



大觀


新公局築集

卷四

昭和十三年四月十六日印刷
昭和十三年四月二十日發行

新萬葉集 第四卷

編纂代表者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二四番

目次

——作者別氏名五十音順——

さ	の	部	………	三
し	の	部	………	一六二
す	の	部	………	三二七
せ	の	部	………	四〇六
そ	の	部	………	四三五
作者略歴			………	四三五

○装幀 横山 大觀

○題簽 比田 井天來

第
四
卷

佐 川 力

張り更へし障子ひびかせて行くバスよ晩秋のひるの部屋は閑けさ
此の日頃吾子にかまけてなすことなしうばらも散りてひまはりの庭
吾子はいねて午後の二階のすずしさよ潮風があふる枕蚊帳の裾

佐久間 安生

十二年振りにて生みの母に逢ふ

相逢ひてかき口説く母や眼に光る涙ぬぐふと荒れし御手を見す

佐 久 良 子

山路下りてしたしくもあるか梓川瀬の音ひびかふ笹原に入る
酸素のみ吸ひて五日を覺めまさぬあはれあはれ吾が父の眠りよ
能登山に寂けき光入りはてて天のうす雲夕焼けにけり

夕まけて歸れる吾子がまづ吾にまぢませるかと言ふは愛しも

佐倉八洲子

われ獨りあやめもわかぬ部屋にあり窓外を行く人聲聞きぬ

佐後淳一郎

春の雨ひと夜の降りに門川のゆたけき水はひびきあげつつ

瀧水のしぶきにゆるる楓の枝になく蟬は濡れて鳴きをり

堅田の出洲は夕日に照りながらなほ雪しげし濁り波のうへ

松山のなだれ落ちあふ萱原にゆふべ鶯の聲の大きさ

春はなほゆぐれおそき門に出て水のながれを見てをりにけり

昭和三年四月十日近江野洲三上山麓神守田に悠紀齋田修祓式を
行はせらる

われはもや悠紀の御田のみ祓ひのあやにかしこきみまつりにあふ

昭和七年十月十四日多賀大社正遷宮を拜し奉りて

阿那邇夜志神の愛袁登古愛袁登賣の月夜齋庭に天降り給ひつ
しとしとと天の露霜降るからに寒夜を濡れて人ら額伏す
天つ神導きまをす白絹の眞夜のみ庭に長々と敷く

比叡山にて

松の芽のみどりあかるし晝ふけてこの大き谷に春の雨ふる
かすかなる春雨あさより降りそめて根本堂の雪を消ちつつ
大堂の眞闇にとりゆらぎたる不斷の燈は昔より今に
春さきの雨なほさむき山のうへ黒衣ふくれて僧はこもれり

防空演習 一首

うすづく日の逆光に立ち橋の上にひとかたまりの兵が話せる

老猫らつべつのうづくまりゐる狭き門雲かがやけば朝顔もしぼむ

ひまはりの莖をめぐりてしづむ日にすすび果てたる槍をみがかむ

昆蟲のまなこにうつる夕焼を立秋すぎておもひみにけり

苔のうへにつゆじもたもつ朝のまは鳥の囀りのきびきびしさよ

ふくだみて鶉は砂にうづくまる昨日も今日も霜おきにけり

み冬づく山を越え來て百鳥の網にかかるはあはれにおもふ

佐 今 晚 葉

梅雨はれてみどりあかるき庭さきの梨の木肌を蟻のぼるみゆ

ふるさとの稻の不作の思はれて見る目に寒しこのごろの雨

佐 々 黙 々

父病みて九十餘日、神に占問へば五寅の宮のみ砂を夜の丑刻に床
下家の周りに撒き被ふべしと一首

躑あそらにさやる小草をいとほしみ今夜こよひは踏みて神砂を撒く

伊吹嵐吹く日となりぬこの里は大根だいこん切干つくりいそぐなり

朝にけに笑あまひ寄り来る嬰兒みどりこをあはれと思へば生きたくありけり

明けやらぬ夜靄の下にほのかなる明るみもちて咲きゐる菜の花

時鳥はととぎす啼きぬといふに聴き居れば山の木深みに鳴きにけるかも

末弟京大講師就任

ひとすぢに父のころをたもち來しこのうれしさを母に言ひたり

島木赤彦師を偲ぶ 一首

ほそりたるわがししむらをあはれがりなでたまひにし人は死にせり
山に來てたぬしかるらしおくれ來る吾兒あこはもろ手につつじ持ちたり
わが子らのむつぶを見つつ嘆くなり父母のへにかく育ちにし

赤彦追悼號を讀みて

おほき人はかく苦しさにあり堪へて至りましけむわが心いたし

霜害調査 二首

地圖もちて霜害地番調べをり地に落ちたる桑のわか芽は

霜害のはたけ見まはる古靴のかたきをはきて我が足痛し

夜なよなのうまいを欲りて茶をたちし父の齡にやうやく近づく

幾年かこころいぶせく眺め來し穀物庫の壁ぬりかへぬ

參り來ぬ幾たり人を思ふなり五たびの忌を山にいとなむ(赤彦忌)

わが子ろの潮干土産のしじみ汁うまらに食して砂かみにけり

降る雨の雲のうすれて照る日ざし丹つつじの花苔におちゐる

こまやかに庭のわか葉にふる雨の二日ふりつぎ映る苔のいろ

こまやかにふる雨見ればゆく雲のこきうすきありてかげるわが部屋

佐佐木 信綱

明治二十八年作 「愚草」より五首

天つ日の光かしこみいやさきにまつろひよりし高さご島山

竹柏會大會の日 明治三十二年四月

ねがはくはわれ春風に身をなして憂^{うれ}ある人の門を訪はばや

折にふれて 同年七月

天地のかくろへごとをわが胸にささやくごとき水の音かな

毛越寺 同年九月

大門^{だいもん}のいしずゑ苔にうづもれて七堂伽藍ただ秋の風

富士登山作 明治三十五年八月

いつよりか天あめの浮橋中絶えて人と神との遠ざかりけむ

長沙に葉德輝郷紳を訪ふ 明治三十六年十二月「遊清吟藻」より三首

苑その舊りて臘梅の枝花えだまばらに書齋の書よみのうづだかく淨し

開福寺梅曉師來訪

東亞は支那の前途はと燭の火をまもりつつ語るわが日本僧

金陵作

建業の冬の城壁じやうへきくろずめる寒きかけゆくわが驢馬の鈴

大和懷古 「新月」より二首

女の童柄香爐ささげまうのぼる長谷はせの御寺の山さくら花

大和の秋

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

華盛頓會議にいでたつ同人に「常盤木」より一首

敷島のやまとの國をつくり成す一人とわれを愛惜まざらめや

狩 勝 峠 「常盤木」より十首

さほろ嶺の大き岩根にわがをれば傍に近く雲遊ぶなり

山の上にたてりて久し吾もまた一本いっほんの木の心地するかも

秋 夜

からうじてわがものとなりし古き書ふみの表紙つくろふ秋の夜のひえ

大震災 録一首

空をやく炎のうづの上にしてしづかなる月の悲しかりけり

折にふれて

道の上に残らむ跡はありもあらずもわれ度みてわが道ゆかむ

明治天皇御集編纂のことをへける日

大御歌えらびまつらくをぢなきや身もたな知らに仕へまつりき

天元四年書寫の琴歌譜を見出でし日に

吾はもや此の歌卷を初つひに見つ千とせに近く人知らざりし

世界戦争の頃

國の命かけて戦ふ幾とせの雄々しくかなしく尊くありけり

時事偶感

言舉しさやぎふるまふ今にして靜かに吾ら思ふべきなり

大禮特別觀艦式の日

天皇旗蒼海の日にまかがよひ冠かがぶりしろき富士にむかへり

國壽の歌「蒼」より五音

神の國あきつ島やまとあけぼのの光の中にさくら花咲く

時事偶感

青空の下あへぎいきづくいかにか此の無数の人を飢ゑしめざらむ

湯の山にて

白雲は空にうかべり谷川の石みな石のおのづからなる

皇太神宮式年祭に奉仕して

神風の伊勢の御民と生享けてかしこし今宵御火たきまつる

阿蘇ぶり

颯々と大阿蘇の風ふき來なり粟生がうへを飛ぶ赤とんぼ

大津 「榎の木」より十七首

大津牛はつ春なれば角まきの眞赤き布に映ゆる湖の日

東郷元帥挽歌

天地日月の共^{むた}大^{おほ}き洋^{うみ}の大^{おほ}きいさをはかがやきとほる

惠那峽看鶴 十首中録六首

天雲のあをき滴^{したたり}たたへ充^みつ峽^{かひ}の大^{おほ}江^えを舟^{ふね}さしくだる

眞^ま蒼^{あを}淵^{ぶち}崖^{きし}の松^{まつ}山^{やま}にみるものか松^{まつ}の上^{うへ}なる一^{ひと}雙^{すう}の鶴^{つる}

繁^しみ立^たつ松^{まつ}の秀^はつ枝^{えだ}におりむとしたゆたひがちに輪^{りん}を舞^まふ鶴^{つる}は

しづかに羽^{はね}ををさめて己^しが心^{こころ}にかなへる枝^{えだ}とおりぬけらしも

おりぬて時^{とき}久^{ひさ}し松^{まつ}が枝^{えだ}にとまれる鶴^{つる}はさゆるぎもせず

松^{まつ}山^{やま}の青^{あお}きにこもる日^ひの光^{ひかり}かそかにほひ夕^{ゆふ}べは近^{ちか}し

奥多摩

山^{やま}莊^{ぢやう}の露^{つゆ}臺^{たい}にせまる高^{たか}き木^きの梢^{えん}しろじろと月^{つき}はのぼれり

瀬の音ときよく月かたぶきぬじみくわう寂光の中にわがあることのかしこさ
月、雲にかくろひにたり目とぢゐて悲しき夢を見つるものかな
溪深くこもらふ水の底ごころたぎつ心のなしといはなくに

奉 祝 歌 昭和八年十二月

ほがらほがら豊さかのぼる朝日子の光の中に皇子みこ生まれましつ
神の國に神の祐さちありたか照らす日の大皇子は天降ありいませり

雪の長良川ホテル

窓あけて手とどく雪に觸れて見つ未だくもれる空のさびしさ

孫 來 る

いだきあぐと手さしのぶればことさらに身を重くせりまこと重しも

あ る 夜

うつそみの心ひそめて歌おもふ此の静か夜に我が世は足れり

埴輪諸相 十首中録四首 「天地人」より五首

ますらをのやまとの國の埴輪はも劔手にぎるよき形して
何をかもいきどほろしみこれの埴輪口くひしばり太刀ぬかまくす
人の世の千年は長き年月を埴輪の少女笑みつつあるかも
むかひをれば埴輪の面の親しもよそがうつろなる眼の親しもよ

宍道湖舟中月下賦 十首中録一首

月ややに西に流れてひろびろし湖の面はまたく月の國なり

宮中鳳凰間にさぶらひて 「心の花」 第四十一卷より二首

内つ御苑風和らかに老梅の花かげにして遊べる雉子

文化勳章を拜受せし日

大御心いただきもちて願はくはわが言靈に光あらしめ

佐佐木 義之

これの世にあれししるしはみだぶつのみなにしよりてすすみゆくこと
かはそひの路をいゆけば五井ごゐのさとの森にとよみて鐘なりわたる

佐佐木 治綱

朝日きらふ眞白山壁滑り行けばスキーに觸るる石楠花の枝（雌阿寒登山）

篝持ちきほへる赤鬼たたずみて面がたはづし汗ふいてをる（薬師寺追儺式）

厚板を彫り透かしたる塗欄間眺めつつ朝を起き惜しみをり（追分油屋）

春の日の新薬師寺の築垣に牛がおとしゆくあたたかき影（新薬師寺）

幾世の僧心うちふるひ登りけむこの戒壇いま冬陽ぬくめる（東大寺戒壇院）

山峽のもみぢ散る岩にあたる瀬のしぶきがつくるたまゆらの虹（鹽原）

佐佐木 康藏

紙芝居師の喇叭この山にきこえつつ港の町は夕陽一ぱいなり(石の巻)
おのづからみなひと方へ檜の葉の光りゆるる上をゆく白き雲

佐々木 綾子

ほととぎす頻しき啼く聲に花過ぎて深山しきみは實となりけり

佐々木 けい子

昨日の日の悦びはわが心なれやこの寂しさもまことなりけり
人思ふ心になしつまぐれは葉がくりにして散りすぎにけり
冬に向ふ日ざしはあれど山茶花の花咲きみちてこぼれゆくなり

佐々木 曠一

涙ぐむ子の顔見れば我はもよ叱り過ぎたり覺えずともよし

佐々木 古貫

日南がつとにおくりし椰子の實をめでてつくりし食鉢ぞこれ(憶愚庵)
播磨路や増位ますゐ廣峰ひろみね書寫しよ法華ほつめぐる山々父母のために

佐々木 三郎

下北の釜伏山の頂に雲たむろせりまた荒るるらし

佐々木 春城

高原のこの芝原にみだれ咲く山をみなへし食はめる牛はも

群山の谷間谷間の白き雲風出でたればのぼり來る見ゆ

佐々木 杉子

教子は工女となりて仕事着のギンガムの服に繭のにほひす
をとめててまたもあはめやも白藤のふさの短き藤棚の下

佐々木 精二

泰山木の廣葉に薄日照らふなり懸巢するどく啼きて過ぎたり

北海道よりの日食實況放送を聞きて

皆既蝕せまれる空の凄からめマイクに入りし鶏の聲

佐々木 惣一

大學在學中母上危篤の報に接して急ぎ家に歸る

遠く出て學べる子には知らせじとたへたまひたる母を父泣きたまふ

昭和八年七月京都帝國大學教授免官

學を護るつとめとわれにたゆみなく鞭^{むち}ちて來ぬ一すぢの道

鳥取の砂丘

目もはるに砂丘のきはみいづくにかかすかに海の色見ゆるなり

佐々木 太道

亡骸なきがしを炎に焼きて夕ざむし藏王ざおうの嶺に凝る雲のかげ

山に日は落ちつつゆきておぼほしく鴉さわげり冬田の上に

十年のわがあやまちを責めざりし父がなさけは沁みておもはむ

九旬の雨安居あんじ明けて山下る杉立つ道に啼く蟬のこゑ

みぞれ雨雪となりたる晝ちかく賽銭さいせん作務さむに僧そうら集あつひぬ

自寮じれうにてみづからものを煮て喰ふを樂しとすらし安居僧あんじそうらは

明暮を安きに慣れてありしかば懈怠けたい心こころもあやしまざりき

佐々木 とし子

うすぐらき灯かげにふくる古家の奥まるへやに幾夜ねむりぬ

四方の山小暗くしづむゆふぐれを家の人たち山羊の乳しぼる

軒ちかくおりしづみくる山霧をあふぎつつ朝の口そそぎしぬ

佐々木 知恵

水尾みず白く引きて入り来る船のあり燈火管制の暗き月夜に

佐々木 忠治

この山の傾斜ななせに長屋あまた建ち渡人わたんど多く移り來にけり(細倉鐵山)

佐々木 博太郎

秋來ぬとしみじみ思ひ牛小舎のかんてらに灯をともしけるかも

縁に近く洋燈を置けば露しげき庭の草葉の眼に迫り見ゆ(臺灣關仔嶺温泉)

青白き光の中に現はれつ心臟黒く働くが見ゆ(レントゲン)

雨に濡れて白頭びやくとう鵲こ遊べり生れながら楽しきものに鳥はあるらし

佐々木 章子

雨上り長靴はきて子供みな水だまりをば選り選りて行く

佐々木 牧童

積古丹しよこたんの南をわたる山なみに雪消ゆきけの色いろのうごきそめぬる

佐々木 陸人

絶間なく皇禮砲あみのとどろける天あめの四方よもより曇り垂れたり

佐々木 義誼

砂利採取機の響こゑどよもす河原に見る夏の雲低く動けり

佐々木 元夫

ほの暗き狭間のみちはたぎちゆく犬鳴川いぬなきがわをいくたびか越ゆ

自らを清しとはつゆ思はねど人のこころの時に堪へがたき

土用芽を吹きし珊瑚樹に水うちて暑あつき夜よひ々よひをせめてすがしむ

山こめてさ霧のふかき曉をほととぎすは北の谷に啼くとぞ

佐々木 善夫

樺太敷香なる幌内河は島第一の大河、春季溯上の魚群を追ひて白鯨二名小鯨の遊戈すること多し

噴潮を夕河空にあげにつつ次ぎ次ぎのぼる鯨は白し

白鯨のかづき入りたる河の面に残りし渦はながれつつ消ゆ

夕靄の立ちそめにける河の面を影まぎれなき白くぢら過ぎぬ

白鯨の方向をかへんとひるがへりひら尾にたたく高き水おと

幌内の河面ひろき筏場のゆるる材の上人わたる見ゆ

佐 澤 波 弦

田舎より姪上京す 一首

日焼して面くろけれどをとめさび赤きリボンをつけて來にけり

答へやればうるさきまでに言問ひぬその先々は父も知らぬに(子のうた)
後よりわが目をかくす幼児は誰かあてよと聲に出して言ふ

河内國弘川寺にある西行の木像は文覺上人の作と傳ふ

眉秀で口元しまる面魂つらたましひ文弱の僧にあらざることし

法界ほふかい定印ぢやういんに結びし指のあたたかく血も通ふがに生きたり像は

夢殿秘佛拜觀 三首

ほほゑみていますみ唇くちびるにのこりある紅の色こそほのかなりけれ
如意寶珠捧げましたる雙の手を押せばくぼまむそのやはらかさ
冠ゆ垂れたる紐にちりばめる玉はきらめくわが持てる灯に
時じくに松風の音澄みひびく西行上人のおくつきどころ
いそがしく飛べる蝶々も暑ければ汗をかくかと子はわれに問ふ

青芝を踏むにこぼるる露よりぞこほろぎの子はあまた飛立つ

佐 澤 幹 子

縁近きわが病床に今日も亦風が持てくる草の實あまた

佐 生 哲 男

山谷を隔てて見ゆる波形の茅倉尾根はいつの日か來む

泥鱒屋の前とほるとき筧のなかにあわふきて泥鱒のなくこゑききぬ

佐 田 節 子

せきあぐる涙こらへぬ常臥とこむの十六年は長かりしかな

これの世の冥加はつきず血を吐きてうつつのわれに蘭の花匂ふ

三世の佛われを護らひ立たせれど咳の辛さはすがるものなし

汝もわれも汝が大切のその妻も生命はわれらのものならなくに
牛馬と生れくるとも必ずし來世に女とわれ生れ來じ

捨て身になりいまは生きんとひたむきの心はただに佛に對かふ

生かしもせず死なせもなさず十方の諸佛もわれを捨てたまふかや

さらぬだにかなしきものを諸苦所因貪慾爲本の女といはれ

天地に吾をまつ人もあらなくに松風のこゑ戀しかりけり

唯一つ生きたしといふ願ひさへ佛にまかせて安けし今日は

すこやけくあり得し時は思はざりしいささか事も身には沁むなり

朝餉はぐくまれつつしみじみと母をし見れば瘦せましにけり

佐 治 斗 牛

古の鳥見のみ山の御儀さへそぞろに懷ふけふの畏さ

御民の一人と思ふうれしさに老の身われも子等と旗振る

小春日のぬくとさに咲くかたばみの花にきはまる靜心なり

吹き込みし櫻紅葉を禽の餌のこぼれと共に掃き捨てにけり

青々と張り極まれる枇杷の葉に霰降り來て彈かれてゐる

むらむらと降り來る雪が黒塀のかこひに入りて悉く光る

椿の葉の葉毎々に春の雪少したまりてしづれつつあり

雪の色鈍りて見ゆる夜の庭闇さへ春の闇となりたり

入りつ陽の餘波の光庭松の花にたまりて梢の明るさ

蝶あまた紫苑に遊ぶほがらかさ心淨らにわがあらんとす

田の水の溢れて落つる音すなり満ち來る春の力を思ふ

山川の雪ゆき汁水じゆみづの響く夜や澤の胡葱あぶら萌えつつあらん

春時雨婆羅の細枝さいえだの若葉芽を白く濡らして降り過ぎにけり

われとわが流す涙にこだはりの解けゆく甘さなしといはなく

何事も淡く感ずる年にして悲しみのみは深みゆくらし

夏草の茂り豊けくなりほのにけり土堤吹き上る風の脚見ゆ

ひるの暑さ残りてなづむ庭の面に夜干の梅が頻りに匂ふ

今咲きしおしろいの花夕焼の雲の光を受けてほのけき

耄碌はせぬと互に言ひ張りて物搜しする吾等なりけり(友自髮)

おだやかに暮れて夜に入る雪の原おほめく春か闇に音あり

佐 塚 實 太 郎

妻として刈り進みゆく青萱のたちまち萎えて暑き山原(山林下刈)

暑き日の漸く暮れて庭の木になきぬし蟬もいつかやみたる
若松を半ば埋めし穂芒に白くまつはる夕べの霧は

道のおどろが中に童らが山芋を掘る土は香に立つ

東京電燈送電線新設

鐵塔に鉄打つ音のとどろきてこの山峽は日ざしあまねし

駿河瀬戸谷村行 二首

谷道にこだま返しており行きし荷車の音遠のきにけり

登り來て見おろす谿の片寄りに見ゆる家居は市の瀬の村か

此宵の月の明るさ吾にいひて窓下すぐる人は親しき

月明き庭見おろしてわがをれば裏木戸あけて人の入り來ぬ

佐藤 哀朝

策伏せて疊の上におく蟬の啼きいでにけり部屋の明るさ
たまさかのもつきり酒はかわきたるのみどをすぎて腸に沁む

佐藤五十穂

山霧はれて眼路ひらけたる笹原に啼く鶯のゆたかに啼くも(大臺ヶ原山)

佐藤 彰 矩

上司より罵られて

帽子のつばぐいと引下げ歩きけり受けきし侮辱堪へがたきかも
六人の家族の命つなぎある職と思へばわれ賭しがたし
堪へがたき侮辱を受けて歸り來ぬ甘ゆる妻を叱りつけたり

或女自殺をはかる

われの顔目には止めしかふたたびを閉ぢし臉に涙にじみぬ(昏睡より醒む)

ゆらぎ出でし夜汽車の窓に胸つまり許せとは遂にわが言ひかねし(恢復後選
國へ發つ)

佐藤 旭

部下の死

昨日(まご)の日に部下が生命を墜したる狭間の道を今我の行く

悲しみてあるべきならず戰場に生命すつるはますらをのつね

さなきだに家を思ふらし初年兵等ひもじさたへて夜道を行けば(討匪行)

開原河閘にほの浮く水上にそれとおぼしき開原城(ろ)のかがり火(守備勤務)

うつし身を射貫かれて地に伏す兵のいたみこらふるあはれさを見つ(下砦子
設懸)

この夕べうましと喰ふは兵隊が獲りて作りし雉のすきやき(駝巖分遣隊
司令となる)

佐藤 一郎

遅れしを言ひつつ吾れのうしろより畑に入りくる妻のいとしも

清水飲みに幾度今日は下りけん照る陽のもとに畑を鋤きつつ
降りやみて雨雲はろに晴れゆけば芽ぶき明るき落葉松林

佐藤 かち代

朝じめりふくみし庭の砂に散り牡丹の花瓣そりしままなる
松山の松にまじれる山櫻日のくれかたはひとりほのめく

佐藤 杏

あはれなる鳥けだものも寝る頃を夜水引きつつ神經尖らす
蛹の匂ひ身に染みて稼ぐ妹を見れば本買ひて讀まん氣力は出でず
ねずみ等はわれにかかはり持たぬらしあかりの下に出でて遊べる

佐藤 喜司雄

背の高き人と對へりこの人に優れるものを持たざるかわれ

金の事にこだはり多きこの頃や眼鏡毀せし夢見たりけり

佐藤 きの

秋の夜の更けてきこゆるはなし聲となりの人も月を見るらむ

佐藤 金造

上つ代の火の國人の驚畏^{おどろき}をおもひつつくだる阿蘇の高原

初夏の草やはらかきなだら山かしここに馬群るる見ゆ

佐藤 きよし

片假名をおぼえし子らの嬉しきかいたづら書きのそちこちに見ゆ(一年
擔任)

佐藤 堯空

ふみこみの爐にあたらせてもらひ居り吹雪はしましやみにけらしも

村ごとに梅の花咲くあたたかさわれ托鉢をしつつ行くなり

家人のわれを見知れるしたしさよ托鉢に来て茶をいただくも

佐藤熊司

呼びかはす向ふの人らのとほりこゑ雨のはれまの水田涼しき

女子の氣性荒くなりゆくを家婦に見るはおろそかにあらず

ゆく鳥の翼揃ひてすぎにけりこころけ寒く冬空に向ふ

佐藤功一

水害の復舊工事監督の汚れずぼんに秋は來にけり

一ぱいに夕陽をうけし宿はづれ牛の荷ぐらに柳葉の散る(津近郊)

苔清水杉の木の間に廻廊の赤きが見えて蝸なくも(日光)

廣野原ただ一本の白樺は秋の夕日をあびて光れり

秋風は蓮華寺坂の大榎その梢よりたちそめにけり(小石川指ヶ谷
町の裏にて)

佐藤慶子

くもり空くもりのなかにしづみさく梨の花畑しろしかすかに
おもむろに冷えしづみゆく高原の家のまはりの秋の草々
ほほけたる芒の穂むら眞日中の風にふかれて光をみだす
朝の日の光つめたし地の雪に空のうつりてひそかなりけり

佐藤佐太郎

尾瀬沼三首

白沙につづき湛へし湖はみづ浅くして遠くたたへつ
湖に生ひし水草はおのおのに立ちたるが見ゆきよき底より
萱草が黄に咲きみちし原ありて日の暮がたにあやしかりけり
顔冷えて眠りてをりし暗闇に天井のたかき部屋に眼をあく

朝床にはかなく居るは睡よりすぐにつづきし心とおもふ(猛夏)
連結をはなれし貨車がやすやすと走りつつ行く線路の上を
濠ぞひに電車まがりて水の上の鴨等を見れば茫然と居り

藏王山

雪にたつけむりかすかに見えしかど忽ちくらし山をふく霧
風ながらおそひし霧はふみてゆく高山のうへのいさを濡らす
直ただざまに空よりふける霧なかに立ついしぶみや寂しきまでに

金瓶にて二首

金瓶の橋わたるとき花さける合あひ歡むの一木のころがなしも
まぢかくの杉の老木に蟬なくや師がをさなくて遊びける庭
とろとろに摩られし豆がつづけざまに石白より白くしたたりにけり

鋪道には何もとほらぬ一時が折々ありぬ硝子戸のそと

葉鶏頭の赤き一群が目には浮びてしばらくは植物のごとき感じにあらず

冬至前後 三首

砥の色の裏の空地を見つつをり寒くしなりぬあらがねの土

電車にて酒店加六に行きしかどそれより後は泥のごとしも

運び來て空地に土を盛りしかば曠野（あちや）のごとく月照りにけり

曇りつつおほにわたれる白の夜ありありと吾れ鋪道に佇ちぬ（白夜）

冬日てる街あゆみ來て思ひがけずわが視野のなかに黒き貨車あり

このゆふべ一かたまりのバラツクは戀ほしきまでに焚火あかりぬ（深川）

残りたるはだれの雪は暮がたにしづかになりぬ黄の芝の上

佐藤 定憲

北國の友がくれたる干し栗は白糸をもて數珠に通せる

比叡の麓にて

大比叡のふもとの冬は山こゆる雲をりをりに雪をふらし來
吾が歩む朝の青田ゆ白さぎのつゆふりこぼし立つはすがしも
前藪に騒ぎ居し鳥ひそまれり夕の部屋に吾は火をおこす

奈 良 三首

夕ぐれのひとつとき明き空にして唐招提寺の森藥師寺の塔
つるし柿さはに熟れたる畑を來て唐招提寺のいらかを望む
旅にゐる心やすけし話しつつ土地の娘とゆく西大寺の原
午すぎで日のあたり來し書院に居て障子の白さ眼にしみるなり

佐藤正一郎

山にして路尋ねたる村人にバスに乗る時また逢ひにけり

佐藤 茂雄

潜水艦にて

潜望鏡ゆのぞき見にける荒海は海にくぐりてたちまちになし
機械とめて海にくぐれる一瞬のしづかなる中に顔寄せて居ぬ
一瞬に海にくぐれるわが艦の傾くなかに驚きやすし
艦内に電燈はつきて眼界をかぎられしかば潜航の感じなし
潜航中の漏水をしらぶる兵二人懐中電燈を照らしてゆけり
軍艦の下をくぐりしと兵いへりわが潜水艦に海の音あたる
ねむりより覺めてわびしきおもひなり艦をめぐりて波の音きこゆ
観音崎を過ぎし頃よりくもり來ぬわが艦にあがる大きうねり波

太平洋にいでて來しかばただひとすぢにわが潜水艦がひく長き水脈
見馴れたる鋸山や艦にして海より見ればしたしまれつる

甲板にいでて煙草を喫ひて居り曇り日寒くあがる白波

佐藤 信也

本箱と机きりなる我が部屋を笑まひつつ父の見廻しいます
谷川に懸かれる橋も青白き月の光の中に浮きいづ

佐藤 正二

熱河にて戦ひし人故郷に山女やまめ孵化場を守りて住みけり
この奥に鑛山の試掘始まりてレールを負へる牛の登るも

佐藤 武郎

朝より暑き日ざしを歩み來て藤波垂るる谿にすがしむ

さつき方小學生が横ぎりし草原くさふのそよぎ目にうつつなし

時事吟

國棄ててはしる帝みかどよいにしへにたぐへておもふだにあはれなる
一國のほろびに向ふさま思もへばかくすみやかにありてきびしも
やぶれつる國のみかどの寫眞見き爲事のひまにまた思ひ出づ

母を思ふ

いつくしみ育て賜たまびしがいささかもわれらがうへに求めたまはぬ

佐藤 たま子

此の家を去る日せまりて砂庭の夾竹桃も花すぎにけり(大磯の家)

佐藤 嘲花

枯るるものは枯してやらむ小田卷の花に水やらず我がながめある
風邪ひきていねしばかりにかく生みの親てふものの戀しきはなぞ
遠山は雪もはだらに春日さすこの街道はゆけどあかずも

いつ見ても獨り遊びをしてををりわが子のすゑぞおもはるるかな

ははそはの母のかへりをまつ吾子のいとしくてならず病みてしあれば

路ばたに童子い群れて獨樂まはすたぬしき春となりにけるかも

はしきやしせむら小さき背を流しつつあなはしきやしわが子と思へば

鉦叩きゆくは子安の觀世音通りすがひに亡き兒し思ほゆ

縛がれて向うとほるは未決囚きる衣青したんぼほの花

糸つけて子がもてあそぶ一疋の蟬をみて居り啼かぬその蟬

す枯れたる紫苑のはなに紙片のごとき蝶ゐて飛ぶさまあはれ

わが妻がおほねを刻む庖丁の音あはれなり雪の夕ぐれ

夕かけて山吹の花みて居たり食後はものの寂しまれつつ

めづらかにわが子を膝にのせにしがうら寂しもよ秋の灯のもと

かはるがはる夜すがら母のみ足揉み心やすけしわれとわが妻

われとわが幼な言葉をきくさへに母とし逢ふはたぬしきものか

白菊の花咲く宿に磨る墨の匂ひかぐはしこころ落ちゐて

山家なる母をたづねて酔のもの菊を食すなり秋ふけぬらし

吾妻山やまおろし吹く夕ぐれは酒たちし身のいや寂しけれ

よその子の食しつつあらばさぞあ子もほしかりなむと餅はつきしか

父のごと偉くなりねと教へえず心悔しも子を叱りつつ

ふびんとは思ひながらも人手なみ子に子を負はせ遊びにはやる

トルストイ讀まざば讀まであり得べし食はねば死ぬる命なりけり
八月のけふは幾日なりしかと妻に問ひたり病みつつ久し

秋の日は障子に明し物洗ふ妻と子供のはなしこゑきこゆ

諦めてゐはゐながらに熱いでて飯うまからぬ今朝の淋しさ

病む父にかはりて今日の喪主となり雨にぬれつつ子はゆくらむか

岩手なる父のみそばに吾あをはふりたもれといひて逝あきし母はも

佐藤 忠 恕

遠き世の女人も姿残さまくほりしところは吾にしたしき(檜垣軀自作像)

佐藤 恒 雄

近衛歩兵第二聯隊にて

營庭の草むらに鳴く蟲のこゑ夜毎にしげくなりけるかも

醫務室に臥れる君に飯はこぶタベタベを月照りにけり

佐藤 東作

沓脱に子等のゴム長亂れしをなほして吾も靴を脱ぐなり

男の子らの遊ぶを見れば荒々し母の叱るをすでにおそれず
遠くより蜻蛉に近づく子の歩み見つめて吾も息をこらしぬ

佐藤 時子

赤子の時より手鹽にかけて育てし姉の子、われを慕ふこと母の如し。年七歳

着飾れる花嫁のわが手を握り逃げ來よと言ふ涙をためて

佐藤 友雄

生活くらしむきつまりつまりてはらかならの逢ふ折もなくなりはてにけり

貧しきにたへて生きゐるはらかならやすこやかにあれいづこに住むとも

ふるさとの石ころ屋根のわが家にいまは如何なる人の住むらむ

東京遞信局辭職前後 二首

ケーブルドラマおしゆく工手うしろでのがつしりとして日のでる坂を
電話機の修理に保守に若き日のくらしをほそくたもちきたりし
煙突の間よりのぼる太陽にまむかひゆけば葭切の聲

おのづから涙はにじめうらうらとてる日ににほふ黄なる菜の花

佐藤 豊吉

子が住めば北のはたての大海の濤をわたりて父は來ませり(故郷の老父來函)
しみじみとひとりを楽しむわれの性さがときには妻を涙ぐましむ

佐藤 豊太郎

教へ子等と月山に登る

はろばろと晴れたる庄内を見下して聚落地理を子等に語りをり
故里に病みをる母を思ひつつみやまわうれんを掘りをる我は

佐藤直衛

實學を修めしめたき中年の嘆きを父は持ちて居給ふ

山深くなりてし來れば禽すらやうるほふ聲に啼きかはしつつ

佐藤信春

トラピスト修道院にて 四首

高原に冬の薄日の染むところ電柱の並び遙かなりけり

揺れゆれて高架線の電車走り去れり一列の窓の夕日の反射

明らけく日の色さびし廢れたるニコライの苑の鶏頭のはな

一列の通風筒めぐり果てしなしビルヂングの上のあかき夕焼

つくづくと和む心か玉葱の芽の尖んがりを眺めてをれば

葦の芽の角ぐみあかき水の面は日射とほりてゐる蟲もなし（早春）

梅のはな眼にこそ映れ射しとほる光はあをく冷たかりけり

ほの明る夜空なりけりビルヂングのこの面の窓に灯のひとつなし

うち仰ぐ天つ日しろしビルヂングの巨き立體は空割り立てり

はね橋と信号柱と見ゆ夏の日の芝浦の景色しろく眩しき

越後にて

國境の隧道ながしこの上に疊たまはり疊はる雪の山を思ふ

冷き距離にしありけり此處より見る國境山脈の雪の夕映

新濱にて二首

大君の鴨御獵場に召され來て眺めるにけり池の水照を

白きもの鷺一羽ゐて葛飾かつしかの刈小田つづき眺め肅さびたれ

現なりけりふち紫の水中花つづる氣泡のここだく光れる(水中花)

風向に蝶はひかりて流れたり今われは何を思ひゐたりし

夏の野の白きアパートの景色なり或る窓はふかく日覆おろせり

蜻蛉はとんぼらの景色をたのしむらしこの複眼は雲にむかへり

工場地帯のよき朝なり空の下瓦斯タンクに充ちみつる壓力をおもふ

蘭類の氣根垂りふかき園の隈なにかしめじめと腐りつつあり(果樹園)

まらりあの蚊生れつつかあらむ羊齒類の陰の水槽は暗く澱めり

バシー海峡に臨みて

がらんぴ燈臺構内の芭蕉の木層なして青き實は垂りにけり

佐藤 英保

草の實は大かたこぼれ直莖のなみ立つ中にこほろぎの鳴く

湯のたぎりしだいに弱く夜更けたり火鉢の炭のくづるる音す

庭のうへに照る月影の静けさよ今夜を妻は乳捨つらむか(妻乳兒たおき
て月餘不在)

山川の流れ乏しみ散りたまる落葉の上に鳥遊び居り

寒菊のはなを佛に供へたるわがいささかの足らひ心や

佐藤 秀 信

逢ひ見つる喜びにとて取りそめし盃なれどあはぬ日も取る

別れむとさきにいはむが口惜しく互かたみに待ちてありぬ二人は

熱き頬を風に吹かせて思へらくこの酔ひごちわれのみぞ知る

佐藤 秀

空ひくくゆきし鴉は音なを鳴かずひむがしの森にすでにこもりぬ

たまさかに羊齒しだはゆらぎて時を經つ水すましもはら日の蔭に居り

この寺につづく低山こも隠り水の音を晝さへ近しとおもふ

霜晴れの空にながれてしろきゆゑ鶴の息吹いきぶきをたふとびにけり

佐藤 弘

吾妻峰の頂近く浮く雲の未だ去らずもためらふごとく

佐藤 博

風いでて寒き夕べは鬼怒川の水脈みせのさ蒼の遠くまで見ゆ

級畑しなばたの裏の砲列宵かけて兵士も馬も寂しく寝てゐる(演習)

佐藤 房 一

蕨山焼く火を見たりたらちねの病める峽はざまに今宵歸りて(父病篤し)

山の雨あかとき暗く降る中にわきたちおこる蛸の聲(煙巖山)

墨溪へ下りとなりてあらあらしく雪折れの竹徑を遮る(月ヶ瀬行)

霜風ぎの日ざしは縁にあまねくて立ち出で給ふがにぞ思ほゆ(柳蔭山房)

鳴きつれて鴨わたりゆくあかとき曉は未だ月夜なるみづらみの空(濱名湖)

佐藤不二男

峠みち下りになりて美しき山半面の夕あかりかな

佐藤正憲

あかときの一時寝ねて別れ來し妻いとほしく思ほゆるかも

新しき雪のあかりに蟠る低山なみを見つつ歩みぬ

月の下やまず動きし白雲は夜あけの雲となりてたなびく

塵芥塚を焼く火の焰よひ更けてたまたまあかく燃えあがりけり

沈まむとする太陽の大きけきくぐもりの中に潜む雲見ゆ

佐藤雅郎

龍膽りんとくの紫ぬるる高原の秋は寂かなり空の色さへ

佐藤松太郎

伊勢の大麻 二首

おそ秋の朝風寒きはて道伊勢の大麻の長びつ通る

巢守山尾の上に白く雪ふりて今年も伊勢の大麻は來ぬる

かま前のほの暗がりに炭焼が今背負ひ來し炭木の匂ひ

丈長の萱背負ひ通る隣人のその穂がさやる大根洗ふ我に

佐藤松平

この輕き月給さへや得がたかる世とし思へどなぐさまぬかも
月給袋に書かれしわが名みるときぞ賢まかしら顔はすまじと思ふ

病床にて

林檎の汁の胃に落ちてゆくつめたさを感じつつたゆき目を閉ぢにけり

佐藤 光 昭

朝霧のはれし日射やひぞり葉に露の光りてしづけき山原

沖ゆ遠く潮みちくれば鱻の群背を光らせて波を跳びゆく(天草灘)

佐藤 みね子

木曾福島方面に遊ぶ

熱き飯食みつつ向ふ乗鞍の山秀をつつむ霧晴れゆくも

荒き風俄に出でて枯草の匂へる路をひたすら下る

佐藤 峰 人

星 座

まをとめの乙女星座の大き星ひかりにごらず常處女かも

夏の夜も更けてペガサスの四邊形中空高くかかりたる見ゆ

アンドロメダの瞳ほればれと見とれ居り美しくもあるか其のまたたきの

月を覗く

圖をたよりにのぞく月讀さ夜更けて天蝸宮にいま入らむとす

幾夜戀ひしテイヒコ山見ゆ月讀の雲の海邊にテイヒコ山見ゆ

月ははや望もちに近しも嵐の海ひろぐる中にコペルニクスの山

いぎよひのこのはなやかさアリストタルコ、カルパチャン、アペニンわけて光りつつ

佐藤 漣

吹きすさぶ峯のあらしの雪けむり晴れてうつくし松の一群

佐藤 洋子

霜さゆる夜を更しつつ遠くゐる姉に訴ふるごとく手紙かきたり

佐藤 彌八

靄かとも見まがふ春の雨降りて山は落葉の腐るにほひす

佐藤 悠紀磨

氣ぜはしく餌えさはみながらいささかのすきを見せざる百舌もずの身がまへ

佐藤 よし子

春の月流しの上の播鉢の水を照らせり戸の隙間より

佐藤 僖助

乳足りて眠る吾子の額より汗わき出でて夏は來向ふ

こまやかに羽根ふるはせて啼く雲雀光の中に消ぬひがにも見ゆ

中津峯のそがひに凝りし白雲の山にかかりて雷なりにけり

山裾は霧ふかけれど峯の際空をかぎりて秋晴れにけり

佐藤利一

硫黄の香のただよふ山の出湯街大湯の壁に月映りみゆ

佐貫照夫

防潮林の丘越え來れば春の海や夕は寒く波あげて居り

灯の下に落穂の粃をよりわくる母をし見れば老いましにけり

佐野梅乃

家の男皆死去したる時

吾ながらあはれなりけり四十路越えて百姓はじむるに思ひ至れば

佐野熊太郎

福壽草日向に出せば手のひらをひらくがごとく花ひらきけり

佐野梢

眠り入ればかくてしもまた忘らるる心の癖のいぢらしきかな
後々の事は思はじ今の身のこのよろこびにまかせて行かむ

佐野四郎

籠坂に我が立ちにけり裾長く國かたぶけるはてに海光る

皇太子殿下第三回御誕辰御寫眞

日の皇子みこや玉の御手みでさへ匂ふがに肥らす見ればこの國わかし

佐野翠坡

學校をひけたる兒等の戯あそれ合ひて行きとどこほる春べとなりぬ
風ゆれの檜葉のしげりを出でて飛ぶ足長蜂は怒れるらしも
水を荒く打ちておもしろ庭檜葉に巣くへる蜂の怒り立つ音

久方の月夜ながらにあけづきて高槻の葉はそよぎ初めたり
若竹の葉かげこまかくそよぐなり暑き日中はすぎにけらしも
夏休みけながく子等はさ庭べの草抜くことも遊びとはせり
空梅雨ときまりたるらし草むしるわが顔熱き土の照りかも
雑草あらくさを抜きたる後あとのほとび土匂ひ立ちつつ日の照り強き

印旛沼に吉植氏を訪ねて 二首

歩み入りてみづから思ふ青萱にふかぶかとわが隠ろひたるを
夕早も蚊遣りを燻す沼の家いへのまへ通りたり煙の中を
コスモスは堀をしのぎて伸びたらひそよろそよるといつも動けり
コスモスの花ざかり垣衝く水の出水ともなしさざなみ立ちて
さ夜しぐれやみたる後は音もなし疊かさねの上に灯はかげたまれる

風の糸巻きをさめつつ居る童夕焼時をすぎてさびしき

庭隅の霜凍て土のふくらみにうもれむとして青き草の葉

この夜らのしづかに冴ゆる雪あかりからす一聲なきとぼけたり

鹿野山

青谷の濡れ色すがしく日は照れり一時に晴れし霧かと思ふ

下谷に雲しづみたる夕晴れにかなかな遠く啼き出でにけり

佐野 静 秋

湯をわかすやかんに菊を挿したれば今日は湯もなきひるめしを食す

ふくよかにつぼみとつぼみ押しあひて咲かむとすなり龍膽の花

佐野 照 子

眼の下の杉生の峰の見えがくれ雲動き初めて弱りたる雨(鹿野山)

朝の間に一張りしたる張物に日の照る見つつ勤めに出で來つ
連れだちて衢ちまたを行くに母われの着くづれ氣づかふ娘ことはなりぬる

佐野 晴美

たまたまの暇ある日を母と出で野にたがやせば雲のゆたけさ

佐野 福次

ほのぼのと夕べ冷える溪あひの石白き道はなほも續けり

佐野 保夫

比良の山尾根をかすめて雲動きしばらくにして時雨來にけり
庫裡の窓にかけ干されゐる大根の葉乾く匂をかすかに放つ

佐野 ゆき

ゆるやかにただよひるつつおのづから相寄りなびく月夜白雲

佐伯 矩

見れば憂し見ねばなほ憂し病む妻の玉の緒細くなりまさりつつ

佐伯 敏子

さ霧這ふこの朝山の草なだり草にこもりて雲雀しき啼く(伊吹登山)

佐伯 仁三郎

青桐のやはら新芽にふりけふるあしたの雨はしづくとなりぬ

はだか麥穂に出てながしこの道は長崎村に通ふならむか

春やがてゆくやつばなのほほけ穂の一つがながし青くさ原に

大原の草間の水の親かはづこゑのわびしき夜ごろとなりぬ

東郷元帥の國葬

大禮服ひろげ掛けたる御ひつぎ音たてきたる砲車の上に

諸兵指揮官南大將馬上にしゆたかに來ますまなこを伏せて

アナウンサー感極まりてマイクの前泣きいづるにしわが泣かさるる(日比谷より
の實況放送)
人老いてきよらなりける一代ひとよなりそのきよらかさ日本を泣かしむ

父 逝 く

なすべきはこの一瞬にをはれりと思ひし時に涙こぼれ來ぬ

我に機械技術者の職にかへれといふ人あり 二首

錢あらばといふこと遂に生活の支配となりて悲しまざる

重工業總動員といふこゑのこの國におこる聞き過ぐしがたし

ゆきて見むいとまはもたぬ荒川のさくらをおもひ飯食ふわれは

佐 伯 千 芳

石段いしだんをのぼる如くにのぼりしは軒より高き雪の上の道

佐伯 秀雄

段落の鳥は麥桑葢の花かさなりながら海にかたむく

佐伯 昌則

頂に立ちて見放みさくればわがこころ潤ひそらにさびし大國原

雪ふるも程ちかからむ山の木々の枯れはてて澄む空靜かなり

原始林の中を走れるわが汽車のけむりは吹雪とともに渦まく

佐伯 松比古

草麥の霜にけぶれる畝の上に鳶は大きく翼ををさむ

家むらの狭く抱かるるひと谷に山越の雷おとひきにけり

どんよくの小作にひと日對むかひたり出できて牛の瞳にも言ふ

嵯峨 與志乃

けながくも病みきしものぞとこの夕べ木枯の音をききつつ思ふ

小 竹 繁

覺めてあればあけほのの鋪道ゆくひとの蹺音あしやまとほくなりつつきこゆ
街の雪に土囊築つきて兵の據れりしがわが眼のまへにいまも迫るを
機關銃の音この夜半にとどろくは吾が幻想とのみ言ひがたし

狭 山 嶺 子

道路工事終へたる村の街道や二子嶺の雪まともに見えつ
工場地街こうば昨夜ちよより降れる雨はげし赤土の道の人等ゆき交ふ

狭 山 繁 生

沓下のかがれるあとを氣にしつつ靴ぬぎかけて佗しと思へる(訪問)

ひとときの航空なれど空にあれば空の心理にわれはふれにき

狭山信乃

春きたり萌えいづる草のひとつの力にもなほおびゆるいのち
霧白くながるるなかを旅人のいくむれがゆく秋風の山

枯草を見いりてあればいつしかに枯草のごとく吾もなりにけり
ちらちらと白雪のふるちらちらと悲しみぞふるわれをめぐりて
からたちの垣根つづきの野の小みち淋しきわれをみる野の小みち
雨雨雨地をたたく雨のころよさ何思ひるしか忘れてしまひぬ

夕づきし段々畠の細道の野少女たちの立話かな

裸木の梢のひかり見成りつつ寂しき心になりてゐにけり

西風にし強く吹きどよもして寒むぎむし菜畠ばかり鮮やかにみゆ（外房にて）

病める子をみとりて

病室の硝子戸そのねこやなぎ花粉乾きて舞ひたちにはけり
氷囊の水すてに出し庭のへに萱草のわか葉みどりあざやか
凧糸の張り強ければ童子らは顔ひきしめてこらへてゐるも
化學研究所の危険信號の赤き旗突風にはためきはためきゐるも

ある會合にて 四首

日本の古き言葉の持つ氣品S夫人の座談はなしつつましくきく

言葉の一つ一つがあたたかく生きてゐるやうなる會話のやりとり
しとやかさ失はぬほどの輕口をかたる夫人に微笑をおくる
しつとりと喪服をつけし未亡人の乳房の張りをわれはみにけり
あざやかな若葉の層のつらなりて向うの空をくつきりと劃る

道のべの網染釜に湯氣あがり野生水仙風に吹かるる（上總）

硝子戸にうつる葉影のさゆらぎを病む子にみせて吾もたのしき

日なたべにつくごむ穂のはずみよしはずむがままに穂つく吾子は

つぎつぎに養老院癡兵きたりけり憂鬱なる春の訪れ人ら

削りても削りても折るる鉛筆苦學生の押賣をしてゆきし鉛筆

アナーキズム誇りに説き錢ねだるこのわかものネクタイはでやか

じろりとわれを見上ぐる男の眼の威嚇をひしとはねかへしやる

四萬温泉にて

簡素な山の生活くらしの親しさにはつきり自分をと戻しけり

朝山の緑のいろの新鮮あたらしさをからだ一ぱいに感じてゐるも

うす曇りしつとりと青き山々に言葉かけたき親しさ覺ゆ

山の温泉にて會ひし夫人

今朝も亦かの夫人の華かなる笑ひ聲がきこえ夜があげてゐる

西海石 詩浪

失職二年有半

妻子を置きて去いなむとす親園かそ村わが連れに来るはいつの頃にか

ふるさとの住みつき難きを言ひ寄りてかなしめる妻と別れ來にける

寢間に來て尙言ひやめぬ就職のよろこびは妻を美しく見す

給料のすくなさ言ふべきにあらざれど安心のちは言ことにいでける

明日よりつとめにいづと張り詰めし身は寢苦しくしばしば眼覺む

働きて疲れ身にひびくあけくれのこの樂しさは思ひ見るべし

辛うじて職得てしより省みぬ鉢草の幾鉢は枯らしつくしぬ

西海石 洋子

自ら育ておほせぬみどり子を持ちてはかなし職もつ我は
里子にあづけむと思ひしより乳呑子の泣くと笑ふと心にし沁む
ちちははのけぢめつき初めしみどり子を手離し難く貧しさつづく
早や歸りの夫つまと遊べる子等がこゑ生くべきみちに思ひ至りぬ

西郷 春子

旅人の姿となりていで行きし心はつひに歸り來らず
何事ぞわが白玉の夢をさへちりの如くに捨てよといふや
白玉のま玉の吾子わがこ汝なが爲に母の命は光ありけり
かくばかりよりてをあれど吾子もこもまた母にあきたらぬ日の來りなむ

ふりつもる落葉の庭の薄あかりうつつともなくもの言ひにけり
ぬば玉のわが黒髪もひえびえと寒さおぼゆる夜頃なりけり

この御佛わがこし方も行末も知りたまふやと涙こぼるる(奈良中宮寺)
群生ぐんせいひの野菊の花に山の雲さびしきかげを置きて過ぎゆく(箱根)

三 枝 常 盤

はろはろし山と山をつなぎたる葡萄の棚のいくうねりかも

庭隅の苔には苔の花さきて梅雨ふかき日となりにけるかな

宵闇の湖うみのおもてを燈籠の一つは紙の燃えつつ流るる(山中湖報潮祭)

三 枝 秀 行

大利根の葦を刈りをりこぼれ穂の浮きつらなりて遠ざかるみゆ

三 枝 は る 子

水苔のゆれつつ湧きて山水の流れ出づるは寂しくありけり

三 枝 福 武

大石村より十二嶽節刀御坂峠縦走 三首

十二ヶ嶽夕立雲のたむろせり雨に會はむは谷の何處か
夕日受けて芦川村のあらはに見ゆ山せまり合ふ峽間の底に
東谷に今朝見し村を西谷に見下して山の旅はてむとす
日曜の今日を來合はず人多し曉山に人聲こもる(大菩薩嶺)

義兄退職行先も明かにせず旅立つ 二首

十三年添ひ來て妻に一枚の着物買ひたる義兄あににはあらず
正氣なる心と思はぬ義兄に向き言葉少き別を申す(驛にて)
河鹿の音湧き起れるに見かへればいま渡り來し橋ゆれて居り(大嶽山)

唐黍^{ちやうこし}を軒に結ひ下げ此村の家居はすでに冬構なり(西湖村)

齋田丑之助

鋼と機械

わが心に大きくかげり据りたる機械のくらき重さを感じず

機械が職場にあらく吐く呼吸^{いそぎ}の流れきびしく心に痛む

うつし身を灼き來てひかり澄む鋼のほのほのゆれはむしろ静けき

灼けて飛ぶ鋼の火花の閃めきのささり來りてうつし身痛し

爐に灼けし鋼のほのほのするどくて眉間^{まゆま}にさむし照り動きたり

室の空氣たたきてデューゼルエンジンのひびきはわれの生命ゆるがす

空氣震動の不氣味に鼓膜押して來て生命にひびくデューゼルエンジン

齋田玉葉

たづね來し甥に罪なし其親と不仲の譯を言ひて去らしむ

齋 田 鈿

安かれと髮解きて寢れ熱ひめてあまたかなしき夢を見にけり

齋 藤 朗

對岸の春の青空うらがなし脳病院の赤き屋根見ゆ

齋 藤 梓

雪ままだも消のこる原に月てれり櫟の梢の花芽影だつ

朝露にしとど濡れ立つ箒草秋さびゆかむ色ぞ見えつつ

齋 藤 加 津

ま木繁る熊野の山の八十谿にしみとほりなく蟬のこゑごゑ

岬近く今日は寄りゐる黒潮の大きうねり波まさ目に見たり

巻きかへるあらうづ潮ににび陽さし海ひといろに曇りわたれり

さし出での中洲の松の木々の間に靜かに人は落葉かき居り(天の橋立)

齋藤夷臣

暮れそむる李花の白さの靜かなり馬は寢藁をかきよする音

齋藤華舟

年毎にわづかなれどもわが家のたつきのゆとり見つつ働く

齋藤鬼淵

かきくらし降りぬし雪のやむときはほのぼのとして夜明の如し

砂高にわく黒雲は越の國の海暗きまで流れけるかも

妙高に居つく夕雲映りぬる刈田の水の寒くし思ほゆ

幼な子をふところにして寝る妻の物言ひやさし冬の夜の雨

齋 藤 清 衛

雲に啼くは何鳥ならむ群れつつ飛ぶかげのかそけきこの夕べかも

齋 藤 清 志

尺あまり氷柱^{つらら}は軒に下りゐて昨日も今日も雪降りしきる

齋 藤 耕 二

母 逝 く 二 首

たらちねの母の柩をおくる道遠山に雪のしろじろとみゆ

苗代に糶のまかれてありにけり母を葬りの道にそひつつ

離陸せし飛行機は塵芥焼却場の大煙突の上に向きかへにけり

齋 藤 弘 道

一日をこよなく長くおもふ日よ植字工等もけふは唄はず

齋藤佐太郎

傘さして花明りの中に我はをりこの降る雨になくひばり一つ

降りつぎてはれぬ雨かもいちじくの今朝もぎし實はみな水くさき

おのづから道に流るる山水の秋ふけし冷えの草鞋を通す

小春日の今日うららけく車窓より見てすぐる家のみなもの乾せり

おろかしき世やと思へど術なきか多きうからを養ひ喘ぐ

齋藤伸

炬燵にて讀み書きをする癖つきしこの一冬も過ぎゆかむとす

萌え立ちし冬菜のかこひかたづけて雪の少き今年をぞ思ふ

北空に雷轟きて降る雨は向うの檜山ひやまを通り過ぎたり

桑摘みてあくに汚れし手を洗ふ門川は既に小暗かりけり

蚊帳吊りて蠶棚こたなの間に狭く寝る枕べにして蟬鳴せみなくなり

眼下まなしたの谿の木立に聞ゆるは相呼びて啼く鶉のこゑ

夜なべにと母が手にこく紫蘇の實の匂ひかぐはし室にこもれる
信濃にはすでに過ぎたる松茸が東京の夜店に數多ならべる

齋藤 愼吾

山寺元旦 四首

禮法華らいほつげ一會いちゑ無言の座に燃えて燭はかすかに音立ててをり

讀みなれし法華經なれど文々もんもんの韻ひびきは深く今朝の身に沁む

そそりたつ杉の秀はむらの眞白雪山はさやかに明け放れたり

元日はしづかに過ぎぬまなかひに富士大きくぞ夕かげり來し

朝夕の勤めきびしく身を置きて淨らに住めば心安けし
さるすべりしんみりと紅し朝じめる庭の木の間の茅^か鯛^たのこゑ
山まゐりの人らゆくゆくうつ太鼓ひびきは高く天に冴えたり
うつしみの吾がいこふべきところなしひそかにいでて山を仰ぐも

三 月 堂

國寶の燈籠一つの置きどころ無雜作にして深く寂びたり
簡素なるみ堂に張りし墨繩のさながら直^{なほ}く人らありけむ
よろづ代に語りつがれむ工^{たくみ}にも名さへ傳へずその工人ら

大和法隆寺

日の本の國興るときいにしへも大き太子は生^なれませりけり(聖徳太子)

紫磨金色かしこけれどもみ佛ら博物館に置かれまします
世にいでしつとめをはりて安らかに奈良の佛のいますにかあらむ
騒がしく遊びぬし子ら皆去りて暑き庭べに蟹の死にたる

身延山元旦

窓近くひびく川音明けそめし空かと見れば月傾きぬ

眼を閉ぢて思へば見えしこの山の晨の庭に今われは立つ

齋藤潤二

たのしまぬ心の前にさくら咲きさくらさびしく散りみだれつつ

信濃のそば粉を貰ふ 一首

みるかぎりそばの花さく信濃なる山畑おもひ食ぶるそばがき
檻のなかの熊が大きな口あくれば吾子もまねして口あくるなり

繪とみれば繪ともみらるる鉛筆の線おもしろく吾子のかきたる

とぼしき商ひ

レジスターのなかに小錢のまろびあるそのさまみては言ふこともなし

齋藤 治郎

鋤馬の脛毛の泥を洗ひゐて腹くぐり來る夕光ゆかりを浴びぬ

夜稻扱くほこりの中に遊びゐし子は眠りたり積藁の上に

遠山に萱刈り行くと午前二時寝てゐし馬を闇に曳き出しぬ

海の上に傾く月を頼みしが林に入れば馬上も暗し

齋藤 秋村

向山に萱刈る音のさくさくと眞晝静けくここまで聞ゆ

齋藤 甚一

夕近き日ざしとなりぬ屋根石の一つ一つに影置きにけり

齋藤 青海

汝なが生おれむことをよろこび大き家借りてを移り來しちちははぞ(わが子に)
いきほひて世をば矯めむとせし人のその大方は敗れたり(二・二六事件)にき

齋藤 稻里

綿の花ほのかにわるる畑中の道の長手に行きつかれたり

この谷の奥處に起る風のあり一むらすすきなびかひやまず

削り立つ岩間のつつじ日にむせて晝しづかなる峽に來にけり(長門峽)

齋藤 大

帝大臨海實驗所にて

水槽の砂にもぐりて生きをりと思へぬまでに動かざる魚

向島工場地區

赤に青に染めひろげたるけだものの皮の大きさは犬にてもあらむか(革造場)

鐵くろがねを電氣熔爐くろがねにとかし居る男のせなに汗ながれたり(鑄鐵工場)

素裸の男等の動ききびしけれ鐵くろがね白く澄み流れてやまず(同)

日本アルプス登山

燒嶽の空は澄みつつ岩山の穂高ヶ嶽に雲はゆき交ふ

高山のあかつき起きに小さき富士南に見えて駭きにけり

槍の秀すがの尖りに立てば飛驒信濃ほがらに晴れて山ぞ起き伏す

齋藤素秋

暮れ近き山田のほとり稻運ぶ人の聲する溪道くだる

齋藤 ちよ

落葉する木の間に見えし庭池に白鷺まひ立ち晝は寒しも

いぬなづなはこべら咲きし桑畑のふみごたへなく土やはらかし

齋 藤 利 治

大江たひかうの流れはるかに靄かすみ氷流るる晝しづかなり(朝鮮大同江)

生活の爲めに教職にあることを恥ぢよと言ひしころは若かりき

齋 藤 徹

東北地方飢饉

みちのくの岩手の民はうつせみの命つなぐと黒稗食ふも

岩手のや青笹村はかしぐべき稗粟もなししだみ食ふといふ(しだみは稗の實)

齋 藤 友 子

雨にこもるこのひるさがりつれづれに胡桃くるみを割りて小鳥にあたふ

齋藤友三

山椒の木やや高ければ母上はつまだちしつみつみ給ふなり

わがふねを橋の欄干に見下せる大人の顔顔子供の顔顔

武藏野の雑木林にひびかせて生徒らが歌ふ遠足のうた(遠足)

避暑客ら大方今は引きあげて避暑地は蟲の夜となりにけり

齋藤虎五郎

霜圍ひとれば若芽の生まひてあり牡丹の日記この日始まる

秋晴の澄みたる夕うれしくも名しらぬ山を一つ見出でつ(伊香保)

齋藤範吉

あからびし朴はの葉に蝶舞ひるしがしろく小さくとまりけるかも

齋藤初枝

國原をめぐれる山は夕焼けてけさ來し旅をわが歸るなり

齋 藤 英 男

青あらし過ぎて明るき樺若葉わが寂しさよ絶ゆるときなく

鯨曇り日ぐせとなりて晝深しさがめの雪は白くつもりぬ

冷え冷えとゆふべを風の吹きいでて樺の林に啼き入る鴉

犬蓼の白き花群にひびきつつ晝雷はとほぞきにけり

齋 藤 福 一

土用濤月に照りつつ飛び散らふしぶきは高く霧となるらし

祭より歸り來りて夜どほしに干せる秋刀魚は朝乾きたる

ひたぶるに戦ひ果つる兵多し古へもかくて國は榮えき

齋 藤 瀏

大正七年さる使命を帯び姿を變へて北滿より某地方におもむく。
第七師團參謀たり

幾日來ていく日また行く旅ならむ曠野のはてに今日も日は落つ

九州大分縣日出生臺廠營、大正十三年

懸命にねりし戰のすみしかば雲雀一時になくと思へり
天幕に夜の冷きびし立番の歩哨は咳をしのびかにすも

大正十三年第七師團參謀として北海道旭川に住む

東明のあかるむ霧にほのかなる光あつめてさく霧華かも

霧華さく秀群はにほへしののめにあかりはまだし森に徹らず
すみ深き星夜の空にぬきいでて木々の霧華のおのれ照りたり

同年大雪山蒼雲溪にて

打ち倒れそのまま朽つる大木のくちつつあらむ山のしづもり

大正十四年東北地方陸軍大演習に加はりて

我が双^{めが}眼鏡^ねに入れりと知らぬ敵の兵の愛^{かま}しきかもよ飯はみて居り

その時中尊寺にて

我に似し顔の羅漢もありにけり頬杖つきて居たりけるかも

氷原、大正十五年

おほつくの海の氷^ひ原^{ばら}に飛び行きて歸らぬ鳥は何の鳥ども

昭和二年歩兵第十一旅團長に補せられ居を熊本に移す

古城の高石垣の大なだりまともに打ちて雨のしぶける

乃木將軍の寫眞かかげあり將軍がここの初代の旅團長なりき

古城の高石垣に照り映えて光りたむろする樟若葉かも

球磨川を下る

全河の明り碎きてたぎつ瀬は岩の眞洞に打ち込みにけり

高千穂に遊ぶ

深山の峽の底ひに音を絶えて常動かざる水にかもある

荒崎濱の鶴群

此の濱の群れなく友になびきつつ鶴群くだる天の高きゆ

昭和三年四月廿日第六師團に山東省出動の令下る旅團を率ゐて之に従ふ。濟南事件起る

異國にいのち脅えて待つといふ同胞思へば心はやるも

船今し港いづると甲板に出で立つ兵の片寄りにけり

否と言はば火蓋きるべく整へて言やはらかに我が告げにけり

街中に逃ぐる敵を追ひつめて打たば打たむと砲据ゑにけり

我が兵の生命かろくし思はねど戦ふからは勝たざるべからず

戦は人間の事か大明湖だいみんこの青葦せいゐ叢そうになけるよしきり
南軍が八千元に買ふといふ八千元の我が生命かも

事收まりて後

時のさばき心に期こしてかなしまず双ふたのほこり我がぬぐふかも
空き部屋にかこまれてわれ一人なる深夜の寢間に蝸かきを殺す

黄　　河

蒼茫と曠野暮れたれ眼の前は黄土を流す大河の明り

同年九月内地歸還

あだの手にはらからのあまた死なしめてあり得る身とし我思おもはなくに
率おて行きし兵死なしめて歸り來つ歡迎門を我がくぐるかも

昭和四年霧島神宮に詣つ

瓊々杵の尊天降りましけむみ代ゆ湧き絶えざる水か吾がむすびたり

兵を南薩の野に練る

攻むる術ここに成りてすがしもよ吹上濱の松風の音

秋日照る濱の松山しづかなれど双眼鏡はうつすひそみ居る敵を

軍用飛行機搭乗吟、昭和五年

吾がのるや機體の下に流れ入り淙々として青し草原

陸軍に職を奉ずること殆んど三十年、此の間日露戦役、西比利亞出兵、
濟南出兵に参加。昭和五年職を退くにあたり感慨無量なり

軍人の長き習慣吾が肩にのこりてこれの平服似合はず

滿洲濟南の日將悉く馘られぬ言はぬ事かはと支那は言ふべし

昭和六年紀元節の御宴に召されて

み酒み饗をわれらに賜ふみことのり打ふるふ身を保つかしこさ

同年秋滿洲事變起る。心は疾くかの曠野に走る

じりじりと暗の曠野に我が軍包圍せばめつつ動く音なく

廟巷鎮に於ける爆彈三勇士の最後をききて、昭和七年

身を彈丸と碎く最後の心きまり吸ひし煙草はうまかりにけむ

合 掌

この道は死もて行く道この道に汝を驅りたる世をば慨かむ

十國峠にて

相模の霧をぐらし伊豆の霧明るしわが行く尾根は漂ぶその間に

戸隠神社に詣づ、昭和八年

戸隠のふか山ゆけばさ霧凝りわが佩く劍聳むすべり

奥日光尾瀬沼遊草、昭和九年

深山のこの沼水の岸うつは獨り遊びて慰むならむ

高原は天にまむかひ四方ひくし澄み寂かなる日光展べつつ

昭和九年大雪山層雲峽に遊ぶ

瀨の響に月夜の天のひびかひて谷は霜凝るきびしさにあり

伊勢神苑昭和十年

玉砂利にしづかに白き垂尾ひき鶏わが前を遊びつつ避く

齋 藤 史

濟南事件の後職を退きし父を悲しみて 四首

大君の御軍人の父にあればひたすらにして黙退きき

御戦に死する者らは眞實なり生命安く居て何言ふ輩

いきどほる部下將校に説きて言ふますら夫父の言のやさしさ

生死を共にこえ來し兵らなり言無くてただに泣きにけるかも
植物は刺をかざせり神々は畏あそびせりわれは素足に

二二六事件の後に

羊齒しだの林に友ら倒れて幾世經ぬ視界を覆ふしだの葉の色
春を斷きる白い彈道に飛び乗つて手など振つたが遂にかへらぬ

父に別るる數日前に吾子生る 一首

暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守うた
倒れたるけものの骨の朽ちる夜も呼い吸きづまるばかり花散りつづく

齋藤 文雄

そばの花の青きひかりの頬に照りて旗ひらひらと行きし行列(母を葬る)
暮れはやき谷の小路のよもぎふの青さに沁みて牛の匂ひす

由良の門かどをおちゆく潮の先しろく冬至の空の小さき太陽

投網うつ音ざんぶりと満潮の渚にゆらぎいでし月かも

齋藤 文夫

夜な夜なを豆腐凍らすこゑのしてこの國の冬は最中なかとなれり

齋藤 北蘭

隱岐丸のあとより靜かに漕ぎいづる小舟のかげのうつる朝波

齋藤 正治

煙幕の中より出でし戦車の列歩兵陣地にとどろきせまる(演習)

齋藤 正治

古ばけつに植ゑし朝顔蔓もちぬ伸びたき方に伸びて絡めよ

齋藤 禮子

味噌汁に露の臺をば刻み入れて香に立つ朝の厨明るき

齋藤禮助

わがこころ遂にきはまりあるべしや起き伏ししげき波を見てをり

齋藤義直

わが庭にともしらに咲く茶の花の凍みつく寒さ遂に至りぬ

齋藤與助

春ぬくき水の音する湯の宿は山に對ひて障子閉めつつ

齋藤茂吉

折に觸れたる三首

身ぬちに重大を感じざれども宿直のよるにうなじ垂れぬし

ひむがしに星いづる時汝が見なばその目ほのぼのとかなしくあれよ

たたかひは上海しやんはいに起り居たりけり鳳仙花ほうせんか紅く散りゐたりけり

死にたまふ母 録三首

死しに近き母ははに添そひ寝ねのしんしんと遠とほ田だのかはづ天てんに聞きこゆる
我が母ははよ死しにたまひゆく我が母ははよ我わを生なまし乳ち足たらひし母ははよ
のど赤つばくらめき玄鳥つばくらめふたつ屋梁はりにゐて足たら乳根ねの母ははは死しにたまふなり

雑 詠 十一首

ふり灑そたぐあまつひかりに目の見えぬ黒くろき蟬せみを追おひつめにけり
しまし我われは目めをつむりなむ眞ま日ひおちて鴉からすねむりに行くこゑきこゆ
草くさづたふ朝あさの螢へいよみじかかゝるわれのいのちを死しなしむなゆめ
われ起きてあはれといひぬとどろける疾風はやちのなかに蟬せみは鳴なかざり
さんごじゆの大樹だいじゆのうへを行く鴉からす南なんなぎさに低ひくなりつも

こらへぬし我のまなこに涙たまる一つの息の朝雉のこゑ
ものの行とどまらめやも山峽の杉のたいぼくの寒さのひびき
ひたぶるに暗黒を飛ぶ蠅ひとつ障子にあたる音ぞきこゆる
ひさびさに外にいづれば泥こほり蹄のあと心ひきたり
むらぎもの心はりつめしましくは幻覺をもつをとこに對す
しづかなる午後の日ざかりを歩きし牛坂のなかばを今しあゆめる

朝の港三首

しらぬひ筑紫の國の長崎にしはぶきにつつ一夜ねにけり
しづかなる港のいろや朝飯のしろく息たつを食ひつつおもふ
朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝みよろふ山

しづかなる峠たがけをのぼり來しとくに月のひかりは八谷やたにを照らす
ほそほそとほりて鳴ける蟲が音ねはわがまへにしてしまらくやみぬ
ものの音とに怖おそづといへどもほがらかに蟋蟀こたろうぎなきぬ山のうへにて

霜

四首

信濃路はあかつきのみち車前草おはばこも黄色きいろになりてしもがれにけり
寒水さむみづに幾千いくせんといふ鯉の子のひそむを見つつこころ和なごまむ
桑の葉に霜の解くるを見たりけりまたたくひまと思はざらめや
むかうより瀬のしらなみの激たぎちくる天龍川におりたちにけり

秋

三首

もの冷ひやゆるころとはなりて朝々の薄明うすあかりより鳥は群れたつ
額ひたひより汗はにじみてしばしだに山を歩むは樂しかりけれ

晝しぐれの音も寂しきことありて日ましに山は赤くなるべし

近江蓮華寺 三首

松かぜのおと聞くときはいにしへの聖のごとくわれは寂しむ
をやみなく馬追のこゑのとほれるを窿應和尚も聞きたまふらし
石龜の生める卵をくちなはが待ちわびながら呑むとこそ聞け

隨縁隨歌 九首

ふりさけて峠を見れば現身は低きに據りて山を越えにき
群山の青きを占めてこのあさけ一夜とどろきし雲はれにけり
春さむく痰喘を病みて居りしかど草に霜ふり冬ふけむとす
覺悟していでたつ兵も朝な夕なひとつ寫象を持つにはあらず
こゑあげてひとりをさなごの遊ぶ聞けばこの世のものははやあはれなり

まなこ冴えてわれは眠れず巨流河の警戒塹に雪ふるらしも
やうやくに老いづきにけりさびしさや命にかけてせしものもなし
あまのはら見る見るうちにかりがねは一つらひくくなりゆきにけり
春の雲かたよりゆきし晝つかたとほき眞菰に雁しづまりぬ

天鹽志文内 三首

燕麥のなびきおきふす山畑晴れたりとおもふにはや曇りける
うつせみのはらから三人ここに會ひて涙のいづるとき話す
人も馬もうづむばかりの太路のしげりがなかにわれは入り居り

雑 歌 五首

横ぐもをすでにとほりてゆらゆらに平たくなりぬ海の入日は
ただひとつ惜しみて置きし白桃のゆたけきを吾は食ひをはりけり

冬雲ふゆぐものなかより白く差しながら直線光すくねるひかりとところをかへぬ

うつつにしもののおもひを遂つひぐるごと春の彼岸ひがなに降れる白雪

ガレーヂヘトラツクひとつ入らむとす少しためらひ入りて行きたり

齊 藤 謙

豆腐釜とうふかまの下焚かき付けて豆引まめひけば寝てませと言ふに父の起きます

豆汁なめそつよくばりに妻の出でたれば泣く子背負こせおひて釜焚かく吾は

齊 藤 春 吉

ねづかれの腰のいたみもいつしかに忘れてわれのやみつづくなり

氷こわりに階下かゐにゆきし母上のしはぶきの聲さびしくきこゆ

齊 藤 浩 二 郎

ひとひらの雲が落せる日のかげり靜かに庭をうつりゆきつつ

月はやや傾きそめぬ風いでて稻穂のゆれのあからさまに見ゆ
橋の下をぬけでし舟の櫓のひびきさやかに聞え月夜すず風

齊 藤 路 光

閑古鳥しきり啼くかなわが引ける田水に曉の色うごきつつ
霧ながら水音たかき深谿に鴉なきつつくだりゆきにけり
おもだかはかそけき花ぞ田草取る手先の波にさゆらぎにつつ

齊 藤 義 勝

帆柱にその目印の旗たててこの沖中にものを賣る舟

春闌けて病いえゆく朝餉には漬けし青菜の花も食べにけり
月光の今宵の如き夜なりけりわれら若くして清くありけり

暑かりし一日の暮の安らぎや木草も今は静もりにけり

山畑のぼけの苗木のいく株は花をつけたり冬暖かし

財津 政男

癩院に友を訪ぬ

あわただしく訪ねし我に落着きて語りがたきを友は嘆かふ

相馬 御風

餅を焼く香ほのぼの雪の夜のせまきわが家にこもりぬるかも

まづしかるわが家の飯いひのこぼれをだに來て待つ鳥のあるがうれしさ

いなづまの光る束の間たか山のさびしき姿わが見たりけり

心つかれながむる庭の秋萩の葉末の露はとどまりあへず

大正七年十月二十四日雨にぬれつつはじめに良寛和尚が住めりける越後國上山腹の五合庵をたづぬ

そのかみの良寛さまをおもかげにゑがきつつのぼる久駕くが美山道みやまみち

たちとまりおもへば夢かうつつかも國上の山の雨にぬれつつ
そのかみのひじりがくみし岩水をおち葉かきわけさがすなりけり
たにかげの村家のやねゆ煙たち久駕美の山はたそがれむとす

大正十二年夏和倉温泉にて

夕まけてほのかにかすむ能登の島の半の浦村に灯のともる見ゆ

大正十四年九月五頭山に登りて

一つらにならびていゆく登山者の列はみだれず道をほそみか
ひややけき霧にぬれつつ穂すすきのさやぐ坂路にわれもぬれたり
先に行く人が搔きわくる穂すすきのはねかへるをばわれもかきわけつ
のぼりつめ息づくただち霧雨に濡れたる草に身をば投げたり
もだしゐるわれらが吐ける息の音のほかに音なし山の静けさ

同年十月佐渡が島にて

佐渡が島^{まの}眞野の入江は秋をふかみ波の穂白く日に光りつつ

初夏の頃

大空を靜に白き雲はゆくしづかにわれも生くべくありけり

越中高岡市郊外にて

たまくしげ^{ふた}二上^{かみ}山^{やま}はかしこぞと友はゆびさしぬ傘もちかへて

越後六日町にて

川沿ひの桑の畑に霜ふりて寒き朝^{あさ}明^けを鳴くいしたたき

柏崎町洞雲寺にて 二首

寺庭の苔のしめりをこころよみ足につきたる泥をぬぐひつ

うら山は松の林のしげければまなくひまなく鳴く鳥の聲

雪解田ゆきげだにほのかに青き草の芽のほのけくしこそ春は來むかへ

栗の花のほひしるけきひるさがり谷をへだてて牛鳴くきこゆ

はだかなる母にいだかれ大きな乳房ふくめるその子もはだか

近くにし鳴きぬしこほろぎの鳴きやめば遠くにも鳴きてゐたりけるなり

盲青年が振りまはず杖のひゆうひゆうと切るはさやけき初秋の風

竹の秀たかのゆれ靜なりそのゆれの靜なれどもゆれやまずして

となりやの庭のコスモスながめつつ風呂の水をぞわが汲みにける

わがあふるぽんぷの調子ととのへば心もおのれたひらかにして

かけす鳴く林のかげにやぶ柑子かみじさがす冬日となりにけるかも

夕餉にはいささか早し炭つぎて今しばらくをこのままにゐむ

遠蛙ねながらに聞く小夜こよの床子も耳すまし聞かむとぞする

とほ蛙ききゐるし耳はいつしかに吾子が寢息を聞きてゐにけり

握りたるこぶしの中の綿屑をそのまま持ちて子は死にゆきし(幼児の死)

夕庭にさびしく立てる一つ岩手ふるればのこる日のぬくみかも

天翔るつばめの姿見えざなりて山に雲ゐる朝おほくなりぬ

二階にのみいねてゐしかば庭の木の梢にのみぞ親しめりける

常ならぬ世のさがおもひありし夜をたまたま聞きし五位鷺の聲

妻を失ひて

わぎもことめでまく植ゑしうら畑の百合もいつしか咲きすぎたるを

朝をとく沖ゆかへりくる彦平にもあはれ舟まつ妻ありにけり

うましうましとむさぼりくらふ鹽焼のあはれこの鮎は仔をはらみゐる

鳶四五羽いとものどかに舞ひてゐぬ飛行機がかける空の眞澄まに
しばらくを飛行機にとられぬしわが目飛行機が去れば山にむかへり
いつしかに雪來にけりとつぶやきて白馬が岳を屋根よりは見つ
しばらくはあかりをつけずこのままに月光げつくわうの中に坐りゐむとす
天の川さやかに見えて風さむし玻璃戸ひきひき鳥が音をきく
物あまたとりみだしあるわが部屋は一鉢の蘭らんに寂然じやくぜんとせり
春淺き空やほのけき夕あかりさむざむとして暮れなづむ山
一もとの松にことたるせまき庭朝日夕日は松のみが浴びて
わが立たち處どそれとわきまへず古き葉のおつる檜ひのきの木の下にわがゐし
入口に牡丹の鉢を置きたれば人來るごとにその香かともなふ

類焼の厄に遭ふ

焼跡のたかどに立ちてしみじみと今日あめつちの大きさを見たり

雪中街上所見

わが前を魚ぶらさげて行く人ありさげし魚にも雪のかかれる

上京横濱に赴く汽車中にて

赤き青きスウエーター着ていそぎゆくこどもを見れば吾子わがこしおもほゆ

相馬米次郎

年貢米納め終りたる安けさやはうれん草をゆでて夕餉す

爪龍寺 嬭

小學校教師のうた

讀本を屏風に立ててその蔭にも書く癖もすでに女子せみぞ

この我を信ずる兒童らの純情まごころに觸れて危く身を保ちをり

境 隆 雄

諏訪の湖朝霧はれて冴え冴えと白みわたれりわが目のまへに

堺 榮 之 介

すがすがし開聞岳かいもんだけは綿津海わたつみの波の底より今出でしごと(開聞岳)

堺 三 樞

窓外に芒焼くほのほ赤々し此の國のおそき田植を思ふ

河原に鈴蟲を採り夜はふけぬ南にひくくアンタレス赤し

堺 田 鼎

脇濟のたまさかとまる一驛に日本人の乗り降り(山東平原)のなし

坂 口 貴 敏

バス中の眺め明るく展けつつ山の幾尾をすでに越えしか
尾根づたひ一筋雪の光れるは峠を越ゆる路にかあらむ

坂口 千年

父長逝す

日を暮らし今日も泣きつつちちのみの父の品々片づけてをり

昭和二年丹後大震災 二首

久方の天あまに焼けたる焰雲我が村かけてひろがりきたる

絲箱を背負ひて通ふ人多し焼野に骨を求めて來しといふ

山の間にたゆたふ雲の光さむし夕暮れて路は峠にかかる(比地山峠)

夜更けて隣家となりやゆもれきこえ來るいさかひも金錢かねのことにかかれり

坂田 富美

森の道深く入り来て下蔭のをぐらきに光る苔を見にけり

森出づればとみに明るし草原の青きにとほる強き日の照

ほの暗きランプがつくる翳にじみ山の夜さりのしみじみと寂し

離り行く子の提灯のかそけきが霧ににじみつつまだ見えてをり

のぼり来る一筋の道ひそかなりこの寂しさに堪へざらむとす

雪晴れの深藍空を目に見れど心はただに歎きつつをる

やはらかき春の光をふふみもて風はやさしう草に遊べる

坂田 彌一郎

いにしへの氷室の池をめぐりつつ踏むには惜しき青苔の庭(勸修寺)

坂戸 幸治

春のごときうらあたたかき日にあれば雪搔き落し屋根葺くわれは

夕風の涼しく吹けば屋根屋われ今暫らくを葺きて仕舞はむ
路のべの稗草の穂も實となりて朝の野分の風にこぼるる

坂 梨 未 明

水成岩のこの層脈のさやけさよ淀める海にきほひ迫れる(城ヶ島)
あたらしくここにひらけし地下鐵の入口さむしこちらを向きて(上野附近)

坂 村 眞 民

朝鮮にて

白鷺の群れてとびゆく空の雲夕日にあかくそまりながるる
白鷺の下りゐしづもる水小田に春日きららに照りてしづけし

坂 元 重 晴

いけにへの牛の頭がほのくらき孔子の廟にかざられてあり

妻病み採血せしとき

つきさしし針をつたうて靜脈の血はしぶくなり採血筒に

坂 元 雪 鳥

我が胸に在す佛の住み憂しと嘆き給ふがかそけく聞ゆ

望む事無きにはあらず年毎に望小さくなるがさびしき(年頭)

酒飲めば慰むといふ偽に假に生き來し男なりしか

斯る時斯くしつるよと思ふにぞ忘れぬ名は胸に新し

松原を庭とし住めばいつしかに親は富めりと思ふ子悲し

武藏野の昔のままの草ここだ萌え出る見れば小庭も足らふ

坂 本 優 子

帯ときつつ涙は落つる友が家いくとせわれのあひたかりにし

ここに來て眠らむ日までの吾があゆみつつがなかれと掌を合しけり

坂本 凱次

高山は雲の流れの絶ゆるなし濡れつつ咲けりいはかがみの花(白馬岳)
節の家たかしここと思ひて見直せる門への萩は花すぎにけり(長塚節の家)

坂本 清八

死にゆかす父に問はむと思ひたることはみづからの内に決むべし

坂本 小金

一夜さの濕りか足れる交讓木ゆづりの柔やき葉莖はの赤み匂へる

あわただし昨日葬はふりし父の墓今日は詣でて立ち行かむとす
たまきはる命死にゆく時の間も父の思ひは吾子おこにかかりし

耐へがたき暑熱は日々に歎き來て朝より眠る癖つきにけり
起きぬけの目をしばたたく霧のなか氣寒さ言ひて女むすめの出で來し
立ち消けつつ移ろふ霧のいつしかに山は大きく現れて來ぬ

えへら笑ひといふを教へし友のありき笑ひてをれば安き此の世か
流れ寄る水は小砂利を洗ひつつ橋をくぐりて幅づきにけり

坂本沙儂子

おのづから眼がしらあつし佇みて千人針を吾わがも縫はむとす
朝風にさんまさんまと呼ぶ聲のはるかに坂を下り來にけり

坂本祥子

もの買ふと出で來し町に土ほこり立ちて淋しも春の眞晝は

坂本佐知子

月の夜の風をりをりにおこるらし峰の煙のくづれては立つ(淺間山)

坂本 聖亮

元引けば日十錢にならぬ繩仕事百姓吾は今日もするなり

冬の陽の翳りて急にうそ寒し庭の日向に繩なひ居れば

坂本 其水

見解の違ふを言はずこの人の話をそらす言葉さがしぬ

折れ針を疊にさがすひとときを庭木にさやぐ秋の夜の風

坂本 武夫

朝の道を何の氣なしに急ぎつつ鳥のそばを通りたるかな

坂本 俊郎

はふりどの崖の萱生にひとつ光る秋の螢は飛ばざりにけり(見逝く)

碓氷嶺を越えてくだりとなりにけり妙義は遠く尾根越しに見ゆ
いにしへの東御門の跡どころ麥青々と雨にぬれ居り

茂り生まふる笹原の中に道は入りて人つぎつぎにかくろひにけり

鳥岩にしぶきを上げてあるる海秋もふかしと見つつ山越ゆ(澁溪崎)

坂本不二子

さくら咲く港の町をゆすぶりて晝の船出のどら鳴りひびく

かへり來し家は緋桃の花ざかり春の嵐のひもすがら吹く

落潮の干潟の上をしらじらと吹き流れ來る秋の風みゆ

白しろ埴はにのけふの誓のかはらけに染みしがかなし口紅の色

坂本不三男

耳にとめてききいればあはれかうかうと晝の御苑になく鶴の聲(朝鮮昌慶苑)

坂本眞鈴

歪みては見まじと見るにみにくきもみにくきままにおもむきのあり
蜥蜴あると見るやすなはち青光る光となりて消えし蜥蜴か

白山佛師と伊勢高源寺に合宿す

この木の中にいます佛を彫り出すと鑿とりもちて木を彫りやまず
像うりし錢盡くるまで像はほらず白山佛師酒のみ遊ぶ

坂本幹郎

海霧^{がす}こめて降りつぐ雨は下りゆく岬山みちにほとばしるなり(羽鷲山にて)
ふかぶかと潮もみ合ふ海岸^{うみぎし}に梅雨めく風は吹きたちにけり(宇野にて)

わだなかの島のそがひにあらはれし月に夜雲のひろごり疾しも(備後鞆にて)
月のかげとどかぬ庭のくらくして蟬はなきつつ土に落ちたり(備中高松立田常島院)

夕ぐれのひかりは残るさ庭べに寒入りの日の月かげさしぬ

坂本 正雄

雨上りのわが靴先に及ぶ靴磨人の視線に氣づきつつ往還に出づ
土木匡救事業の監督に來しわが友のきびしかりしが噂にのこる
嘗てここに上司たりし人來たまへり穩やかにしてよき人らしも

坂本 都

現し世に常變りなく父母のいましたまふと想ふべからず
松風の音をこほしみ枯草を踏みわけて入る寒き樹の間に

坂本 義夫

行きずりに吾が下げ持てる松茸の香りを言ひて振り向く人あり

坂井 喜美子

すつぼりと一つの殻をぬぎ捨てしこちするなり三十となりぬ

坂井久良吉

新聞のオリンピック記録切抜きてわれ何にする病の床に

坂井謙吾

よしあしを蔭にまはりてのみいふか女といふは憤ろしき

坂井晶山

さ青なる茗荷畑に落つる陽の黄なる信濃に歸り來にけり

天龍の河原に萌ゆる春草の青きを摘まばなぐさむらむか

もろこしを焼けば音たてはぜにけり秋となりたる故郷の家

坂井正義

踏みさくむ山路はるけし尾根にはふ雲にもひびく谷川の音
山國は冬づく早し茶の花をゆすりて寒く時雨きにけり

長良川下り

ひとところ夕映あかしいただきの青葉がくれに城聳え立つ

坂井半甫

久方の月夜の空に並みたてる信濃のおくの雪の高山

汽車とまれど更に音なし木曾谷の山にかかりて月澄み渡る

坂井吉満

杉の葉の雫は雪に滲みゆきて母の墓邊の淨らけきかも

レーニンの言葉賀狀に刷りたりし友捕へられて年過ぎにけり

病み臥る父をし見ればことごとに父に従ひ來し我なりき

空しかりし今日の一日^{ひとひ}を思ひつつツボンたたみて小床にしきぬ
故郷の晝靜かなる目覺には遠松山に蟬なくきこゆ

阪 口 保

大和の家にて

露の臺^{たう}ちぎりかなししみ大和野に君が黒瞳を欲りてなげくも

富雄川のほとりにて

砂原のねむりぐさのはなわが顔を地にちかづけてみいりけるかな

あるとき

くるしみもはたよろこびもわくらはの一夜にかけて灯を消ちにけり
よしゑやしいましと率^{ひら}寢^ねて諸神のうち懲^{むた}むとも悔あらくなくに
ちちが家大和の國の家なれば髪は解かせずいねにけるかも

髪とくと起きいづる子にまだといへど否とはいひて曉近づきぬ

またあるとき

はつはつに朝けにみらくうら悲し小床におちしぬば玉の櫛

淡路へ

陸くがの燈ひと全くわかれてわが船のゆれははげしくなりにけるかも

上海に遊ぶ

長崎は月の出潮となりにけり今よひはじめて宿る長崎

果物を買ひに行かむと出でて來つる町の曲に大き月の出

黄浦江岸の柳が見ゆるぞと妻をたすけて船室をいづ

但馬圓山川を下りて

青葙を手折りて持てば鮮しき五月の感じするをうれしむ

太々とあざみの莖はしげりたり紫痛き花天を向く

學問を遂げて死なしめと地震ありし温泉街を歩みて思へり(城崎にて)

執 筆

よるふけて鼻のくすりをさして居り思考のとぎれにこほろぎを聴く
やうやくに得たる結論をよろこびて書きつけてをれば夜があげてくる

阪 口 い と し

ふるさとの春ともなれば薬師寺の會式みしきの鐘のなりひびくなり
夕されば御陵たかく五位鷲のなきて渡らふ大和戀ほしも

上海にて

あめりかの船つきたりと黄包車オシボツラ岸邊ツツにならび客をまち居り
海岸に竝ぶ倉庫の白壁に打倒國民黨フアシストとあり

阪本千代子

山葵^{わさび}田の花の香こもるそよ風にふかれて丘に雲雀聞きをり

阪本 静子

いさかひし我と妹^{いも}とに説きたまふ父の言葉は悔いつつぞ聞く

農場のトタン屋根よりしづくする霜どけの音は聞くにぬくとし

酒 徳 宗 三

芥ただよふ港に朝の光さしすでに暑しと船を待ちをり

白じろと蕎麥の花咲く山畠うす曇りつつ日は傾きぬ

酒 井 朝

沼べりにつづく葦原眞菰原夕はさやぐ音ばかりなり

酒 井 彰 夫

ほのかなる香りなつかし青森の林檎はこびて貨車つきにけり

酒 井 充 實

明けやらぬ外の寒さに交替の歩哨は白き息吐きて來し(衛兵勤務)

酒 井 克 枝

をとめなれば清しと言ひて醫師がとりしわが血は人の命救へり(輸血)

酒 井 喜 芳

奥深くのぼり來しかもたぎつ瀬の瀬音かそかに谿せばまりぬ(黒部谿谷)

酒 井 薰 風

ははそはの母のこのみしたぐ櫛の木の太芽かなしも春かへる山
藁を焼く火は赤々と田の中に暮れのこりつつかりがねの聲
末の子が眉の間に小皺よせものいふさまは亡き母に似し

酒井 廣 治

大君の立たす邊へにこそかがやきて菊花天皇旗紅く映えたり

丈あまる玉蜀黍びの畑を分け出でて夕空高し鯖雲の晴れ

自しがひかり全けく消しし黒き陽をあるにあられぬこちして見し(日蝕)

海遠く明る妙たなす流水のかがやくばかりこゑ呑むわれは

荒涼と海白くのみ見はるかす流水はあはれ南下せりけり

この山にかかりて過ぎぬ夜立ち汽車夜は膽たまるべし赤き鐘かねの火

島やまは樹林地帯の春なれやむらさき明る延えん胡索こさくの花

冬枯れて山は明るしときじくにみぞれの音す遠き木の間に

杉並木の向ふに見えし萱葺の山門を入りてさらに幽けさ

堂にせまる山ふかくして老杉の木垂る暗さを仰ぎ見にけり

閑かさまぎるべくなき冬の雨精舎の屋根に音を立てつる
いろ濃きは朱あじそのままに冴えながらあさき紅葉も憎にくからなくに
もみぢ葉の一木のうれに面映ゆる日向きの枝はことに匂へり
山の町は冬のひかりの片蔭る朝ひとときを霜のま白さ
山の秋のさやけかりけりたたなはる雲ちかくゐて眇々と身は
村びとらくらしけはしくこの川の鮭密漁をおそれずありぬ
群れゐたる蜂の巢につくゆふべなり受胎の花もしづかにあらむ
この嶺を發たちわかれゆくやまみづの會ふことなけむ北と南に
畑荒らす熊の話もなくなりぬ冬のたつきのしづかなる村
歳ごとによるこびあさくなりにけり落葉しぐれをまた聞きに來し
ひとりゐて墓の回向ねかうの刻經ときたりここを通りて海にゆくひと

惠庭嶺の夕ある雲にあかねさし山かげふかむ湖心の明り

酒井晋一郎

霧雨の晴れゆくなべに種ヶ島波立つ上に山青くみゆ

澎湖島は低き山かも山越しに泊はつる御艦みふねの檣の見ゆ

酒井俊治

信濃路に入り來て山はせまれども町あかりする驛ありて過ぐ

妙高の山そそりたち朝空のあかるきときに谿川を越す

初雪の降りやまなくにゆふ路をすでに馴なれたるものの音きこゆ

酒井鈴子

竹むらに群れある雀かげ動き障子はなやかに初日さしきぬ

酒井仙影

葭切はいやしきなけり青葦のしげみの中の夕焼の水

筑摩野の水はしづかに流れたりけぶりてとほき春山の雪

枯山にひとすぢのぼる炭けむり雲にとどけりしづかなる日や

粃種を浸す日近し亡き父のをしへをおもふ山の雪消え

働きて思ひ入るとき桑棒ははねかへりきてわが面をうつ

うるきやうの花の濃き香に黒き蝶るむれて晝はまだ暑きかな

いちはやく穂高の嶺に雪のきて今年の秋の日和定まる

口まねて鴉とあそぶ子は泣かず稻抜き一日くもる陵根田

るろり火は障子にうつれ裏庭に唐箕の粃をあふりつづくる

酒井 檜 一

吾子の描く提灯の圖畫みてをれば幾度か消してややかたちなれり

酒 井 信 令

野分吹く日ぐれの町を馬いくつ青菜を負ひて通りけるかも

酒 井 一

陽のしづむ沙漠のはてを曇らせて沙たつまきはゆるく移動す(大島)

酒 井 鳴 可

長女女學校にて學びし生花を吾が家の床に生く

黄金檜葉生けし吾が子のつたなさをいひつつ吾は心なごみぬ

大觀艦式陪觀

大御艦近づきぬらし先頭の長門はすでに皇禮砲を撃つ

酒 井 龍 輔

砂山裾の赤く日の照る村見つついつか來しかの氣のわきにけり(天草島)

このゆふべ母が饗へにし山椒の芽は莖ながら匂うましも
たかな切ると下り立ちにけりおのづから土ふみたくて草履を脱ぐも

山 村

いつせいに藁槌の音揃ひ居り吾妹が村にひとりわが來し
裏森の聞き井戸べへ水汲むと燐寸を擦りつつ下りて行く人

伊藤左千夫の墓に詣でて

撒水を清らに吸ひし墓土に水玉草は眞青なるかも

酒井田 壽子

わが兄の飲み残したる水薬を捨つると夕の庭に下り立つ(兄死す)

酒川 哲保

動くものなしと思へるにつはの葉をとびてはとまるとうすみ蜻蛉

酒見四郎

別子銅山採掘の鑛石は東平より索道にて黒石に運搬せらる

直杉の若葉のしたの路ゆけば索道のきしりかそけくきこゆ

鑛石は瀬戸内海の孤島四阪島にて製鍊せらる

ほとばしり爐口をいづる熔鑛の赤き流れをただに眼まもりつ

酒勾親幸

庭の樹をやぶ鶯のうつり鳴き暮るるにちかき明り久しき

鶴一羽卵を抱きて身じろがぬ夕づく頃のさくらたふとき(上野動物園二首)

鶴の羽にさくらの花の光り降り生ける命をたふとくしたり

鋤き終へて歸る人らか夕明りに江を漕ぐ舟は牛を乗せたる(霞ヶ浦潮來)

松山をそがひにしたる青田より舞ひ立つ鶯の一羽涼しき(武州金澤)

瀬の音のひびきはやまず巖がしら日に曝れてゐて蜻蛉とまれり

虎杖いたどりの濡れ葉の青さ山澤の霧は雫となりてしたたる(伊豆船原温泉)

榊原 武雄

夢みつつ泣かせ給へる父をよび胸の御手を解きまゐらす(父逝く)

榊原 たづ

縁先のおしろい花のかずかずの明るくにほふ月夜なりけり

美しく化粧して友と遊びゐる夢をみしからさめてさびしき

榊原 菽村

厨邊に鶏の骨を叩く音のいらいらしさに堪へて寝てをり(肺尖カタル)

榊原 昌義

川風に荒くもまるる榛の木の花は揺れつつうすき日を吸ふ(大和川行)

虎杖いたどりを口にかみつつ行く今日は子等こどもに一生ひとよの記憶とならむ(明神山)

相良義重

降りいでて音あらしき雨は路原の葉群が上に白くたばしる

冬來向く空の高きに鷹舞ひてひようひようと啼く聲のきびしさ

燈のおそき日暮の部屋の姿見に底冷えかかもす明り残れり

たたなはる前山傳ひ移り來て月夜の雪は庭を白くす

いそがしき仕事の暇をいでて來て事務服の埃日向にはたく

父七十九歳にて逝く

かへりみる長ながき一ひと代よを酒飲みて過あやまち失まち多く父はすぐしき

崎江初次

親しげに話交して親子らし今崖下の道通りゐる

向坂禮子

思ひてもかひなきことをまたしても思ひ居るわれにきづきて笑ふ

先川露江

蒿^チ荳^サつめば蒿^チ荳^サに心のよりゐたりふるさとに來て何ぞ安けき

作田良雄

母危篤の報に急遽歸郷

たらちねの命思へば能登の奥の海山動きただに落ちゐず

蒼潮の荒きうねりにくもりきて沖にうつれるその日かげはや

町なみの犬^タ樟^ブの大樹に鳴く蟬のあまは鳴けり柩はゆくに

一めに霜にくろずめる桑畑わがゆく寺は山の上に見ゆ

甲斐にて

霜ふかき地上ひそかなり山ぐにのあかときやみにしはぶきにつつ

作 間 木 菟

鳩の群の中に吾子あこゐて小さき足踏みこたへつつ追ひ廻したる

櫻 田 角 郎

函館大火

重傷負いたへる妻を看みりて念じ來し砂山もすでに炎の海となりぬ

砂山に渦巻く炎堪へがたし身體埋めむとただに砂掘る

うつ伏して妻子をかばふ吾が前に大きな火の粉は音たてて落つ

このままに果つる命か濡したる一つ筵を妻子とかぶる

目の前に炎となりし人いくたり見つつ術すべなく吾等逃げゆく

猛火の砂山を辛うじて逃れ五稜廓に至る

あかあかと眞晝の如く炎照る空を小鳥の渡り行く見ゆ

災 後 (三月二十三日)

ただ一つ焼け残りたるストーブをリヤカーに積みて吾は曳き來る
國元に妻子はしばし歸しおかむと心きめしが立上り又坐り直しぬ

狩 勝 峠

あかときの光ひろごる十勝野に放たれし馬は見るにすがすがし

櫻 庭 誠 四 郎

踏みごたへたしかにありて新らしき疊は未だ足になじまざ

いね足りて病父は目覺めぬ曉を遠田の蛙聲落ちゆけり

櫻 井 英 信

崖の上の小さき家居灯りて荒海へ通ふ細きみちみゆ

おのおのおのもつゆをたもてる麥の葉にひえびえとして朝づく光
提灯を子に持たせおき桑の葉に息づくほたるわがつかみたり
秋の日の夕づく海の光り波眞下に見つつ尾根を下るも
しづけて今日をあり經ぬほそぼそと茶の木の花にかかる夕雨
柿の木の葉かげ涼しみよごれたる裸形の童子二人ねてゐる

櫻井喜美

油まみれの男が古汽船のハツチより顔を出して吾を見たりき(芝浦岩壁)
冬空に一直線に跳ねあげしドロリアリツチ閉閉橋の橋桁の反り

櫻井京三郎

夕暮れて氷雨となりぬせ百日ひ咳止どめの蓮根掘ると母は出で行く

櫻井慶雄

蓼科たどしなの裾原遠く雲湧きて光ふふめる湖うみにうつろふ（諏訪湖）

櫻井聲樹

立山の嶺ろにいさよふ雲の色の日にけに白くなりにけるかも
俱利伽羅やもろ木しぐるる朝あけに山柿の實のくれなゐぞ濃き
山峽の追れるなべに小矢部川鱒のつくとふ瀬も見え初めつ
みなぎらふ小矢部の川の常滑とこなめの石は濡れつつ光りけるかも

朝鮮より満洲へ

唐がらし干したる屋根のかたむきに夕づける陽の光さし居り

櫻井ツネヨ

この山のさ霧いく夜か凍りけむ草かれがれて龍膽りんだうの花

垂乳根は早やたたすらむ稻刈ると朝明け寒き廣き沖田に

床に活けし南天赤し來む年をのぞみ迎ふるわれならなくに

櫻井孝

罷業の指令つひにいでたり灯の下に添乳の妻はよく眠りをり

櫻井文司

點字歌書日毎いだして感覺の鈍りし指をなほもたのみつ(癩院にて)

櫻井秀人

盛られたる敵意は小さきしみとなり朝の陶器の無表情なる

つぶれたるゴムまりは雨にうたれゐて朝からわれの身のせつなけれ

櫻井文子

草山は檜山となりてなほ入らむ山路おほふまでしげる熊笹

終日ひとひ降り夜半よなかも降りて山峽に夏降る雨の寒けかりけり

小鳥網かくる日近し山小屋に板戸をつくろふ山人見れば

時雨雲北空とほく動きつつ寒くし照れる雲の下の山

櫻井夢村

兵士宿泊

初年兵皺のハガキをのぼしつつあはれなるかも字を書かむとす
夜の土間に脚絆を巻ける初年兵灯をさしむけてあはれと思ふ

妻弘前に療養中

三人子の枕ならべて寝入る顔淋しき夢よここを通るな

櫻井よしえ

孵化場にともれるランプ暗くして生れ出づらん卵並び居り

櫻井芳雄

今年春嫁とりしとふ清松が朝まだきより薪割る音す

櫻井禮丸

朝な朝なこの塀角をまがる時雪の淺間がまぶしかりけり

あきらめの涙流れんとしたる時息通ひたる吾が子の聲す(難産)

今朝の出がけに抱いてやりたる乳くさき吾が子のにほひがほのかにするも

笹川露香

風吹けば風に委せて流れたる水馬ふたたび泳ぎ初めつも

國上山に良寛和尚の遺跡を訪ふ

ほの暗き庵の中は薄べりの敷かれしままにうら寒げなる(五合庵)

枯葦にこもりて鳴ける鴨のこゑ岸にひびきて寒し夕は(山中途に迷ひて)

笹川満堯

ふる里の小夜ふけにけりかすかにも青澁柿の地に落つる音

笹 田 葉 花

葬式の花輪持ちに雇はれて 一首

葬列に造花捧げて先立ちつつ知らぬ人ばかりの氣安さに歩む

はなやかなる送別ありて混みあへる夜の下關行に吾も乗り込む(歸郷)

笹 沼 剛

山原に刈伏せてゐる萱の穂は吹きたつ風にちぎれ飛びつつ

笹 沼 秀 夫

草がくり咲ける深山の片栗のかそけき色をかなしみにけり

片谷をひたこめにつつ尾根越ゆる霧とはならず山の明るさ

合あ歡わの花色おとろへて朝夕の潮の満ち干きしるけくなりぬ

笹野 一夫

よく遊ぶ吾子^{おぼこ}をし見れば心ひそかに現在のわれに足りゆかむとす
そぎたちて迫れる山の朝かげやなく蝸のしづかにそろふ

静かなる命と思ふ赤蜻蛉ゆれつつ笹の葉にとまりをり

朝時雨ふりすぐるとき雨あしのしろじろと屋根に光るを見にけり
沁むほどの今朝の寒さのころよしすがすがと山にさす朝日なる
み冬づく光と思ふひねもすを流るる雲のもてる白さは

笹森 壽子

裁判所見學 二首

いくそ度物盗りしといへかくのみに貧しきままに捕はれ來にけり
この人の妻と子となり苦しみにあへぐ生命^{いのち}の世には生きつつ

今日一日よき兒なりしやと兒にきけば枕に就けし頭ふりけり
いかばかりよき名の下に果つるとも若き命はをしかるものを
夫と子を心に持てるはりあひに編物などもうれしきものか
春の夜を君と出づればぬかるみの路をひろふものどけきものを
魚買ふを見ると下駄はき子も出づる雪の消えにし家の門口

天折したる長男長女の墓に詣でて 二首

年経ればかく靜かなる心もて子等が墓にも詣で來るものか
生き死には常の道なりいかならむ悲しき死にもやがて堪へうべし
先生に叱られしことを程をへて話のごとく話す我が子は
堀に落つる雪解水に聞き入れば背の子供は寝いたりたるらし
その母のかつて出さざりし大きな聲はりあげて子等は歌ふも

家を濟ふるわざよりもなほ君と我れとよきまじらひを育くみて來し
過ぎゆけば皆小さなる苦にしあれば心は靜かに持ちて行くべし
學問にも藝術にもあらず貴きは靜かなる心持ちて生くること
炭殻をすてむと出でし外の面には雪にさす陽の春めきにけり

十和田湖二首

雨降らむけはひけはしく奥入瀬のたぎつ底より湧く暗さあり

深山路かき曇りゆけば幾峰の青葉若葉の色冴え來る

ふるるにはわびしきまでの身疲れに仕事の事はかたみに語らず(夫婦教職にあり)

文書くを思はぬまでに事々に心は人をしのびてありし

時來れば歸り來ますと知る故にひとりの夜の靜けさを愛づ

世の煩にかかはらであらば人はみな一つの道をきはめうべきか

子と遊び鞠はふりつつ見上げたる空の高さにしみじみとする

笹山 君子

案内づな坊に通ずる間を待つに耳近く来て鶯啼くも

下北の島の牧場を焼く野火のいく日かつづく日和なりけり

十和田湖

奥入瀬に引添ふ峽の木ぶかきに匂ひ咲くなり深山あぢさゐ

水檜の根を張る蔭のおのづから垂水となりて齒朶生ひしげる

八甲田山 一首

雲きりにさからひあらび吹く風もあからさまなる高山にして

いたはられてある身まがなしうとみたる生の卵ものみなれにけり

男の兒得てはれがましもよ我が庭に三間にあまる鯉ふきながす

笹 井 浩

爪のみが悲しくのびて肉おちし手を見て居れば呼吸ひそみたり

笹 尾 好 一 郎

性慾とふ文字を嫌^い悪^くひて讀みし日の美學は今に忘れかねつる

獨^ひ身^みをやしなひがたく在るときしわれに勿體なき縁談きこゆ

たちばなの花にほふさへこの夜ふけ遠來しことを思ひたのしむ(伊豆)

笹 岡 安 正

かんぼちやの花咲きそめて伊那の谷うすむらさきに雲わきのぼる

篠 尾 美 枝 子

春のゆきおもむろに降りて消えゆきぬほのかなりけりその土のいろ

里 見 近

水光る田中の家ゆさわがしく出づる家鶯あひるの見ゆる朝かも

馬市の果てて散らばる捨藁のいづくにか居てこほろぎの鳴く

膨らみて朝かも咲かむ緋牡丹の蕾はややに傾きにけり

壁際に子を寝かせつつ燈を下げて夜長を妻の物縫ひ初む

嫁ぎ來て未だなじまぬこの國の山は若葉となりにけるかも

里 見 房 子

止り木に嘴くち寄せてゐる十姉妹かくむつまじく親と子とゐる

つながれて牛はかかはりなきごとしかはるがはるに動かす毛の耳

門燈のあかりくまどるひとところ光りをひきて雪はやく降る

女兒誕生

みどり子のまぶたの下の皺目さへ愛しかりけり父によく似て

大きな眼を明るきに向き開くなりなにか見ゆるかみどり子の眼は

里井陸郎

落着かぬ心をもちて入り來つつマスクをはづす茶房の奥に

眞田但馬

生き死にのさかひにありて人はかく心靜かにあり得るものか(妻病む)
ルンペンの自殺せしものなしと聞く心のほこり棄てて生くるか

早苗亮雄

梅うめの尾の奥の谷より清瀧におちこむ秋の山水の音

清瀧や前もうしろも山水のひびきおちあふ松風のこゑ

椎の根をおほひてあまる青苔は冬の汀にもりあがりたり

棚雲をぬきて聳ゆる塔一つ春はしづかなり山城の空

鳶一羽檜原を離れ黎明の山の上の空をさしてゆきにき

實吉惠美子

眞白なるシートより眼を動かしてふと見し花の鮮けき赤

澤 こと子

向側の病室の燈の一つ消えまた一つ消えてとみに寒けし

澤 星彦

ひとところ漣たちて戻り來ぬ風吹きむかふ入江汐ぐち(和歌浦觀海閣)

雀のまくらかむらもかぼそし土にしむ風のなごりは目にとめて見む(雀のまくらは燈心草科植物)

三段壁のきざはしなせる斷層に風吹きつけてうつる潮さき

澤 美枝

久にして熱の下ればわがおもひ鋼のごとくすむこちする

澤口政之介

山雉子巢ごもる頃か曉の若葉の山に鋭聲しきり立つ

霧雨はほのけくしよし舞根浦女王ヶ島に鷗おりたり

こまやかに霧雨けふる舞根浦水脈ひきて白し泳ぐ海鳥

さむざむと磯の岩群秀に立ちて汐ひく後夜を月おし照れり

夜の更けはおのづしづもる旅ごころ馬櫓の鈴はいねて聞くなり(小櫓)

澤口眞沙夫

砂にもぐる生簀の鰈おもむろに泥ふきたれど動かざりけり

澤島かず子

松風の鳴りを静めしたまゆらに松はひそけく落葉するらし

落葉落葉散りてしまへばしづかなりとはのねむりもかくてあるべし

靜心しづかにみればみる程に深きしづけさを萬年青は持てり

この世から忘れられたるひとのごと灯のなきへやにねてをりあはれ

澤田 證

坂の上に日は落ちんとすぬれ礫のひそけき光り踏みつつのぼる

山莊の朝は澄みたり朝顔の白ばかりなる庭の晴れつつ

澤田 甲子雄

つくばひに薄氷はすではりてゐつ月しらじらと照りてゐにけり

澤田 憲治

苗くばりすると早引乞ひし子が道具を負ひて歸りゆく見ゆ(田植の頃)

澤田 水聲

土ほこり夜空に高く巻きあげて運搬自動車村を通れり

澤田藤枝

つれづれにひとり眺むる白菊の一鉢の花は灯の下におく

澤登龍生

ほろほろと蝦夷山櫻ちれる日に神居古潭を急ぐなりけり

澤村儔

手づくねの盆子の壺を一つ据ゑて大晦の床をかざれり

三條公夫

かへりゆくひとみかへれば春の陽にてりしづかなる磯やまざくら
おもひいでなしといはずも松の芽のにほひしるけき山路ゆきつつ

屋根の向うに白きますとが動くときゆれのぼる赤き月の大きさ(樂港附近)

春あらし若芽並木をわたり來てわがねくたいを吹きひるがへす

山 宮 允

春の夜は誰とはなしに来る人のあるが如くに静心なし

とろとろと溶けゆく蠟のころよく靜に春の夜は更けにけり

晩秋の厨の土間のしめらひのしめらへるままに夕さりにけり

とよめきの巷いとへどしかすがに山に入るべき性さがにもあらなく

このわたり淺くはあれど何となくこころ率かるる森あまたあり

山 東 慶 二 郎

月いでて森の若芽の影さへや宵なつかしきふくろふの聲

年暮るる街の物音のここに來て沁みゆくごとし庭の冬木立

敷きつめて塵ひとつなきしまはち登しんかんとして梅さかりなり

秋の雨しとどに庭の山さん楂ざ子の青き實ながらぬるるいちにち

海洋の秋は寂しづかなり夜をさぐるサアチライトのうすき光芒
暗き海にくぐまりひそむ艦隊のサアチライトは觸手の如し
海近き朝の垣根の道ぞひに秋なれや淡き松の香ぞする

鮫島ちづむ

庭隈の芙蓉の花の紅に雨降りやまらず今日も暮るるに

皿海美孝

愛兒の死

にこやかに笑へば見えし白玉の其の齒をひろふ火葬や場の灰ばに

申賀謙太郎

おほらかに満ちたらひたる心もて生きむ日もがもとく來こよき日は

猿田實

頬白のさへづる森の下草に一人静は實となりて居り

教へ子を葬る

葬りしはあまりさびしき山なりき墓をめぐりて松風の音

猿橋 英太郎

今宵捨てむと心定めし蠶等のむらがりて白し桑をさぐりつつ(くさり蠶)

梅雨は既にあがりたるらし天の川今宵の空に白きをみれば

夜水ひきてもどる野中の埃道ふかき疲れをたへつつあゆめる

夕立のはげしく降れど擬寶珠の花は静けしきき木の根に

拾ひきし橡とくの實を桶にあくる音暮れてをぐらき井戸邊にきこゆ

向う山樹々の伐られてあらはなるに夕寒き日のさしたるがみゆ

降りつもる雪の夜道をあゆみきて川の流れの黒きをみたり

猿橋 收 一

月の光明るき野道歩み來て稻架いなぎに露の光れるを見つ
夜水引く百姓ならむただ一つ灯動けり遠き山根に
白百合の蕾いつしか開きしを仕事終へたる時に氣付きぬ
うち揃ひこまごま動く羽ばたきの美しきかなやらず鴨渡る

志 賀 一 夫

伊勢皇太神宮參拜

ねもごろに拜みいませり老母も一生のねがひとげたまひつる

昭和十年九月美作國蒜山原ひなだに於ける秋季演習に賀陽宮殿下を
拜し奉る 一首

青雲をそびらに馬を驅りたまふかしこき姿仰ぎまつりぬ

山清水高岩壁をしみ垂りて裾分れつつ青淵に入る

空狭く星は光りてゐたりけり軒端にそそりくろき岩山

小夜ふけて眠れずをればあかり戸に月さしさやぐ寒竹の影

志 賀 ・ 曉 果

吹雪の夜更けてゆくらし味噌豆の音ひそびそと煮え上りつつ

志 方 赤 堂

小山田に耕し居ればあしたより日暮に及ぶ松蟬のこゑ

身にまとふ野良着の破れ目立つなり秋爲事ながき日數おもほゆ

ゆたかにも梅雨の降り來る村里は競ふ田植のひもすがらなる

降りやまず夕となりぬ峽ふかき小田の面より暮れ初めにけり

うからどち競ひ植ゑたる山小田にそよろそよると早苗風立つ

良き梅雨に植ゑぬ田とてなくみな植ゑて村安らけし良き作上り

田植すみてころほがらに^{つぎ}朔の饅頭作る母とわが妻

志 貴 き み 子

細ぼそと戸隠山に通ふ路雪にまぎれず野の中に見ゆ

志 岐 春 吉

いづこより降りて来るやと降る雪を見つつ幼き^お吾子の問ふなり

なめし革の財布の濕り梅雨めくを懐にして夜の町に出づ

眞鍮のふとき火箸の手ざはりもしたしき春の朝となりたり

大河のむかふに遠き寺井村今朝よく晴れて家^や並さへ見ゆ

志 岐 信 次

春の嵐はつたりやみし夕空に低く大きく月いでてをる

夕暮の風吹きいでてざわめける棕櫚の木にいまだ陽の射してをり

志摩 英二

休職中の僚友貧困の中に逝く

癒すべきでだてはあれど貧しさにつくしあへねば友は死にたり

志水賢太郎

若葉洩る青きひかりに染みぬればひとのもの言ふ優しくきこゆ
いささかの熱いでければ晝を降るあふひの花の雨をいとひぬ

ふるさとにて 一首

草の葉のほそきにおけるしらつゆはこよひの月に照りてしづけし
小夜ふけの外とのものに佇たちてあふげどもわれにひかれる星ひとつなし
世の噂はばかりながら生きゆくをまことに生くるいのちと思へや

野にねむる 二首

枯草の葉ずれの音のかすかなるころうごきは人に知らゆな

草の葉をのぼりつつある蜂の子の稚き翅にうごく日のいろ

湯あがりのひとのもろほほいきいとこよひは冴えて夏ちかづきぬ

かすかなるひとの言葉やこのゆふべ松吹く風も音をしひそめよ

麥の穂は黄にぞかがやけみなつきの甲斐のくにべを旅ゆくわれは

なにしらずころはいたむ眞日のもとしろきつばなのがよふ見れば

疲れつつねむりし夜半の夢にすらかのやまかはの清けきをみぬ

志村 潮

くれがたの時刻のびしごとし陽の餘光吹雪を透りはるけく明るむ

志村 白鳥

若葉せる櫻は夢をこぼすなりこの寂しさは誰れにつげまし

志村桐門居

今日日は落ちむとすらし天そそる槍の穂尖のそびら燃えつつ（常念小屋）
若葉かげはつかに白く咲きのこる山ざくらあり如意輪寺みち

志連政三

鴨川をわたれば藤樹先生の書院は近し襟の正さる

穫り入れもすみて安けし近江路は昨日も今日も雪はふりつつ

滋賀エミ子

考査室に肩うちすぼめてゆく吾兒（あこ）の後さびしく見送りてをり（入學考査）

しめやかに春の夜雨の音きこゆ今は亡き兒の衣をときをり

着するべき日の永久（とこし）になくなりし赤き友禪の乳のしみはも

紅若芽しづげき雨にぬれてぬみ堂のわきのひとつと楓

物言へば涙とならむ赤くおこる火鉢の炭火見守りてゐつ

思 賀 良

一時雨しぐれて山は又晴れぬ栗の林に音の幽けく

四 賀 光 子

やはらかにわが黒髪も匂ふなり櫻さく夜の湯がへりの道

また更に何にあくがれゆくわれぞ足れる寝ざめに涙おつるは

はかり得ぬもののやうにも見えて來ぬ寂しげにして君はいませり

歸るべきところと思ひ歸りくるさびしき人を待つゆふべかな

悔いてゐるさびしさならむ只一人こもれる吾子に聲かけましを

ひろびろと波たつ見れば河の水夕川口に落ちなづみたり

秋ちかき端山の鼻の青草のなびき寂しも天に向ひて

アイヌ住む蝦夷のはたてに來しことも忘れてゐたり人をたのみて

いのち生きて十日はすぎぬ秋はやも白き木槿の花咲きにけり(關東大震災)

東宮殿下御成婚の翌日雪の降りければ一首

よき程に降りて止みたる今朝の雪祝祠を申せ逢ふ人毎に

遠山に朝日あがれば草原は残るくまなき光となりぬ(赤倉高原)

空の日はさやるものなく行きにけり茂りをつくす山原の草

垣根より一枝菊をさし入れて佳き日を言へる隣人かな

風止みて夕日明るし隣にも塀を隔てて落葉かく音

しきわたす砂の上に移る日のゆくともなしに千とせ經にけり(法隆寺)

青空の北を支へて神山の戸隠山は雲ひとつつけず

秋がすみ御車遠くゆきますと思ふゆふべのまどかなる月

秋二十日御代の祝ひに恍^はれ恍^はれと遊びてありし我し嬉しも

見るものに谷のもみぢば峰の月いかにいましし月日なるらむ(吉野懐古)

ちる花の春は春としてしづかなりうぐひす遠き山のみたまや

白々と蓼のしげりに風ふけば秋はま近き戦場が原

所澤にて三首

すめらぎみ日東の國の海風に機首皆むきてゆく空をおもふ

離陸すと見るまに早く爆音を氷雲ひくもの中にはじかしてをり

はつたりと音をやめたる飛行機のあなや垂直に落下し来る

片隅に調帶べルト動きゐて工場いま一齊にめぐる機械のしづけさ

かつきりと咬みあふ齒車ギヤをまもる眼の觸れなば物も切るべくおもほゆ

ひらひらとベルトめぐれば咬みあひゆくギヤのきざみのかつきりたがはず
炎の環星を大きく抱きながら望遠鏡の視野に入りくる(土星観測)
無邊際蒼くはてなくゆく星の天の軌道は秒をたがへず

皇后陛下の行啓を拜す

陽のなかに玉もりあぐるあぢさゐの花のむらさき御座みざにうつろふ
窓といふ窓ことごとく夏空の青き微風を吹き入れにけり
去りまして御衣みけしの匂ひなほのこる長き廊下をゆきをしみつつ

鶉 飼

赤く暗く鶉匠の顔の見ゆる時水は奈落の色に流るる
浮び出し鶉のくちばしにひらひらと閃めく鮎のいのち悲しき
篝火のくづれて水に散りゆけば闇に横たふ山の見えくる

天の下大みたからの子を生みて祝ふ心はわたくしならず

輓 歌

思ひ出でてこぼす涙の一つぶも珠とぞ思ふ清けき君ゆゑ

北條時宗弘安の役の功を顧らることなかりしに日露
戦争の時明治大帝始めて従一位を贈らせ給ふ。一日そ
の墓に詣でて二首

膽たん一ついのちに向ふますらをはわが大君ぞしろしめしける

千載の今こそ泣かめすめらぎみ嘉よしとしのらす大御心に

除夜の鐘ひびきそろひて七郷ななさとの谷より谷を遠くとよもす

除夜の鐘ひびきそろひて一どきに又あとさきになりてたゆたふ

たをやかに撓しをりて指のさす方にはてなき空の深さ見ゆなり(舞踊)

いなづまの光の中に櫻ばなわづかにうごく白さ見にけり

老父母に侍して山行す

まさやかにうるしのもみぢもえてをり老いのまなこのとみに明るき

四海多實三

北信行歌

はろばろとかがやく雪の高原のいづくをあてに飛び行くぞ鳥

南信行歌

ふりさけて見れば雄々しも八ヶ岳天霧らひつつ光りたるかも

滞郷

朝霧らふ丘の梨畠剪定の缺のおとの澄みてきこゆる

あらしの前

風の隙を飛び上らむと身がまふる力いつぱいの鳥のかたち

氷湖

夕凝りし岨路こえ來ておもはぬにまなかひに見るしろがねの湖
山ちかきここの入江は夕寒く凍らむとしつつ波さやぎある
凍らむとしつつうごける水あかりひそむとすれやまた明かりつつ

店頭

荷造りの釘うつ音を頭に堪へて夕づく店にも書くわれは
奥ふかき店に灯はつきたまたまに出で來し妻の顔はにほへる
人わけて重荷曳き行く馬の脚たくましく見ゆ淺夜ちまたに
納本の重たき車みせさきに停めてものいふ人はぬれつつ
銳心を堪へてを居れば飯に呼ぶ子のいとしごゑ近づきくるも
忙しきにかた言いひてゐよる子を叱りながらに抱きはあげつ

盆地の村

櫛木のふとき幹立ち納屋倉の屋根の勾配に影をおとせり

巖 島三首

内海の夕さす潮はいろふかくひかりたたへてみちふくれたり

夕潮のふくらみ波のよるままによりかへすままに海月くらげうかべり

夕潮はふかくさし來て巖島かたちとのひいつかしく見ゆ

今年竹まき葉ほどけて朝涼の日ざしの中にたちゆらぎたり

庭さきの木叢のした葉照りあかり秋は乾きてしろき土はだ

四野宮すま子

をさなきが喜び思へば託兒所に疲れて我は悔いなかりけり

清水朝子

燕岳にて

一萬尺の山の高みに我れ居りて
こころの底ゆ戀ふる人あり
現し身の力の限りのぼり來し
この山頂に仰ぐ朝日子

清水以譽子

井戸端の水のこぼれは凍てつきて
曉がたの月に白く光れり

春ごとに來る鶺鴒は池の邊の
さつきの株にまた巢ごもりぬ
(庭前)

清水和彦

近江瀬田

河隈の青蘆むらの上じろみも
やだちしるし朝日さし來て

琵琶湖

蒼よどむ湖つらぬきて
ひと筋の出水のにぎり沖に
ひろぐる

夕焼の雲ひろごれる磯にたちよどみて赤き湖にまむかふ

知多鶴の山

足ひきて翔びくる鳥のしらすぎのゆたかなるかなや松にすがれり

商賣破綻す

ふた親のひそひそ話聞かさねどけはしさ知るや子ろのはなれぬ

清水 一雄

病ひ重き幾夜のわれの枕邊に母の短きねむりは寂し

清水 易嘉

鶺鴒の鋭聲しるけき朝戸出に革手袋の觸り冷たき

降るとしもなき春雨に空仰きて頬の濡るるは静かなりけり

朝鮮風俗

垂卷きし轎に坐りてうらうらと芝居のごとく福女嫁きたり(ボンネ
は人名)
賣りだめの錢勘定に時雨れつつ負荷行商の膠もなき顔

二・二六事件

勅命は主上なりけり叛亂兵らみな身をつつしみてつひにかへりぬ

七十四聯隊討匪の爲め南滿に出動

曉ちかき空に傾く天の川命を賭けて兵は征きにけり

清 水 基 美

立ちどまり子の早引を頼む母の紺のもも引は泥にまみれつ(教へ子)

清 水 潔

をさな兒らよく遊ぶよと思ひしに障子を裂きて遊びるにけり

裏やぶに風吹きすさぶ此のゆふべ泣きつつ吾子のかへり來にけり

清水塊音

武田信玄の遺臣僧宗玄隠り住みし峡谷宗玄澤 一首

夕べ雲うつりて淡き山の井や人住みほろび年はろかなる

朝山の暗き底ひに沈みゐてほのかに白き湖うみづらの照り（箱根）

濕り地の谷に焚く火のさみしけれ生木のけむり白く地に匍ふ

裏山に樹を挽く大鋸おのの音きこゆ日もすがらゐてその音をききたり

春淺き魚街通りとらつくがぼとぼと落す血の腥ささ

鋼はがねうつ夜の物音は下町の雑音の中を過ぎつつ聞けり

工場街の騒音の中を通り來てこの夜祭の群にまじらふ

清水源

あかあかとかがり火燃えて雨乞の神輿みこしは川にひたされにけり

清水 權 錄

草屋根は濡れてほのぼの光りたり雨の日ぐれの石臼の音

寒ながらこよひの月の匂やかにねむくなりたる仙芎の風呂

ほそぼそと水は笕に光りつつ穂草のゆるる秋風の家

青くさく花アカシヤの匂ふ背戸乳をもらひに子を負ひて行く

淨財をしぼりて豪華の金堂を建てねばならぬ法（ほう）をうたがふ

清水 貞次 郎

何となきものはかなさの二三日續くと思ふに風邪ひきにけり

清水 三 郎

天そそる男體山に眞日照れり若葉を吹きて上る風見ゆ（日光中禪寺湖畔）

いただきは荒れたつ雲にかげりたり木むらここだく風たちて來ぬ（日光男體山麓）

清水しつ子

わが世帯古りしをおもふ湯垢ふきてこの鐵瓶も出口ほそれる

清水 秋 歩

父 逝 く

再びは逢へぬ歎きのこみあげて縫れば棺の手ざはり荒し(納棺)

清 水 翠 雨

吾れは不具無能の身なれば妻の稼ぎに恃みて一家の露命をつ
なく。或時は妻他家に住み込む

今日もまた生きて恥ある身なりしか日暮わびしく窓の戸をさす
ことごとく諦めすてし身なるかも眠れぬ事のこの夜頃なき

清 水 夕 舟

大風水害に製瓦工場等三棟倒る

倒れたる工場の復舊を急ぎつつ資金の事を今日は思ひぬ

清 水 武

ヴァンゼーの湖邊（湖邊）の朝け松風に心清（清）ましてふるさとおもふ（ベルリン）

清 水 千 代

家康がうづめ残せる城の濠に冬の水ありて黒くよどめり（大阪城）

興福寺の境内を夜ふけ通るなり北圓堂は星かげに見ゆ（興福寺）

星冴ゆる夜空の下に形見えて北圓堂の屋根のそり美し

母

三十年の昔書きたる我が手紙母こひしさの思ひを述べたり

父と母といさかひ絶えぬ家の内にをさなき我や生（お）ひ立ちにけり

鉦叩きといふ蟲ありて晝鳴けりこゑ透きとほり聞くにひそけし
鉦叩きのほのけき聲を聞きてをれば二つ離れてこもごも鳴ける
村人が副業に植うる栗山の栗よく實のりいがはせてをり

法華寺本尊十一面觀世音は光明皇后を寫しまつりしと
いふ

厨子の中に立たす觀世音が御裳の裾ゆらぐが如しあかりを受けて
近よりて仰ぐに親し若々と御手ふくよかの觀世音菩薩

女體佛のみ手若々し指さきにおん裳の裾をかかげています

奈良の晩春

北圓堂の栴ぐみ古りて黒ずむに牡丹ざくらの花散りかかる
北圓堂の牡丹ざくらと並び立つ大木かへるで瑞葉萌えたり

清 水 輝 明

淺間嶺の噴煙長くふき靡き夕焼雲とつながりにけり

草原に遊べる馬の親と子の顔すりあへるむつまじさ見ぬ

清水 暉 吉

風車めぐる廣野に摘む苺赤きは寂し春たけにつつ(サンノゼにて)

山川の清きよどみの岩かげにひそけくもすむざりがにを思ふ(アルマの巖谷)

竹藪の小みちまはれば朝かげに照り映ゆる花はくれなるのうつぎ(武蔵野)

清水 寅 治

北海道に伯母を訪ふ

現世うつしよにあふを得べしと思ひきや思ひかけずといひつづけ給ふ

清水 信 清

雑草の匂ひほのかに残り居る手は氣にしつつ書讀みにけりよみ

清水 延晴

白埴の甕のごとくにおそるおそる子を抱きたれば乳くさかりし
嬰兒みどりごの頬に見出でたる片ゑくぼ一大事の如く孀つばなが誌しるせる

凶作義金にうるほふ兒童の幾人はあはれ新しき足袋はきにけり

清水 はま子

學校にて子が縫ひくれしはつ袷着にくきことは言はで置くべし

事しあらば學びを止めて勤めせむと言ふまでに子は育ちたるはや

清水 比庵

わが父のいのちをはりし齡ともわれはなりけりあはれなるかも(新年二首)

おもふことさらにも成らずおもはざるわざはひもなく年をへにけり

岩かげゆそそと出でたるみそさざいいそがしくしてひそかなるかも

塀際の雪の消え間にみそさざいひそひそと居て鳴くにはあらず

おぼろ夜の岩石原をしろじろと流るる川に鳴くかじかかも

狐は穴あり空の鳥は巢あり人にはすこし錢のあれかし(大黒像畫譜)

青山の寄り合ひの影ふかくさす湖うみのほとりのやつももの花(日光湯元温泉)

霧降の瀧のもみぢばたなぎらひ赤薙山ゆ時雨吹き來ぬ(霧降瀧)

もみぢ葉の下照る岩に腰かけて溪のむかひの瀧をみるかも

水の音こもれる暗の深けれや螢ゆらゆらよこぎりにけり(獨居)

老杉の林のなかの鳥のこゑとぎれとぎれにひびきかはすも

石につきし青苔に杉の芽生えせりあはれに青しその杉の芽も

獨り居のわがまさびしき厨邊に葱の白根はあまりうつくし

地の上のすずめは脚のみじかくてつちくれなどのころがるごとし

手をかざしあたたまりつついとまあり見るに火鉢の火ぞうつくしき

清 水 晴 代

五本の指一つ一つ切られゆく夢見たりしを我が言はざらむ
職のこと忘れてせめて夜だけでも女になりたしと思ふこのごろ

清 水 堪 治

在りし日を耕しにけむ田も畑も一目に見ゆる奥津城おくつぎどころ
よべの雨今朝止みて仰ぐ飯綱の高嶺さやかに雪ふりにけり

清 水 弘

秋の夜の寒さ耐へつつ書く文字の拙さは吾が心疲らす(履歴書)

清 水 政 福

捨てに行く蠶はあはれ吾が背負へる籠の中にてうごめく音す

峠路をのぼりつくせば目の下に眞夏の湖うみのかがやきて見ゆ

清水 百代

ブラジルにて

眼下まなこの牧場を白くせまり来る日光の移りすみやかなるも

清水 乙女

信濃高原 二首

うち展く青葉高原い隠ろひみるみる虚し吹き上る霧

照り出づと見るまもおかず湧く雲の陽は定めなし高原の朝

おのづから水の道つきて雪原の下ゆく流れ清すがしかりけり

黄に明りなだり美しき枯草山幽かに春は萌ゆる色あり

雪かづく富士の高嶺は日おもてと照りしらむなり幾尾根が上に

暮れ早き秋の日ざしよ夕山を胡蝶たどたどし舞ひてゆきにけり

輕井澤高原 一首

登り路のわが眼にとめて幽かなり朝山に散る唐松落葉

日向ひのこの一山は櫻山五百枝の蓄みなふくらめり

老松の高き枝より落つる雪風強くして光りつつ飛ぶ

山原の一本樵を吹く風や葉ごもる雪を霧とし落す

庭松の梢に大きい星一つ牙ゆる光は秋と思はむ

崩え崖は道陰にして日もさささずさらさらと聞けばくづれ落つる霜

前山にたちまち起る疾風あり谷をめがけて雲吹き落す

谷間ゆ湧き上るよと見る雲は嶺の疾風に飛ばされにけり

朝光の寒きに青む濠の面水尾引く鴨の浮きて静けさ

波の間に押し流れゐる鴨の群をりをりくぐりまた流れをり
二羽の鴨青き波間にひそかなり夫婦の鴨かも相寄り浮ぶ

中津川溪谷

眼に瞻るやとどろときほふ川水が岸に揺りくづす岩松の影
春の溪未だ短きいたどりの若葉は赤し陽に照らひつつ

利根川

大川をよぎる電信の平行線太きたるみよし梅雨空に光る

紫 藤 紫 光

そよ風の木の葉にさやる音よりもなほあはれなり吾子が寢息は

秋 艸 道 人

しらゆりのはわけのつぼみいちじろくみゆべくなりぬあさにひにけに
はなすぎでのびつくしたるすゑんのほそはみだれてあめそそぐみゆ
しげりたつかしのこのまのあをぞらをながるるくものやむときもなし
かすみたつをちかたのべのわかくさのしらねしぬぎてしみづわくらし
ののとりにはのをざさにかよひきてあさるあのとのかそけくもあるか
いりひさすはたけのくろにまめううとつちおしならすてのひらのおと

耶馬溪四首

あしびきのやまくにかはのかはぎりにしぬぬにぬれてわがひとりねし
よひにきてあしたながむるむかつをのこぬれしづかにしぐれふるなり
ひとみなによしとふもみぢちりはててしぐるるやまをひとりみるかな
しぐれふるやまをしみればこころさへぬれとほるべくおもほゆるかも

かすがのにおしてゐるつきのほがらかにあきのゆふべとなりにけるかも
かすがのみくさをりしきふすしかのつさへさやにてるつくよかも
もりかげのふぢのふるねによるしかのねむりしづけきはるのゆきかな
ほほゑみてうつつごころにありたたすくだらぼとけにしくものぞなき
みほとけのうつらまなこにいにしへのやまとくにばらかすみであるらし
ちかづきてあふぎみれどもみほとけのみそなはずともあらぬさびしさ
かきのみをになひてくだるむらびとにくたびあひしたきさかのみち
まめがきをあまたもとめてひとつづつくひもてゆきしたきさかのみち
ならさかのいしのほとけのおとがひにこさめながるるはるはきにけり
はたなかのまひてりたらすひとむらのかれたるくさにたちなげくかな

たかむらにさしいるるひもうらさびしほとけいまさぬあきしぬのさと
あきしぬのみてらをいでてかへりみるいこまがたけにひはおちむとす
おほてらのまろきはしらのつきかげをつちにふみつつものをこそおもへ
いかるがのさとのをとめはよすがらきぬはたおれりあきちかみかも
ひとりきてめぐるみだうのかべのゑのほとけのくにもあれにけるかも
ゆめどのはしづかなるかなものもひにこもりていまもましますがごと
ふたがみのてらのきだはしあきたけてやまのしづくにぬれぬひぞなき
くさふめばくさにかくるるいしずゑのくつのはくしやにひびくさびしさ
あせたるをひとはよしとふ頻婆果のほとけのくちはもゆべきものを
みわたせばきづのかはらのしろたへにかがやくまでにはるたけにけり

鹿谷かをる

さむざむと西風吹きいでて波の秀のとがりもしるく夕づきにけり
寒つばき今頃花をつけゐると思ふこころのしづかなりけり

式場 麻 青

いそのかみ古津新津の油田にあぢむら騒ぐはだれふるらし

かすみたつ古野の奥のをばやしに辛夷咲き散る見る人なしに

赤き花あつしといふに活けかへし白き芍薬よ朝のミルクうまし(病中)

曇りたり雨かもふると草花の種子つみいそぐ背戸の畠に

萩の花こぼるる庭に干しなめし箕の土偶の繪の具乾きぬ

とのぐもり小雨ふれれど石川の瀬棚の淀はうす明りせり

故郷越後五泉

つみあげて窓より高き雪の上に春の雨ふる音のひそけさ

雪の上に紅梅の鉢おきてあり日はてりながら春雨のふる

宿 谷 四 郎

冬山に蘭を掘りつつ耳たててわがききけるは松風の音

曇り日の寒き山べに蘭掘るとかがまり居れば松風の音

灯の下に色つややけき春蘭の一鉢を据ゑて今宵たぬしも

月冴ゆる寒き夜更けをかへり来て庭の敷松葉踏むはしたしき

電燈の笠にとまれる馬追の青きからだはすきとほりみゆ

板の間に飯喰ひ居れば蝸の聲ひびくなり夕べ涼しく

繁 富 元 治

元旦白玉山上にて

日の本の天津御空にさしのぼる初日影かもここにをろがむ

重田 流人

春雨は降りつつかあらむ拭ひる鏡の面にややしめりあり

重友 小代太

精密旋盤にい向ふ銳心とどころきはまりて午後をむしむしと蟬鳴き止まらず

重松 ムラ

笠砂の岬 古事記には笠砂の御前とあり 一首

國とめて笠砂さきの前に道ははて美くはし少女とあひませるむかし

御扉ひそかにはあけ夢殿にこの世の光いれたてまつる(法隆寺)

總代と呼ばれし吾子あては小さなりかしら下げしをのびりみる(小學校卒業式)

はだか木の梢にのこる夕あかり五位鷺の巢の風に吹かるる

悼石井直三郎先生

うつむきて人麿の歌ときませり静かすぎたる師をおもひいづ

重見 白朗

家の子と居れば安しと七十年故^く里出^にでまさず母はしづかに(ふるさと)

重山 十字路

抱へたる草を投ぐれば暗闇のまやに音して牛の立つらし

穴戸 幸榮

いづこよりか馬の蹄の音きこゆしづかに昏るる村の小道に

七條 晃正

妻なくておのれ寂しき日もあれど心ゆたけし大き家居は

冬の夜のいやすみ更くる空ゆりて地鳴りひびかふ落潮のおと

七五三 満

燃ゆる火を隔てて父の叫ぶこゑかかる悲しき聲あらめやも

燃えさかる吾家を前にいつしかも心ゆるびて寒くなりぬし

焼跡の火の見廻りに母と来て瓦踏みゆく足おぼつかた

仕切りなきこの家なかに物言へば鈍くこもりておのづから消ゆ(假屋)

黒き蝶二匹もつれて舞ひゆけり谷を壓するくもりのひそけさ

品 田 聖 平

月かげに光るを見れば高原の秋の千草は露深きなり

品 田 政 子

麥生野の芽立ちのみどりほのみえて山の上の月圓まきかなりけり

品 田 米 尙

小感情にこだはり居りてとくるなき心をときにひとりなげかふ

階 本 樹

生きることのかたきをおもふなり夜ひそかとぼしき錢をわれかぞへつつ

信 樂 眞 純

昭和八年滿鮮に遊ぶ

滿洲に死ぬべき身なり名刺など持たずと語る同船の兵(船中)

大空とひろ野の末に立ちながら銚かすがひとなる一寸の人(金州三首)

何の木ぞ一もと立ちて影を引く行けばいよいよ廣き沙原

夕燒の淡き地平に馬と人黒き二點を置きて暮れゆく

山寨のごとく薪を積む窓に聽くハルピンの教會の鐘(ハルピン)

鞍馬山雜詠

臥す我を釋迦の涅槃の像として蟲多く寄る山の八月

無言にて三たび繞れる足おとの降る雪に似る所化の行道(修正會に無言行道と云ふことあり)

わが山の所化が六器にあけ方の闕伽汲むことも冷たからんぞ

雪まじり山の夜明に風吹けば前こごみして廊わたる沙彌

ほととぎす杉黒く立つ山に鳴きうす紫の山に月出づ

精進して山に修すれば秋の來て壇におく灯も露に似るかな

親しくも人に言ふごとと聲あげて祈る少女もまじる夜の堂

あなかしこ何の宿世のえにしより山の御堂に拜まるる身ぞ

昭和十年六月二十九日未明京都に水災あり洛北鞍馬また荒る 一首

荒れにあれ昔に還る山に我れ開山のごと杖もちて立つ

曉の灯を先立てて廊行けば紫衣に寒かり初春の風

くらき山雪を風吹き束の間に直なる杉の片側に積む

侍者一人影の如くに我れにそひ鼯鼠むさび叫ぶ山の夜の道

わが山へ七寶なんど埋むなり堅牢地神地をかし給へ(金剛壽命院の地鎮祭)

信濃 田津穂

生野鑛山

坑内に働く人は外の面の日和を問ひてねんごろにあり

坑内をいできし坑夫等カンテラあかりの灯を消していそぎさりにけり

猪 狩

隧道をいでて峽路はくだりなり谷ひらくところ桑の木を植う

谷を越え飛びゆく雉子はひくくして雪の斜面に何時までも見ゆ

尾根こしの吹雪渦まく谿かげに猪比待つわれやみじろぎもせず

青淀に四つ脚のべて浮び居るけだものに白く雪降り積る

かつぎきて土間に投げ出す猪は地響たててころがりにつけり

兄 逝 く

湯灌をへて身を淨めゐる裏川にものを言ひたりわが弟と

兄のやけて變る火色を守りつつやすらぐに似つ心疲れて

兄燃ゆるほのほに赤き松の幹あふぎ見につつ涙あふれぬ

冬ざれの野をきて冷えし現身は兄燃ゆる火にあたたまりけり

まだいぶる堀かま底に兄を拾ふうつそみわれの汗かきにけり

信 夫 安

ひとりして荷を作り居りわが友のこの便りさへ焼きすてかねつ(轉居)

瀬戸物の大き火鉢に火をおこし宿直室に栗やく吾は

この部屋に夕さり寒くかへり來てひとりいほ飯食をすつめたき飯を

篠崎 隆

茅の葉の搖ると見れば馬追の幼き蟲は居直りにけり

篠崎 松夫

絶え勝ちのひとのたよりを待ち侘ぶる思ひもうすれゆきつつさぶし

篠崎 八重乃

看護婦生活 二首

病棟をつと過ぎゆける眞夜中の烈しき風はふたたび鳴らず

樋つたふ雨をききつつ夜の更けをひとり起きいでて派出の支度す

わがまへにゆゆしくたてる白き波暗きになれて見つつおどろく(暹子)

篠崎 よしゑ

ひそやかに地もや流れて春の夜の巷をつつむ紫のやみ

あますなく食ぶる吾子の食慾に追はれて冬のくりや明るき

篠塚寛

あはれなり支那の子供らかかる書教（排日教科書）へられつつ人を憎めり（排日教科書）

鞍馬越峠に出でぬふかぶかと九十九谷に霧下りにけり（空沼嶽行）

篠原いと

中央寺院の鐘なりひびき仰ぎみし頬（頬）にゆるやかに柳絮（柳絮）ふる

松花江（松花江）の河面ひかれる夕なり辻音楽のひびきかなしも

篠原源太郎

第一艦隊佐世保に入港

上陸を喜ぶ兵の次々と上る波止場は笑ひに満てり

佐世保、鶴度越

將冠山の峰より昇る大き月の光は射せり山の中の池に

篠原志都兒

駿河なる富士の頂見ゆるまで淺倉山を木葉刈りのぼる

足曳の山ほととぎすいつしかも木葉刈る吾に隣りてを鳴く

立科に雨降り出でて麓野の萩刈る吾に霧下りめぐる

横岳のつがの木末の猿麻さるま柿がせあまり長けば吾とりて見し

頂の岩高ければ這松の上を危ぶみ這ひて越しけり

萩山の峰に草刈り天廣ら雲ゆく見つつ晝餉するかも

萩山の尾の上に出でて今朝見れば雲ただ低く里を包めり

篠原富藏

たはむれに犬に聞かす弟の悲しき言葉をふと聞きにけり
思はれてありと思へば春の夜のわがひとり寝の樂しくもあるか

篠原 双葉

雪消えし麥阜の土やはらかく踏む足毎にくぼみてゆくも

篠原 正邦

水柱のひときは高くたち消えて機雷爆破は一瞬に終る

篠原 良雄

生れし子の男の子の大き初聲を妻も己も聞きにけるかも(長男生る)

芝 猛雄

大正八年陸軍特別大演習

休めばそぞろ寒しと親しげにいひよる兵と闇夜を歩む

一團の兵去りしあとのあかつきの山ほのぼのと霧たちのぼる

丹生 山一首

遠つ世も今のうつつもさびしくて燈明杉はそそりたつかも
有馬郡有野の里にわれありと人に知られず年老ゆらんか

芝

宏

蕃界の徒然

しきり降る雨に濡れつつ蕃童は山に目白の巢をとりて居り
山水を堰きて川魚かほなをとり遊ぶ蕃童とありつつ一日ひとひ過ごしぬ
中空に月はかかれり檳榔の葉音淋しく更くる冬の夜

大武嶺の裾を流るる谿川に金鑛捜す人の來て露營はじめぬ

芝 沼 美 重

晝すぎの路上に土に塗れたる氷の碎片かけら見て過ぎにけり（工場街）

みんなみは山脈やまなみひくしはるかなる水の光は何湖なにうみならむ（高鈴山頂）

汗たりてひと日をゆけり街道の白くながきに日は照りにつつ（五浦行）

芝山 永治

ひとむらの竹藪青き溪の家しきりに咳せきをせきつぐ子をり

柴 紐三郎

こもり居の仕事に倦みて窓に見るあふひの花はちりそめにけり

柴 弘志

思ふさまここに憩やすひて草喰めと牛を放ちてわれは草刈る

柴崎 光雄

あはれなる笛一しきりこだまして舞ふ手に散るや遅八重櫻(太平樂)

柴田楊花

厘毛の利のかけあひにわれとわがひたすらなりしをさびしめりけり
老楠(おきな)のひときは高き茂り枝に雨はれてゆく明るさの見ゆ(熱田神宮)
末つ子のわれをたよりに老いゆくやあはれ小さき母の寝すがた

柴田倉三

いちじるく朝の道に吹き散れる青き木の葉を踏みつつぞゆく(颱風のあと)

柴田健兒

印度支那朝鮮滿洲より集りし砂それぞれの臭持ち來ぬ

秋深く窯(かま)べなほ暑し硝子工は二升三升の氷水(ひみづ)のむなり

いつまでも咲くサルビアに冬日さし色あせながら赤き花びら

ポーナスの多き少き言ひ合ひて獸の如く半日過ぎぬ

柴田 畔老

米國にて

排日の騒ぎ日につぐこの國にかかはりなくて子らは陸める
日本人われに乏しき室をさへとりて呉れたり湯宿の主人は

柴田 久

かなりやの籠にとぶ音ひそかにて障子に明しひるすぎの日は

高木國二君の急逝を悼みて一首

くるしみて死にきときくがあはれにてこらへかねたる涙落ちけり
草屋根の片側いまだ日の照らずつぶつぶさむしたまるあられば

伊豆大島

頭カブの上に物のせ歩むならはしも若き娘こゆゑにかなしかりけり

柴谷武之祐

酒倉の豎樋をおつる雨のみづ一日鳴りゐて退社ひ時どきとなりぬ
梯子かけてのぼりし桶かに夜よひそけく醪もろみ泡だてり見つつやすらぐ
燈に照らしのぞく火桶の醪湧けり音ふつふつとにぶく泡だつ

某社重役室

もとのまま残る卓あり革椅子ありてゆたかに過ぎし父とぞ思ふ

大和天川山林

水飲みし小屋にてトロツコを乗りすてぬ草立つ線路なほあゆみゆけり
吹きすぐる霧のなかにももの言ひていたく和なごましき父の聲かも

柴谷文子

二階より見え居る隣の庭隅の夾竹桃は咲きおとろへず
降る雨に花落ちつづく木犀の木下に濡れし雀來てゐつ
朝庭にさ霧のうごく頃となりて松の根もとの橐吾つばぶき咲きぬ
いちはやく朱あかに色づく黄櫨きはじの葉はひと日北風の吹きて散りたり
朝々の寒くなるときすこやかにありやと母はたより賜ひぬ

柴生田 稔

高野山二首

箒草うすき日ざしに影ひけり高野たかのの奥の畑ひろくして
秋づきし日ざし明るく杉に照りたちまちにして過ぐる霧雨
年老いて時におもねる文章は今日もひきつづきて夕刊に出づ
コルセツトしてをりと思ふおのづから舗道の角を今まがりつつ

この夕べ二人あゆめば言ふことのただ素直なるをとめなりけり
をさなきわれに父の郷里きやうりをいやしめて言ひにし母のことも思ひ出づ

比叡山

空たかき月の光はさえざえと夜半のみ山を照らしけるかな
水のごとく澄める夜空にみづうみのはたては白く雲ひきにけり
月あかり暗きあなたにふりさけし幾山なみのあかつきのいろ
人去りて何するとなき一日たち夕づくころに雨ふり出でぬ

太東崎一首

沖ひろく海はなぎつつ眼下まなしたの磯にとどろきてあがる白波
過ぎゆきしことは悔いじと曉を入りし臥床ふしどに足をあたたむ
砂利道に霰はしろく降りたまる朝ただゆきても思おもはざらむ

起き伏せる草丘にまれに牛群れてすでに久しく海に沿ひゆく
たひらかに草野をひたす入江あれば水をわたりて馬ぞ群れたる
海に入る日は窓染むる幼くて母とありにし旅の戀しく
朝ぐもる空に熊笹の丘つづき宗谷そらの海に汽車ちかづきぬ
トタン屋根ひくき家竝かさなりて曇る草山その先に見ゆ
つらなれる水田のはての山ひくし幾度いくたびかわたる椋鳥のむれ
夕燒のうする空に月たちて石狩の國のひくき山やま
國こぞり力のもとに靡くとは過ぎし歴史のことにはあらず
峠より見さくる野邊に日あたりかかつて來し日のごとくしげし(奥日光)
消え残る雪にそそぎて降る雨の煙らふごとく夕べとなりぬ

ひとりゐてほしいままなる安けさはふたたび我にかへらざるべし
汗たりて夜更けし街を歸り來ついきどほる心いまなし我は
あをあをと廣葉茂りし木蓮の散りゆく見れば常のごとしも
山茶花の斑ふかのくれなゐを別きてわがあはれとぞ見し冬も過ぎなむ
霞みつつ空暮れゆきて片割れの黄色き月が一つかかれり

柴 山 保

三原山の熔岩臺地かけくだり夏山やまなか中にうぐひすを聞く(大馬)

柴 山 武 矩

鯉のぼり引きあげ終へてなんとなき辱かしき思ひに家に入りたれ
共に寫眞撮ると招きし蕃女等の背に寄り來れば女の匂す
眞向ひて夜更けをあれば壺のばら我と共にひそかに起きて居るかも

過ぎてゆく夜汽車の微動を感じつつくづれ落つるばかりの壺の花ばら
やはら葉の和なごめる上に咲きしきて朱のみづみづしき鳳凰木の花
文筆の業するばかりにもつたいな父にも貧しき生活をさせつ
なむあみだ唱へあはしてかたはらに吾わが子もみ骨を箸にとり居る
おん骨の脛の長きは箸をもて折り碎きとる白木の箱に
ちちのみの喪にゐてうからしめじめと仕草もの言ひやさしかりけり
小さき手にわが膝つかみ縋り寄る幼きものはかはゆかりけり
金のなき閑なきわが妻子を背負ひ尻をからげて洗濯をする
古里の驛に待ちゐし老い母の手にぞ受けさす父のみ骨を

椎 木 文 也

オアフ島夕づきにつつ島かげのよどめる海に虹立ちにけり
太平洋の波の上はろに日はきらふ幾日をかさね渡り來しかも
赤道を今通過すと眞晝日のひかりのなかを太笛鳴るも

水平線近くにアルゴ―見えそめて今宵はアルゴ―座全體が見ゆ
ブラジルの山見えてより七日あまりいまだも船は南し南す
異國いこくにありと思ふこと今は稀いとれなれど水平線を見ればさぶしも
太陽の光鋭し街路樹の青葉二ひら落ちにけるかも

椎 名 智 夫

雪曇り晴れたるらしも窓掛を明るくそめしひかげしたしさ

椎 野 か つ

舟の上に人も荷馬も静かにてただ川風をたのしむらしも(多摩川の渡し)

おのおのおのかへり行く子よおぼつかな吹雪にかすみ小さき姿

椎屋 欣 二

夕はやく扉のきしむ音のして出仕の僧の歸りゆきたり(比叡山上)

ひと冬を越えし竹むらおとろへず光春づく山のなだりに(碓氷嶺)

しらじらと川の流は見えきつつ月てる夜半の如くしづけし(飯綱登山)

農民らよりにてきほへる組合の亡びし數も尠くはあらず

おのづから眼まきさめたる曉のしづけきなかに鳥が音きこゆ

古の戦圖賣る店ひそかにて蠶は繭になりてゐにけり(川中島)

妙高登山 三首

富士見平を夜半に越えきつふるさとの信濃の山に雲しづまれり

黒々としげれる山を越えしより夜空に起る風はするどし

こだませるたぎちの音の遠ぞきて尾根ふく風の天にさびしき
雪あかりに幾山脈いぐさなみの見えをりて北に傾く山は低しも
夜ふけて雨やみにしか雁かりがねの天そらわたりゆく聲ぞきこゆる

澁江 嶂

潮ひけば沈没船の甲板のさだかに見えて冬晴のつづく

この月夜いづちにむかふ船ならむをさな子が泣くこゑ透るなり
二階より巷のゆききながめをりかかる旅の夜のありたるごとし

澁澤 喜守雄

梅雨さぶるひと日を叔父にたづさはり水鶏くひなの啼けば日暮とぞ思ふ

月島へ晝渡りゆく船のなか野菜買ひもつ女こみあふ

なべて世に敵意を持つと言ひきりし小氣味よさよ我が一生なからむ

あはあはと庭に咲きつぐ無窮花むきゆうけに心しづめむ折ひもなかりし

澁谷 あきら

一年を保たばよしと人絹の洋傘あがなひて三年になるも

澁谷 市郎

女工なりしわが新妻は百姓のなべての業は知らざりにけり

澁谷 俊

於名古屋市公會堂第九回全國市長會議

髻しろき翁もありて國々の市の長たちがことあげぞする

澁谷 すみ子

無智なるは罪惡なりといふことのかほどにしるき世のあるべしや

澁谷 玻璃子

大き宇宙の一端に動く地球とふ確かさは今宵月を光らせず(月蝕)

澁谷 嘉次

洲のさきの石のつぎつぎ水づくは川へさし來る潮どきならむ

雨雲のひくくなづさふところまで汐とほくひき干潟つづけり

とびたつと見えて忽ちおりしづむ雀おびただしむかう葦原

夕もやのあるかなきかに冷えしづむ中仙道を板橋に來つ

丘つづき枯桑畑のうへひくく一むら雲の移りつつあり

あけ方に起りし火事を見てかへり晝ちかくまで眠りつづけぬ

ふくらむがごとくにそよぎむら萩の風すぎゆけば枝たれにけり

印 旛 沼

日のくるる沼岸づたひくだりきて渡の小屋に人のたまれり

岸をこえ沼水ひたすみのり田へ稻押しわけて舟入るる見ゆ

四萬温泉

星冴ゆる山の空にはいま降りし時雨の雲のきえてあとなし

法師温泉

戸をささぬ障子のそとの月あかり時雨音たてすぐにやみにき

夜もすがら月夜あかりにあかかりし障子に朝の光さしきつ

澁谷 修

なが雨の止みし時の間を濱に來て濁りし海を見て引き返す

鹽川 孝

樽を背負ひ人等來りて湖の雪面の穴に水くみにけり(山中湖)

夏日照る箱根街道風つよみ洋傘かさをたたみて人の歩みつ(箱根湯本)

鹽小路 政子

目をとちて熱計りをれば水銀の昇りゆく音聞ゆる如し(病床にて)

鹽崎 善一

初島に遊ぶ

島山の繁みの中にほほけたる蕨を見れば春たけにけり

峠路の角を廻れば段々畑海に向ひてせばましかたむく(辰の濱)

鹽澤 薫

石老の山をまもりて一千年顯鏡寺はふかき木立のなかに(石老山頂上)

桑の芽の伸びいちじるく陽の光さへぎる雲は電をふらしぬ

鹽島 嘯風

鶏小舎にとり呼び入れぬこの夕べ荒れたる土は早く凍れり

坂路に照りてはくらむ雲迅し砂利をつぶして繭車行く

鹽田悦子

額より汗たらしつつ歸りたる吾が子は犬に六與へ居り
出かけむと下思ひつつある時を客はこみ入る話に移る

鹽田邦一

病妻を守りて故里に歸る

妻の病おこたる晝は障子をあけて青葉たけゆく山を見せしむ
山に住みて安しとおもふ雨の日は唐傘さして米を研ぐなり

妻遂に逝く

青嵐ふく日となりて打ちわたす野山かぎりなく思ほゆるかも

いとけなき心に沁みて自が母を見たしと思ふ時もありなむ(吾子眞弓に)

我が妻の好みて食せし青紫蘇の匂ひよろしき夏さにけり

鹽田沙香

渡り來し谿見返れば索道の大きたるみの未だ揺れる(比叡山ロー)

門標をしばし仰ぎて成功せし友の態度を心に描く

あざやかに山頂を描く若葉の線天文台は白く聳えつ

鹽田眞八

逆立ちて海底深くぐり入る海女の足うらひらひら白き(江ノ島)

川岸にむらがり咲ける野茨の長枝は垂れて水にとどけり

雨霽れて月は明るしひとつらに街の躉は濡れて光れる

街裏の空地草原秋晴れてきちきちばつた飛びかひにけり

颱風それて夕明るき空の色高きに群れて岩燕飛ぶ

水底に陽光^{ひかり}明るしさび鮎^{あひ}のをりをり砂に腹すれる見ゆ

鹽田 秋陽

故郷にかへれば友は父の業つぎてことなく桶つくり居り

鹽津 眞二

行きすぎし牛の臭ひものこりゐてほのぼのとぬくし夕丘の道
臨港線を貨車とどろかに過ぎゆけりいまはあまねき夕靄のなか
組伏せて吾に灸すゑ給ひけむ母の力も衰へましき

鹽野 橙一

酒藏ゆ若葉をもれて酒の香のただよふ頃となりにけるかも

鹽原 義久

松の葉をもれてさしくる朝の陽にうるしの紅の露のしたたり

重たげに露をたもちて白藤の朝の池にうつる静けさ

蕎麥の花ちりてしまへば幾山の奥の穂高は雪ま白なり

どうだんの花のこぼれて居る庭の朝しづかなり大寺の屋根

睦じく遊び居につつ争ふはたのしみなるか幼な兄弟

時雨雲山の奥嶺にたたまりて峽のうるしの紅を濃くする

鹽 見 清 子

佩劍の音もさやかにゆきませば一日われの心明るき

鹽 見 太 郎

水光る由良川上の高山の燐明らけく雪ぞのこれる

鹽 見 敏 明

ひたむきにわが言明は押切りたりかたくななりと佗びしがりつつ(あらそひ)

鹽谷喜久子

楠若葉もりあがり見えてその蔭にみ寺の屋根の反のしづけし
白南風のゆるく流るる日和ぐせ咲きたれておもき棕櫚の花房
吹流しよくながると仰ぐ空に咲きたりて太き泰山木の花
霧の動きゆるやかにして向つ山に朝なく蟬の聲は透らざ

加部島にて

浚渫船をりてひそけき川口の月夜の橋をひとりわたりぬ

鹽山正二

投げし網しづかに手繰る指先に魚の動きの傳ひ來にけり

潮満庄三郎

幼子と見つつ越えゆく峽みちのいが栗青し上枝に下枝に

山かげの馬車のひびきは聞ゆれど揺れて來る灯はいまだ遠しも
弟は白骨しろほねなれば夜の汽車の網棚の上にのせられにけり
朝いまだくらき濃霧の沖に鳴る汽笛はふとし航空母艦能登呂

潮村 白槇

大友宗麟公銅像除幕式

ふまへたる此の大殿の力足のしかかる如く青空に立つ

島 楳 乃

洛北詩仙堂にて

しづけさをここに集めて添そっ水づの音ことりことりといちにち止まず

島 吉 二

雜草にまじりて紅く曼珠沙華咲く野となりぬ寂し風音

島 久美 於

雨やみて色あざやけく並び立つ金剛の山葛城の山

島 東 吉

阿片喫ふ習ひおぼえし福州フクシユウの茶館ツアクワンに咲ける夾竹桃の花(旅)

島 乃 保 留

ひとところ紅葉あかるき山見えて硫黄噴く谷に雨降りにけり(大涌谷)
み社は夜はとざしてほのぼのと匂ふ櫻に物の音ともなし(靖國神社)

妻 逝 く 三首

いのち終るといふははかなし今朝食はみし餅もちひの残り枕べにあり

今日が日にせまるいのちと知るよしもあらでこの朝を相見別れき

生活くらし約つづめ漸く買ひし品もあらむ妻亡き今をひとり見なげく

鍵かけてひとりこもれば泥かむる田螺たじにも似るおのれ嘆かゆ(アパート生活)

島 稔

老いらくの母を思へば銀ぶちの眼鏡まなかひに見ゆる如しも

職ほしきわれはためらはず鳶あをき君が玄關のベルを押して立つ

島 洋 介

ロツキー山中に鐵道工夫となりて

乏しくも得たる白味噌汁にしてさかり遙けき國を偲びつ

五萬年經ふとふ氷河のあとどころ散らばふ石ころ皆まろくして

みづから馬車を御し行く異人の子起きたての吾にこゑかけ通りぬ

きなくさきものの氣配のなびけるはどこにか野火の地を這ふならむ

家めぐる向日葵刈りて半哩むかうの埒に牛乳ち搾る見ゆ

天の河のまなかに照りし北光の光消ゆれば雨しげく來る

あけがたの空覆ふ埃ほの黄ばみあかるきところは月にかもあらむ
一晝夜のドストスタアム吹き落ちて今朝すみわたる空のしづけさ
ま夜中に目覺めし吾や日本のラヂオ聞きたく起きいでて聞く

嶋 正 央

煙りつつ海のはたてに消えてゆく月夜時雨のほの白き雲

嶋 雅 男

夜の更けを茶を飲みゐるにひそやかに自動く車まとまりて客着ききにけり(旅の宿)
眠られず眞夜を起きゐて看板の吹き飛ばさるる音を聞きゐる(烈風)

嶋 藤 介

いささかは世にたづさはる身なりなど己思へり錢得たる日は

軍艦鳥海

大砲にまともに向ひ立ちにけり押しちぢみたる丈けの厳しさ
わが艦の 高き舳先の 立ちむかひ 水平線が切られてゐる今
舷側に眞晝を 點す赤き色の 救命浮標は 寄りて見にけり
砲いまや 上向となり 詰めにけり 空には 光る白雲の層

軍艦羽黒

鐵筒を 積み重ねたる 見の姿 羽黒は 凄し 鬪志みなぎれる
金輪際 据り揺らがぬ 砲塔に わがうつそみの 掌は 觸る

長興村の夏

雲の 峰水田に 映りかが やかしふと 漣の 立ちてまぎれぬ

長與川ここに堰なす水の越え厚みは見つただに涼しさ

東望濱海水浴場

海水着潮垂らしつつ股長またに來る處女をとめを眼は避けむとす

雲 仙二首

雲仙の幾重の山や遠きより見えななりつつ雨來りける

普賢ヶ岳ふかき曇りの寂しさはそれかと思ふ日の在處ありとなし

筑紫野の春も闌けたりげんげ田は鋤かるる前の莖長の花(歸郷)

わが潛もぐり浅く平らにすすむなり浮ぶ海月の垂尾來る見ゆ

山越ゆる電柱見ればわが性格さがやはるけきものに泣くとするらし

白蝶はくてふの海を渡るはあはれなりひたぶるの羽搏舟はつちにして見ゆ

夜の風の止み間はあれど遠方に音を離さず澄む一木あり

上 高 地

森深く鳥鳴きやみてたそがるる木の間の水のほの明りかも

客 居

げんげ田に寝ころぶしつ々行く雲のとほちの人を思ひたのしむ

長 崎 二 首

長崎の古りにし家にうらがなし疊ほてりて日はいや闌たけぬ
夏の日は暮れても暑し肌ぬぎつつもの言ふ友の衰へにける

このごろ 二首

寂しめる下心さへおのづから虚むなしくなりて明あし暮しつ
わが部屋の疊をかへて心すがし昨日も今日も一人居にけり

木曾御嶽

夕ぐるる國のもなかにいやはての光のこれりわが立つ岩山

初冬

光さへ身に沁むころとなりにけり時雨にぬれしわが庭の土

柿蔭山房二首

野分^{のわき}すぎでとみにすずしくなれりとぞ思ふ夜半^{よなか}に起きゐたりける
冬菜^{ふゆな}まくとかき平^{ひら}らしたる土明かしもの幽^ゆけきは晝^{ひる}ふけしなり

明日香二首

明日^{あす}香路^{かぢ}を^をか行きかく行き心親^{こころおや}し古人^{いにしへひと}をあひ見る如し

天なるや月日も古りぬ飛ぶ鳥の明日香の岡に立ちて思ふも

柿蔭山房

今日の日も足らふに似たりわが掘りし雪割茸ゆきわりだけを羹あつものにして

春 二首

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも
春雨の雲のあひだより現るる山の頂は雪眞白なり

巖 温 泉 二 首

静けさよ雲のうつろふ目の前の山か動くと思ふばかりに
野の上に雲湧く山の近くして忽ちにして隠ろひにけり

左 千 夫 忌

我さへや遂に來ざらむ年月のいやさかりゆく奥津城おくつぎどころ

關 東 震 災 三 首

現し世ははかなきものか燃ゆる火の火なかにありて相見けりちふ

火のなかに母と妹を失ひてありけむものかその火の中に
あな悲し火に焼かれたる人の背に薬ぬりつつわれは思ふも

滿洲 三首

この國の野のへの土のいろ赤しさむざむとして草がれにけり
行きゆきて寂しきものか國原の土に著くなす低き家むら
一と國の境をこえてなほ遠し雪さへ見えぬいやはての山に

をりをり

障子あけて昨日の朝も今日の朝も遠くながむる春さりにけり

燕 嶽 二首

山の上の梅の木肌は粗々し眼にしみて明けそめにけり

わが齡やうやく老けぬ妻子らとお花畑にまた遊ばざらむ

土肥温泉にて 三首

亡きがらを一ひと夜抱いだきて寝しこともなほ飽き足らず永と久はに思はむ
土肥とひの海傍こぎ出でて見れば白雪を天あめに懸けたり富士の高根は
海の上うへゆ振りさけて見ればわが前に押してか來くらし富士の裾野は

柿蔭山房雜詠

凍りたる湖うみの向うの森にして入相いりあひの鐘をつく音聞ゆ

初 夏 二首

湖うみに入る谷川水の浅き瀬にいささ蟹はふ夏となりけり
清らかなる山の水かも蟹とると石をおこせば砂の流らふ

高山國の歌 三首

夏にして御嶽山ごたけやまに残りたる雪の白斑しろあぶは照りにけるかな

やや暫し御嶽山の雪照りて谿の曇りは移ろひにけり

岩あひにたたへ静もる青淀のおもむろにして瀬に移るなり

峽谷の湯 三首

仆れ木にあたる早湍はやたぎの水も見つ寂しき過ぎて我は行くなり
谷かげに苔むせりける仆れ木を息づき踰こゆる我老いにけり
山深く起き伏して思ふ口鬚くちひげの白くなるまで歌をよみにし

秋 田 行

をちこちの谷より出でて合ふ水の光寂しきみちのくに來こし

恙ありて 八首

ささやかなる室をしつらへて冬の日の日あたりよきを我は喜ぶ
寒鮓かんぶなの肉を乏しみ箸をもて梳すきつつ食らふ樂しかりけり

もろもろの人ら集りてうち臥す^{こや}我の體^{からだ}を撫で給ひけり
生き乍ら瘦せはてにけるみ佛を己れみづから拜^{をら}みまをす
或る日わが庭のくるみに囀りし小雀^{こがら}來らず^{こがら}
信濃^{しんのう}路^ぢはいつ春にならむ夕づく日入りてしまらく黄なる空のいろ
わが村の山下^{やました}湖^{うみ}の氷とけぬ柳萌えぬと聞くがこほしき
箸^しをもて我妻^{おづま}は我^わを育^{はぐ}めり仔^ことりの如く口開^あく吾は

島崎 きみ子

書道博物館にて

たくつぬの新羅^{しんら}の國^{くに}の阿彌陀佛^{あみだぶつ}時はろかなるものしづけさ

島崎 清吉

夕餐^{ゆふい}焚^たく母と語りつつ埋火^{うりび}に草履^{くわだ}の髭^{ひげ}をあぶりつつとる

夜に入るを待ちてやうやうあきらめし病蠶捨つる穴ほりにけり

島崎清吉

臺うき

石いし

(五十年の我が家の昔祖父の世は生きのたづきに足袋造りせし)

祖父の世は貧しかりしか終日ひねりを足袋打つ石に對ひ居にけむ

仙石原

山腹の夕陽照りしむ家の庭柵めぐらして人住まぬらし

島崎ナヲエ

我が村にて機織る家は稀となりぬ吾が織り居れば子供等こどもらの見にくる

島崎松司

峽の道夕ぐれ寒しうしろより馬のいななき近づき來たる

島崎義雄

動亂の支那に巡查となりゆきし友あはれなり酒ぶとりして

島崎英彦

岡山縣蒜山原野營

ほのぼのと風に流るる土用螢眼にとめて涼し門田あかりに

島末眞之

眞盛りのれんげをかくも食べたがる牛を叱りて田を鋤すなり

疲れたる牛も歸りは嬉しきか夕べの坂の降り早しも

麥扱ぐと妹も出て來る夜の庭は眞晝の如き月夜なりけり

島田旭彦

ねりぬきと伸さるる麵の滑らかさ幽けくきしむ竹昇の振り(竹昇は孟宗竹にて作れる麵を伸す器具)

コークスの餘焔にはじく水の音とがりかつ消ゆ深夜の寒さ

コークスの餘燼に浸むる如露の水かつがつ返えて午前二時うつ

雪ならむただにしづもる外のけはひ汽罐かの火おとす眞夜中の二時

記帳了へて黎明あけには早き午前二時かすけき音は雪かも降り來し

五加酒ろうややに滴るほの赤さ夜陰は凍みて杞憂か湧かしむ

或る夜おもひ内にあふれて

しんしんと更くる寒夜をそこはかと香に立つものは根ぶか白菜

厨房は夜陰に凍みて眼がしら刺すかに匂ふ玉ねぎの屑

思慕切々 三首

燒賣しゅうまいを蒸しつつ眼うるみ來ぬ豈みさとしに悖ると思へや

煮つむるは豚脂のスープしかすがに苦難に堪へてただに在經む

おはさねど先生の御こゑ直に聴こゆ我も働かむ脂染みつつ
ゆつたりと急ぐにもあらぬ定齋屋の藥箆筥に秋の音すも

何かしらかきむしりたき心持五重の塔をぶつたふせ今

斜にかざす光鋭き大庖丁疊屋なれどたじろがれぬる

いとし兒の咳きいる聞けばこの我れの顛顛ひんひんにじじと沁みてなやまし

うつし世に生くらく樂し貧しけどうからむつみてよごとを申す(元旦偶詠)

朝やけの空ははるけし珍らしく小泉町に蛸なけり

事務室の窓にうつれる我があごのとがり痛々し心しめらふ

鰯すめつくとと繩ひきはへて日だまりに烏賊いかほす妻の窠れ佗しも

さえざえと光りつめたる寒鮎の鱗に明る川くまの渦

春なれや何とはなしに嬉しくて月夜の土堤を吾子おこに歩ます

まみ近く寄せ給ひにし先生の御髭に觸れついのち死なずて
紫蘇の葉に降る雨あしのこまかさよけだしや秋の近みつつあらむ
さ夜くだち煮ゆる土筆の香にたちてしめやかなれや軒端うつ雨
陽に匂ふ梅の楚チのはだら雪しみらに啼なくは鶉うしかならむか

島 田 澄

わが歩み遂にさぶしくなりにけりどこまでつづく枯草原ぞ(富士山麓)
刈田越し遠く横伏す冬山の襪まさやかにまだ暮れぬ色

通風筒の音にたつほどにいでし風日癖ひしの西風にしの朝より兆す

島 田 實 造

すがすがしき朝あけがたの山ひだにきはだちて見ゆ綿雲の群

島 田 尺 草

癩を病みて既に十數年今や文字通りの生ける屍となり、眼も失
明し、咽喉は氣管切開によりて僅かに呼吸す

霜とけの庭の濕りにしみて照る日かげ静けき春は來りぬ

胸のなかに痰の灼きつく雪の夜は心ゆるして眠ることもなき

朝戸くりて阿蘇は雪よとみとり女のつぐるは聞きぬ痰を切りつつ

梅の香をしづめて降れる雨脚のほそほそと今朝は春めくをおぼゆ

ねずみの穴に杉の葉束をつめ込ませこの夜は早く寢につかむとす

窓近き櫟の花のにほひ立つまひるは病癒ゆがにやすき

言ひ残すべきこともほとほとあらざれば心は澄めりいまの現に

いま更に命惜しむとあらねどもくるしき日には心つかれつ

流動食にふたたたびかへりゆく春の臥床に思ふことのはかなし

島田 道人

いつぱいに開けて清しき二階なり青空を前に机を据ゑる

島田洗耳

柿のはな落つるゆふべの土くろし遠音の河鹿こゑの澄みたる

庭樹々にかすかにふれて音するは時雨にあらず灰降れるなり

よなはらにうつろふ雲のかげはやしさき山の秀ゆたはあらはれにけり

ひそやかに障子にさやるものの音は夜半吹きつる雪にしあるらし

島田武

早稻わぞはすでに穂孕いねめり川下のしがらみときて水はおとさむ

掘りあてし蛙はなほも動かざり再びうめて籠らせにけり

島田タマ

自ら湧く親しさに近づけば見知らぬ吾こに童の笑みかくる

青年わかものの心のうごき思へれば酔ひし吾が子をたしなめかねつ

島田のはぎ

いち早く咲きて明るきたんぽぽが金属のいろに見えて寒き風
何やらむきほへるものに面ほてり露店の花が虹の如く見ゆ
灯の冴えて玻璃戸にうつる壺のかけ見て居れば青く息づく如し
暮ながき春の夕べとなりにけりこの朧さはいづこより来る

島田兵三

東郷元帥薨去

もののふのつとめ本分を守りて沈黙だ居れど徳望高し第一の臣おみ

皇后陛下御懷妊五ヶ月の御發表を拜し奉りて

日の本はふえよ伸びよの神ごころ御躬みみに示さす畏こかりけり

伴林光平大人の南山踏雲録を讀みて

忠烈の大人を偲べば魂緊り横臥して讀む書ならなくに

同じく天誅組義士を

若けれど侍從忠光ますらをなり義烈の兵を率て戦ひつ

島田眞佐

一群れの鳥寒天にしばなきて吹き散らされぬ木の葉の如く

島田政子

今年竹葉はまだあらく幼くて止りゐる雀皆見ゆるなり

島田芳子

またまなす龍舌蘭の花にかこまれてペルリ記念碑海に向き立つ(三浦三崎)
この朝の目覺め清しも霧ながら白き芙蓉の花咲きにけり

島田米子

草とれる僧一人居てしばらくを墓相につきて立話しせり
卒業の試験終りしか肩くみて亡き子の友等通り行きけり

嶋田美佐緒

すみ透る水面にこぼせし種粃は土につくころほどよく坐りぬ
家ごとにこぶし花咲くこの村は鑛泉宿べど一つがほこりなるらし

嶋田榮一

恩師に揮毫を願ひける時

菽白き庭面をむきて師の前に大き硯に墨する我は

衰弱甚しき病床の父に別れ陸奥の國へ赴任す 一首

しみじみと別れて行かな別れなば再びあはむ父ならなくに

皿に割る卵の黄味の凍りゐて寒さきびしき大寒に入れり

繻帯を顔一面に巻きてくる子の目は吾を見て笑ひたり

島津耕三

そこばくの物を惜しみて居る吾は老父おいちちの性さがに似てゐるらむか

さむぎむと嵐吹きしく家のめぐり時にはげしく物さやる音

夜の雨にしとどに濡れし梅の幹今日の一日は乾かざらむか

島野三秋

夢殿に永き日くれんとす夢のごと斑鳩いかるがの空はこがね色なり(法隆寺)

藪の路ゆけどゆけどふかく今年竹のみな**の**びたちてあかるき日ざし

島峯月歩

日のぬくみ未だのこれる夕ぐれの丘のなだりの草にいこへり

島村空花

くろがねは赤きがうちに鍛つべかりしと悔ゆる思ひ出

島村須賀子

白川のたぎちの音のひびくなるこの山峽に盛りのさくら(阿蘇月下)

島本源太郎

昭和六年秋熊本地方陸軍大演習を御統監遊ばされし天皇陛下には水俣町日本窒素肥料會社工場に御成り遊ばさる

あきつ神すめらみことのひたつちにあよませ給ふかしこきろかも

滿洲國軍靖安遊撃隊討伐隊長森秀樹少將昭和七年十二月十六日戦死す

槍きずにわわけし服にも血にそみし煙草の殻にも君がしぬばゆ(遺品)

君を刺しし槍かもこれは柄につけし眞紅の房もいきどほろしき(所謂紅槍也)

島元義輝

をさなきが嗜好この頃かはりきて木屑竹片を部屋に持ち込む
印刷所に原稿をわたしかへりゆく夜の露店（よる しろでん）に砥石（とぎし）を買ひぬ（編輯を終へて）
桃のつぼみ紅きをみれば日頃わが心けはしくなりて過しき

男子猩紅熱を病みて入院す 一首

病室をきめて日昏の街にいで心せかるるゆまりをしたり
線路に沿ひつつかへる日の昏をながながと貨物列車がゆきぬ
九十何度の暑熱に日ごときほひしが雨過ぎてとみに疲れいで來ぬ

關東大震災十周年當日 一首

燒原に人のむくろをおどろかず見て過ぎし日はきのふのごとし
鎌を揮つて少年の肝をとりし記事煮えくりかへる思ひにし讀む

滿洲事變史を校正しつつ

第一線によく戦ひし將士らは讀みゆくにおほく戦死したりぬ

神宮哲三郎

秋草の根にひたごもる酸漿酸漿の色づきそめて妹をこそ思へ

かなしかる妹が乳房のほほづきの丹丹づらふ色にいでにけるかも

乳房なす酸漿の實のほのかなる色にいづれば愛愛らし吾妹吾妹

離れつつ戀ふるは苦し妹が國筑紫の山は遠からなくに

まれまれに逢へば嬉しとほとほとに笑み含含ごもる吾妹子吾妹子あはれ

吾妹子吾妹子と手を携へて足裏の地につく知らに二人は行きし

柑橘の花香りくる樹の下に夕かたまけて塵燒きにけり

山峽に水呑みをれば現身の寂しき牛の遠吼きこゆ

谿あひをい行きつかれてつゆの居る朝蔭ぐさに足袋をぬらしつつ

遠方の濱べを見ればこの日ぐれ小さく動くは牛馬ならむ

夕づくると豆^っ酸^っの荒磯になく鴨を獨り聞きつつただに寂しき

芝原と淺篠原の間の川その水の音たうたうときこゆ

戸のすき間漏るる灯に尾を引きてあるくねずみの顔みえにけり

神保 聰 吉

雪きえて乾きはじめし土の上を歩幅大きく吾は歩めり

神保 冷 平

咲きほけしなづなの花をとりもちて佇みてゐし吾^お子^こし思ほゆ

二日たちて未だ消えざる雪の道ゴム長靴の足にこたふる

新海 五 郎

日戻りし家かげの道しらじらと落ちくる水の瀬を立ててゆく

淡路より鳴門へわたる船みれば流るる如し潮流しほにかかりて（鳴門觀潮）

新開 政勝

芍薬に肥料やる人の聲はすれ春の日向に視力及ばず（失明）

新谷 三千子

久々に旅ゆ歸ればしたしさよ縁側にまで散れる笹の葉

夕づけばさ庭に散れる笹の葉をしきりに母は掃きたまふなり

新藤 武一

ときをりは風のすぎゆくさまも見え靜かにゆるる榛の木の花

夕風になびく茅萱の葉のうれにゆられつつなくかねたたき蟲

新 免 忠

ただひとつ白芥子の花咲きたるを籠りまもりてわれ一日へめ

白芥子の花びらはいやしづまりて光がなかに照ることもなし
しづかなる炎のごとくありたりし泡盛あわもり升しよつな實となりにけり

進藤喜與子

築地つくじ河岸がし小雨にぬるる夏草はつぼみこまかき姫紫苑の花

勢ひよくかけて行きたる子供らは草にかくれてこゑのみきこゆ
鐵橋を通る時見し秋の川の瞳めに消えがたし白き川波

毒けし賣は角をまがりて聲とほし涼しき風の吹きすぎにつつ

背戸のべの漬菜の桶はかわきたりゆるむときなき寒さいたりぬ

進藤孝三

眼に俊敏あし雙脚しに豪快若き腕に優美をみせて若人とぶも

その臺の眞下にありて音にきくスキージャンプは何にたとへむ

進 藤 水 鶴

時折りに壁蹴る馬を叱りつつ櫓火にこもるひと日の永き
鍬の柄を水に浸して畑を打つ吾のしぐさも馴れて安けし

進 藤 千 鶴

塀の上をもつれてのぼる白き蝶やがて消え入る空のくもりに
ばらの鉢庭におろせば花に葉にこの夕風を感じてゐるも

岩ばなの木ぬれをわたる風の音おつる松葉は日に光りつつ

進 藤 秀 子

わがなやみ取り去るごとく一心に庭の雑草あぢく引きすてにけり

進 藤 惠 美 子

親牛の方に向きつつ繋がれし子牛なくかも幼き聲に

病みて明石に身を養ひゐたる頃

一ときを心の底ゆ笑ひたり幾月ぶりにかく笑ひけむ

病床びやうしやうにひたすらにわがものいふ時をかしげに人は笑ふものかも

ときのまを風吹きやみつ日に向ける松の細葉の光静かなり

病みこやり久しきからだ起しみつ笑ふともなく聲たてにけり

濱松のおのおのもの幹のくねりまさやかに見ゆこの蒼空に

雨降りて海の上へ白し一つ行く大き帆ぶねは灯をともしたり

吹き強き風に吹かれてときのままに蒼空となるけふの空かも

この朝を外とに出で來れば家並いぢまの向ふに澄みて蒼き空かも

故里に歸らむ我と思ひつつめの前の疊ひろしとみつも

飯たぶる疊の上に小窓よりあをき月かげさし入りにけり

むかひつつ打てばひびかふ心もち言にいでしてうれしといへり

病を養はむと精常園に入る 三首

何ならむあまた種もつ草の蔓うれたる種はこぼれむとする

ひとつ事遂げむと思ふわが心思ひ凝りつつ嘆くに似たり

たまたまに町を歩めば話し聲うらなつかしく後方よりくる

庭の木の背向に見ゆる冬の空けふのひかりの照りみちにけり

わがおもて花の方にと向きしときフリジャの花香にたちにけり

雲あらぬけふのひかりの漲りて蒼海原のかがよひにけり(舞子公園)

澄み渡る空の下びを行きしかば爪先白くかがやきにけり(蘆屋海岸)

死にましし君がおもかけ胸にもちうから打寄りこよひ飯たぶる
旅にいます父を思ひてあり經るにさつきの空の蒼き日つづく
西の空いまだくれなる保ちつつ浪ひとつらに白く碎くる

甚野敏夫

樺太惠須取は養狐事業盛んなり

朝な朝な通るこの道けだもののにほひも吾れにややなれむとす

霜島榮

時折は青き松葉をうづ高く積みて下りゆく船もあるなり(大同江)

再びを訪ねゆく日はあらざらむ夕歸り來て埃をはらふ(事にふれて)

末葉こぼのみ採り残されし桑畠の直枝すげ動かずよき月夜なり

下御領義盛

草わけて登るみ山の霧がくれ佛法僧の鳴くはしづけし(霧島山)

親家鴨おやがもにつづく子家鴨のいとけなさこころにしみて視てゐたりけり
聞き捨てて日頃はありけりをさな子の遊びなかまの來て呼ぶこゑを

下
瀬 謙

工場雜詠

鋼爐はがねろの火ばかりあかく見えをりて一日つとめし職場暮れゆく

月光はふかく斜に射し入れり職場かたづけし打水のうへ(夜勤)

下 田 一 清

母病みて刈りおくれたる小田の稻夕おそくまで妻とゐて刈る

稻刈を終へて歸れば五位鷺は月明き空を啼きつつぞとぶ

下 田 貞 雄

祖母おばあの病びょうのねむりいたいたし九月の庭のこほろぎのこゑ

入りくめる兄の結婚のいきさつを夜半すぎの炬燵かまどに姉と語らふ

下 平 依 知 一

朝疾あさきガソリン・カーに嬌こゝろと乗り吾家わがやちひさく見て過ぎにけり

嬌を率て故郷にあそぶ

嬌と乗る索道函の窓外は眼にやはらかし杉の濃みどり

わが乗れる索道函の揺れゆくが杉山すぎやまの上うへにかげをおとしつ

瀬戸市に遊びてそのみちすがら

白けたる陶土のやまの幾尾根を越え來し峽きりに檜葉ひのじの匂ひす

下 平 晴 實

みんなみの空を流れてゆく雲は赤石嶽を越えゆきにける

山につね働く少女の前髪は赤くほつれて亂れ居にける

國境の兵火の中に務め來し從弟のまなこするどくなりし(滿洲守備)
吾が襦衣しゅいつと妻の襦袢が物干に入れ忘れられ雨にうたるる

下 條 寛 一

寄席仲繼のラヂオは人を笑はせ居れど電燈下げて履歷書書きつぐ
書き了へて乏しき履歷讀みかへす夜更けを何時か雨となり居り

下 斗 米 光 子

淋しさのきはまる時は青石の硯の肌をなでつつぞぬる

この道や吾がたましひのよりどころたえばたゆともいゆきはてなむ
さやさやと朝風わたるみづ若葉さざなみたちて光かふりこぼす
あるとなき風にこぼるる一ひらの光つめたし谷のやまぶき

紅のしべもこまかき葉ざくらに枝うつりする雀子のこゑ

杉むらの梢はなるるうす雲の静けさにゐるこの夕かも

みなぎらふ朝の光につゆあけの階上岳はじかみは近くそびゆる

水かともまがふ光の秋の夜の月より白き空の晴なり

般若心經よめとのたまふ人の眼は深くかすかに濡れていませり

下長根 時子

子の身丈けわれをしのごにこの母や愚かしくゐてものを思へり

下野 精三

山鳥の晝ふかく啼く路にして春蘭掘ると心樂しも

下林 喜市郎

あらはなる休止火口こそ寂しけれ硫黄採取の人うごきゐて(阿蘇)

山水をたたへし桶に餅をもる笹の葉浮けてあるはすがしき(高湯温泉)

下村海南

石狩原野

見はるかす蝦夷の曠野(わづらの)はひろびろしやまと鳥根に山を見ざる國あり

蔦温泉

山の秋の水はさやけし橡(くわ)の實のみな底ふかく沈めるが見ゆ

佐渡が島へ船上

舳先切りて右にとびたる飛魚の左にそれてまだ落ちぬかも

越後へ飛行機上

たたなはる白雲わけて信濃なる淺間の嶽とすれすれに飛ぶ

下總手賀沼

ただ一つうなぎ釣る舟見えぬしがいつしかそれも見えずなりにけり

比叡山

四明嶽にのぼりて見れば風をつよみあわただしもよ白き雲黒き雲

阪神電車

松並樹にそひて一すぢ眞白くぞ水なき川のくれ残りたる

六甲山麓苦樂園海南莊吟

天地の廣きが中に踏む足のはじめて輕し我が土を得て

眼さむれば松の下草を刈る鎌の音さやに聞ゆ日和なるらし

吾子^{みこ}はしり仔犬^{こいぬ}また走り路のべの山萩の花はゆれて散りけり

隱岐西郷港

汽笛の音島一ぱいにこだまして隱岐通ひの船錨おろしたり

頭を下げつき上げつき上げましぐらにつきすすむ牛の次ぎ脚の早さ
一步さがりまた二歩さがりずるとさがるやがても遁げ行く負け牛

土佐室戸崎

わだつみはとどろき暮れて室戸崎燈臺の火のただ一つのこる

琉球

田の畦も丘のなぞへも岩の上も野も山も谷も蘇鐵蘇鐵蘇鐵

臺灣臺中濁水溪

張氏に嫁ぐ李氏の女のあかきけう橋徒歩かちわたり行くも濁水だくすゐの溪を

臺灣最南端鷺鸞鼻

日の本のみんなみのはしにわが立ちてふりさけ見れば黒潮をどる

華府郊外ヴァーノン丘 (華盛頓終焉の地)

戈とりて立ちにしところ戈ををさめねむれるところ秋の水長し

ミラノをあとにローマに入る

朝もやの晴れゆくひまにドーム見えて鐘の音きこゆローマはちかし

石見國汽車の中に

汽車の中に一人し居れば打絶えて久しき我に我は會ひにけり

程ヶ谷ゴルフリンクス

たまたまに打ちたる球の高く飛べば空仰ぎたるに雲雀なくきこゆ
渾身の力をこめて打ちし球二三間ころび止まりけるかも

大正十年臺灣總督府民政長官を辭し野の人となる

此あした天地の中に我ひとり立ちし姿をわれと吾見たり

あまりにもかはりいちじるき今の世にたまたまめぐりあひて六十年をへたり
我と我が頭に腕に手に足にこの年月の御禮を申す
生きむとする心やうやく衰へ來てなりゆくままになれよとも思ふ
天地の中に立ちたる我すがた數ならねども日は光らしけり

時事偶感

いにし人を思ふは我の老いたためか今の世に人のまづしきがためか
滿洲の寒さ日本人に堪へ得ぬかそのはるか北のシベリアに町あり

下村 貴美子

ここよりは名草の山の櫻花眞向ひに見え晝靜かなり
さりげなく別れを告げて歸りたり語りあひたき思ひつのるに

下村 湖人

まれまれに木蓮の花こぼれつつあかつきの雲照りそめにけり
枯草生ただに廣きに一羽來て歩む鴉は大きかりけり

鷺のむれの夜聲しづもり明き月河原はろけく照りしみにけり

つつしみを知らぬ男ら墓石をかけ聲しつつまろばし行くも(母の墓改葬)

下村 照路

妻亡き後

朝を夜を妻がまほ瞻りし大鏡澄みきはまれる虚しさにいまは

山は霞みたなびく雲の底白さひと群の鷺のひるがへりたる

妻あらぬ朝餉の膳や箸を持ちてあこ吾子が見たりとふ夢問ひ訊す

ふるさとの停車場前の百日紅山河ここに照りひそみたる

下山練

阿蘇谷ゆ流るる水のこの日頃いたく濁れり山荒るらんか

日毎我が床に繰りかへす癒ゆる日の空想の型も定まりて來ぬ

じやう・いばら

あかしやの花しろく咲く夕ちまた夏きにけりとおもひつつ行く
山茶花はゆふべかそけく咲きゐたりひと想ふほどの八日月出づ

城望東

陽の落ちて間なきさ庭のうすあかりくちなしの花風に揺れつつ

城市紫影

漢江に近代的鐵橋成り舊鐵橋の解體作業始まる

鐵橋の上へのぼりて鋏をぬく人寒げなり夕日の中に

城市 秀子

心すべきことこまごまと宣らしつつしつけの糸をとり給ふ母(結婚前)

城島 正代

思ふことひとつさへならず歸り來て故里の山の春ふかきに向ふ

阿蘇も見えず三角みすみもいづち山の上はただはろばろに木枯の音(普賢嶽)

城山 達朗

沖繩某島海濱に療養所に行けぬ癩者たち集ひ住めり一首

病家より二町程來しアダンの蔭に郵便受はおかれてありぬ

ふるさとの人言繁し去りゆけば去りゆきて後言止むものか

あさにけに野原に出でて刈る草のみじかさをいふ冬は來にけり

昌子 明

棺の中にうづくまりある亡父と思へばになひつつひしと身を寄せにけり

ちちのみの父を埋めたるふるさとの昨日の今日は雪となりたり

正分蒼生二

おもかげは秘めて一生を生きむとふひたごころさへやがて和ぐべし

庄司正史

秋すでにかかる幽けき一日なり柱時計に来てゐるは蜂

村に貧農の母娘あり、さる病を得て共に村山全生病院に送らるる事となりしにこの地を離るる事を厭ひて中々に肯んぜず

己が蒔きし青き麥の芽はつはつに冬日に光れり忘れめやも(母を)

再びは住む日はあらぬこの庭や枇杷の喬木(たかき)のともしき花群(母娘を)

庄司勇之助

向つ山に三重の塔はひかるなり孤雲關にて朝の山みる(奥山方廣寺)

庄 武 春 鳥

小松島しら帆かすみてこの浦をくだら雀のいむれてわたる(徳島に在りし頃)
夕ぞらにうかべる富士の嶺こえてうき雲かろく西へはしるも

庄 野 光 子

ゆく秋のさ庭に榎(か)の實を拾ひふたり食(は)みたる日さへ思ほゆ(金田千鶴氏を懐ふ)
何か待つ心にをれば夕空に雲のながれのただに早しも
ひとりぬに馴ると言へど熱つづく夕べはしきりに夫(つま)の待たるる

上 代 絲 子

美しき處女(まとも)ならねど我が命あらん限りは太陽を戀ふ
飛ぶ螢源氏の君をみちびける小君のやうにあはれなるかな
この夜ごろ天の河より汲みて來し水と思ひて米ひとりどぐ

黄なる繭藁に光れり日の種を神の手により集めたるごと
美しくものを思ひて死ななため賜りし身と月の夜に知る

わが家に牛の子産る知るものは十六日の明星ばかり

われすらも仙女の靴を穿く如く山に今踏む曙の雪

神に焚く火ともおぼゆれ明け方の暗き爐のもと一人坐れば

わが心盲のままにみ柩の大人おとなに逢はんと都へのぼる(故與謝野寛先生)

日の暮れぬ母に待たるるこちして歸りて見れば工場の門

我れひとり涙を屠蘇の如く飲む年の初めのみ光のもと

薔薇の葉を笛に吹けども鳴らざれば我が世俄かにあぢきなきかな

雲雀らは青き原より我が歌は涙より立ち大空へ入る

望月の光る世界へゆるやかに入る矢の如し白き我が船

天つ日の私房の如く光より先に人をばゆるさざる閨

いたましく血に塗られたる手を合せ互に拜む太陽とわれ

釋 迢 空

『驛 旅』

陸中石鳥屋より岩泉へ出でむとす

山鳥の道に出で居て おどろかぬところを過ぎて、なほぞかそけき
年暮るる山のそよぎの ひそかなる幾ところを過ぎて、我は來にしか

數多い馬塚のうちに、ま新しい馬頭觀音の石塔婆のまじつて
居るのはあはれである。

人も 馬も 道ゆき疲れ死ににけり。 旅寝かさなるほどの 幽カウけさ

山岸に、晝を 地蟲の鳴き満ちて、この静けさに 身はつかれたり

最上川モガミぞひに ひたすらくだり來て、羽黒の空の夕焼けも 見つ

旅どころもろくなり來ぬ。 志摩のはて 安乘アチの崎に、燈トの明り見ゆ

『相聞』

池寺聯作のうち 三首 (通稱阿彌陀池、和光尼寺と謔ふ。大阪西區
堀江にあり、善光寺如來出現の地と傳ふ)

難波寺 阿彌陀ヶ池に棲る龜も、日なた戀しく 水を出でつつ

いきのをに思ひ潜めてありしかば、逢ふこともなく 人はなりつも

かもかくも すべある時は過ぎにけり。すべなき時に、歎きけるかも

あかしやの垂り花見れば、昔なる なげきの人の 思はれにけり

『雜歌』

宮 廷

ほのかにも 聞え來るかも。大宮の内の起き臥し ただしくいます

山行けば、なほかくの如き人を見る。

ほがらなる心の人にあひにけり。うやうやしきの 息をつきたり

木地屋の家

山々をわたりて、人は老いにけり。山の寂しさを 我に聞かせつ

山びとは 轆轤ひきつつあやしまず。わがつく息の 大きと息を
木偶キコ兒コの目鼻を見れば、けうとさよ。すべなき時に わが笑ひたり

〔能登の七尾の冬は住み憂き〕など詞におびかれて、

にぎはしき港なりけり。うち出でて見る島々も 家むら多し
苦しみて 竟に遂げざらむ。つくづくに 世の和平ニキヘの 戀コホしかりけり

『挽 歌』

三矢先生病篤きほど、事ありて、箱根堂ヶ島にこもれり。

山川ヤマガハの激タガちを見れば、はろばろに 満ちわかれ行く 音のかそけさ

〔巖崩えのうち (文學士坪田滿壽穂、昭和五年四月十七日、和州江ノ高岩屋の番所にて命終る)〕

はかなさは 巖イハの下シタに人死にて しらせある日も、客みちて居り

昭和九年歳暮、中村雁治郎病篤し。

むらむらと見えて はためく顔見世の幟のほどを 過ぎて來にけり

若き人あり。姿優にその聲よかりき。倏にして世を終ふ。相
かかはることなかりき。

ほのほのと 朝づたひ來る人の聲 あはれのことや。人の死にける
思へどもなほ あはれなり。死にゆけば、よき心すら 残らざりけり』
雪荒れて 山に命をおとしたる許多コトの上を思ふ。 陸月に

下婢三上愛子の死。門中瑣事のうち 二首

ありありて 着欲キしき帶も買はざりし かかる悔ウレみも、今は言ひけり
諒闇に 歳窮オシれり。世の人のうへも、しづかに 我は思はむ

古泉千樞に訣れて旅に出づ。其訃を聞ける日は、土佐國室戸崎
にあり。

まれまれに 我をおひこす順禮の 登音ノトにあらし。遠くなりつつ
なき人の 今日、七日になりぬらむ。 遇ふ人も あふ人も、みな旅びと

三矢先生歿し給ひて、十三年に當る年、

師は 今はずかにかにいます。 荒々と 我を叱りし聲も 聞えず

『季 節』

春深き信濃の寺に おもへども、かそけかりけり。 父母のうへ

さんか者のせぶりを過ぐ。

春の日は にはかに寒し。 乾きたる地びたに竝ぶ 乞食コツツキの食具ゴキ

村山の雪消ゲおくれし芝原の 櫻は 草の花の如く咲く

柴山の春の芽ぶきの ととのはぬ山に向へば、 風の つめたさ

春山の芽ぶきととのふ 谷の村。 晝鳴く鳥の聲の ものうき

山寒き起き臥し 馴れて聴きにけり。 土用時雨の たまさかに過ぐ

野方村哲學堂に住める頃。

刈りしほの麥の穂明り昏クれぬれど、 いよよさやけく 蛙カヘルコ子は鳴く

合ホ歡クの葉ハの深コき眠ネりは見ミえねども、現カウソク身ミ愛ヲしきその香カ たち來キも
村山ムラヤマの 草クサのいいきれをのぼり來キて、めくめくらを神カミに齋イハふ 祠イハヒあり
この夏ナツも、我ワ瘦ウせにけり、山ヤマ高タカみ 膚カウ燥サきつつ 日ヒごろ住スむなり
葛クワの花ハナ 踏フミみしだかれて、色イロあたらし。この山道ヤマミチを行イきし人ヒトあり

淺間山々裏

鳥トリの聲コエまれになり行イく山ヤマなかに 來キ向ムクふ秋アキは ひそけかりけり

山ヤマに出イで入イるもの、今イマは鳥兔トリウのみ。猿サルだに稀カウになり行イく

山人サンジンの 言コトひ行イくことのかそけさよ。きその夜ヨ、鹿カの 峰ミネを涉シりし

東京詠物集より 一首

穗薄ホトのみみづく 呆カけて居イたりけり。日ヒ頃ケけはしく 我ワが居イりにけり

山びとの 歳木樵りつむ音ならし。夕日となれる庭に かそけき

奥州青嶺に逗留して 五首

歳深き山の かそけさ。人をりて まれにも言ふ 聲聞えつつ
年暮れて 山あたたかし。をちここに、山 櫻ばな 白く ゆれつつ
あけ近く 冴えしづまれる月の空。むなしき山に 木枯 つたふ
かさなりて 四方の枯山眠りたり。遠山嵐 來る音の する
目の下に たたなはる山みな低し。天つさ夜風 響きつつ 過ぐ

三河 奥設樂

山峽の残雪の道を 踏み來つる あゆみ久しと思ふ しづけさ
髣髴顯つ。速吸の門の波の色。歳の夜をすわる疊のうへに

釋 堯 空

靄こもる菜の花月夜ほのぼのと人ゆき過ぎて靜かなりけり

釋 光 澄

ひとつらに野燒きの跡のくろぐろと月のしたびにひそまれる山
つながれし牛の瞳のおとなしき野茨の花が眼にうつりゐる

釋 蒼 玄

旅順白玉山にて

俯瞰する狭き港口に閉塞船沈没の跡を示す浮標あり(白玉山にて)

釋 放 空

空昏く傾くみれば群立てる黒松の上にあられ降るなり(屋島)

寒早のつづく衢は埃立ち電車の軌り神經にこたふ

枯山の芽立ちのしるき斜面には日のあたる見ゆ山ふかく來て

花季はなときの空ひたぐもるさびしさよ葛城の山金剛の山(大和路)

赤後寺 壽光

湖より吹きおぼる風に山松の音さえざえし日は暮れむとす(彦根城山)

白石 眞吾

三界唯心心外實に別法なしとのらしし聖ひじりの言ことのよろしさ

北九州防空演習

雨ぎらふ草山の上の高射砲今し砲口をめぐらしにけり

三條の照空燈は高行ける飛行機の一い點に今し集りぬ

白石 崇

ひでり雨ひとときしげく降りかかる堆肥の上かんぼちひの南瓜の花

白石 初枝

病癒えて夫と相會ふこの朝は面はゆきままでに心はずめり

霜枯れし土手のなぞへに雨ふればわづかに萌えし草の色みゆ

白石浪男

小夜更けを井戸水汲める音やみぬ靜かになりて遠きいかづち

昨夜の雨やみにけらしも庭先の冬木の枝の黒ぐろと見ゆ

白石八重子

頬の上のまつげの影のひそけさや人の凝らせる思ひにふるる

主家の子を負ひしオモニはいとけなき己しが子歩ます目に守りつつオモニは朝
鮮既婚婦人

白石悠紀保

阿蘇山

大阿蘇の火口の壁の斷層に秋はあはれなり虎杖いたどりの花

朝の霧うごくときみえねりんだうのふふみてあまる露おとすなり

天草島

果樹園の剪定終へて冬待つや裾野をとほく陽をはじく村

岩壁にはじけし苔の胞子群五月の風に漲りてゐむ

軍需工場視察

截斷機人の心をおしかぶせづぶりづぶりと鐵板を截る

白岩艶子

上海にありける頃

この國の友とかたるに友も我れも事ありぬべきうれひを言はず

里の門にいくさ遁れし人のむれ賣^ふ笛^え兒^りよびて笛かひてふく

民國十九年やなぎはもえて陳其美の像たつといふ春の西湖に

來る人も來る人もいくさのたより梅蘭芳オウランフの天女散花はかたらざりけり

白 岩 隆

菩提寺の古りし山門入るときにふりかへり見しとほき夕焼

白 川 晃

隣間に柿むく音のしみじみとうら親しもよこの夜の冷えに

朝光あさかげの射し來る窓に鉢よせて卵割り居り菓子工われは

大寒の朝光あさかげすがし籠の中の卵おのおの影たもちつつ

菓子つくり吾の希ひは一きれのとび切にうまき菓子つくること

白 川 淳

湯崎三段壁にて

圓かななる水平線の視野にありて黒潮帯は起伏するらし

白川 照雄

三尺程へだたる隣の病棟に眼見えぬ我は渡りかねつる

白川 彌太郎

泣く妻をうらなげきつつ再びはそむかじと思ふ親にそむきぬ

相見れば心なげかひ逢はず在ればただに戀ひつつ小夜もわが寢ず

み佛を説ききかせつつ目にたまる涙すべなく吾がこぼしたり

白川 了照

佛かねてしろしめしてといふ條くだりよみゆくほどになみだながれぬ(歎異抄)

わが友のころをこめてよせし布施を味噌買ふしろにひらきけるかも

浮き群れて魚陣ぎよぎえの如く流水の下つ瀬をさしてゆくはさやけき

うつたへに心に沁みぬなき父の書き寫さしし還城樂の譜
煤びたる自在に吊るす吊るし柿うまきころあひとわれは食ふかも
待ちがてに母が埋めておきませし砂栗を拾ふあたたかき庭に

白 木 豊

子規居士埋髮塔 一首

接骨木の秀枝の花は過ぎにつつ花粉をこぼす撒水の上に
夜おそく月のぼりたる川原には鳴く行々子むかう岸に居り

閑谷聖廟釋菜

おほけなく古の禮を營むと唐戸の外にわれら侍らふ
砂利清き唐戸の外に侍らへば掌儀の陞る杵の音聞こゆ

中村憲吉先生葬儀 一首

峽こぞり君が葬儀はふりに従へり田に働ける人を今日は見ず

夜風さへ立たで虚しき時過ぎて西の障子に月かたぶきぬ(山居)

出でて去いなば戀ほしからめと防火塙うの嫩草を踏む昨日もけふも(閑谷を出づ)

驚きて書庫に法案を讀み返し劍つるぎの福音といふ文字もんじあり(事變)

月落ちて暗き野の面に何を見む慰まぬまま窓は閉しぬ

未明みだきより揚雲雀鳴くこゑはして二階に吾は衾被かぶきぬ

今日に明日に朱黄しゆわうの筆は續くべしもろもろの事忘れたるがに

白 木 成 邦

キリシタン殉教の地と傳へたるこれの河原に夏草茂れる

白 倉 三 郎

御召艦比叡かしこし双眼鏡手にとりて見れば天皇旗見ゆ(大觀艦式)

仕事場に入ればかしこしうつぶせにまろびて在す持國天菩薩(唐招提寺)

白 倉 牧 露

スペインの美しき女ら忽ちに蟲のたぐひの如くに撃たれむ(映畫)

立石面老江鎮

魚油の匂ふ老江鎮に吾も來て魚買ふ群衆のたかぶりにゐる
酒色セイヂュウガ家に燈火あかりがともる頃ほひは赤ネクタイのひとも通れり

安州地方は稀有の大旱魃

鉦太鼓しやにむにたたき山上の雨乞ひ踊り夜半に及べり

白 倉 八 重

身延山に詣づ 二首

年まねき願ひ足れりと母の言ふ身延の山に心をしむも

水垂るる豆腐の箱を背負ひ居る少女子と暑き山道を行く

羊齒しだの葉のうら枯れはてて今朝の朝や寂けしとおもふみ冬づく日の
この夕べ蠅はきけば幾日をあらがひたりし心おとろふ

白 崎 秀 雄

亡き父の常着給ひし古ジャケツ我の下着となりて残れる

白 澤 敏 江

全生學園にて

社よ會に在れば家事に育兒に迫はるるを療院に吾が笑らぎ暮すも
何時々と癒ゆる日に希望かけて來し吾に離縁の便り届きぬ

重病室より健康寮に歸る

歸り來る吾を見受けし教へ子は聲はずませつ馳せてくるかも

白 澤 昇

前山の霧吹きはれて大樹の木群明るし山鶉の聲

ほとばしり水の落ち込む瀧壺に浮き沈みして木の葉おびただし
瀧しぶきかかりて濡るる岩壁に木洩れ日うすくさして寒けし

税務吏が獲ものの如く眼を向くる電話は今の間に賣り拂はむか

白 敷 武 夫

掃除するとしばらく開けし窓ゆ射す太陽の光に手を差し出しぬ(未決監にて)

石臼のきしむ音きけば雨の日は屑米ゆると挽きぬし亡父ちちの憶ほゆ(失職中)

白 鈴 二 朗

窓のべにきのふもけふも小雨ふり葵の花の朱あけうつろひぬ

弟が歸りたるのちの胸うづく如き思ひに机に坐しぬ

白 谷 虎 雄

老父母とランプのもとに話す夜の河鹿の聲は溪にまぎれず
せまり合ふ山々青き玖摩川の早瀬を下るいかだ舟あはれ

白 土 よ し 急

ふと涌きしひとり笑まひはゆきずりの見知らぬ人を笑ましめにけり

白 鳥 耀

磯岬になほ残りたる波明りはつかに遠くもり上る見ゆ

農村不況の爲に冬季間道路河川の工を起し農民を救ふ。
補習學校の生徒その工事に働き、夜學校に學ぶ一首

みねむれる生徒のあたまみつめつつ救農工事の荒きを思ふ

暮れ落ちし山々さみし淺黄空春とほ野火の炎立つ見ゆ

落つる陽に茅萱の色の深まりて寂かにあかき光をとどむ

月の面のうるむとみればひたひたと窓の硝子に霧凍りつつ（大寒の夜宿直）
秋はるる湖うみのかがみにとりよろふ山の紅葉は色を深むる（野尻湖）
から松の下道あかりひそかなる陽ざしにまなくちる糠葉なり（飯綱山麓）
野をゆけば雪の底ひに水音のもやを震はすあけぼのの空

白 鳥 游

阿 蘇

張り終へし天幕にさせる夕明り日没いらんとして草原のいろ（波野高原）
草山のひだひだややに黝みつつ曠野のはてに夕日うごかず
山なみのひだのかげりの深みつつはろかに音す夕のかみなり
撫子の薄紅匂ふ草山に湧きつつ白き霧の冷たさ

久住高原

久住の山くろぐろ見えて大いなり星夜の空のここにして低き

たにみづの音絶えずして鶴鴿のひとり遊びはさみしく思ほゆ(澤水原生林)

白鳥 きみ子

同じ木に飛び來りまた飛び去りて遠くへゆかぬ二羽の鶉かも

白鳥 大治

ふるさとは赭土山の切り通し小松が枝に我手ふれゆく

青澄める天鹽の川を腹すりてひそかに鮭の遡りつぐらし(鮭鱒遡上)

精うけて命こもれるうす紅き卵の美しさ陽にかざしみる

荒菰に包みて晒す寒鮭の厨につるす影ぞ冬めく

白鳥 晴康

たまさかに歸りし父ぞ子供等よ今日一日我と居りて遊ばむ

白鳥義千代

こえてゆく伊那の田切の奥嶺はむらさきふかく空にさえつつ

月一つ空を青々とさえしめて秀つ嶺の雪は靄立ちにけり

そちこちに水車まはして山水のゆきどころあり谷間の村

おのおのおもむきもてる山の秀に初しら雪のおきわたしたり

法隆寺に參詣して

大講堂本尊薬師の眉間より一千年の光うちくる

昭和九年四月三日宮城二重橋前に今上天皇陛下全國小學校教員に閲を賜ふ

草莽の孤の臣と思ふだにかしこきかなや涙あふるる

同年十一月十七日高崎市乗附ヶ原練兵場に於て同地方中等學校青年訓練所生徒男女青年團に親しく閲を賜ふ。早朝野營の幕舎を起き出でて

天皇旗ひるがへりをり信濃なる淺間ヶ岳に光るしら雪

獨座點茶

茶を點^たてて獨り坐りをり咲きたりてさくらの花の寂かなるかな
もちこみし水濡釜につきてある二ひらばかりさくらはなびら

天龍川を下りて秋葉に

山櫓の火はくらぐらと燃えをりて二瀬の音のわかれきこゆる

野尻湖

白帆一つ山かげに入りてかくろへば光をとどむものもなき湖^{うみ}

北海道大沼池

ひそまりて波一つなほ一碧の光をすゑて山聳えたり

紀州の旅

海山のせまりより合ひあらけき光りをたたむ新宮の町

吹きかへし一山若葉どよめくは瀧のひかりのあらしうつなり(那智観音)

戸隠山

立ちのまま枯るる老木を思ふにも奥ある山はおのづからなり

白仁秋津

送り來れる友と別る

加加鶴の坂に立ちたる電柱の白きもわびし別れ來ぬれば

唐津

遠くより引かれて海に入るとく松の續きて青き磯かな
明け方の海のみどりに吹かれんと松浦まつらの川の長橋をゆく
入海の浪おとろへて晝の月靜かに映る葦の葉がくれ

四つ山に登る

松に倚り遠く思へば諫早の入江も戀し浪のひかりも

とみえの日記 一首

自らを紅つけし蛾とののしりて筆を止めたり涙出でけん
木がくれて聲なき沼の水あかり臘の灯のごとさす月夜かな
朝の日に木肌白くも見えすけば山の寒しと鳴くみそさざい

宮崎に遊び鵜戸神社にまわり西都が原へ

ひと木だに尊からざるものなき神の都の宮崎に來ぬ
何鳥か一の瀬川のみなかみに春の夕をほおほおと鳴く

高千穂に入る

高千穂に蒿雀わたりて秋早く穂觸山を越えんとすらん
ひたふるに國稚かりし日のごとく蜻蛉飛ぶなり高原の上

夕日さす坊中驛のあか瓦火を噴く阿蘇はその屋根の上
わびしげに岩もこもりてありぬべし遠見が鼻の草にふる雪
空氣銃手に執る子等の三人が土手に倚りつつ大根を撃つ

多良は書紀にある彼杵美しき山なり 二首

百艘の船もいろいろの帆を張りて彼杵そのきの山の根に並ぶ朝
天草の本渡ほんとに遠くかたぶきて落ちゆく潮の鳴れる海かな
草に坐し脛すねの毛むしる杣の顔見て思ふなり吉林の賊
満洲の旅より歸る子のために川魚を煮て夜を更かし待つ
夜店より古き狸を求めきて煤を拂へば放つ金色

卷柿を賣る店先に青馬の立ちふさがりて春の土搔く

由 布 院

由布岳の胸騒ぎとも云ふやうに審らつまに荒れて山風の鳴る

六甲山の麓岡本の寓居に倉田夫人を尋ねて

岡本の土一升を袂にし歸らん程のなつかしさかな

山陰に遊び宍道湖松江を経て玉造温泉に到り宿る

對岸は暗し夜泊の船の灯になるとなる松江の灯の螢めく

風あるか玉造湯の宵の谷音のとだえて又高く鳴る

白 縫 須 磨 子

灰かにも蜜柑の花の香のにほふ夕べの厨に胡瓜をきざむ

白 根 邦 人

昭和十一年四月神戸市湊川神社講社大祭に参列し蘭陵王と
いへる舞樂を拜觀す

襦うち襦かけの綾目を劃る白房の垂りもよろしく舞たけむとす

雄たけびを踏みて舞ふなり陵王の舞人の影長く引きつつ

笙の音を長く引きつつしづまりて陵王の舞今は畢りぬ

白旗 浩蕩

貧しげのからかさ賣が驛員といさかひてあり發車といふに

わがたつき苦しきままにはつ春のよごといふ日を妻といさかふ

白幡 正吉

仕事終へやうやく暮るる夏の日のほとぼり暑き屋根にいづるも

豊田秀穂博士を悼む

燠あきかきてみ骨ひろへば君穿きし足袋のこはぜもいできてきにけり

白濱 増夫

次々に型を出で来るやはらかき瓦運ぶも春浅き今朝

白 水 廣

舊八月十五夜雲仙嶽に登る

うちわたす山裾遠く野になだれ月の光し押し照りにけり

月よみの光に見れば裾ながく低山端山傾きにけり

白 水 吉 次 郎

朝浪はききのよろしき遠つ世にありけむ音のひびき来るがに

秋づきし雑草の穂の潤び居り眞ひる陽あつき街の空地に

足もとに白く浮き立つ埃あり日の暮れはてし野道行きつつ

ものうくも蒨葎草のくきかたき夕餉にむきてつかれつつ居り

何かものを言へよと言ひつつ老母は白き敷布をのべ給ふかも
をさなくてわれらまさぐり遊びたる父の手のひらをつくづく見るも
寢いりたる父の手見れば筋たちていたく萎しなえて老い給ひけり
ま裸のわれのからだをしげしげと見てゐし父の瞳に逢ひぬ
ひるがほの花咲きみちて蝶とべり寂しき道にひとりたたずむ

自殺者を見る 三首

親と子の三つのむくろの臥よしつつ向き向きあはれ渚の砂に
きぞの夜の父子おやこ三人の足あとか砂地みだれて霜白く降り
渚なみべにいのちは死にて臥よすものむくろの上に陽の射すあはれ
夕日落つるひとときの間の裏畑凍みたる土の寒くかがよふ
この頃の我のこころを慰むるあかるき空を出でて仰ぎつ

夕ぐれのにぶき光のたゆたひて雪炫かがやけり秩父を見れば

三月の末とおもへど山なかに雪降りつみて國原はあり

手の甲のいたく萎しなえて居たまへるあはれ先生を拜み申すも

わがやまひ癒えよとねがひ待ち待ちてありし昔を偲よぶ夜よかも

熱ありてたどきも知らに眠りつる秋の日はやく暮れてゆきけり

小林をばやしをゆけば木草の枯るるらむ匂ひこもりて淡き日ざしや

山茶花にひるすぎながくあたる日の冬の光となりにけるかも

妻が掃きていくらもたたぬに庭の上に落葉の散りてくるを見てをり

枯落葉焚きたる庭は匂ひつつゆふべの空氣はやくしめりぬ

煙草やめて二日目といふこの朝のあぢきなくして庭を見てみつ

枯落葉このごろ散るはすくなきか冬さだまりて庭は寂しも

冬ばれのこの朝空を飛ぶ雁の列を正して行くがあはれさ

あしたより雁はいく群わたりけむ寒く晴れたる葛飾の空

賜はりし咳どめ薬あまくして喉すがすがと寝るがうれしさ

裸形わが鏡にうつりおどろけば蝻螂のごと瘦せはてにけり

眼ざむれば月しづかなる夜ごもりの窓にうつりて木の葉散りけり

さびしさに耐ふる夕や白飯に柚子味噌おきて妻と二人食ふ

吹ききたる風すでにして和かし縁に腰かけひとりし居れば

宵のうちすいちよが鳴きし草叢に雨降りそそぎさ夜ふけにけり

山中の齒朶の葉蔭を滴りて流るる水もわれは見にけり

山中はにほふ朽葉の香に沁みて飽くこともなしひとり歩めり

ひさびさに野邊を歩みて見るものか蘆穂の群むらに照らふ光を

白井善司

大震災後一年鶴見を過ぐ

かなしみにわらべのころこだはらず焼けあとひろし行きて遊べよ

七里ヶ濱一首

空にして鳴るいかづちは遠けれど海のおもてにとどろきにけり
寒さゆるびもよほす雨はふりいでてさ庭の上にうちながれたり
すがしさや朝戸出すれば月の面おもてひかり斂ぢまめて鏡のごとし

伊豆にて三首

冬さゆる荒磯の凍みにたつ波のうしほ碎くる音ぞひびかふ
もの凍るけさの寒さに青なみのしぶきをかぶる岩むらの音

紙のごと干枯れて鳴るは檜の葉か風のふきゆく冬山中に

あたたかき雨あがりたる櫻やま花かわきゆく朝の日の照り

むらさきの桐の花かもたちばなの白き花かもかぜに薫るは

語りつつきぞは寐いりし朝あけに手ばなれをしき妹にもあるかも

秋づきてこよひすがしき月かげは空のふかきにかがやきにけり

水檜のいまだ芽ぐまぬ枝ほそし月のあかるき夜はけぶれる

濱はらにつづく海原なぎしづみ春のひかりのかぎりなきかも

水色の紙をはりたる籠すずし灯を入れ提げてあそぶ童^{わらわべ}

昭和五年五月遠江地方に行幸あり 一首

大君はこのまのあたりゆかせしを夢のごとしといふもかしこし
秋の野にいのち死にける蟲みればおほよそあはれものに縋れり

おとろへし力にすがる蟻螂を裾よりとりてわれはすてつつ

日に向きてわれは歩まむみんなみに水ゆく川の枯堤道(遠江馬込川)

隠女かくしめとみゆる女の住みつきて子をはぐくむは佗びしげに見ゆ(隣家)

谷の空にきこゆるこゑはすがすがし澤をもとめて小鳥啼き寄る(駿河檜峠)

柿の葉は置きたる如くちりてあり錦木もみぢおちしく土に

ふかぶかとうぶ毛は耳にかぶりたり息さへ安しうまれたる子は(田鶴子生る)

春しほをわたりくるかぜふきふけど疾はやくはふかぬ濱の上のおと

やすやすと涕ながれて哭くわれに縋るものありき夜よのゆめには

妻とわが手握たりしかばわれよりも冷えてゐし手はちひさく思ひぬ

ひとときよろこびごともしろがりてゆくがに思ふ心足る日は

波鳴りて岩瀬をこゆる水の上をはしりてしなふわが乗る舟は(天龍川下り)

ながれくる紅葉をみればかぎりなしふかく透れる水より湧けり(す又川)
怒りくるころをわれは押へむと顔をもあげず物をもいはず
財布あけ錢かぞへる妻のさま時のはずみにいたくさびしき
ふか山にわが寂しめば谷々の瀬鳴りのおとはゆりあげにけり(安倍川上流)
散薬をのむと仰むき喉白きをみなはわれにゆるすがごとし

白井庸子

落葉か松まつの林を歩みつつおもひをりそむきて去りし妹の上を
大根の干葉せじの匂ほひを好み給ふ父をおもひて大根買ひぬ

白井英子

風のややになぎたるひとときに谿間しづくの音をこそきけ
日に向きて涙ながせばあなまぶしありがたき心一ぱいなりし

あまづたふ光の雫うつらうつらとゆづり葉の青に燦めけるかも

瑠璃色の空はるばると耀きてあはれ悲しみのよりどころなし

涙湧く眼にかなしをちこちの冬の入江の薄暮の輝き

ダリヤ畑晝深くして堪へがたし雌犬の喉の赤々と見ゆ

砂丘の頂ばかり夕光り子供の臀のあかあかと見ゆ

白 井 孝

水引草はな咲きいでて背戸畑のささげの實みりとぼしくなりぬ

白 井 登 志 晶

野中なるこの病院の窓にして早くも見たる遠山の冬

白 男 川 敬 藏

讀みかへすいとまもあらず分秒を惜しみ書く記事に悔なからめや
校正のよしあしは言はねわが書きし記事を讀みつつ今朝も悔あり
湯の宿の朝をすずしくかなかなの鳴きくづれたるなかに目覺めぬ(霧島梁の
綠温泉)
送電の鐵塔たかく尾根つたふ山のはざまを深く來にけり(球磨峡谷)
ほこり風吹きつけたれば繋ぎ馬まつ毛の長き目をほそめたり

荒崎田圃鶴群見物

渡り來て下りむとするや鶴はまづ輪をゑがき飛ぶ冬田の上に
下りむとし輪に飛ぶ鶴がまづ啼けば田にゐる鶴もただにこたふる
鶴の群次第に歩みうつりつつ遁ぐとはなけれ人ちか寄せず

附屬小學校入學試驗

吾兒が手をひきつつ上るはしど段ひとつふたつと數とらせつつ

案じつつもややにほぐるる思ひあり試験の模様よく語る子に

代田文誌

わがためと母がうゑたる薬ぐさこの春雨に萌えいでにけり

野分はれし朝をうれしみ朝日さす疊の上に足のべてをり

城木正太

歸り來て服ぬぎすつるうしろには臥れる妻の視線あるらし(妻病む)

あわただしき明け暮れは悔いて思はねど寝顔汚るる子をのぞき見ぬ

城之内徹一

蓮池を二分ふたわひにして細ぼそと田舟入り行く水路見ゆるかな(巨椛池)

電燈の下に本讀む妻見れば眼鏡かけそめ老いづきにけり

ゆゆしくも疾風はやちは吹きて降る雪の吾が庭の木に積つることなし

須賀 惠彦

春ふかき十勝國原白樺の疎林のなかにあめ牛遊ぶ

こまごまと凧浪寄する海の上に藻刈の舟は遊べるとし

須賀 歌子

別府の街目に迫りつつドラなりて朝けすがしき灣に船入る

須貝 徳之輔

病を得て伊豆大島に渡る 四首

うつそみの命生きむと椿咲く南の島にいで立つわれは

海遠みはるけき思わがすなり夕日あかあかと照る島に來つ

臥り居ればものみな悲し栗の花のあかるきさへや眼にしみて見ゆ

悲しさや海にきたれば海さへや青きうれひに充ちてかがやく

都なるさわぎを思ふこの夜半に屋根の雪崩はとどろきて落つ（二・三六事件）
迷ひ來て障子にあたる黒き蛾のひたぶるものを怖るごとし

須志田 ふみ江

白杉の櫃におとせば夕明りにぴかぴか光る新米の飯

須々木 草一

河口に盛り上りくる夕汐にエンヂンとめて船歸りくる

須田 伊波穂

田結たえの海夏は上島かみじま下島しもじまの若葉ととのひ影浸すなり（長崎縣北高來郡田結村）

伊吹嶺の雲を憂ひて眠りしが彦根の朝のしづかなる雨（近江の旅）

磯山に鳥呼ぶ笛は續きつつけはひさわだつひよどりの群

裾野風阿蘇の乙女は牛に乗り白き布笠揺られつつ來る（秋の阿蘇山）

梅咲ける家居ひそけき岐れ道障子にむかひ言問ひにけり

火の國の早岐の瀬戸の朝風にわかめを探ると舟たむろせり

氷雨降る夜の佐世保の町はづれわが家を遠く寝ねてをるなり

夜あらしのどよみのあひに轟くは波止場にあがる浪の音なり

須田昌平

鰯寄ると夕べの海に鳴りわたる法螺貝の音の息長にきこゆ

須田利雄

山澤の冬はしづけし水草のとぼしきながらみどりもちつつ

アメリカの芝生の上に母と居し寫眞を見つついねがたくをり

須田禮子

受けつれば手に暖かく流るるもまことに春の涙なるべし

須藤 克三

教員生活二首

火鉢かこみ昇給遅きを言ひ合へどさて術もなし人もまた我も

昇給の不平話の味氣なさむしばのうつろ舌に弄ぶ

連翹の月夜しづけし花びらのおのおのつくるかげのこまかさ

午すぎてはや恃めなき日の靄やひかり返さぬゆづり葉の色

日の荒き野風に遠く富士立ちて新雪の線既に鋭し

語り合ふこと大方は錢金のことにのみして夜も味氣なし

操行丙と通信箋に書き入れて耐へるし尿に我が立ちにけり(宿直)

霧雨のおもひ氣遠き晝となり窓にかぶさるものの葉の色

須藤 紫風

梁うつぱりの古りて太けき上にゐて燕休らへり家ぬちひそけく

この朝の遅き朝餉あきに對むかひ居り庭の光より入り來るつばめ

山肌の草萌いまだ短かくて湯を導ける管くだをかくさず(伊香保温泉)

須藤 鐘 一

夕まけて歸る小路の秋刀魚あきまの香わが食慾のあはれなりけり
朝顔の花は小さく咲きつづくいつしか人に忘れながら

須藤 泰 一 郎

おめおめと命を持ちて足たたず醜みにくのますらを提灯ていとうを書く

うつくしきうなじを見せて吾妹子わがむすめがかがまりて結ぶわれの草履わらじを

秋山の枯草くさのうへに二人すわり惜しき日影の移ろふものか

何時の日か此處にまた來む高山の熊笹くまざさのうへに飯をこぼせり

あしびきの赤城山べに在らましを都にいでてわれ悔いにけり
さみだれの庭の木こ暗くらのふかければ蝶とび立ちてかくろひにけり
北上つ毛越後ざかひに眞壁なす清水峠はいつかしきかも
麥青む田の面おもに汽車の白けむりちぎれて落ちて這ひて消ゆるも
細溪川咲きたわみたる山ぶきのした行く水はせせらぎにけり
はろばろに思ほゆるかも北毛野きたけや越後ざかひに疊まる雪山

赤城山に押し登りしよわき身はとりかへしのつかぬことになりしか
こすもすも倒れ伏せれば丈ひくみ百日草にまじり咲きたり

すこやけくありける時に吾妹子と相ねしことは千々におもほゆ
言ことば靈たまのさちをたのめば病める身も生けらくしるしありと思はむ
病み床に今日もわびしむ風の音いつあたたかくならむ春かも

春雨にみづきし土にふり落つる大きな雪はつもらざりけり

長病みのわが目にまぶしうらうらとひかりあふるる春となりたり

障子あけてまなかひ廣しねながらに櫳の芽ぶきをひと日したしむ

いそがしき蠶飼こがひのひまにたまひけむ玉子のぬかに桑葉まじれる

むきむきに咲きかたむきぬ大輪の三だん咲きの芍薬の花

子供らが栽ゑし草々花咲けり日ねもす庭に向きてこやれる

夕顔が咲きぬといふに眼鏡かけてそのあはあはしき花を見にけり

夕顔はみどり明るき夕かげにあはあはとして花咲きにけり

ところ蔓からめるままにつかみさしぬ今朝もらひたる山百合の花

ぎらぎらと目にしみて痛き夏のひかりおもてを向けて寝むかたぞなき

須藤 得水

よもすがらオハイの落葉屋根を打つかそけき音をききにけるかな(オハイは布哇の樹)

須藤文子

いちめんの白き草の花そよぎゐる夕ぐれの野なりげにもやさしき

須藤正男

金盞に飼へる龜の子は鮭の皮をたくみに食へり人を恐れつつ

須藤倅康

雨晴れて照る日をぬくみ鳴きうつる四十雀多し峽の冬木に

あらし息聞ゆる鼻をわが近く持て來る牛に親しみ湧くも

須永秀彌

今日になれど心ゆくまで教へぬと思ひし日なし一日もなし

鉛筆の芯尖らせて用意よく半ダースほど列べし子もあり(試験場)

御社の繪はがき賣れる店の鶏何時も鳥居にとまりて啼くも
撒き豆を黄な粉となしてなやらひの鉦餅つきて今宵祝へり

巢木健

やうやくに竝木の公孫樹芽ぶきたり中鳥は芝の下萌えにつつ
霧こめて月朧なりうらぐはしかかる夜ごろを獨りかも居らむ
樹の梢つれの若葉の芽立ちすがし風見の矢羽根よく廻る見ゆ
新緑の丘に弧を描くP・C・Lスタデイオ白き立體感がおのづからにみゆ
人すでに寝ねにたるらしこの庭の芙蓉は白しあるかなき風
おほに蒸して木群しづもる夕の風茅ひぐさの聲はたかくはげしき
夜の色のはや立ちこむる木群にはつぎつぎに移る茅の聲

仰ぎ見るは星座うつくしき天にして竹の葉の揺れのあはれ間近さ
向ひ見る黒檜が嶽に立つ霧の頂は晴れて朱あかのみぢ葉
はだら牛鼻づら白う吐く呼吸の眉の生毛うぶげが露を光らす
雨あとの水霧こむる下の田や中空は霽れて月の光れる

巢山壽恵一

諏訪湖畔

群鴨のいづこに去りし湖にうすれし霧の再び深し
漸くに霧霽るる中ゆ冷え冷えと靜かに湖うみは水を現す
霧霽れて輝き出づる太陽の湖に漲る光は寒し
昏れなづむ空の明るさ湖の面にひと時見せて夕べとなりぬ
天龍川湖はけ出づる水量は豊かなるらし闇に響きぬ

天龍川此處より起る湖口に泊てゐる舟の暗きにならぶ
湖のひそけき水は天龍の川口にして音立てにけり
釜口の橋渡る時ひとしきり吹く風寒し暗き湖より

木曾谿棧道附近及福島町 六首

山いくつ深雪凍りてひそけさやこの谿川の響をあげず
川鴉鳴くを聞きしがひそかなり水なき谿の深くけはしき
おそき陽は谿に射し來て爨々の雪に冷たき日向をつくる
泡立ちて岩乗り越ゆる谿水を秋の朝明に見るはつめたし
雨あとの町空せばめ立つ山に霽れゆく日光寂びしく澄めり
屋びさしに雨の濕りの乾き立つ匂ひは道に低くこめたり
枯桑の群立つ畑荒くして今日雪降るか乗鞍嶽を見ず

洲崎 哲 二

伏木港より和倉温泉へ

國境の石動山せきどうさんを海原の船より見れば低まりて見ゆ

壽 床 榮 助

秋川のゆたけき見れば早魃に水をあらそふ村とおもはず(鑛山の秋)

鷺 見 治 喜 次

昭和十一年十一月伊勢參宮の途次名古屋の旅宿にて老父に
會す 三首

あひみつる孫子を前に極まりて目を細めつつ酒すすります

この年頃酒がうましとのらせどもわが目にかなし老いたまひたる
暇告げずわが去り來しが酔ひ伏しし父はかなしく知りましにけむ

庇ひくき草屋の中の朝くらし織る機絹の清く光れる(石老山)

死を戒むる立札ありて荒淵の渦にひたむく心を濁す(熱海錦が淵)

箱根仙石原夜營

百姓家に竈を借りし吾兵等家の娘とすでに親しき

釜のまま兵がになへる味噌汁は高原の草に湯氣をなびかす

故郷より黍餅送り越したるにわが幼時を思ひ出でて

取り上げし蒸籠せいろうの湯氣の中に見し祖母おばの顔は今も思ふに

祖母はそのたなうらに湯氣たてて餅につくべき蒸飯むしいひくれし

祖母の麵棒めんぼうの先に伸びてゆく伸餅のしもちの縁へりをいぶかり見てゐし

假寓のあたり水田多し

此の畦に乾草あつめありたれば踏みゆくに晝のぬくもり匂ふ
灯あかりに見れば水田の小魚ども稻株のかげに居より眠れり

奥多摩にて

瀧壺に陽光とほりて渦の心の位置を移すが深くまで見ゆ
せばまりし峽間の道は足下の岩間にこもり落つる水の音
密林の斜面下ると學生がつつぎつつぎに幹に巻く手のはやさ
まやみの山せき下り來て茶屋の灯の山紫陽花に照れる涼しさ
浚渫船の導管がふく水煙闇にむかひてわづかに白し(鶴見川口)

菅 敏 夫

妻の死

わかるかと言へばかすかにうなづきしいまはの妻に頼すりよする

菅 又 吉

天が下はろけきかもよここにして阿蘇も久住くすまもまなかひに見ゆ

菅 義 臣

熱泉の湛へをかこひ侵蝕のあらはなる岩あからさびたり(別府温泉)
山峽に見えかくれする道白し罕まれに人行くをなつかしみる

菅 江 貞 雄

冬枯の谷川べりを行きしかば人ひそひそに石運ぶ見つ

菅 澤 忠 雄

インフレ景氣の恒久性を否定する新聞記事はうべなひて讀みぬ

菅 田 正

借り白をころがして來し跡ありて庭の大雪いくにちも解けず
ありたけの聲こゑ出して子は夕飯に母を呼ぶなり稻刈る母を

菅沼宗四郎

八丈島にて

島青く海と一つの色なれど二つの峯に白き雲おく

あはれなり流人のなかに名のあるは更にいたまし秀家の塚

桂川にて

行く船をめぐる瀬の音しばしして河鹿の鳴く音またも瀬の音

駿州雑詠

駿河野は風にまじりて桃の花飛ぶ日となりぬ富士かすみつつ

執拗に敵かたきを探るかたちして九月の草に飛べる蝻螂

富士既にヒステリックの形相ぎやうさうに變りて寒き冬空となる

山はなほ蜜柑のこりて小屋さむく雪のいささかふれる初春

菅沼猛雄

老いまして愚痴も少くなりませる母と思ひつつ肩もみて居り

菅沼能

山里にわれは來にけり子を負へる女が居りて榛はしばみつぶす

日曜を山に遊びてうらやすし樺の林にたたふる水あり

菅原利通

苗代は水をたたへて昏れ近し蛙の聲の未だ幼く

菅原房乃

今散りし牡丹の花はな瓣はなのいさぎよしこのままにして今宵すぐさむ

手にうつす化粧の水の爽けし庭木若葉に陽ざしかがよふ

ひたぶるの一夜の雨のよく晴れて若葉すこやかに朝日を反へす(庭前)

菅原 春水

千割れ田に水とるすべの今はつきて月明き道を鋤さげ歸る

菅谷 庸三

深川の勤先にて大震災に遇ふ 六首

目の前に燃えくる焰われはみて金庫のうちにもものしまひをり

陸の火は次第に舟に燃えうつれり叫びの聲はただに響くも

舟の上に落つる火の粉は絶間なし防ぐちからも盡き果てにけり

黒煙みなぎる川に我はゐて朝陽の光をろがみにけり

焼土のほとぼりさめぬ道のべに命を盡きて眠る人あはれ

川の面に浮ぶ屍もなくなりて夕べゆふべにこほろぎの聲

露しげき松山中は心すがし萩も桔梗も花咲きにけり

谷川の音さやかなり有明の月の傾く山に入り來て(甲州御獄)

箱根にて

山の上より見下す仙石廣原(ひろはら)に雲くだりゆきぬさへぎるものなし
日の没(い)りに何れの山も暗くなりて猶ひかりあり不二の高嶺は

杉 明 一

いふまじき嘆きを友に聞かshめて酒は冷たくなりてしまへり

杉 榮 三 郎

近江野の暮れなづみたる菜の花にかかれる白帆動くとも見えず
隴夜の濱邊いゆくに親しもよ晝のぬくみの砂にのこれる
熊笹の中をながるる水ありてその音のみの山のしづけさ

そば立てる岩ほうつ浪つぎつぎにうちよせ碎けよぢのぼりちれり(室戸岬)

時雨るれば白に荷鞍に雞は小闇き納屋のそこここをり

水の上に影うつしつ々やけの風ぎし大川を稻舟下る

夜をさむみ灯に近う來しこほろぎのしばし振りをるその髯の影
佇めばとみに寒しも今下りし紅葉の寺に灯のともりたる

夜は更けぬ雨戸をかろく風ゆりてまたひそかなり雪ふれるらし
世を慨き人をなげきてありし間に櫻はいたくふふみたるかな

杉 浦 貴 一

獅子ヶ谷牡丹園 一首

雨晴れの眞日のいきれに白牡丹花はくづれて葉の上にある

豊坂を早稻田に下る眼向まなかひに戸塚球場はうちかすみをり

杉 浦 力

鐵橋よ山よ川よと子供等は落着く間なしおのれの席に
習ひたる濃尾平野はここなりと子等に教へて我も見てをり

杉 浦 民 一

亡き父が目をとほしけむこの古事記乏しき本の中に見出でし
照り暑き運河工事を見つつ來て潮高だかと湛ふる海に出づ

杉 浦 亮 一

樺太の旅

樺太の西の濱邊の馬鈴薯畑花一めに海の風吹く

たそがれを草の中より砂濱より昆布を負ひし人影が來る(多聞泊ア
イヌ部落)

夕濱にアイヌが負へる干し昆布よく乾ひにけらし音を揺りつつ

杉 江 芳 枝

みづのやうな月夜をむねに描きつつ息ひそめ聽くシヨパンの夜曲

杉 江 彦 太 郎

御車を今下り立たす大君の大御姿は神にします(行幸)

杉 田 小 九

明けむ朝遠ゆくわれにふるさとの家廣くしてこほろぎ啼けり

日ねもすを書庫にこもりてゆふべ見るわが眼に深し五月の空は

はだら雪くづるる鶏屋とやの夕あかり鶏とりくろくゐて押へつ雌を

落ちつきて住む家もがなこのあしたばらの寒芽を土に挿しけり

亡き母をいぬに見にけりかたくなの父にかくれて夢に泣かすを

乏しけどこのしあはせは思ふべしことしも食ふ厄落しの豆

むら山を青垣として高市の野春日にまぼし四方に垂るる空(大和飛鳥)

寒晴れの空に寂びたつ塔を見に下りゆく鳥はいさご明るし(宇治浮島)

わが孫にこの世のけふの日は暮れて庭雪のかけ寂じけくしあり(孫誕生)

祖父さびて名づけあぐみしうまごの名これをと決めて安き思あり

富びとをみうちにはもてど手力や借さむと嘗て誰か告げ來し

杉田千鶴郎

芭蕉故郷塚 二首

霜下りねば芭蕉の廣葉秋をのびてこのおくつきを清しからしむ

山國の伊賀の上野は今日ひと日雪降りとほしたそがれにけり

家もちてはじめて上ぐる朝煙われ歡びをしづかに保つ

杉田鶴子

内村鑑三先生を憶ふ（曾て先生より洗禮を受く）

信ずやとおごそかに宣らし吾が頭おさへましし大きい手いまも感ずる
しばしばも涙さしぐみ聴きにける先生の講演耳底にのこれり

告別式の日 三首

かの國は帳一重と教へましき何ぞわが涙かくもながるる

再び會ひまつらむ日も遠からじとおもひ慰めてみまへを去りけり

先生の残したまひし聖書講義にくりかへし聴かむ心かたぶけて

影は見せて弱々と鳴く小鳥あり雪にかもならむ空のけはひに（淺春）

窓おほふ梧桐の若葉やはやはとゆする風ありて險のおもき（初夏）

東海道富士の病院に久しく療養せし親友危篤の報にとるもの
も取りあへず急行せしが臨終に會はざりき 二首

いついつと吾れを待ちつつ逝きしとふ友よひと度はものをいへかし
いつしか朝となりにけりいねぬ眼に窓一ぱいの富士の山見ゆ(通夜をして)
うなりたてて高空に威張る大凧ありあまたの凧の負けじときほへる
暁の空をさながら朝顔のゆたかに開きぬ紺瑠璃の大輪

母古稀を超ゆ

母の齡よまひいまさらにしもかぞへみつよろこびたまふことをせむかも

青函連絡船にて 一首

わが船とゆくてをきそふ巨き海い豚かきはやかにとべり青潮の上を
降り止まぬ今宵の雨や御墓邊の花も夜すがら散りつつあらむ
偉おほき力にゆだねし心衰へしか世の人言に耳かさむとす(或時)
日の出を待つと登りし屋上に没いり日を見むとふたたびのぼる

かかる時ふとしもおもふ惧れなく業にいそしむ日のありがたさ
刻々に発表さるる得點を立どまり見守るは男のみにもあらず(總選舉)
白く長き根をいたはりて植ゑし蘭花莖のびてつぼみほぐれぬ

杉 田 星 歌

顔よせてあやしかくれば聲たててよく笑ふなりさしあげてやろ
膝の上に足つまだつるみどり子や立つとするらしこのちからおお

杉 田 翠

かがまりて牛の腹帯ほどくととき吾が息を見つ月の明りに
ひとむきに砥石にあつる鎌の刃のおのづからなる摩擦熱もちにけり
おもむろに方向かへしむる鋤き牛の喘ぎはしるし太腹ふとばらの揺れ

聽覺のはたらきそめしたのしさか山にむかひて呼ばふ背の兒は

杉 谷 國 朗

道の邊の笹生に夜風吹き止まず雪となるらし月ありながら
ひたひたと畦に打寄せしぶき立つ冬田の水は道越えむとす
夜學終へ歸る月夜の畠道うりの夜番は蚊帳吊りてゐる

杉 野 朴

幼より父と離り住み、母系の祖父母の籠に育ちし吾、ある年急病にて危篤に陥りしも、父は打電に應ぜず遂に來給はざりき

親と子のうすき縁はえだし哭かねども父は子われを忘れぬたまふ
子がいのち極る際をよそにみる父よまことの子なるやわれは

義妹政子一周忌前後 二首

たんぼぼのわた梨とぶ野邊や少女らにまじりて妹の居るここちする

あふぎ見る月の面より流れくるひかりは肝にしみ入るごとし

かすむ眼を暗きに向けて坐りをり項うなじにあつき晝の風かな(眼を病む)

子が言まのころにふれて思ひ出づるわれはちちははをおろそかにせし

降りつづく梅雨うつうつし門べゆく楊梅やまもも賣りを孀つぼに呼ばしむ

卓上の茶碗の縁を巡りつつあゆめる蠅の見えかくれする

蠅ひとつ卓にあそべるしまらくは我れの眼は蠅を見てをりし

春さむき月の光に庭のべの臘梅の一樹花散らむとす

夜更けてあはれなるこゑと聞きとめぬ遠く鳴き過ぎしひとつ五位鷺

貧しさによくぞ耐へ來し妻よ子よ今日は欲ほるものみな買ひてやらむ(本賞選)

机の上の瓶に挿したる罌粟の花微かに揺るるひとのあゆむに

巨大なる颱風の塊のしかかりのしかかり來て家を搖るがす

吹く風にみだれ靡ける噴水の直るとすれやまたくづれ散る(公園)

風邪をひける末の子はいづちゆきにけむ書きつつも心にかかりて消えず

杉野房枝

病みて三首

おもひみればこころぞかなし離り住む夫さへとほくわすれなむとす

病むゆゑにいとまある身か日毎ひごと蘭の花芽のふくらむを見つ

蟲ならば聲のかぎりを泣かむもの青きひかりに月こそは照れ

落の葉に散れるはなびらうすあかきいろをたもちてなほにほふかも

月見すと庭にさそひし夫の手はわれのうなじにあつかりしかな

年ふりて水の流のおのづからゆきつくごとく夫に頼りつつ

杉原 皓三

正午^ハごろの街をにはかに暗くせる冬の靄をば玻璃戸より見る

ブルジョア^イの妻らがゴルフ姿など載れる雑誌も病めば讀みつつ

見ならひの少年までもカアルマルクスの思想にもとづく不平しるせり

苔むせる樅の林に湧くみづは氷のごとし米を洗ふに

ま晝なほ凍れる河の底青し海より潮のここにさすらし

杉町 舟水

夕映の空にあやしく湧きし雲ちぎれちぎれて阿蘇が嶺を越す

杉村 楚人冠

兎^トせばかく角せばとあらんと思ひはかるこの心常にわれをあやまる

なれとわれと幾たびかくてあることぞ戀ならば戀と明らかにかにいへ

月に語る人の面のとりどりに向へるは白くそむけるは黒し
一日作^まして一日食ひて今日ゆかばあすの事はあす思ひわづらへ
人や見ると改札口の人ごみにまぎれて人を送りけるかな

杉 本 寛 一

天地はあまりにひろしあめつちはあまりに寂しひとりあるには
土はいふさびしくば身を土に棲む蟲のたぐひにくらべてもみよ
小さな枕のおほひたたみつつ吾^お子^こも二人となりし思へり

掃きつくしいまは落葉も焚くほどはたまらざるまで冬ふかみたり
潮切りて走るへさきにたちてみる鋸山の初秋の雲

黒潮のひろごる上に鱒網の泛^う子^こさむざむし波にゆれつつ
甘^い藪^もの葉の黒ずむまでに霜は降り土にしめりのみえて親しき

杉本峰世

朝空を渡る鳥の數増して南明るく雲切るるらし

聞ぬちに聞けば親しも中空を鳴きつつ渡る朝鳥の群

相棲みて二とせちかし栗山の花のさかりもすぎなむとする

杉本喜一

聲高に馬を叱れる兵卒の服はしづけり朝のしぐれに(機動演習)

杉本歸一郎

妻をむかへて一首

われは男子そのこきみは女子と生れきて今宵あふべく掟てたまひき

うつうつと猫も眠れる日の闌けを咲き盛りたり牡丹の花は

かそけさや牡丹の花の揺るるとき眠れる猫が耳をうごかす

猫のひげふと動きたり牡丹花に日の耀かがやひのきはまりし時

白山彌陀が原

しろじろと芒のひかる徑ありてひとり往むかきしかば寂さびしかりけり
屋根の上に柿もぎをれば能登の國の石動山いするやまに雁かりのくる見ゆ

杉 本 露 彦

灯を消して臥る我が眼に今宵見し白き卵の花浮びて去らぬ

杉 本 萍 吉

鹿兒島縣出水なる鶴飛來地にて

ほがらほがらなきわたりゆくむら鶴のこゑもはらなり冬晴の空に
濱松のうへなる空をつらなりておりくる鶴のみだるともせぬ

冬の海けふ風ぎたればむらつるのおり来てあそぶ濱のちかくに

冬寂びの沼田におりてなく鶴のこゑは晴れたる空にひびけり

大正十三年の春、日向國坪谷に若山牧水先生を訪ねて 一首

なつかしきひと夜なりしか山川のひびきのなかにわがめざめたり
深山木の葉にいま霜の降りむとや月のひかりの更けしづみつつ
大阿蘇の山鳴きこゆ春あさきこのあめつちにうちとよみつつ
おほらけき夏野のはてやしら雲のなびきながれてひもすがらなる
山ざくら咲くけふの日に逢ひ得つつあやふかりけるいのちを思ふ
またここに秋の風きくかしこさよわが足いまは立つも立たぬも

病久し

青篠の葉にまつはれる冬の日のあはれはつひに解きがたきかも
肉親のこころおのづと馴な寄よる兒を口にしかりてわが近づけず

日のにほひ花にこもれり野がへりの妻が折り來し紫木槿

若菜つむ吾兒がこゑかも松風のかすかにひびく晝のはたけに

鷓ひたぎきてひねもすあそぶ紫蘇の穂のすがれはてたるけふの日和に

われ故に皺ぞふかめる妻が顔ただありがたし年のはじめに

庭木々の葉はちりはてて明るさのよるべもなしや三十三才啼く

杉 森 静 子

老母に吾がやせし手は拭かせつつにじむ泪をこらへつつ居り

病みほけて永く使はぬ白粉を掌てにとりて寂し固く乾きぬ

杉 山 多 喜 子

子の投げし白きごむまり秋晴れの空に飛び行く見つつ笑ましも

夫つまよりのたよりに心をどりつつ髪結へる手をやめて封切る(夫の外遊)

杉山多賀

百日紅の枝皮はせて寂かなり芥を焚きてひとりたのしむ

杉山唯芳

簡易保険外勤員となりてあけくれは募集成績に心張りつつ

軒並に保険募集をこころみて甲斐なかりしを今日もしたたむ(外勤日誌)

保険募集解約防止のあけくれは疲れて寝るに夢に見にけり

杉山常子

しばしばも出できてすわる芝山の南なだりの白梅の花

杉山灯影

鐵塔の遠きつらなりにうごく雲秋風にこゑをあぐるごとしも

白き鷄秋風かぜに吹かれて茗荷畠の茗荷の枯れ葉ちらすまひるま

杉山尚子

そら言の慰め言はいまにしていはじと言へばうなづきますを(兄危篤)

夫逝きて

思ひ出でて悲しきものかうつむきて物書ける子の亡夫（亡き夫）には似たる
末の子が言の幼なさに笑みながら心はさみし君おもひつつ

わが生きを思ふにさみしくだつ夜をたのまれものを縫ひいそぎつつ
山茶花に冬あたたかくさす日ざしすべなき歎きいつまでかせむ

杉山益夫

見おろしつつわがすぎてゆく谷合のここの家々桃のはな多し

月影の眞白かりけるかつしかの冬田眼に見ゆ君を憶へば

やるせなく思ひきはまりて立ちどまる堅雪の上にわが心燃ゆ

春雷の去りゆくなべに夕日さし檜葉ひばよりおつる雫はやまず

杉井武治

ぬば玉の夜空を焦す前山の雨乞ひの炎ひを吾子わがこに拜まがます

杉岡富美枝

青竹の籠にしじみを洗ひあげすがしき朝の厨にたちをり

夜の雨にしとど濡れたる薔薇切りて子に學校へ持たせてやるも

秋晴れの空を思はする鴝ももの聲たのしみてきく朝のめざめに

沈丁花のかをりひろごる晝庭に子のつく鞠のよく弾むなり

助永春夫

親どりのはら毛の下に雛どりの小さき足のならびをる見ゆ

鈴江幸太郎

昭和九年五月五日中村憲吉先生歿せらる。時に伊勢湯の山にありき。

菰野より蘭花香をば君に送りすがしき山をめぐり居りにき

翌六日深更歸宅、訃に驚きて直に備後布野村に向ふ

諸木々に藤波のはな咲き垂りてうつつはかなし奥吉備の山

諸國より友らつどひてまどろめる二階に來れば鳥が音なきこゆ

中村憲吉先生遺稿筆寫

ひらきゆく日記は亡き日に近づきぬあはれその前の日も書かせ給へり
常とこぶし臥にいましし君が日記には日々のごとくに無爲を嘆けり

昭和十一年四月、中村先生の病を養はれし尾道千光寺山の假寓
のあとには花見時の茶屋となれり

疊の上に三味線一つ置きてあり君が臨終の部屋にすわりぬ

妻開腹手術を受く

油蟲いでてあそべる板敷にみとり疲れて時の間を寝つ

同じ病院に病み居て、母の死を知らざりし草子は癒えぬ

移る家求めむころも侘びしけれ雪解の道に兒をつれて出づ

故郷に妻の遺骨を納む

海に向き甍明るきわれの街兒に見しめつつ妻ぞこほしき

春明きふるさとの山よろこびて駈けいづる兒を見ればさぶしも

白骨温泉

白骨の谷の草むらに湧きにほふ出湯はほそく徑にながれぬ
部屋ごとに晝臥こやりある人みれば寂しき谷の湯宿に來つる

觀艦式

とどろきて砲うちそめぬことごとく煙あげたる艦列ひろし

昭和八年十月病はかばかしからぬ中村先生を訪ぬ

君が家にほしいままにぞ晝ねむる穂田ゆく川の光る二階に

三瓶高原

草の山天よりゆるく傾きて涯なき花野けふぞあゆめる

ゆきゆきて高野にあふぐ三つの嶽みな草山の天に寄りあふ

鈴川 秀雄

大鋸^{おが}ひける木納屋の音かつのりつつ細りつつきこゆ風のひねもす
憎しみの家さへ人さへほのぼのと今はさびしも事すぎにけり

鈴木 祐喜

男鹿山の狩の土産にもらひたる雉^{きざし}子はあはれ幼かりけり
里山の焼くる焔を見て來たる童は一夜ねむれぬらしき

露ながら青篁のなびく上にのぼる朝日は妻もあふげよ

山葛の這ふ枯山にひびきつつあら澤の瀬をたぎちゆく水(陸中大荒澤)
谷川をかち涉りゆき岩群の明るき風に吹かれぬるかも(鷹の湯温泉)

鈴木浅五郎

暴風しけ來ると競ひ入り來るあぐり船機關ぶねのこだま重なり亂るる

鈴木淳雄

朝空に輕爆撃機澄みうかび東京灣は青く晴れたり

鈴木内子

秋づきし夜の親しさに寢のこりて今宵も一人衣縫きぬひ續く

鈴木海南

稔り田の曇りに遠く見えて居る送電線のたるみ静けし

山原のほほけ尾花に照り沁みてかがよふ晝の陽のしづかなる

朝川の澄みて見え透く底砂に間なく水皺みじわのひかり移ろふ

鈴木勝子

長男出生早産兒にてか弱く育てにくく殊に夫は洋行中なれば
苦心一通りならず

二とせのつまのるすゐのなぐさみによき子を得つと人はのらせど

鈴木數吉

癩療院に父の死をきく

たけり立ち我をうたしし父故に忌まれて病みしときけばなかゆも
病む父をひとりのこして日やとひにゆかしし母が思はれにけり

草津より玩具を戴く

名のみきく追分馬子の馬子姿白樺に彫りしを君たびにけり

二月十七日野口侍從御來院遊ばさる。この日朝より大雪降り

大君に日毎仕ふる人の聲きかまほしさに吾がまゐり來し

鈴木勘正

河口湖

大雪はいまだもやまず湖は岸より水の凍りゆく見ゆ

雪晴の湖は静けしこの朝け鴨の群たち低く渡れり

天城山

天城山澤への奥の山葵田を落ちゆく水はひややかにして

高山の谷に動ける霧晴れてさやかにぬるる石楠花の花

鈴木 一

片言の子にたはむる妻の聲風呂場の方に晴々聞ゆ

鈴木 吉治

アドバルーンあまた浮べる一月の都の空の風の明るさ

鈴木 欽二

艦底の作業終りて出でくれば海は涼しき月夜なるかも

鐵板の蔭に裸に憩ひをる胸毛を吹きて青海の風

午後二時の暑さけだるき眼の先を機械に觸れて蝶一つゆく

櫻花かそかに薰る朝の丘に夜勤を終へて登りきにけり

工場に出づるに間あれば夕陽さす窓にいたはりぬ手の指の傷を

したたかにゆふべ凝固土の上に掃く鐵塵を我が肺は吸ひけむ

磨き上げし鐵の面にふと落ちてしづけさ邃し夜の埃は

み民われ艦をし造るこの業にひたいそしみて二十年過ぎつ

艦造る仕事に父の貧しくて一代過ぎしを我は継ぎ生く
堅き鐵一日研ぎてをりしかば火華の匂ひ鼻につきたる
日曜の家の日向にわが掌てより光る鐵刺てつのいくつかを抜く
丹念に磨きあげたる鐵肌ぞ春雨近き氣に曇りゐる
起ちゆきて握るに鐵の冷え強し海にも今ぞ霜降りゐむか

鈴木吉良

上河内にて

燒岳も火を噴く山と思はれず夜明の肌のやはらかきかな
穗高山ほのぼのとして大空に半ば消え入る夕月夜かな

山寺に詣でて

親子路出羽に來りて今日踏みぬわが子もいつか踏むやこの路

赤城にて

夕映の空に妙義の秋の峰雲のいろして雲に翳つ

上州の櫻山に登りて 二首

山々が襟を合せてある如く重なる奥に寒き日の入る
寒ざくら日の暮れゆけば連山のうす雪よりも花の淡あはかり
我が内にありて知らざる寂しさを誘ふが如く秋の風吹く

秋川の溪

みなかみの雪まだらなる曉の山青みつつ月傾きぬ
よべの雪光を添へて梅更に白しと見ゆる溪の路かな

桂川の依水莊 二首

莊のもと百尺の溪暗けれど月は三國の山わたり行く

我が舟の張れる布より連りて茅花つばなの白く見ゆる洲の上

よべ降れる秋の雨ゆゑ海もまた濡れたるとき伊豆のあけぼの

踏みて行く落葉の音も寒からず春の光の山に満つれば(武藏名栗)

はかなきは唯人の世の上ならん褪せたる薔薇も香を放つかな

初春の眞鶴の海花のごと旗を飾りて船のあつまる(眞鶴)

病める子が床より父を呼びかけぬ我身ひとつを悲しめる時

朝顔の蔓のいたづらに伸び行きてかなしや蔓の蔓にまつはる

子のために迎へん母のあれよともまた無かれとも思ふ我れかな

鈴木 庫 治

母病むの便り來る

癩病かたむむ吾れはかにかく親族の身のかかはりをひたすら恐れし

母入院す

赤々と沈む入り日にま向ひて山を下りぬいのち寂しく
老いづきてこの癩院に入らむとは母よ夢にも思はざりけむ
老いらくの母と相病み相住まふ吾が現身は幸と言はむか

清瀬村附近の山に落葉を搔く二首

大き籠を背負ひて來たるをみなごは癩かたるの吾れに朝の會釋あしやくす
行き過ぎてをみなは何か語るらし吾が事ならむこの山路に
熊笹のひと葉しきりに揺れるつつ雪解ゆきげの水の溝に落ち居り

鈴木 恭 作

早引の理由は問はでかへしやりぬこの子どもらは子守なるべし(農繁期に)
曼珠沙華抱へし子ろを自轉車にのせて過ぎたる人のありけり(墓參の歸途)

波音に聲はまぎれずさへづれる雲雀のあれど寒し砂丘は

空車馬からぐるまにまかせて馬方はおくれつつゆく山中の路

鈴木 杏村

正午ひるすぎてビルディングに揚る赤旗の靡きそろひて空は青ぞら

少女子はかなしかりけり空罐に雀子一羽秘めて飼ひつつ

眞晝なり合圖の音を待ち構ふる少女選手達の體勢の張り

海水着の雫瀧のごとしたくましき處女の太腿は白うかがやく

窓をひらけば今朝も二本の煙突がけむりを吐かず冬空に立てり

生き惱むころ荒すさびて堪へがたし今日もあがなふ冬薔薇の花

我がこころ夢きものに盈みちにけり膝の日かげのとみに消えゆく

雪解けてただにうるほふ下土の息だち白し春の陽ざしに

日のひかりあまねく明る登道のぼりみちに立ち細りたる我が影黒し

春の光盈ちあふれたる土手の斜面駈け下るなり友と犬と子供

ひらき切りて大き菖蒲の花びらの反りまくれたる縁かぎをさびしむ

はなあやめの白き花瓣の湛へたる氣品豊かなり我が眼に愛す

玻璃に映る顔の中心にひらきたる大輪の牡丹朱にかがやく

鏡面の赤き曇りや焦點をわがあはせつつ丹躑躅の花

生活の青空を求めてかぎりなし硝子窓に今朝もしぶき光る雨脚

時計臺に灯の點つく見れば黒き指針あきらかにして眼に沁む心地す

眼は對ふ衢をぐらし大いなる葬送自動車の花輪が揺れ來る

屋上の出口の玻璃に映りたる青空のなかへのぼりゆくなり

米穀倉庫の鐵扉記號の白數字かがよふ見れば夏は來にけり

風強し草原にあがる飛行機の飛びあへずして直ぐ着陸す

造船場の廣き窓々夕かけて音響を吐けり暗き川かは面にも

日ざかりの直線舗裝路を花持ちて女事務員がただひとり來る

切なかりけり仰ぎつつあるビルディングの白き稜線が切り圍む青空

人夫らがただに剪り落す篠懸の青葉匂へり朝の舗道に

高山の花野とほり來し村の娘こは秋草花の匂ひするなり

紅薔薇を片手に持ちてわが歸るビルディング街の秋日和しづか

今の世のきびしさを思ふこころ痛し季節の花に親しまむとす

あらはなるこずゑは寒し柿の實の一つ一つがひとつひとつ見ゆ

畏友小林歩三たまたま郷家に歸ることあれど妻子に親しむこと
と僅日その上京に際して妻子は何時も村界ひの峠まで見送る
習慣とはなりぬ

峠まで歩きとほせしをさな兒をひと言賞めてあと言はず父は

眼の下の紅葉に隠ろひし子らのこゑ何か悲しきこだまひきたり
子供を幾たび此處よ返しけむ今日もためらはず別るる父なり

鈴木憲太郎

北海道の旅

もみぢ葉を旅のしるしに折らまくはあまりに大きな山葡萄の葉
黒々と熟れし葡萄は九十九折つの山の小路に馬ながら採る
秋山の大き潤葉の黄葉もみぢするまほらが中を見あげつつ行く

鈴木浩

養蠶場見學

蠶まぶし簇はふ蠶のからだすきとほりか黒き糞の一きれのこる
か黒なる梁うつはりの角にはひ出でて蠶は白き繭かけにけり

鈴木 古鶴

病む母のけはひうかがふ秋の夜や落葉の音の雨となりぬる

母のみまかりけるとき

子ひとりのわれを力にながらへて生けるかひなく逝きませしかな

鈴木 貞吉

沼底に陽ざしは透り水草の伸び静かなる根元まで見ゆ

鈴木 藁子

風寒き十一月の朝あけの光に透きて白き茶の花

ことありて人と別る

昂ぶれるこころしづめて冷やかに別れむといふことは言ひてき

朝々は傷むこころを人しれず秘めてぞ髪の元結を締む

人を戀ひうつろ心にゐしわれか花瓶の水涸れてゐにけり

鈴木重貞

北満の野

悠久のこれの曠野に來て思へり吾と蟲けらといくばくの差ある

鈴木重衍

平岡の櫻の下に炭を焼く

ま日中は木伐るに忙し夜ざくらの月てる下にすみかき出す

かすむ夜の月のま下にさくら花見つつし我はすみをやくかも

鈴木重延

炭かまの煙たなびきあたたかき山ふところにうぐひすなくも

雨戸あけさし入る月を蚊帳の外に首のみ出してながめふかしつ

鈴 木 賤

鳴門觀潮

内海ないかいのうしほの流れここにせせばまる瀬戸をせめぎ落ちゆく
風はやき鳴門の潮はさしいでの磯岩こえてしぶきをとばす
海の上うみをしぐれて渡る一むらの雲脚はやし撫養ひんぎやの山かけて

攝津昆陽の池

沖とほく散りぼひ泛ける鴨どりは波の光にまぎれつつ見ゆ

中河内家原文珠院

鷓鴣みぞさぎい時雨のあとに來啼きしが底冷えしつつ日の暮るる庭

北河内、私市附近

信貴生駒遠く見えつつ水の邊に柳の芽ぶき今ぞ明るき

北河内、獅子窟寺

秋ちかき山べは暑く照りながら谷よりおこるひぐらしの聲
いかづち雲前山のうへを動きつつここに轟く音こもりたる

日が落ちて野の上とほく飛びめぐる千羽鴉は影となりて見ゆ

京都深草石峰寺

梅雨ひでりひび割れかわく庭の上にくちなは出でて舌吐きにける

江州大津城址

むれむれて鴨のおりたつみづうみは枯蘆のうへに遠くひろがる

滋賀の宮址

湖のうへに射せる夕日は淡くして光らずなりぬ沖のさざなみ

水族館

おびえたるものの如くに尻跳ねて伊勢海老はなほ後退りする

大阪港

三井埠頭に動きやめたる起重機は日の落ちてより空に浮き出づ

朝鮮慶州途上にて 一首

ぼたぼたと花むら明き林檎園鵲啼ける方はいづらぞ

凍みゆるぶ日蔭の土に萌え出でて瑞々しきは堅香子の芽か

春深き曇りつづけば白藤の傷み散る花昨日にまされる

雨あとの雲ににじみてまだ照らず月はそのまま没るにかあらむ

五位鶯の啼きゆく聲を聞きてよりとみに秋づく夜空をあふぐ

江東新川附近

冬の田に白鷺飛ぶを見つつ来てここは静けき堀沿ひの町

風空に吹き流さるる白鷺はいづべの田居に降りむとすらむ

小下澤溯行

水の邊は常濡れ羊齒の葉のうへに木群洩れ來る日は蒼くして

武甲登山一首

ここに棲む山の獸は何ならむ岩の上に乾く糞を見出でぬ

雪山に狩りたてられて斃れしは熊の仔にしてあへなかりけり(十六ミリ映畫)

年老いて圍碁に夜ふかす父が上しづかに母は嘆きいましき(懷舊)

鈴木信太郎

見の遠き河原のはたてゆく馬は黒き馬かも河原は光り

片附かぬ用の書類のそこばくは靴につめて旅立たむとす

機關エンジンの響傳ふる天井の鋏のふるへを見つつねむらず

鈴木 新一

熔岩の岩秀の竝みの眼にさむき夕裾原に父を葬るも

亡き父の遺せし衣ことごとく我が身につくを嘆く母はや

鈴木 秋 郊

明日こそは賣りにやらむと日ならべて溜めし卵の數をかぞふる
草喰むを止めてさし出す牛の頸力いつばいこすりてやるも

鈴木 俊 三

石投げて濱のからすとたはむるる盆のやすみの船大工かな

鈴木 つ じ

天皇陛下江田島海軍兵學校に行幸遊ばさる。わが長男兵學校
生徒なり。此日我等夫妻早曉齋戒沐浴し臺中神社に參拜せり

大君の軍人なり汝が道の私ならず専念に勵め

朝露にうすじめりせる參道を心つつしみて夫に隨ふ

鈴木如楓

桐の葉の雨にゆらぐがすがしかりこぼるるほどの湯にひたり居れば
陽をいだく垣の根方は雪きえてすでに春なるわか草の色

残雪やうす陽さし入る篋に雪折れ竹を誰かきりをり

あけはなつ窓より入りて青蚊帳の裾にもとどく月の影かな

鈴木水圃

風のごと散りゆく鳥は哀れなりまた群りて高き木に寄る

鈴木誠一

窓外の手摺てすりにひかる雨だれを心かたくなに見てゐたりけり
ひとつ居て鳴く葭切を右に聞き左に聞きて道をめぐれり

新しき日傘を妻に買はせけりかかることさへ今はこころよし
人さまざまの念をもちて生くる世に御符ごふをば飲むといふも嗤へず
エナメルのにほひに染みて來し友を夜更くるまで引留めて語る

鈴木 精 一

店頭しんのケースに著るく埃積み今日も暮れたり吾が心重く
長病みの衰へし兄に氣休めの言葉を言ひてうら淋しかり

鈴木 丈 夫

北風にしぐれ降る日は南の楠つばきに集ひて鶉うぐいすの鳴く
群鳥の山々越えて渡る日の幾日續きて秋闌けにけり

鈴木 太 一

水飲みに出でし巢鷄すまねのもどり來てしづかに土間を歩む音すも

冷え來る山の夕の谿ふかくしづまり咲ける石楠花の花

防空演習

燈火管制いましてかれたるにところどころまだ消さぬ家は蠶を飼へるならし

鈴 木 孝

この街に命果てたるとつ國の人のみ墓は海に向へり(下田)

深谷の西にわづかに開けたる空の明るみを戀ひつつくだる

生徒等が踏みにじりゆく路ばたの蓬はしるく香に立ちにけり

我れの背にもたれて吾子は眠りたりつむりの重み觸りてかなしも

鈴 木 孝

つながれし綱の長さのとどくかぎり原の青草は牛に喰はれぬ

幼な兒は薄眼を開きて眠りゐる日中の庭の紅薔薇の花

つゆふふむ葡萄の玉にあかつきの動く氣配をみつつありしか

鈴木喬

中程はたるみ大きく重々し石狩川をわたる電線

鈴木武雄

下總の芝山栗を爐にくべて母は居りなむ今朝の寒さに

横濱の港の煙ながながと丘を越えくる春となりけり

鈴木大二

敷香郡内路飛行場に横須賀航空廠の耐寒試験飛行あり

寒空の空をかけりて凍海のはたてに消え失せぬ耐寒飛行機は

樺太にて

寒晴れの空に起き伏す山脈やまなみの茜に染むは露領の空かも

荒れに荒るる波の最中を進み來て間宮丸は太き汽笛を鳴らす

鈴木保

春曉にしつとりぬれし土ふめばわが足白くうつくしく見ゆ

鈴木千賀子

わが町にも出征兵士ありて朝門に割烹着のままわれも送りぬ

鈴木千久馬

すなどりの火のあかあかと燃ゆる頃海より大き月のぼりけり

うらうらと照れる春日に外人の子等もつどひて凧をあげをり

鈴木忠次

小子部オノサコすがるを思ひこの夜居り心ゆたけし一人ゆたけし

いにしへは大き愚人オホロカぞ居りたりしわれは甚だ古へおもほゆ

吾子オノコよ汝ナが父のみことは冬岡に立てる榎の木のごとく錢なし

吾子よ汝が父のみことはやま川の瀬のさやさやに錢なしのみこと

鈴木 哲 夫

けぎやかに障子にうつる風明り夕べとなりて熱いでにけり

鈴木 傳左衛門

一日の畑打ち終へて灯の下に野良着をとけば砂こぼれたり

鈴木 英 夫

くるめくはカンナの紅オホか日盛りの庭に故あらず異象を怖る

磯岩にひたとしづもる夕光ゆふかのあかるさ寒し潮ぐもる海

島の背の空に遠ぞくみなみ風わが眼を離れず雲ひとつ清む(佐渡晩秋)
葉牡丹の葉色の冴えのひたぶるにいのちは燃ゆる冬深みつつ

始めて村を出づ

此の丘の楳しもとの芽ぶきにほふ日もわが獨居ひとりゐはかそけくあらむ

鈴木比露思

麥畑むぎに消残のこる雪やしかすがに雲雀の聲はすでに満ちにけり

童こと共に聲あげむとすまなかひにいまし孔雀は尾羽ひろげたり(動物園)

鈴木藤雄

荒繩にくくりし寒の鯉さげて峠を越ゆるバスに吾がをる

鐵工場

熔鐵の炎は空地をへだてたるあげ潮どきの波にうつろふ

熔解爐に鐵塊あかく燃えたぎち熔けゆくさまを疑はず見し

熔解爐に上る炎は工場の庭の立木にあかあかと映ゆ

鐵材を船に積みこむ起重機の響き重々し上げ潮の浪に(月島)

箱根にて一首

忽ちに霧はれゆきて眼の下に青笹なびく一平見ゆ

ふいごの火炎をあげていきほへる鍛冶屋の前を今宵もすぎぬ

工場より鐵板を打つ音響き雨荒き岸に吾が渡舟わたふねはつく

鈴木不二子

朝床にこほろぎ一つ飛びければやはれぬる身の我にかへりぬ
まだきより起きて働く然れども日の出拜みつつたのしもよ我

鈴木冬吉

うちなびく尾花の原の上にしてはや眞白なる藏王山見ゆ
春いまだ夕べは寒し家かげによごれ消残る雪は凍てつつ
耳とめて聞けばまさしく雨の音春も雪解の頃となりたり
星冴ゆる今宵を田居の雪どけの落水さやに音たてて居む
うららけき今日の日和を畑中の家筒ぬけにあけはなしたる

この夜ごろ月のあかきをゆくりなく仕事なしゐてわが思ひ出ぬ

鈴木まつ江

竹買ひの男來てゐて竹林に竹伐る音のひねもすきこゆ

鈴木正夫

ヨーロッパへ

朝霧の流るる隙にほのぼのとアカシアの咲くコロンの町

黒頭の鷗飛び交ふ朝明けのアラビアの海に烟長しも

鈴木 正男

一つ事に思ひかかづらひあり經れば口數は減る弟妹らにすら

海の面に遠く流るる水脈みれば船過ぎてより時たちにはけり

山行きてわれひとりなる氣安さかせせらぐ方へ路はとりたり

鈴木 無庵

朝霧の青田の土手をはしりゆく男童の手にうなぎをどれり

やうやくに老いづく妻や洗ひたる髪の短きをわが見たりけり

湯にをればすぐそこの部屋に妻子らの食後の談話ねもごろなるも

鈴木 茂杜子

背戸の道行きずりに抜く稗草の秋穂はいたく伸びにけるかな

門過ぐる小學生らわが庭に來鳴く鶯を眞似つつぞゆく

鈴木康文

わが接穂芽ぶき初めて暖き晝をしきりに雉子鳴く聲す

肥臭き手をほのぬるき田の水に洗ひてをれば春の月出づ

よべ降りてけさはあがりつ桑畑の肥きき出すにほどほどの雨

春の雨しばしば降りて堆肥こへ入れし畑の土も落ちつきにけり

あかあかと裏田の畦の榛の間に夕べ上總の山燒くる見ゆ

夕野火の明りあとにしくる農夫鍬光らして擔かたげ換へつも

戸あくればなま暖くくる夜風野火のけむりの匂ひふふめる

野仕事の疲れけだるく持ち越して朝起き難き春となりにし

二つある蓑の古きはおのれきて父と田に出づ雨降る朝を

焚きあとのほとぼりぬくきくどの上に夜はぬれたる蓑つり置くも

董咲く芝生にいでて道ひろし背の子をおろし歩ませ行くなり

子を抱きて渡ればゆるる板橋の水にとどきてひたひた鳴るも

代搔きてあがれる牛の泥足によごしつつゆくたんぼぼの花

白露の玉なす草の葉をなでて鎌研ぐ砥をばぬらしけるかも

霧深き朝の野路ののぢのいくまがり草負ふ妻のおくれがちなる

刈りてこし草の中より抜きとりてわが子にくるる撫子の花

朝な朝なはく股引に澁しつきて田植も今はなかば過ぎたり

四つ這ひとなりて田草を取る姿わが身ながらもつらし農夫は

時化しけやまぬ總もとのの海鳴り夕小田の稻のさやぎをおさ壓おさしてきこゆる

たちとまりきけば小夜田の稻のさやぎ實の張はりかたくなりし音かも

野^の扱^とすと野^のべの秋草折^り伏^せてしきし蕙^は高^{たか}低^{ひく}多^くし

妻^とわがふたりばかりの稻^こきは扱^きはかどらず話^のみして

粃^こ蕙^さ庭^にしくとこすもすのしどろの花^は妻^がたばねつ

稻^こ車^ひけばさやぎて後^の押^しの妻^がものいふ言^{こと}聞^きわかず

ほのぼのと流^るる霧^は穂^の芒^の白^き山^の根^にいたりまぎらふ

月^は高^くのぼりて田^の面^靄白^しいづこの橋^か人^渡る音

野^の晝^餉母^が忘^れてそへざりし箸^{には}青^き萱^折りにけり

稻^か架^たとれて見^晴らし遠^き田^圃道^日にけに風^は西^吹きにつつ

畦^みちの榛^落葉^{して}この頃^の夕^日は沼^に沈^むまで見^ゆ

小^夜更^{けて}沼^面はややに凍^るらし映^らふ月^のかげ据^りきぬ

米^の價^の高^低によりて動^く農^民の生^活は實^に豫^算をたて難^き
みぢめさなり

去年は去年今年は今年来のむた動くわれらのくらし歎かゆ

もと磨りの米は賣り賣りやかからの餉にとるものはみな二番米

盲腸手術

腹の上を萱の青葉のひとはしり走ると思ひし切られたるなり
片足づつもみて貰へば看護婦の手は柔らかく妻の手はかたし

三里塚にて

咲きつづく櫻の中に松ありて曳ける霞は松のみに見ゆ

九十九里濱

曳きに曳く網は鰯の群跳のしぶき見せつつ眞近くなりぬ

十六島

鳩の音のゆくゆく起る島の道橋を渡りて橋さらに橋

利根川口

利根川の海に向ひて吐きいだす濁りの色は沖に及べり

大利根の水海原に押し出してなほ川なりの流なす見ゆ

利根川の吐きだす水は海潮うねをひた押しに押しして波たたしめず

利根のあなた常陸の磯に寄る波の間なく音なく穂をくづしをり

鈴木よし子

霜やけの足のかゆさをこらへつつ來向ふ冬に衣縫きぬひ急ぐ

鈴木樂光

朝の飯終へてしばらく窓開けて置くに明るき白藤の花

ころころと湯の煮え沸ぎる音にさへ吾れの心の遊ぶとすらし

顔に出し病かなしも醜かる姿となりて世に生くる我は

再びを生れ來ることなき世なれ命は生きてながくありたし
疊の上にかたく坐りてゐたりける吾と氣付きてうらはづかしき
押入にあるひは納屋に幾年か隠れて過ぐる身をかなしみき(回想)

夢

眉の毛の生えたる事の嬉しくて故郷へ歸りし夢さめにけり
健かになりなむ日さへ吾になく眉毛の生えし夢ははかなし

鈴木 菱 花

遠く見てしたしきものか秋畑に居つ立ちつうごく麥播き人は
兒を抱きし女ひそかにひたりゐる野天湯の上の山ざくら花

鈴木 良 作

汐曇る瀬戸のそぎへの岬山に夕べしき啼く蛸のこゑ

朝霧の霽るるすなはち岬山のそぎへに見えて海はさやけし

鹽釜に近き菖蒲田濱に遊びて 二首

岬山の崖のま下に寄る浪の退くたまゆらを轉ぶ石の音

土くえし崖のなだりの藤の花浪のしぶきにぬれてゐにけり

山川の岸の藤浪盛りなり短か花房見つつ過ぎ來し(巖美溪)

七月の日ざしは照れる高山の木原に啼ける頬白のこゑ(地藏岳)

天霧ふ瀧のしぶきの虹の輪のほのけかりけり眞日は照りつつ(親子瀧)

鈴木亮之介

夕渚ひとりと思ふ寂しさをまた降りあたる粒あらしき雨

鈴木村左兵衛

あらあらしき商賣人の世を思へば一生つくさむ業にはあらず

ひとすぢに山くだる水白じろとはるかなるかな流れゆくはては

をとめごがこころいちづなる手紙みれば世にはさまざまのさびしさのあり

若葉ばかりのゆるきなだりをゆく風やひかりのなかの郭公のこゑ

鈴井 武治

甚だしきは食ふや食はずの生活せり思ひくらべて耐へてゆかむか

鐸木 孝

街なかに想ひ継ぎつつ術もなし男かいかのみ氷截る音

瞻りつつ氷は凜しさみどりのいのちひたすらにいき立てて炎ゆ

光りあをき氷の稜に眼は凝らしわが術なさのきはまらむとす

鍛冶工はかかる日なかを鞆吹きひたすらとあり火入れすらしも

聴きとめて術なきわれや烙鐵べつきの水に觸れたるたまゆらの音

墓原や眞日のたまりに燃ゆる火のひる深うして火むら澄みつも

桑原をうちとよもして來る風の風脚疾し息もつきあへず

物音の今のひそまりを照る花のひとへに暑し大き向日葵

秋もやや日ざしあはれになりにけり菊の根方の糶殻あわのいろ

手は觸れて眞竹の膚のすべなさよ何爲なとや今日も此處にわが來し

木枯は一日のはてを吹き落ちて背戸あらはなり青竹のいろ

日をいく日氷の上に散りつぎて松の葉はあはれ色もにほはず

おしなべて木萱の音も乾きたり昨日も今日もつづく寒晴れ

流れ來て冬の日なかを降る火山灰やまなの木のもとに聴けば音かすかなり

寒雷はただ一つのみあと晴れて臘梅の花に夕日さし來も

しののめの玻璃うち徹す霜明りひとはきびしくて遂にゆづらず
今さらに何を想はむ照り寒き氷にひびく木枯の音

ふと聴きておどろく耳にくる風の庭木のひびきいたく乾きぬ(貧寒)

夜の窓に見えつつ寒き笹のいろや心錢だま金かねにかかはりて久し

わが立つる音のことりと此の夜寒坐りつづけゐて心疲れぬ

あやまちて鼠落ちたる夜半の音このをかしさを笑はじとすも

鐵道堀夕榮ひろし起重機クレーンのうごきのみ見えて音はきこえず

ひき潮に川幅狭くなりにはけり鐵材を積みて船なづみ來る

二二二六事件 二首

こなた向きて雪に潜める銃眼の事なかりけり風光り過ぐ

今やすでに事し畢りぬしのめの雪踏みさくみ兵らは嘆かず
夕いまだ赭き陽を吹く残り風桑の結ひ目も吹きほどけつつ

砂田清哉

ひとりごとひとりあそびになれし子の顔いっぱいにゆるる秋の陽
にはとりのかきちらしたる春の庭の土のしめりにわがむかひをり

角鷗東

島の松すべて程よき位置を占め五月の富士をくきやかに見す
落葉してから松の枝のとげとげしき外輪山の傾斜を攀づる

松の影松の青さに青くして池の面の澄み暗くさへあり

雨氣持ち風さへ低き地曇りに菜種盛りの野は壓されゐる

みづみづし若葉の樟の繁り深く鳥をおほへりはみ出すほどに

聖壇に濃きくれなるの花をさし晩春すでに長崎は夏

大阿蘇の草のなだりの吹き通し雲雀なきつつ高くは揚らぬ

わが過ぐる岩手水澤くもり日に蹄鐵工場の火花赤かりき

原敬の位牌塔なり土足にてのぼるその事に親しさのあり

から松の芽ぶきの青さ何の木のみどりとありてたしかに青し

この萱生抜ければ海とわけ入りし脊高萱生のどこまでも萱

江の奥の日だまりぬくし軒低にこの漁師村かたまり合へる

にははせてかき餅かじる隣の子車内ほかつきけふは神武天皇祭

朝夕のすわりどころもおのづから定まりてはや住みつきにけり

殺すべき鼠一匹殺しつつひとりさびしく寢床にかへる

尋ねこし人の話題の一言も君にふれざるが淋しかりけり

隅 青 鳥

熊本回春病院にて

背負はれて禮拜に行く道すがら傘にこまかき雨音ききぬ

汗にまで薬の匂にじみつつ遂に癒えざる病なるらし

盲目わが籠りひそけし永き日を九官鳥と物言ひくらす

電燈の光は見ゆといらへつつ何か淋しくなりて黙もだしぬ

今宵降る雨をし聞けばわが軒の絲瓜へちまもすでにすがれたるらし

ホルマリン消毒の香もそのままに我の歌稿はとどくにかあらむ

皇太后陛下の御下賜金を拜受して

かりそめに使ふべからぬ御下賜金いかにせむやと心まどへる

御下賜金の記念に買ひし眼鏡もておとろへし眼をいたはらむとす

住野山郎

烏羽玉の暗の中にし探り撈ぐ蜜柑冷たく手に觸れにけり

住谷三郎

土の上に降りしは解けて木に草に落葉につもる春の雪かも

山の根に一つ家ありて桃の花さかりに咲けり汽車より見れば

灯のもとに母の髪ゆふ妻のかげおほきく動く蚊帳に映りて

隅田葉吉

故ありて久しく別居中なる妻にひそかに逢ふことありて

別ると巷行きつつ振りかへるかなしきまみは人に知らゆな

二月七日夜、大正天皇の御大葬儀行はる。青山通りにて

いや果ての行幸^{みゆき}畏み秩父宮今日のみ供と徒歩^{かち}行かします

新しく住める家 三首

夕立の外^それて吹き立つ風涼し草野になびく竹煮草の花

抱かれて行きたる子をばくらき夜の草野に向きてわが呼びにけり

野の中に一つ見えたる大き石草ふかくなりて隠ろひにけり

掘りぬきの溢るる清水松の根を遠くは行かず砂に浸み入る(葛飾に遊ぶ)

道を來し兵隊の列草の中にたたずむ吾子^{おこ}を避^よけて通れり(戸山ヶ原)

言問橋渡りて歸る猿廻し欄干の上に猿を歩ましむ

厨べにあした來てゐる蜆賣り雨に濡れたるしじみ光れり

つややかに濡れししじみを盛り餘り榊よりこぼす音のすずしさ

叱られて泣きたることを幼な子の夜の床にして言ひいでにけり

岩の間よしたたる雫ぽとぽと落ちては濡らす露の丸葉を(甲州柳澤峠)
夕まけて眠げに膝に上る子よ片かたの足袋いづこに脱ぎし
抱き上げて子の手にさやる白藤の短き房は散りこぼれたり

下野國烏山町に移り住みて

寂しげに母のあと追ふ幼な子呼びて坐らす圍爐裡の側に
風呂の水汲めるかたへの花柘榴かなかなが来て鳴き出でにけり
草なかに落ちて音なき庭うらの胡桃の花は青きまま落つ

岳父宮城縣女川町に遊びし際同地にて急死す。行年六十九 二首

幾度かい行きかへりて見ましけむ細き入江の松青き島
縁ありてはるばる來つつ死にましぬ冬の海荒るるさびしき町に
春いまだ冷たき朝の庭土に鶏なまは卵を産みおとしたり

梨畑の棚かげ暗く散る花の晝さへ清すがしその白き花

水みづ引ひ草くさの花を挿したる子の机父のつくゑと一つ室に置く

鬼怒川の長き船橋渡り來る一つ灯かげはいつまでも遠き(鬼怒川)

住みつきて日淺き町か夕ぐれに鐘つくみ寺いづべと知らず

郭公のいく日離れず啼く山の藤の花房色あせにけり

霧過ぎてしばし照る陽に笹の葉の乾く間迅し日にいく度ぞ(下野國西明寺)

淺間山の灰白く草に降りし日の夕べのラヂオそのことを言ふ

岩の上に散りたまりたる枯松葉ひと時の風にこぼるるもあり(筑波に登る)

澄 田 水 聲

閑古鳥の鳴く聲さびし山に向く障子をあけてひとりゐにけり

秋と思ふこの静けさや朝明を吹井の水は音に澄みにけり
山深く住むともしさよ夕まけて灯す石油を買ひて來にけり
おほよそに思ひゐしよりみんなみの麥生の果に阿蘇ヶ嶺は見ゆ
遠嶺呂の容すがた静けしほのぼのと今朝は雪解の靄立ちにけり
雪解靄ひすがらけぶる猫柳の上はっえ枝ほのかに新芽たつ見ゆ
雪解けてつのであるぬくさや小山田の畔くろに思はぬ水湧きて居り

末 田 晃

樂浪古墳發掘

自動車をはしらせて來し平原ひらげんに古墳掘るひとはしづけかりけり
秋はらに鍬をならしてあけし扉とや古墳にくらく水たまりをり

平壤にて

妓生學校にまなぶ少女のうらわか秋日の庭に石蹴りあそぶ

國境に町近ければきたぐにのさみしき空には爆撃機飛べり

末 廣 富 士 子

病牀のをりをり

今宵はも今いもうとの出で行きし音樂會を思ひつつ臥す

我が立てる態をはじめて見しといふ君がいぶかり何かさびしき

病むためにうまれ來しかと床に臥しなげく月日も久しかりけり

末 宗 卯

飛行機の浮力定理を只一人圖書館に入りて我は讀み居り

單葉の飛行機一機夕焼くる豊旗雲をとどろかしくる

湯上りの我が黒髪をときながし月夜の白き床に入りけり

瀬崎 三郎

目に立ちて白髪も多くなり給へりかなしやけふも髪染め給ふ(母)

瀬下 義友

伊那谷はさびしくもあるか燈ともさぬ電車停留所に月明りさす
横ざまにふき降る雨の街をきて露地に曲ればしづかにふりぬ
川せばめつもれる雪のあひだをばゆるく流るるみづ見えにけり

上海通信

たたかひのしまらくやみし上海に杏桃きょうたうの花咲き散りぬとぞ

病みて

信濃にはすでに絶えたるこほろぎを安房の海べに来てききにけり
みつつぬし夢のつづきのごとくにて醒めしうつつに泪ながれをり

瀬野 喜義

洗場のすみに捨てたる菜の屑に今朝うすうすと霜おきにけり
落ちたまる庭の松葉につゆじもの凍みつく今朝の寒さを思ふ
消えのこる道べの雪に地靄して今日ふる雨の寒くはあらず
こまやかに芽ぶきととのふ谷あひにひねもすさわぐ春鳥のこゑ

病 閑

このあした心あかるし庭石の雨に濡るるをひとり見てをり

紀州野上病院にて

朝々の目ざめしづかにあるときは癒えて歸らむことのみ思ふ
ひむがしの生石山嶺（いし）を吹きこゆる風あたたかくわれをやしなふ
ふるさとの山の草家に足る日なくはたらきたまふ母しこひしも

おしなべて若葉しづけくなり
にけり谷間にとほる鶯のこゑ

瀬野 錦藏

秋たてば空のはるけさ由布岳ゆふだけの一筋道もけぎやかに見ゆ

世古 四郎

膝抱きて日向の縁に吾が居れば子も來てい
だくその小さき膝を
夜に入りて吹雪つ
のれば冷ゆるらし
既に馬の立ち騒ぐ音

世良 田優子

ほたる草瑠璃色きよく花咲けば朝夕あさゆふにつゆはしげくなり
つつ
雪のうたうたひくれよと幼子はわれに言ふかもこのふる雪に

こゑのよきかの苗賣りは來りけりにはかに胸に湧くうれひかな
水上はうす紫のもやふかく流れ來むかふ朝の宇治川

そこここに吾子の泣きごゑあるごとし目ざめてきくは落葉なりけり
床にゐて見たる垣根の山茶花も散り果てにけり吾子も逝きたり

勢 多 朗

北海道禮文

トンネルは八つつづけりトンネルの間に見たる海の明るさ

妹 尾 豊 三 郎

腹白の魚をすくひて徐ろに大き四手は水離れたり

妹 尾 鍊 三

大阪に在す母上より味附鱒を送られて一首

陸奥の秋田あがたの鑛山にゐて浪華の魚を食ふは嬉しも

たまさかの當直なれば奉安所の鍵は枕の下に寝むとす

清板好子

父死にて年賀の客のへりし晝を母と二人が餅焼きて食ふ

清家瑩三郎

久邇宮殿下藤澤カントリークラブ御始球式を拜して

うら若き御力雄々し白球の弧線ほがらかに碧空に入る

清家正子

朝顔もへちまの花も瞳めにとめて吾子みこは喜ぶ朝のめざめに

清藤二實子

子を負へるすがたさびしく野にうつしわがうしろべに月のぼりたり

病むなかれころぶなかれとそだてしが赤き帯する女童となりぬ

鯉のぼり入るとゆふべ見上げたる竿の先べにほそき月見ゆ

大輪のしろきダリアを咲かshめて静けくゐるとひとには告げむ
青蚊帳のなかにさびしく病める子にせみをとりきぬなかぬ子ぜみを
さむざむと夕風吹けばくりやべに干魚あぶり人を待たむとす

清野 静子

暖かになりなば癒ゆと病む友になぐさめ言はいひつつもとな

清野 宗佐

闇の中呼吸をすれば暗黒は鼻より入りて身内めぐるも(神經衰弱)

清野 祐彦

山形縣左澤町大火

十錢二十錢を貯へ求めしわが本がひとかたまりに焼けをるならむ

關 あさ子

朝まだき窓の硝子戸搖り過ぐる電車の音も聞き馴れにけり
暖きみ冬越せりと母そはがよろこび給ふ文届きたり

この頃の早りつづきや今朝庭にもぐらが上げし土も乾きぬ

關 卯 一

蕎麥打ちて父の位牌に供へたり父が好みしこの手打蕎麥

關 寛

靱すりてほとほと疲れいねたらむ妻のいねしを吾れ知らざりし
秋蠶の上簇をへてうら安し妻も今宵は髪すきにけり

五月雨の晴れ間を出でて妻と摘むさやゑんどうは冷たかりけり

關 せ ん

汚點多き疊に明る日のひかり朝寢しをりてあたたかきかも

すこやかなる人らが夜なべ終へて食ふ餅もちの焦げるにほひするかも
野仕事にいづる人らが垣越しに聲かけ行くはなごましきかな
物言へば己あはれになりて来るよりどなき日は臥りつづくる

關 德 彌

山の上はひたに静けし杉の葉の落ち枝のもゆる音のみぞする
月明り晝の如しと出でて見る向うを歩み人はゆきたり
月かげの明るき道を踏みゆけば吾にかかづらふことなき如し

岩手大瀨川村松林寺林に遊び亡兒を偲ぶ

時の間に暗くかげりゆく遠方の寂しき笹の藪原を見つ
をさなごよここの林の松風のすがすがしきに來りあそべよ

關 み さ を

まろまろと肉づきてゆくさびしさや心にうれへなき人のごと
眼さむれば小犬なきやまず搔卷の天鷲絨の襟もつめたき夜かな

新濁にて二首

はまなでしこ砂のなぞへに咲きつづき雲雀なく春となりけるかも
國境の山に雪ふり冬されば流人のごとも相あはれみぬ

六月のながき日をなほ惜しみつつゆふべをおそく遊ぶ子のこゑ

茶をつみてあめりかへ行く船ならむ五月の風に光れるますと(清水港)

友が手のまろくあたたかき感觸が時雨るる歩廊を明るくするも(歸朝せる友)
何一つ重心となるものもなき官舎の庭の水仙のはな

東 京 三 首

見るかぎり神宮外苑の風景なりこの屋上にこうひいをのむ

都會交響樂の指揮棒をふるふ交通巡查十字路の上の不思議なしづけさ
吾子^{あこ}が吹く麥の草笛五月野の青のそこひにすみとほりたる

きり雨を睫毛に感じ初夏の明るき街を歩みけるかな

谷こえて青き海より吹きあぐる嵐にさわぐ山みな若葉

青あらし山の若葉をとよもせば海にも白き波たつが見ゆ

要山^{かなめやま}を月離れたりありなしの風をたのしみものいはずる

久々にひとりとなりてすがしけれ家ぬちひろらに風吹きとほる (獨居)

石油すとおぶの燃ゆる焰もわびしけれ晝ながら灯をつけてものいふ

關 百合子

あてどなく歩み來りて山道の夜風の中に銀河仰ぎぬ

うすべにの花びらもちて海棠は櫻散る日に咲きそめにけり

關 得 一 郎

崇徳天皇白峰御陵

巖間よりしたたる水をせきためてみたらし小さしこの御陵は

阿讃國境大灌寺

通夜人の今宵多きに日の暮れて山のみ寺は米つきはじむ

阿波國大步危谿谷

谿深く瀬鳴とどろく峽山に啼く鳥が音は短くて止む

關 口 登 記

朝あけの驛の清水に口そそぎしばし^な經てれば風をさまりぬ

昭和十一年六月北海道日食觀測

日食の迫りし時の歌ありて父の電報五十字を越ゆ

關 口 正 雄

兵士等は戦に行きてひつそりと兵營のつつじ今さかりなり

關 島 桃 子

濡縁に梅の花びら散り敷くを素足のままに夕べ掃き居り

桑かきて泥つきし手は垂る汗を拭ふ術なく垂るにまかせぬ

關 戸 信 次

夜の色海を被へり米山はさびしや寝るに枕だに無き

さらにまた佐渡に向ひぬわが旅の果は命のはたと異り

山幾重わけて流るる溪川もうき戀のごと瘦する十月

河の石この朝ぬれぬ我よりもまづ秋霧の來て泣きにけん

山に立ち人戀しけれ心にも遠き境の見ゆるなるべし

冬の日も二つ並べる山ありぬ寒き箱根の茅原の上

笹山の夕かぜの色海にしてなびく藻よりもほのかなりけれ

草濡れぬ那須の峯より會津へと越えつる雲のしづくならまし

こすもすが草に伏しつつ咲くことも病める我子のおもかげとなる

病院のうしろの山をひとりゆく病む子のために花を摘まんと

みちのくの板留いたどめの夜の外風呂のあたりに見ゆる秋草の花

馬のごと溪の早瀬に身を反らし流るることを拒む流れ木

溪に來て石に坐れば我肩に觸るる木賊とくさもなつかしきかな

鳶はやく秋に染みつつ眞紅なり十和田の路の水門の上

みづうみの秋のなぎさに浸すとき我が手も青し石の如くに

悲しみに若し色あらば木深くて光の射さぬ奥入瀬おくいりせの水

山晴れて陸奥灣光るわがみちに落葉松の葉の散りこぼれつつ

關根 九連城

柿の葉の大き青葉の散りしける朝山道は柿の葉の匂ひ

關根 幸二

曇り日の午睡よりさむるひそけさや空わたる鳥のゆくへ目守りぬ

二三日たち迷ひるる颱風に今朝もまばらに雨ふりてをり

立てつけの悪きこの家に移りきていらだちにつつ十日まり經つ

さ庭なる赤檜の葉に風ふきて相鳴る音は雨かと思ふ

病む友が部屋の障子のあかあかとあらはなるかも畑の中に

枯草に淡々と日のさす山は瘦せたる松がまばらに竝ぶ

むらがりて我のめぐりに飛ぶあきつ山深くして日のさす路に

日のあたる山路にむるるあきつはの石いしの上にして衰ふるあり

關 根 孝 三

一人ゐるこの山鳥夕ちかみ青葉明りの冷えて來にける
朝明けてこの河口に歸り來る舟は漁りの灯を消さずをり

關 根 源 吉

葦原の彼方展けて日に白くかがやく浪はまなくひまなく

關 根 文 之 助

街中も夕べとなれば街路樹の葉のうごきさへきくにすがしき

關 根 正

世に生れていまだも知らぬいくつかの愉しきことを思ひつつ寝む
花ながら漬けし寒菜の保もつ味は朝夜食べつつ飽くこともなし

日かげればすぐに夕づくふるさとは斑雪はだれの峽にたかき水音
炬燵して君と向へば遙々と吾は來しなりかく逢ひたくて
濡桑をひとり摘みをり鸞鳴うそきてなにか儂なき日暮れ山畑
昨日まで一途にひとを戀ひけるが今日の日暮れにいきどほろしも
わが立ちて閉す窓べに焼土の香をうちつけに驟雨きたりぬ
信號手配車終りしカンテラを携たづげて月夜の貨車くぐり出づ
葛西びと家のかたへの入江より田舟に乗りて荷役すらしも

造船所

戸にひびく壓力試験濟みしより造船所暮れ鷗來て舞ふ
鐵の屑旋盤機より飛び散るを踏み渡るとき人の匂ひす
灼鉄に龍骨板を打締むる響音のなかに人呼び合へり

關根 よし哉

さくさくと道通る人わが家にむかひ來る如し雪氷る夜は

朝の陽は障子一面にかがよひてとくる垂氷の影をうつせり

關谷 和夫

疑獄疑獄果さへ知らぬ現し世に細々生きて憤ろしも

關谷 靜枝

梅の實はいまだも青き枝のもと鳥の空巢が霧にぬれぬつ

關井 こう子

梅酒を瓶に作ると青梅のこちたき皮は端居して剥く

仙波 青都

母は子を夫は妻を呼ぶ聲の間にひびきて流され行きし
裸にてねる慣習は悲しかも裸身の儘のしかばね多し
學校に通ふ部落の道の邊に子供の屍あまた出でてふ

千家 照子

大空を山をわが身をひたしつつしづかに秋は來りけるかも
竹にそよぎ棕櫚の葉に鳴り榧かきにふくかぜの音をぞききわけて住む
ひとつ世に生れあひたるよろこびをさびしけれどもさいはひとせむ
ふくみ音に鳩なく春のしづけさにわが思ひごととけて行くかも

千家 經麿

皇國すめくにの遠荒國とほなのそのかみをわが大國主はをさめ給へり(我が國造家
の祖を憐ぶ)
我がなせることの悪しきはせめ給はずわがむなしさを叱り給へり(あること
ありて)

汝がなせるあやまちごとの大いなるに心おぢつつ息づきてあり(或人に)

病みつかれまどろむ母や部屋のうちのをぐらきに向ひ息つきて居り(母)

我が心知らしめがたしかたくなに言ひはる人に向ふさびしさ(うるさき人)

馬幾つ牛幾疋とほりけむ稻佐の濱の日ざかりの砂(夏)

三瓶さんべいの山の荒肌まざまざと夕日照る見ゆ風おちぬらし(旅及び故郷)

朝間より雨ふりしきりほのぐらき土間にひろへる夕刊のしめり

母一人さびしき旅にいでたまへり青桐の芽の日に日にととのふ(母)

をみなごは幼けれども思ふらしつむりに觸れてさみしきものを

いさかひの後のきまづさ友のするしはぶきのこゑをにくみ思へり

田の畦のひとむら薄ほにいでて夕陽にひかる穂のやはらかさ

入りつ日のかたむく空の色あせて松の緑のひそけき明り

遅れ咲く曼珠沙華かも土ぼこりはちまたに白くたちゐたりけり

赤松の幹をいだきて居たりけり赤松の幹のにほひさびしも(海の回想)

夕庭は四方のもの音絶えにけり大きくひらく夕がほの花

千家 すぎ子

野風呂の火闇に赤けれ聲ありて去らぬ暑さの禮交し居り

曾 我 弘

春さりて今日を日すがら降る雨に一尺ばかり雪減りにけり

曾 我 信 子

夕つ靄海より立ちぬ麥崎の岬の松の見えずなりけり

曾 根 光 造

實を採りし紫蘇一畑しもがれて冬日が白し暫し立ち見む

曾根 正巳

うらはかなく出で來し石の門ちかくげんげの花は風に搖れるぬ

曾根 正庸

わが庭に花を見に來る人おほしすこやけき人らたぬしかるらし
徴兵検査猶豫願ひをこまごまと筆とり書きぬ足なへ我は

女なき家のくらしや梅雨にいりて夕べゆふべのひそかなるかも

家蔭に解けのこる雪は凍りたるごとしさむざむ見えて三日經にけり

草山のま晝しづかなり大いなる松の下にて飯食ふわれは

常臥せば小窓を高め隣家に咲く木蓮の上枝のみ見ゆ

すくすくと木賊のびたつ春の日にもうき心人を戀ひをり

來る友らいまはなくなりし枕べに秋草活けて慰まむかも

褥近くとどく朝日のしたしもよ軒の夕顔きりはらはれて
庭なかの枯草むらに照る日光ひかげつかのまにして寒き日頃や
家垣に久しく咲きし臘梅もしをれて寒の雨にぬれをり

曾山 祐博

苗の芽のやや伸びそめし苗間田にふえふきぐさはいちはやく立つ
病み臥す我にかまはず妻子らは西瓜もろこし何なりと食へ

漬 菜 二 首

漬桶につめし青菜の反り葉にもさやさや鹽のふりかかると音
漬桶にかけししめ木のきしむ音夜ふかく起きて重石おもいしをなほす
栗の木の皮の煮汁に染めあげて栗皮鼠かほねずと名さへ親しき

長男芳鹿死す

子の柩かかれて家をいでゆけり狭き戸口に觸れてゆきたり
もえるだけ燃えて消えたる線香にせめても我の心足るなり
その命絶えける際に大き息一つしたりときくがかなしき
日を経つつ子が新墓の盛土の落ちつく見ればまうらがなしも

十河道之介

我子の飛行家たらむとするに同意して

學問をあきらめし子を諦めて希ふがままにうち向はしむ

十龜儀三郎

春じめり朝は地靄のたつ野良に聳る鴉のたどたととるつ
風落ちてよき小春なり門の田に稻抜ぐ音の日もすがらなる
船の一つゆけるあたりを黝ずみて沖の時雨の移りつつあり

淡雪のほどろほどろに降り積みて日のくれぐれはものの戀しさ

園 瀬 眞

鐵兜着たままをがむ日輪の赤々として朝のかげろふ(揚子江岸敵前上陸)

園 田 信 子

灯を下げて文書く母も鴨なくとわがつぶやけば手を止め給ふ

園 原 信 夫

この國の春は鯨の賣り聲の風曇りする日となりにけり

白萩のけさのうねりや瀬がしらに秋まだあらし陽のさしてゐて

この山の萬朶のさくらいつとときに吹雪となりて散る日を想ふ

園 山 喬 三

はざま田に稻架はて解きをればちひさなる兎とびいでて畦駈けりとぶ

ひる間のあかるき庭に母ひとり明日賣る蕪東ねてゐるも

蘭 邊 國 臣

大いなる山のなだりの湯のけむり月の下びにほこほこと白し
牛三頭ひき登る山路の霜柱日の出に向ひ花のごと見ゆ

背に高くたきぎをつめばおのづから麓のかたに向きなほる牛

柚 田 勝 重

相模嶺に今日雲晴れてはだら雪かがよふみれば人のこほしき

染 野 巖 雄

神風機 ロンドンへ飛ぶ

世界地圖指に追ひつつ神風號の快翔のあとを思ふはすがすがし

藏王山に登る

紅どうだんむらがりしづくあたりより霧ふきあげてみちをとざしぬ
ふた國へ吹き分けおとす山疾風わが被る菰はちぎられむとす

染 谷 進

寒き夜の室の灯影を貫きて細葉するどき鉢の支那蘭

さみどりの細きその葉の描く線我にさみしき鉢の支那蘭

東輝庵の老師を訪ふ

東輝庵這入りを埋むる穂すすきの白き穂なみのうごくともなき

聲ひくくかたる老師にうちむかひ命幽かに我はありけり

東輝庵丘下り來て見返ればひとつ雲ゆく背面の空を

大和へ旅たたむとして

幾年を書に讀みつぎ目に描き戀ひたる大和今は見なむかも

奈 良

道のべの木蔭の闇よ大き鹿うごめきいでて我に寄り来る

飛鳥の岡寺に宿る

いにしへの義淵が寺に夜を來たりあたたかき風呂ふるまはれけり
大き寺人氣のあらず身じろげば我がつかる湯の音たててこぼる
時雨よと障子あくれば電燈のとどくかぎりを雨足白し(又)
白き雨ま直ぐにふり來^き木の葉たたき泉水をたたき庭石をたたく

吉野宮趾

幾坪と數へあへぬべし畏しや三代^よの帝の大宮どころ
秋を來てみあらかのあとにわがたてば櫻の黄葉^{もみぢ}間なく地に散る

宮瀧にて

桑畑の畝にころぶす離つ宮の礎石を踏めば古へ思ほゆ

野の宮にて

たもとほりゆきすぎがたき野の宮の古櫓の下はまたも我が來む

落柿舎

庵守は街に出でてや雨戸さししづけき軒にこほろぎの鳴く
今日の空すみきはまれり柿紅葉深きくれなるの滴りなむず

奥澤界限

夕けむりたつる藁屋の軒めぐる孟宋藪を雀とよもす

大き藪ただに聲なりここに住める雀の數のかぎり知られぬ

俄に病にたふれて絶對安靜を續くること十餘日なりき

簡素なるものこそよけれ花籠にひとのさしたる寒木瓜の花

我が亡き父の恩師岩溪裳川先生をはじめて訪ひけるをりに

清らなる室にもなく朝の日のかがよふ窓に文机ひとつ
わが父を導きましぬかしこやと常思ひたる先生をみぬ
子と生れ父の姿は知りぬわれ父を教へましし先生をみぬ

染谷ふみ子

雷の丘すぎくれば飛鳥川光ましろくながれゆく見ゆ

作者略歴

さの部

佐川 力

三十二歳。愛媛縣伊豫郡砥部町に生れ、同縣小學校教員。昭和七年頃より作歌、師無し。日本短歌、やまぶき等に居りしも昭和十年「多磨」の創刊されしより入會、今日に至る。

佐久間 安生

二十一歳。福島縣石城郡川前村大字上桶賣字根本一九に生れ、同地に現住。農業。昭和九年十月雲泥短歌學園に入り、昭和十年一月より歌と觀照社に入り今日に至る。

佐久 良子

本名内山量子。富山縣婦負郡百塚村宮尾に現住。昭和五年一月アララギ會員となり、齋藤茂吉氏の選を受く。

佐倉 八洲子

十八歳。靜岡縣小笠郡佐倉村に生れ、同地に現住。神社に奉仕。歌を作り始めて日淺く獨學。

佐後 淳一郎

三十三歳。近江犬上郡安曇村に現住。天台宗僧侶。大正十一年の頃「短歌雜誌」に投稿、松村英一氏の指導を受くる傍ら、又若山牧水氏を知る。同十五年「自然」同人として尾山篤二郎氏の薰陶を受くるに至りしも、昭和三年「詩歌」復活と同時に入社、前田夕暮氏に師事し爾後六年間詩歌同人たり。のち昭和八年京都より「自然」の復活を見るに及び、之に復歸して今日に至る。其間前川佐美雄氏らと知り日本歌人會員に加はる。著書に「土のしめり」(大正十五年刊)あり。

佐今 晩葉

本名齋間萬。卅六歳。山梨縣東八代郡永井村に生れ、川崎市南幸町一四三〇に現住。鍍金工。作歌十六年、「あしかび」「霸王樹」を経て現在「心の花」に屬す。

佐々 黙々

本名治之。明治廿一年四月十五日、愛知縣丹羽郡千秋村大字加納に生れ、同地に現住。農。大正三年「アララギ」に入會、島木赤彦氏の

指導を受く。名古屋短歌會の同人たり。歌集「尾張野」あり。

佐佐木 信綱

明治五年六月三日、伊勢鈴鹿郡石薬師村に生る。歌人にして歌學者たりし佐佐木弘綱の長男なり。幼にして家學を受く。同十五年四月上京す。同十七年九月東京大學古典科に入學し、二十一年七月卒業。民間にありて和歌の普及に志し「日本歌學全書」の編纂にたづさはり、「歌の葉」等を著す。同二十七八年暇役後、歌壇に革新の機運興るや、落合直文、

與謝野鐵幹、正岡子規の諸氏と新風を唱道す。後、竹柏會を設け、同三十一年二月、石樽千亦氏と共に雜誌「心の花」を刊行して今日に至る。同三十七年一月南方支那の旅より歸るや、チャンパレン教授の言に指示を得たり和歌の歴史的的研究に専心す。翌年七月、東京帝國大學文科大學講師を囑託せられ、爾來昭和六年迄二十六年間、和歌史、萬葉集等を講じ、萬葉學の建設、その基礎的研究に努む。明治四十四年、文學博士の學位を受け、大正六年、帝國學士院より恩賜賞を授けらる。同年御歌所寄人を命ぜられ、明治天皇御集、昭憲皇太后御集の編纂に従ひしが、御集完成後、寄人を辭す。昭和九年七月、帝國學士院會員を命ぜられ、同十二年四月、文化勳章を拜受し、同年六月帝國藝術院會員を命ぜらる。著書に「日本歌學史」「和歌史の研究」

「國文學の文獻學的研究」等、歌集に「思草」「新月」「常盤木」「豊旗雲」「鶯」「椎の木」「天地人」等あり。橋本、武田、久松氏等と作成せし「校本萬葉集」あり。また國文學史上未知の資料なる「琴歌譜」「秘府本萬葉抄集」等を發見紹介し、且つ「扶桑珠寶」三十六部を刊行す。歌人としては「深く廣くおのがじしに」といへる主義の下に指導す。なほ夙く軍歌童謡を作る。「あな嬉し喜ばし」「煙も見えず雲もなく」「雀々今日も亦」等人口に膾炙せり。

佐佐木義之 明治二十八年三月、廣島縣高田郡井原村に生れ、大正十三年四月一日、兵庫縣武庫郡本山村に歿す。行年三十。大正十年三月、東京帝大法學部卒業。

佐佐木治綱 三十歳。東京市神田區小川町一に生れ、同市本郷區西片町一〇に現住。日本放送協會文藝部員。父佐佐木信綱に指導を受く。

佐佐木康藏 明治四十四年五月十七日、宮城縣登米郡佐沼町丸ノ内七に生れ、仙臺市大佛前三佐藤養治方に現住。昭和十年より本格に作歌、一路に發表し居りしも同年五月同誌を脱退し心の花に入會、石樽千亦氏に師事して現在に至る。

佐々木綾子 大正五年三月二十三日、横濱市山手町に生れ、

大津市三井寺山内に現住。小學校訓導。昭和五年より作歌、昭和十年五月「潮音」に入社現在に至る。

佐々木けい子 出生地不明。神戸に住み、昭和七年二十三歳にて自殺。昭和四年始めて歌を清水千代氏に見せ、「ごぎやう」に入社、自殺の年まで四年間作歌す。死後、清水氏の手にて遺稿集「遠松風」を發刊す。

佐々木曠一 三十一歳。京都市に生れ、同市上京區小山板倉町七〇に現住。立命館中學校教諭。大正十年作歌を始む。アララギ、帚木、香蘭を経て現在眞樹同人。

佐佐木古貫 祐言。明治十二年神戸市に生る。神戸市元町善照寺住職。京都本願寺文學寮時代より與謝野寛氏と相識り、次で哲學館時代に安江秋水氏と交あり。更に早稻田に移り、格堂、湖月、里靜、巴子等の根岸黨あるを知り、漸く日本派の歌を作る。後、佛教誌「靈光」に之を掲載す。明治四十三年一月關西根岸短歌會同人。同年九月武庫短歌會創立同人。大正元年十一月物故。

佐々木三郎 二十八歳。青森縣上北郡下田村に生れ、同郡百石町字一川目に現住。小學校教員。昭和五年九月より、森山謙一郎氏に作歌を習ふ。同

年十一月より「潮音」に據り、太田水穂氏に師事して今日に至る。

佐々木春城 本名仲義。明治三十三年十月十六日、島根縣能義郡荒島村に生れ、同地に現住。計理事務員。大正十一年頃金子薫園氏の「光」に投稿す。地方詩歌誌「曼陀羅」を創刊せしことあり。現在俳誌「石桶」幹部。合著詩集「青柳の湖」及民謡集「そりこの唄」の著あり。

佐々木杉子 本名西村ちやう。三十三歳。山形縣西置賜郡長井町に生れ、同町境町に現住。教員。結城良草果氏に師事。

佐々木精二 舊姓相坂。四十二歳。大森區雪ヶ谷町六三に現住。著述並貸家業。在郷時代菊池知勇氏主宰の朔風社々員たりしが、大正五年上京行路詩社同人となり「アララギ」に入會、後、「青垣」に加盟す。昭和九年より再び菊池氏主宰の「ぬはり」同人となる。

佐々木惣一 六十一歳。鳥取市に生れ、京都市下鴨泉川町一に現住。元京都帝國大學法學部教授。作歌經歷といふほどのものなく、ひとり作りて樂しむのみ。

佐々木太道 明治三十四年九月、山形縣東村山郡天童町に

生れ、山形市上町正徳寺に現住。僧侶。曹洞宗立駒澤大學卒業。大正十二年より岡本かの子氏に師事す。

佐々木とし子

四十二歳。東京市京橋區木挽町八ノ一、別府方に現住。昭和四年六月アララギに入り、岡麓氏に師事す。

佐々木知恵

本名知恵子。京都市に生れ、長崎市若瀬道町一四七に現住。霸王樹社準同人。

佐々木忠治

大正二年五月七日、宮城縣栗原郡鷺澤村字袋往還東二ノ二に生れ、同地に現住。農。昭和十一年春より作歌、爾來婦人公論短歌壇に於て、釋道空氏の指導を受く。

東京市淺草區聖天町三六に現住。會社員。十五六歳頃より作歌、二十歳頃僅かの間創作社友たらしことあり。

佐々木博太郎

四十一歳。神戸市下山手通り三丁目に生れ、

佐々木章子

廿二歳。朝鮮釜山府西町一ノ四〇ノ一に生れ

滋賀縣栗太郡草津町五ノ九八〇に現住。滋賀縣草津高女在學中より短歌に興味をもち、昭和十二年五月秋田雷雨氏の青櫻創刊と同時に入社す。

佐々木牧童

本名藤之助。五十一歳。長野縣南佐久郡青

沼村平林に生れ、北海道小樽市緑町に現住。小樽高女國漢教諭。二十歳より作歌、「佐久新報」「信濃毎日新聞」に作品發表。白夜會同人となる。爾後三十年、歌興わく毎にぼつぼつ作る。

佐々木睦人

二十二歳。廣島縣賀茂郡廣村字横路に生る。

海軍工廠職工。十七歳より作歌、二十歳にてアララギに入會す。

佐々木義諷

舊姓田中。三十二歳。岡山縣眞庭郡勝山町大字勝山五五三に生れ、津山市大谷二七六に現住。小學校教員。昭和六年四月、法政大學高等師範部國語漢文科に入學し土屋文明氏につき作歌法を學ぶ。

佐々木元夫

明治三十二年三月三日福井縣坂井郡三國町に生れ、神戸市灘區高尾通一ノ五に現住。銀行員。昭和五年アララギに入會。

佐々木善夫

本名善作。明治三十五年八月八日、青森縣下

北郡易國間村に生れ、樺太敷香郡敷香町大通リ北五樺太敷香時報社に勤務。初め林務官を志し大正十一年渡島せしも成らず、轉々して現在前記の印刷部長たり。三十歳頃より獨學にて作歌、昭和十二年三月青垣會に入會し今日に至る。

佐澤波弦

本名儀平。五十歳。徳島縣那賀郡坂野村赤石

に生れ、大阪市住吉區天王寺町三二五三に現住。大阪市帝塚山學院教師。明治末年より作歌に親しみ、郷里にて南海の子、合歡花等の歌誌を出し、後、大正十三年霸王樹入社、現在同人。

佐澤幹子

大阪府南河内郡新堂村に生る。大正十三年佐

澤波弦に嫁し、大正十四年霸王樹入社。昭和五年病床につき六年六月十五日歿。享年二十六。遺稿「佐澤幹子歌集」あり。

佐生哲男

三十一歳。東京市麴町區に生れ、杉並區松庵

北町一三一に現住。會社員。昭和三年金子薫園氏の「光」社友となり、同五年退會後島元義輝氏の「朱船」同人となり今日に至る。

佐田節子

明治二十九年十一月三日、近江八幡の青果間

屋佐田源治郎の長女として生る。二十一歳の折著體を手術せしに初まり、肋膜炎、腹膜炎、腎臓、肺結核、膀胱結核等、次々或は二三同時に病み、殆ど病床に日を送りしまま昭和九年三月三十日、二十年間にわたる病床生活を終り死去す。時に三十九歳。歌は大正十二年頃より初め、同十五年七月橄欖社に入り吉植庄亮氏に師事す。

佐治斗牛

本名勇平。明治八年十一月二十日、福島縣大沼郡高田町に生れ、同縣若松市中原町桑畑に現住。元中等教員。橄欖社創立より同人として今日に至る。また「日光」同人たりしこ

とあり。

佐塚實太郎

四十三歳。靜岡縣志太郡大長村伊太八七四に

生れ、同地に現住。小學校教員。昭和七年三月より國民文學社に入社し、爾來今日に至るまで半田良平氏の指導を受く。

佐藤哀朝

本名篤壽。福島縣伊達郡茂庭村に生れ、昭和

三年一月、三十一歳にて歿す。鐵道省職員。福島刑務所看守等。大正六年尾上榮舟氏主宰水廻社友。同七年五十嵐茂平、山倉眞砂夫氏等と純短歌誌新聲、奥羽路編輯發行。

佐藤五十穗

本名五壽雄。大正二年三月三十日、三重縣北

牟婁郡尾鷲町中井浦に生れ、昭和十三年二月六日死亡。「島人」「志支浪」「霸王樹」等に關係す。

佐藤彰矩

本名裕。三十一歳。宮城縣栗原郡金田村宇川

口中町に生れ、同縣遠田郡大貫小學校に現住。教員。昭和元年頃、金子薫園氏主宰「光」の會員となり指導を受け、其の後「短歌雜誌」「詩歌」を経て、昭和六年頃より「歌と評論」

に入會、現在に至る。

佐藤旭

二十五歳。岩手縣膽澤郡姉體村字吹張二五に

生れ、滿洲國山城鎮鈴木部隊本部に現住。陸軍歩兵軍曹。昭和十年四月より作歌。「琢磨」に投書し菊池劍児の指導を受く。

佐藤一郎

四十一歳。信濃北佐久郡三岡村に生れ、同地

に現住。農。窪田空穂氏に短歌の手ほどきを受け「國民文學」に學ぶ。後退いて地方同志と相寄り作歌。

佐藤かち代

三十二歳。島根縣大原郡加茂町大西に生れ、

同縣簸川郡平田町上田町に現住。昭和四年一月より心の花に入社。昭和六年九月より朱鳥に入社。昭和十年九月より草炎に入社。

佐藤杏

本名要。二十九歳。福島縣信夫郡大笹生村字

上川原に生れ、同郡笹谷村字中町清水方に現住。農業。昭和元年より作歌。昭和六年清水延晴氏と「梧桐」を創め、昭和八年「歌と觀照」に入社。現在無所属。

佐藤喜司雄

三十二歳。山形縣西置賜郡東根村に生れ、同

地に現住。農。森青村氏に師事、その歿後は歌壇を流轉し現在「立春」の同人たり。

佐藤きの

五十七歳。長崎市に生れ、東京市目黒區上目

黒五ノ二四一二に現住。昭和の初め頃京都に遊び下村關路氏に師事、その後歸京して笹村良水氏の指導をりけ今日に至る。

佐藤金造

號微洞。六十歳。岡山

郡金光町に現住。金光中學校長。曾て中村秋香氏の指導を受けしこあり。その歿後はただ夫妻の間にて作歌を樂しみ合ひつつ年を経來りしが、近年佐佐木信綱氏に師事す。

佐藤きよし

本名清。三十九歳。茨城縣筑波郡大穗村に生

る。小學校教員。大正十五年より昭和六年「とねりこ」廢刊まで河野愼吾氏に師事す。

佐藤堯空

三十九歳。福島縣伊達郡小綱木村に生れ、同

郡川俣町東圓寺に現住。僧侶。小僧時代より歌壇と交渉なしに氣儘に作歌し、近時雜誌東邦に發表。

佐藤熊司

二十九歳。千葉縣香取郡常盤村東松崎に生れ

同地に現住。農業。昭和四年土筆入社、昭和八年橄欖入社。

佐藤功一

明治十一年七月二日、

村大字小金井に生れ、東京市小石川區指ヶ谷町に現住。早稻田大學教授、建築技師、工學博士。歌は家庭をもちたる頃より日記のはしに折々かきとむ。

佐藤 慶子 三十四歳。福山市東町に生れ、同市西町鳥越

内に現住。從兄故石井直三郎氏に師事。

佐藤 佐太郎 明治四十二年十月十三日、宮城縣大河原町大字福田に生れ、東京市麴町區九段一ノ八福田アパートに現住。幼時一家を擧げて茨城縣に移住す。學歷なし。大正十五年アララギに入會、齋藤茂吉氏に師事し現在に至る。

佐藤 定憲 三重縣鈴鹿郡龜山町に生れ、滋賀縣滋賀郡坂本に現住。比叡山西部大學にて修學中。小學生の時より作歌、昭和十年五月「いぶき」に入社、後「自然」に移り今日に及ぶ。

佐藤 正一郎 二十六歳。岩手縣一戸郡金田一村に生れ、青森市蛸貝町四三に現住。商店員。昭和十一年十月アララギに入會、現在に至る。

佐藤 茂雄 三十二歳。横須賀市逸見町八〇に生れ、同市池上町四一〇九に現住。海軍工廠工員。大正十五年常春社に入社。昭和九年同社を退き、田口白汀氏主宰の「現實短歌」創刊より同人として現在に至る。

佐藤 信也 二十五歳。福島縣南會津郡八幡村に生れ、仙臺市小田原長命莊、青沼方に現住。官吏。昭和九年十一月「地上」社に入社、今日に至る。

それより以前「短歌月刊」「アララギ」等に關係す。

佐藤 正二 大正二年一月二日、秋田縣鹿角郡花輪町横町に生れ、同地に現住。小學校教員。師範在學中より作歌、同郷の先輩中島耕一氏の添削を受く。昭和十一年秋アララギに入る。

佐藤 武郎 三十一歳。大分縣宇佐郡明治村に生れ、同縣玖珠郡野上村に現住。鐵道從業員。大正十五年作歌を始め「常春」會員たり。後無産者歌人聯盟、プロレタリア歌人同盟に籍を置きしが再轉して現在「霸王樹」に據る。昭和十年一月より「由布」を創刊經營して現在に及ぶ。

佐藤 たま子 四十歳。宮城縣玉造郡岩出山町に生れ、東京市杉並區高圓寺一ノ二に現住。昭和八年一月今井邦子氏の郷の葉會入會、今日に及ぶ。

佐藤 嘲花 本名章。明治二十年二月十五日、宮城縣白石町に生る。東北學院、早稻田英文科に學び、明治四十四年四月前田夕暮氏の「詩歌」創刊と同時に入社。福島民友新聞記者となり、大正九年六月發病、同十一年四月腎臟結核にて歿す。時に三十六歳。遺稿歌集「常臥して」あり。

佐藤 忠恕 明治十年熊本縣菊池郡隈限町に生れ、熊本市新屋敷町一〇六に現住。明治四十二年東京帝大政治科卒業。熊本、香川兩縣及關東廳に勤め昭和三年辭任歸郷。アララギ短歌會員。

佐藤 恒雄 三十歳。群馬縣佐波郡名和村大字下福島一に現住。村役場勤務。昭和二年農業學校卒業後作歌、昭和四年「野菊」に入る。昭和五年八月近衛歩兵第二聯隊に應召、同年十月召集解除。

佐藤 東作 號東朔。明治三十四年九月十三日、宮城縣名取郡玉浦村寺島高原二七に生れ、仙臺市北二番丁市營住宅二に現住。仙臺鐵道船舶郵便局通信書記補。昭和五年短歌月刊誌友となり、楠田敏郎氏に師事して今日に至る。

佐藤 時子 二十五歳。石卷市横町八六に生れ、宮城縣遠田郡大貫村字境、佐々木務方に現住。昭和十二年初頃より、夫彰矩に指導されつつ作歌を始め、「歌と評論」に投稿す。

佐藤 友雄 三十四歳。山形縣酒田區新宿町四九三、城南アパート十二號室に現住。職工。大正十二年「創作」及び「水滸」に入社、昭和二年退社。大正十五年「蒼穹」に入社、爾來岡野直七郎氏に師事、現在蒼穹社同人。

佐藤 豐吉 二十九歳。山形縣飽海郡本楯村大字保岡字越

橋に生れ、函館市松川町一三に現住。新聞社員。昭和四年函館の歌誌「鹽」に投稿。昭和五年函館に「心の花」支部設置されるやその會員となり、爾來投稿して今日に至る。また朱鳥（横濱市）發行中はその會員たり。昭和十一年一月岬短歌會を興し今日に至る。

佐藤 豊太郎 二十八歳。山形縣西村山郡西山村大字陸合甲一四九に生れ、同地に現住。教員。昭和八年頃より作歌。

佐藤 直衛 三十三歳。秋田縣北秋郡米内澤町に現住。齒科醫師。大正十二年暮太田水穂氏の潮音社に入社、今日に至る。

佐藤 信春 本名達夫。三十五歳。東京市丸ノ内和田倉門内閣廳舎内に現住。「日光」以來北原白秋氏に師事す。

佐藤 英保 五十一歳。長野縣北佐久郡中津村大字鹽名田に生れ、同縣上田市大字上田字新田に現住。元小學校教員、現産組事務理事。大正九年頃アララギ會員となり、特に故島木彦彦氏の指導を仰ぎしこと多し。

佐藤 秀信 本名佐一郎。宮城縣本吉郡松岩村力持に生れ、明治四十三年五月東京にて死去。享年三十二位。佐佐木信綱氏門下にして心の花編輯に關

係せしことあり。

佐藤 秀 大正三年四月東京に生れ、同市大森區雪ヶ谷町六六四に現住。司法官試補。昭和九年初、「國民文學」に入社、爾來松村英一氏の指導を受けて現在に及ぶ。

佐藤 弘弘 大正六年十二月二十六日、山形縣東置賜郡沖郷村露橋四五八に生れ、同地に現住。職業なし。作歌經歷なし。

佐藤 博 明治二十七年二月十七日、茨城縣筑波郡小田村に生る。教員生活二十五年、現に結城郡五箇小學校長たり。大正五年より同十一年まで根岸短歌會員として作歌、最近作歌なし。

佐藤 房一 明治二十八年八月愛知県八名郡石巻村に生れ、岡崎市明大寺町馬場東七四地に現住。官吏。昭和六年よりアララギ會員。

佐藤 不二男 明治四十四年二月福岡三井郡小郡村に生れ、朝鮮大邱府三笠町八に現住。小學校訓導。昭和三年頃より作歌、六年九月柗檀社に入社して須藤克三氏の指導を受け今日に至る。

佐藤 正憲 三十三歳。茨城縣西茨城郡南川根村に生れ、東京市澁谷區幡ヶ谷本町二ノ七二九に現住。警視廳職員。昭和八年一月アララギ會員とな

り、齋藤茂吉氏の選を受け今日に至る。

佐藤 雅郎 二十五歳。秋田縣北秋田郡米内澤町宇薬師下田に生れ、同地に現住。齒科醫師。中學三年頃より作歌、昭和七年潮音社に入社して今日に至る。

佐藤 松太郎 四十三歳。新潟縣古志郡東谷村大字赤谷に生れ、同地に現住。農。大正の初期より竹橋園同人となりて「心の花」に投稿し、相馬御風氏の歌誌「木蔭」の創刊されるや之に投稿す。

佐藤 松平 明治四十一年、東京京橋に生れ、昭和十二年三月十九日歿す。生前雜誌編輯。「文珠蘭」同人を経て「新興短歌」に關係せしことあり。後「短歌月刊」同人となりしが、昭和十一年之を去り「エラン」同人となる。

佐藤 光昭 大正元年十一月十日、山形縣南村山郡瀧山村大字平清水三に生れ、熊本縣球磨郡五木村八重六一七二に現住。材木商。十八歳頃より作歌、一時香蘭によりて杉浦翠子氏に師事せし事あり。

佐藤 みね子 二十二歳。東京市澁橋區柏木一ノ一二八に生れ、同三ノ三五四に現住。東京女子大にて、森本治吉氏の教を受く。昭和十一年七月「ア

ララギ」に入會し、高田浪吉氏の選を受く。

佐藤 峰人 山形縣東村山郡明治村に生る。大正十年六月病のため入院、萬葉風

の作歌を爲す。同十一年四月頃より結城健三氏と相識り歌の添削を受く。同年十一月「國民文學」に入社、松村英一氏の選を受く。同十三年四月「霸王樹」に入社。昭和六年六月二十九日永眠す。享年四十。

佐藤 澁 三十五歳。新潟縣佐渡郡金澤村新保に生れ、

同郡澤根町五十里籠町に現住。女學校國語科教諭。師範學校一年の中頃より作歌、國語教諭の添削を受く。其後久しく作歌に親しまず、從つて歌は我流。任地の相川短歌會同人。

佐藤 洋子 本名櫻井綾子。三十三歳。宮城縣仙臺市土樋八一に生れ、同地に現住。小學校教員。大正十二年加藤秋村氏に歌の手ほどきを受く。昭和四年木俣修氏につく。昭和十年以降アララギに入會。

佐藤 彌八 二十四歳。福島縣信夫郡笹谷村字塗谷地五九に生れ、同地に現住。農業。昭和八年十二月より清水延晴氏に師事して今日に至る。

佐藤 悠紀麿 本名正。宮城縣黒川郡富谷村富谷字町一六に生れ、昭和十二年四月二十九日、仙臺市通町

二五佐藤實方にて歿す。享年三十一。神職(主典)昭和七年十月より「あざみ」同人。

佐藤 よし子 本名淑子。三十六歳。熊本縣熊本市京町に生れ、尼崎市神田南通二ノ五二に現住。十七八歳の頃「潮音」に學びしことあり。其後中止、十五年を経て再び作歌「新藝」に投稿す。

佐藤 徳助 大正三年三月十一日、德島市塙裏町巽濱二二に生れ、同地に現住。職業無し。昭和十一年より香蘭社友。

佐藤 利一 二十歳。山形市小姓町一四三に生れ、同地に現住。青虹社友。

佐賀 照夫 宮崎縣東臼杵郡北方村日平新築に生れ、同縣延岡市恒富伊達北五二八に現住。會社員。大正十五年一月十八日工場に於て火傷し、一年十一ヶ月間の入院中、作歌を始め。後安田青風氏に師事、「生きて行く道」に投稿、昭和四年の暮「水鏡」に入社今日に至る。

佐野 梅乃 四十八歳。京都府南桑田郡馬路村字馬路中川家に生れ、同郡大井村字並河に現住。農業。三十三歳にて夫を失ひ以後獨學にて作歌。地方短歌結社「芝栗」に據りしことあり。現在いづれの結社にも屬せず。

佐野 熊太郎 五十一歳。神戸に生れ、横濱市中區西戸部町二ノ二四〇に現住。生糸問屋店員。昭和八年冬より作歌、「青波」に投稿す。

佐野 梢 本名こずえ。二十八歳。神戸市下山手通四丁目に生れ、同市灘區福住通四ノ一〇美濃方に現住。神戸大丸百貨店勤務。昭和五年頃より歌心を起し、昭和九年一月潮音社に入社、今日に至る。

佐野 四郎 四十一歳。山梨縣南巨摩郡萬澤村に生れ、同地に現住。郵便局長代理。大正十一年初めて日日歌壇に投稿、昭和四年アララギ會員たること一年、昭和九年歌集「杉の花粉」上梓、同年歌と評論同人となる。昭和十年多磨會會員となり今日に至る。

佐野 翠坡 本名光雄。五十歳。青森縣弘前市品川町九に生れ、千葉縣船橋市九日市一九九に現住。成田線大戸驛長。初め尾上柴舟氏に師事す。次で太田水穂氏「潮音」を創刊するに及び同人たる事約十年。退いて一時「霸王樹」同人たりし後「敬禮」同人。昭和十年十月「登音」を創刊、現に主宰す。

佐野 静秋 本名清。二十八歳。靜岡縣富士郡上野村字精進川に生れ、横須賀市東金谷町七七九に現住。

工廠職工。特に記すべき作歌經歷なし。

佐野 照子 本名やそ。四十二歳。滋賀縣犬上郡大堀村に生れ、千葉縣船橋市九日市一九九に現住。小學校教員。現在「登音」同人。

佐野 晴美 本名浩美。二十九歳。京都府南桑田郡大井村に生れ、京都市中京區西ノ京中御門町一田中方に現住。小學校訓導。十二歳頃より作歌、二十歳の時萬造寺齊氏に師事し街道社同人となり今日に至る。

佐野 福次 三十一歳。横濱市に生れ、同市中區日之出町二ノ一九に現住。米穀販賣業。「短歌鑑賞」に入會して三年餘。

佐野 保夫 三十七歳。大阪府北河内郡庭石村字佐太に生れ、兵庫縣明石市山下町二ノ八四五に現住。英語教員。學生時代より作歌すれど何等の歌誌にも投稿せず。昭和四年「水麴」に入りて今日に至る。

佐野 ゆき 明治三十六年新潟縣西蒲原郡吉田町に生れ、同地に現住。十五六歳頃より作歌、十九歳春結婚、二十四歳夫に死別。昭和九年十二月歌集「菜実の花」を久保田小夜子の名のもとに發行、現在に至る。

佐伯 矩 明治九年九月一日、愛媛縣新居郡水見村に生れ、東京市大森區市野倉町四一八に現住。官吏、榮譽研究所所長。作歌經歷といふほどのものなし。

佐伯 敏子 三十三歳。熊本市に生れ、京都市上京區大將軍坂田町二ノ四に現住。元女學校英語教師。昭和三年アララギに入會、爾來梅村敏子(舊姓)の筆名にて同誌上に發表、現在に至る。

佐伯仁三郎 三十九歳。鳥取縣東伯郡倉吉町に生れ、東京市世田ヶ谷區赤堤町一ノ一六に現住。教員。「珊瑚礁」「あけび」を経て現在「國民文學」「槻の木」同人。

佐伯 千芳 明治四十一年三月三十日生。大正十四年田畑善兵衛氏主宰の「仰望」社に入社、大正十五年三月「せせらぎ」社を主宰し、昭和三年二月迄「せせらぎ」を發行。爾後淺谷六郎氏に師事、昭和六年秋同氏主宰「葦附」社同人として今日に及ぶ。昭和三年歌集「蒲の穂」を出版す。

佐伯 秀雄 明治三十二年八月三日生れ、八幡濱市本町に現住。高等女學校教諭。大正六年六高に入學、同八年短歌研究の爲「護謨の樹」會を興す。「霸王樹」創刊の頃一時

入社、更に「水麴」に轉じ暫く岡野直七郎氏の選を受く。大正十三年東京帝大英法科卒業。某會社に在勤中改めて「水麴」に入りしも、大正十五年「蒼穹」發行と同時に參加、現在に及ぶ。

佐伯 昌則 三十四歳。福井市に生れ、札幌市外琴似三番通に現住。官吏。「あしかび」に入社、現在同誌同人。

佐伯松比呂 本名敏夫。三十五歳。兵庫縣城崎郡八條村佐野に生れ、同縣氷上郡黒井町に現住。會社員。昭和二年頃より作歌、昭和六年「霸王樹」に入社、現在に至る。

嵯峨與志乃 本姓大原。三十二歳。滋賀縣東淺井郡小谷村別所に生れ、京都市鳴瀧洞ヶ淵町療道協會内に現住。病氣療養中。昭和十一年より作歌、創作社友たり。

小竹 繁 本名竹内敏雄。三十四歳。愛知縣渥美郡二川町に生れ、東京市小石川區大塚坂下町一二二に現住。東京帝大助手(美學及藝術史專攻)。大正十四年歌集「冬空」を出版、昭和十一年より「短歌研究」に出詠。

狭山 嶺子 本名峯尾リン。三十九歳。神奈川縣足柄下郡前羽村五一〇に生れ、同縣國府津町在押切八

に現住。手藝教師。昭和七年十二月横田葉子氏に師事。昭和八年一月より「草の實」に入社、今日に至る。

狭山繁生 本名字塚一郎。二十八歳。栃木縣那須町に生れ、東京市小石川區大塚仲町二四加藤方に現住。雄山閣雜誌書道編輯記者。國學院大學在學中同志と作歌を始め、のち生田蝶介氏の門下となり吾妹誌上に作品發表。一時中絶せしも昭和十年復歸、今日に至る。

狭山信乃 明治十八年十二月二十一日、福井縣三方郡早瀨に生れ、東京市杉並區荻窪一ノ六一五に現住。前田夕暮の妻。明治四十四年四月「詩歌」創刊と共に同人となる。大正三年長男出生、種々の事情のため作歌を中止す。昭和三年「詩歌」復活、再び同人となり今日に至る。

西海石詩浪 原町に生れ、川崎市溝ノ口七九〇に現住。化粧品問屋店員。大正九年春創作社に入り、若山牧水氏に師事す。後創刊當時の「ぬはり」に一時籍を置きしが、昭和二年、吉植庄亮氏の門に入り、現在「橄欖」同人。

西海石洋子 本名秀子。二十九歳。栃木縣那須郡親園村に生れ、川崎市溝ノ口七九〇に現住。「橄欖」

社友。

西郷春子 四十五歳。神奈川縣横濱市に生れ、同市中區本牧三ノ谷二六五に現住。大正四年歌集「塔」を出版す。

三枝常盤 舊姓櫻田。明治二十三年、甲府市富士見町に生れ、同市穴切町五九に現住。大正八年より竹柏會に入り歌を學ぶ。昭和十年一路會に入會、引續き今日に至る。

三枝秀行 明治三十二年九月二十七日、山梨縣東山梨郡諏訪村室伏五二七に生れ、尼崎市西本町八ノ三九一に現住。教員。大正十三年より二ヶ年間文藝雜誌「山の息子」編輯。雜誌「雲母」及「紫苑」の同人。其の間「アララギ」會員たりしこと數年あり。

三枝はる子 二十一歳。山梨縣に生れ、東京市小石川區大塚町東京女高師寄宿舎に現住。學生。

三枝福武 三十三歳。甲府市に生れ、同市柳町一六に現住。洋服商。國民文學社友。植松壽樹氏に師事す。

齋田丑之助 三十八歳。新潟縣三島郡西越村田中に生れ、札幌市北五東十一丁目鐵道官舎に現住。官吏。大正十年頃アララギに入りしことあるも一年を滿たずして退き作歌も中止せり。後昭和二年再びアララギに入り約五年にて退き「橄欖」に入り吉植庄亮氏に師事して今日に至る。

齋田玉葉 本名とめ子。五十四歳。濱松市に生れ、同市鴨江町一六九九に現住。昭和六年よりアララギに入會、岡麓氏に師事して今日に及ぶ。

齋田鈿 明治四十三年、名古屋市西區小舟町に生れ、昭和四年二月六日永眠。享年二十。十六七歳の頃より作歌。十八歳愛知縣第一高女卒業と同時に、同校講習科に入學、高崎正秀氏の指導を受く。遺稿集「常寂光」あり。

齋藤明 二十六歳。青森縣南津輕郡尾崎村大字新屋に生れ、青森市大字大野字長島八五に現住。官吏。嘗て齋藤耿夫なる名にて、短歌月刊、短歌春秋、短歌研究等に投稿せしことあり。昭和八年五月以來「樹氷」に發表。十二年一月同誌休刊。現在無所屬。

齋藤梓 本名豊。三十歳。長野縣南安曇郡梓村六二〇イ號に生れ、同地に現住。農。昭和二年「アララギ」入會、昭和七年八月退會、後ち藤澤古實氏の教示を受く。昭和十年「歌と評論」入社、現在同人。一方松本短歌會を主宰す。

齋藤加津 明治二十五年九月十四日、埼玉縣北埼玉郡忍町行田に生れ、和歌山市宇須元町九二に現住。

女子師範、高女教師。大正四年東京女高師卒業後も尾上柴舟氏に師事し、「車前草」より「水薺」社に引續ぎ入社、現在同人。

齋藤 夷臣 本名義男。二十五歳。山形縣飽海郡西遊佐村

大字藤崎に生れ、秋田縣由利郡象潟町字三丁目鹽越一五一に現住。商業。作歌經歷といふほどのものなし。

齋藤 華舟 本名信夫。明治三十八年十二月八日、福島縣

河沼郡上野尻村一七五四に生れ、同地に現住。建築業。亡父の遺稿に刺戟され地方歌人の指導を受けつつ職業のかたはら唯一の趣味として十有餘年、現在に至る。

齋藤 鬼淵 本名孝治。明治四十一年三月二日生。新潟縣

中頸城郡新道村稻田に現住。商業。昭和七年「アララギ」會員となり、齋藤茂吉氏に師事して今日に至る。

齋藤 清衛 四十六歳。山口縣に生れ、東京市世田ヶ谷區

祖師ヶ谷二ノ一四二に現住。著述業。

齋藤 清志 二十八歳。栃木縣芳賀郡物部村に生れ、同地

に現住。小學校教員。昭和五年頃より作歌、「つきくさ」「下野短歌」を経て現在岸良雄氏に師事し「立春」同人たり。

齋藤 耕二 本名九一郎。明治四十年七月、新潟縣糸魚川町に生れ、東京市荏橋區戸塚町一ノ五二五

牧野方に現住。日本乗合自動車協會書記。昭和九年秋より作歌、同年十二月「歌人」に入社。同誌廢刊後昭和十二年一月「二路」に加入、現在に及ぶ。

齋藤 弘道 三十二歳。岩手縣膽澤郡古城村古城寺ノ上

に生れ、同地に現住。僧侶。十四歳頃「岩手日報」と「禪」誌に投稿、その後も諸新聞雜誌に投稿。

齋藤 佐太郎 舊姓稻場。明治三十五年八月二十一日、新潟

縣佐渡郡外海府小田村に生れ、新潟市寄附町に現住。官吏、新潟郵便局在勤。大正十四年「橄欖」に入り、昭和五年同社を退き専ら地方歌誌のみに關係して今日に至る。

齋藤 伸 二十七歳。長野縣下伊那郡山吹村三六五八に

生る。農業。「アララギ」にありて齋藤茂吉氏の選歌を受く。

齋藤 慎吾 三十六歳。茨城縣眞壁郡黒子村稻荷に生れ、

東京市城東區大島町六ノ一〇九に現住。教員。二三の歌誌を歴、昭和十年二月「山柿」を創刊主宰して今日に及ぶ。

齋藤 潤二 舊姓大岡。明治二十一年二月、栃木縣宇都宮

市に生れ、東京市足立區千住柳町四六に現住。無職。十三歳頃より歌道に入り、明治四十一年前田夕暮氏の白日社に入社。後若山牧水氏の創作社に轉ず。昭和二年菊池知勇氏等の「ぬはり」創刊に及んで之に参加し同人として今日に至る。短歌雜誌「山葡萄」「土蜘蛛」「こだま」「下野草」「吟唱」等を主宰せしことあり。

齋藤 治郎 本名甚治郎。二十二歳。秋田縣由利郡院内村馬

場に生れ、同地に現住。農業。小學校卒業後農事のかたはら歌に親しむ。昭和十一年四月より「國民文學」に入り松村英一氏の選をうけ現在に至る。

齋藤 秋村 本名守一。明治三十年一月十五日、千葉縣君

津郡根形村谷中に生れ、同地に現住。農業。小學校在學中作歌、大正八九年頃若山牧水氏の創作に入社一年位にて退社。同郷の増田絲畔氏に師事し、前田夕暮氏白日社の詩歌復活と共に入社して數年教を受く。

齋藤 甚一 明治四十五年一月、秋田縣由利郡院内村馬場

に生れ、昭和六年二十歳にて逝く。十八歳頃より作歌を始め、松村英一氏の「短歌雜誌」に投稿。

齋藤 青海 本名貞次。三十四歳。千葉縣君津郡波岡村小

濱に生れ、同縣木更津町寺町に現住。第一生命保險相互會社外務書記。二十四歳の春より約六ヶ月「眞人」に歌を出し、その後休詠、二十八歳の二月「水麴」に入社今日に至る。

齋藤 稻里 本名義心。三十一歳。出雲國飯川郡久村九〇

六に生れ、石見國美濃郡豐田村に現住。島根縣立益田高等實業女學校教諭。十七八歳より作歌すれど定まりたる師なし。

齋藤 大 本名大太郎。明治三十七年三月、東京市日本

橋區馬喰町四ノ一に生れ、淀橋區戸塚町一ノ三一五に現住。畫家。昭和九年十一月より一ヶ年半島田忠夫氏に指導を受く。

齋藤 素秋 本名吉衛。明治三十五年三月八日、新潟縣東

蒲原郡津川町に生れ、同地に現住。商。昭和六年四月より三田短歌に據る。

齋藤 ちよ 二十五歳。長野縣北佐

久郡小諸町赤坂町に生れ、同地に現住。小學校訓導。十八歳頃より作歌、二十二歳にて「アララギ」に入り今日に及ぶ。

齋藤 利治 明治三十六年七月九日

佐賀縣藤津郡久間村に生る。昭和五年渡鮮し現在平安南道鎮南浦公

立尋常高等小學校に勤務す。二十歳の頃より中島哀浪氏に師事し以來十六ヶ年其の指導を受け現在「ひのくに」の同人。また「眞樹」の同人。昭和七年頃より平壤を中心とする歌會を催し會誌「四温」の編輯をなす。

齋藤 徹 三十四歳。東京に生れ、

一に現住。金光教々師。同市赤坂區新町三ノ二

齋藤 友子 二十六歳。仙臺市に生

れ、函館市松蔭町一、谷方に現住。私立函館大谷高女教員。宮城縣女子専門國文科入學以來加藤文友氏指導の下に作歌を始め。以來斷續して今日に至る。

齋藤 友三 明治三十一年七月一日

生。東京市足立區千住本町一ノ三五に現住。東京高師文科第二部卒業後中學校教諭たり。現在東京府保護協會主事。「ぬぼり」創刊と同時に入社今日に至る。歌集「草叢」の著あり。

齋藤 虎五郎 明治十一年七月廿八日

群馬縣佐波郡赤堀村大字香林に生れ、横濱市中區龍之上一五〇に現住。東京帝大法科大學卒業後日本銀行其他にて銀行業務に従事。大正十年以降佐佐木信綱氏に就き歌を學ぶ。

齋藤 範吉 明治四十一年十一月十

六日、東京市王子區豐島町一〇七二に生れ、同町八二八に現住。郵

便局員。昭和七年六月「國民文學」に入社、現在に至る。

齋藤 初枝 三十九歳。宮城縣伊具

郡丸森町に生れ、仙臺市靈屋下七に現住。昭和十一年六月アララギに入會、現在に至る。

齋藤 英男 二十五歳。山形縣南村

樺太豐原町王子製紙三星寮内に現住。會社員。十五歳の頃より作歌、上野甚作氏主宰の地方誌「鳥影」に發表。昭和九年九月「水麴」に入社し現在に至る。

齋藤 福一 二十九歳。靜岡縣志太

郡燒津町城之腰二〇三ノ一に生れ、同地に現住。會社員。高等小學卒業後二三の地方歌誌により手ほどきをうけ昭和五年アララギに入會、潮莊三の名にて投稿を始めしが途中齋藤福一に改め昭和七年迄繼續す。

齋藤 瀏 明治十二年、長野縣北

安曇郡七貴村三宅家に生れ後に齋藤家を繼ぐ。陸軍軍人。中尉にして日露の役に従ひ、陣中より作歌。歸還後竹柏園に入り、佐佐木博士の教へを受く。昭和五年、少將にして軍職を退く。家は東京市大森區上池上町八九四。歌集「嘯野」「霧華」及び「萬葉名歌鑑賞」あり。

齋藤 史 明治四十二年二月十四日、東京に生れ、東京市大森區上池上町八九四に現住。醫師の妻。軍人なりし父にとまなはれて各地に轉住しつゝ大正末年頃より作歌。現在日本歌人同人。

齋藤 文雄 四十二歳。茨城縣に生れ、兵庫縣武庫郡住吉村鴨子ヶ原に現住。醫者。潮音社友。

齋藤 文夫 大正二年宮城縣本吉郡松岩村一九五に生れ、同地に現住。小學校教師。故熊谷武雄氏に師事す。昭和十年「ぬほり」に入社し現在に至る。

齋藤 北蘭 本名卓一。四十三歳。島根縣德地郡五箇村大字郡に現住。小學校長。大正六年頃創作社友となり、十二年あまり經て一時退社せるも昭和十一年二月より復社、今日に及ぶ。

齋藤 正治 二十四歳。東京府南多摩郡堺村相原二〇六八に生れ、同地に現住。農業。昭和十一年九月野菊に入社、今日に至る。

齋藤 正治 三十九歳。新潟縣北蒲原郡中條町に現住。小學校教員。昭和五年より作歌、「勁草」に入り宇都野研氏に師事す。

齋藤 禮子 本名すみ。四十六歳。濱松市天神町一二、川合家に生れ、靜岡縣濱名郡白脇村瓜内二八〇に現住。女學生時代より同窓會誌等に寄稿、昭和十一年四月潮音社入社。

齋藤 禮助 三十四歳。山形縣北村山郡東根町に生れ、同地に現住。町役場吏員。これといふ作歌經歷なし。

齋藤 義直 四十九歳。千葉縣福岡町に生れ、同縣暮張町馬加四九六に現住。東京中央電信局吏員。大正八年七月島木赤彦氏の門に入り、アララギ會員となる。その歿後齋藤茂吉氏に師事、今日に至る。

齋藤 與助 明治四十年二月五日、山形縣酒田市鷹町一五に生れ、同地に現住。日刊出羽興民新聞社編輯長たりし事あり、目下浪人。大正年代若山牧水氏に學び、大正十五年より昭和三年迄橋田東聲氏に學ぶ。以來十年作歌を離る。

齋藤 茂吉 本名茂吉。明治十五年七月二十七日（昭和十三年、五十七歳）山形縣南村山郡堀田村大字金瓶に生る。東京府開成中學、第一高等學校、東京帝國大學醫科大學卒業。東京府巢鴨病院醫員、長崎醫學專門學校教授、文部省在外研究員、青山腦病院長、醫學博士。明治三十八年作歌をはじめ、伊藤左千夫門人、アララギ同人。歌集、「赤光」「あらたま」「朝の聲」

「齋藤茂吉集」。歌論集、「短歌私鈔」。「童馬漫語」。「金槐集私鈔」。「短歌寫生の說」。「新選秀歌百首」。「柿本人麿。隨筆、念珠集」。他に未刊の短歌、歌論、隨筆等數多。帝國藝術院會員。新萬葉集審查員。

齋藤 謙 本名杉太郎。大阪市天王寺區下寺町三ノ五三に住居したり。豆腐屋。昭和七年十二月四日腦溢血にて歿。行年三十四。久しく歌道獎勵會に入りて舊派の歌を稽古す。後吉植庄亮氏に師事す。

齋藤 春吉 明治四十三年二月二十日、横濱市に生れ、昭和八年六月十日死亡。昭和五年「ぬほり」入社以來菊池知勇氏の指導を受く。

齋藤 浩二郎 本名卯三郎。二十八歳。神奈川縣横須賀市に生れ、靜岡縣熱海市驛前に現住。會社員。昭和六年八月、若山喜志子氏の門に入り現在「創作」社友。

齋藤 路光 明治二十六年一月生。秋田縣由利郡院内村馬場に現住。農。三十三歳より歌を始め間もなく松村英一氏の國民文學社に入り今日に至る。

齋藤 義勝 號琳谷。三十九歳。香川縣高松市外麩屋町に生れ、同市一番丁五〇に現住。彫刻師（譜岐

彫刻。水鏡、香蘭を経て現に多摩會會員たり。

財津政男

二十五歳。大分縣日田郡日田町に生れ、同地に現住。會社員。昭和七年アララギ會會員となり今日に至る。

相馬御風

本名昌治。明治十六年七月十日、新潟縣糸魚川町大字大町に生れ、同地に現住。著述。歌は最初中學時代の國語教師下村千王伎氏に見て貰ひ、後竹柏會に入會。金子薫園氏の指導をも受く。更に新詩社に入り同人の列に加はりしも後脱して前田林外、岩野泡鳴氏等と東京純文社を組織し雜誌「白百合」を發行（四十年廢刊）す。明治三十八年處女歌集「睡蓮」を出す。同三十九年早稻田大學文學科卒業、四十四年早稻田大學文學科講師となり、大正五年郷里に歸住。翌年より全力を擧げて良寛和尚の研究に従ふ。昭和三年四月より短歌結社木蔭會を組織して今日に至る「御風歌集」「月見草」の他、良寛に關する著書多し。

相馬照子

本名テル。相馬御風の妻。東京市京橋區日吉町藤田家に生れ、新潟縣西頸城郡糸魚川町に住むこと十七年。昭和七年七月十日歿。享年四十四。歌は日本女子大學校在學中故鹽井雨江氏に就きて學びしが、晩年夫相馬御風を相談相手として作歌を樂しむ。

相馬米次郎

明治三十五年十月七日新潟縣中浦原郡庄瀬村大字鑄物師興野に生れ、同地に現住。農。十六歳頃國民中學會講義録機關誌に投稿し、金子薫園氏の選を受けしことあり。其後諸雜誌に投稿す。

瓜龍寺

自由律は大丘章郎の筆名を用ふ。本名大亦詮一郎。明治三十四年十二月埼玉縣南埼玉郡岩槻町に生れ、東京市中野區城山町四三に現住。中學校教諭。早大在學中窪田空穂氏に師事、後、歌誌「赤光」「梵貝」同人。

境隆雄

明治四十年九月、富山縣伏木町に生れ、靜岡縣沼津市御幸町七七に現住。内務省狩野川改修事務所勤務、内務技師。幼時より學生々活を終る迄二十年間札幌市に住む。北海道帝國大學工學部土木科卒業。大正十五年頃口語歌を作り、雜誌「藝術と自由」に投稿せしことあり。

境榮之介

六十一歳。鹿兒島縣枕崎町に生れ、東京市牛込區赤城下町一〇に現住。元高等女學校校長。興起れば作歌するのみ。

堺

本名酒井利家。明治四十年長野縣埴科郡松代町に生る。長野市芹田小學校訓導。昭和十一年よりアララギ會會員たり。

堺田

四十歳。大分縣臼杵町に生れ、新京敷島高等女學校に現住。同校教諭。作歌經歷といふほどのものなし。

坂口

二十七歳。熊本縣上益城郡飯野村に生れ、同地に現住。小學教員。二十歳より作歌、「古城」「歌と觀照」「龍燈」に關係す。

坂口

千生。大正十一年京都府師範學校を卒業、現在丹後與謝郡加悦小學校に在職。大正十三年アララギ會會員となり後轉じて、現在みつがき會會員たり。

坂田

富美。明治三十五年東京市に生れ、神奈川縣大船田園都市三三三六に現住。佐佐木信綱博士に師事す。

坂田

彌一郎。三十六歳。大阪市に生れ、同市旭區生江町四六七に現住。會社員。大正十五年二月早崎常盤夏衛氏の指導を受け「草の葉」を創刊、同年十二月「自然」に入社す。昭和六年十一月同誌より分れし「曼陀羅」同人として現在に至る。

坂戸

幸治。二十九歳。長野縣上水内郡水内村新町八〇に生れ、同地に現住。農及び板屋根職。昭和五年より作歌。昭和六年より中村柝花氏に師事す。

しその間「松籟」「科野」を経て、「創作」に入り今日に至る。

坂梨未明 本名武行。明治三十七年十月四日、熊本縣玉名郡賢木村細永二五〇五に生れ、同縣館林町裏宿八一に現住。齒科醫師。昭和五年一月青虹入社、現在に至る。昭和九年十月第一歌集「寒燈」を上梓す。

坂村眞民 本名堪。三十歳。熊本縣玉名郡簗村に生れ、朝鮮忠清北道清州郡清州邑本町三ノ一五九に現住。中等教員。二十二歳、岡野直七郎氏に師事し今日に至る。蒼穹同人。

坂元重晴 五十七歳。宮崎縣都城町に現住。益樹の研究を爲す。明治三十一年都城市に若葉會を起し新派和歌の研究を爲す。三十五年若山牧水氏と知り同氏等の野虹會に合す。地方新聞に發表。昭和三年眞人社に入り、今日に至る。

坂本雪鳥 本名三郎。舊姓白仁。筑後柳河に生れ、昭和十三年東京市杉並區松庵北町九三に歿す。享年六十。東京帝大國文科出身、日本大學文學部教授にして「東京朝日」能樂批評を擔當したり。

坂本優子 二十八歳。熊本市黒髮町五五九に生れ、水戸

市元山町五八〇三に現住。官吏の妻。昭和七年一月熊本の「龍燈」に入社、今日に至る。

坂本凱次 明治三十八年十一月二十四日、茨城縣結城郡結城町字本町に生れ、東京市葛飾區金町一ノ七六六に現住。小學校教員。常春同人。歌集「武藏野」あり。

坂本清八 大正元年和歌山縣西牟婁郡新庄村に生れ、同地に現住。農。大阪にゐること十年、ポトナム社友。

坂本小金 本名志鎌正雄。明治四十一年十月十二日千葉に生れ、東京市杉並區大宮前四ノ五三九に現住。教師。東洋大學國文科卒。藤川忠治氏門。歌と評論同人。

坂本沙億子 二十八歳。旭川市に住宅七に現住。昭和六年ぬほり入社、今日に至る。

坂本祥子 本名八重子。二十三歳。愛媛縣南宇和郡綠曾都

村字縁に生れ、同地に現住。十九歳の六月より、郷里の短歌誌「くさの葉」に入會して今日に至る。また「嫩籠」にも投稿。

坂本佐知子 本名禎。三十八歳。京都に生れ、龜町區中六番町三〇に現住。「水麴」「ポトナム」を経

て、現在無所屬。本名正亮。二十五歳。千葉縣香取郡佐原町佐

原ホ四九六に生れ、同地に現住。農業。作歌經歷といふほどのものなし。

坂本基水 本名藤吉。明治四十四年能登に生れ、金澤市殿町六一に現住。雜誌編輯。昭和七年歌誌「閑古鳥」に加盟、今日に至る、かたはら俳句雜誌「蟻乃塔」を編輯す。

坂本武夫 二十六歳。和歌山縣伊都郡九度山町に生れ、同郡高野町に現住。官廳に奉職。昭和六年、「いぶき」入社、一ヶ年足らずして退社、昭和七年「水麴」に入る。

坂元俊郎 明治二十六年九月生。富山縣氷見町中町に現住。呉服商。大正八年より昭和九年迄國民文學社友として半田良平、植松壽樹兩氏に師事す。

坂本不二子 二十四歳。大分縣中津市に生れ、徳島市徳島

本町北濱に現住。昭和八年七月潮音社に入社。現在に至る。

坂本三男 三十一歳。北海道松前道廳立江別高等女學校内に現住。女學校教諭。中學四年の頃より作歌、地方新聞に投稿。早

稻田大學入學と同時に同校文藝研究会及び短歌會に入會、同會發行の文藝誌に發表。昭和四年十二月「歌と評論社」入社、現在に及ぶ。

坂本 眞鈴 四十九歳。熊本縣玉名郡賢木村上長田に生れ

福岡縣朝倉郡甘木町に現住。朝倉中學校教諭。中學時代より作歌、神宮皇學館在學中、磯部桃果氏に師事し、傍ら森園天派氏の「山上の火」に投じ、續いて「珊瑚礁」に遊ぶ。昭和四年「國民文學」に入社し、窪田空穂氏門に遊ぶ、今日に及ぶ。

坂本 幹郎 本名三龜男。二十一歳。岡山縣吉備郡高松町原

古才に現住。酢釀造。昭和三年頃より作歌、昭和五年國民文學に入社、松村英一氏に師事し現在に至る。

坂本 正雄 三十三歳。岡山縣阿哲郡新砥村蚊家に生れ、

東京市中野區上高田一ノ九八に現住。東京市書記、財務局主計課勤務。昭和八年以來歌誌「にひはり」に發表、昭和十一年十一月青垣會に入會、今日に至る。

坂本 都 明治四十四年十一月十日、愛媛縣八幡濱市

新町二丁目に生れ、昭和五年六月十四日急逝す。享年二十。昭和三年愛媛縣立八幡濱高女卒業、同年六月「蒼穹」入社。

坂本 義夫 二十八歳。福岡縣山門郡山川村大字北之關に生れ、同縣三池郡駛馬村西米生高畑に現住。會社員。國民文學社友。

坂井 喜美子 三十一歳。岡山市西中市區西戸部町二ノ二五〇に現住。昭和六年

八月ぬはり入社、現在に至る。

坂井 久良吉 三十九歳。新潟市に生れ、新潟縣西蒲原郡坂

井輪村字青山、市立有明療養所に現住。病臥五年現在職業なし。作歌年限十ヶ年。歌誌ボトナムに屬し小泉芝三氏に師事、現在同人たり。

坂井 謙吾 二十八歳。新潟縣三條市大字一ノ木戸に生れ

同市大字西裏館に現住。鍛工業。昭和九年三月より作歌、「短歌研究」讀者歌壇に作品を投ず。昭和十一年十一月「アララギ」に入會現在に至る。

坂井 晶山 本名喜三。明治二十八年十一月長野縣下伊那

郡市田村に生れ、大正十年二月二十八日同郡山本村に二十七歳にて死去。飯田中學校中より作歌、前田夕暮氏に師事し「詩歌」に投稿すること數年なり。

坂井 正義 明治四十五年五月十五日、岐阜縣加茂郡蜂屋

村下蜂屋一二九五ノ二に生れ、廣島縣賀茂郡竹原町に現住。竹原高女教諭。國學院大學在學中折口信夫氏、島野幸次氏に師事、昭和六年四月より金子元臣氏に師事、金子氏主宰短歌雜誌「あけぼの」同人。

坂井 半甫 本名輔三。明治二十九年六月十日、金澤市尻

垂坂町に生れ、靜岡縣濱松市中島町七九七に現住。濱松工業學校教諭。明治四十四年より作歌、大正十三年より相馬御風氏に師事、昭和三年より木蔭會同人として現在に至る。

坂井 吉滿 二十八歳。長野縣上水内郡南小川村に生れ、

岡谷市上濱小口政雄方に現住。小學校訓導。昭和八年四月よりアララギに入會、土屋文明氏の選を受く。昭和九年六月より、森山汀川氏の選を受け、現在に至る。

阪口 保 明治三十年三月十四日三重縣多氣郡津田村大

字鐵形に生れ、淡路國洲本町に現住。兵庫縣洲本青年學校長。大正三年白日社に入社今日に至る。著書に「短歌概説」「萬葉地理研究兵庫篇」「萬葉集大和地理辭典」、歌集「平歩青天」あり。

阪口 いとし 二十五歳。奈良縣生駒郡伏見村賢來一〇六に

生れ、上海華盛路二二七號に現住。「こぎやう」社友。

阪本千代子 四十二歳。京都市左京區岡崎圓勝寺町に生れ

奈良縣吉野郡龍門村字佐佐羅に現住。林業。昭和五年二月より佐佐木信綱氏の門に入る。

阪本静子 三十歳。大阪府北河内郡川越村字高田に生れ、同村字山ノ上に現住。今中楓溪氏主宰若菜會員。

酒徳宗三 明治四十年三重縣宇治山田市古市町に生れ、鹿兒島市上荒田町二一九五に現住。教員。昭和四年十二月アララギ入會、土屋文明氏の選を受け今日に及ぶ。

酒井朝 明治四十一年三月二十四日千葉縣に生れ、昭和十一年十月十日死亡。日本女子大國文科卒業。昭和五年酒井億尋と結婚。昭和二年「ぬはり」入社以來菊池知勇氏の指導を受く。歌集「朝の食卓」の著あり。

酒井彰夫 三十三歳。岡山縣兒島郡宇野町に生れ、同縣津山市川崎に現住。鐵道職員。昭和八年歌誌「情脈」入社、昭和十一年退社、同年歌誌「早蕨」に入社し今日に至る。

酒井充實 大正三年十一月、長野縣南安曇郡豊科町に生れ、現在松本歩兵第五十聯隊在營、下士官。昭和四年ポトナム短歌會に入り今日に及ぶ。

酒井克枝 二十八歳。大阪市に生れ、同市東淀川區長柄西通三ノ二四に現住。硝子製造業。在學中清水千代氏の教へを受け作歌せしが、卒業後中断。昭和十一年五月同氏の「どうだん」發刊にあたり再び師事、今日に至る。

酒井喜芳 明治四十五年一月二十五日、長野市大字西長野二〇三に生れ、同市新諏訪町に現住。小學校訓導。教員生活に入つて間もなく作歌に志し、信濃毎日新聞歌壇にて土田耕平氏、森山汀川氏等の選を受けて今日に及ぶ。

酒井薫風 本名良弼。五十一歳。新潟縣刈羽郡田尻村に生れ、同地に現住。柏崎町比角小學校長。高田師範二部生時代より作歌、卒業後神田停雲氏を中心に柏崎歌會を興し、今尙同人たり。曾て相馬御風氏主宰の木蔭會同人たりしことあり。現在は布施翠柳氏と共に月刊歌集「砂時計」を發刊す。

酒井廣治 四十五歳。福井縣今立郡岡本村杉尾に生れ、北海道旭川市五條通九丁目左十號に現住。大正初年北原白秋氏の巡禮詩社に入社。爾來同氏の門下として今日に至る。目下「多磨」會員。

酒井晋一郎 三十歳。名古屋市に生れ、東京市大森區田園調布二ノ八一七に現住。海軍軍人。昭和八年より「アララギ」會員となり、今日に及ぶ。

酒井俊治 本名俊治。明治四十五年七月生。長野縣南安曇郡豊科町に現住。雜貨商。昭和三年作歌をはじめ、同年ポトナム短歌會に入り今日に至る。

酒井鈴子 明治二十年十月一日、東京市牛込區辨天町に生れ、臺灣臺北市東門町二七五に現住。小學校當時内藤花子氏につき歌を學ぶ。最近柴山武矩氏の「相思樹」又は「臺灣日日新聞」等に投稿するのみ。

酒井仙影 本名明一。四十四歳。長野縣東筑摩郡廣丘村に生れ、同地に現住。農。明治四十四五年頃より、太田水穂氏の選を経て信濃毎日新聞紙上に作歌を發表、また若山牧水氏の創作社に入社せし事あり。大正四年七月、太田水穂氏潮音社創立に加盟し今日に至る。

酒井樞一 明治三十二年六月二十四日、大阪市南區間屋町に生れ、同市住吉區遠里小野町五一に現住。南海鐵道運送株式會社會計係。昭和九年四月作歌を始め、爾來雜誌「武都紀」に投稿して今日に及ぶ。

450

酒井 信令 三十五歳。長野縣上水内郡日里村に生れ、同郡七二會村に現住。教員。アララギ會員。

酒井 一 四十歳。千葉縣長生郡南白龜村に生れ、横須賀市公郷町二五四五に現住。横須賀海軍工廠勤務。アララギ、水響、嫩嶺、國民文學、心の花を経て大澤雅休氏の野菊の同人となり今日に至る。

酒井 鳴可 本名次作。四十六歳。兵庫縣氷上郡大路村下三井庄に生れ、神戸市灘區中郷町二ノ三に現住。兵庫縣武庫郡鳴尾小學校長。大正十四年頃より本格的に作歌、昭和八年六甲會員、更に昭和九年アララギ會員となり今日に至る。

酒井 龍輔 明治三十二年四月三日生れ、東京府西多摩郡平井村一二八九に現住。大正十三年頃より作歌、大正十五年始めて「日光」に投稿。昭和二年上京國學院大學に學び傍ら古泉千樞氏に就きて指導を受く。その後「青垣」同人となる。昭和三年八月「青垣」脱退。昭和四年「歌と評論」同人となり、専ら口語歌を發表す。昭和七年再び文語歌に歸りしも以後小説へ轉向して作歌を休み現在に至る。

酒井 田壽子 大正二年七月二十五日東京市本郷區龍岡町出

六に生れ、東京市澁谷區代々木大山町一〇四七に現住。昭和七年春竹柏會に入會、石博千亦氏に師事して今日に及ぶ。

酒川 哲保 三十八歳。新潟縣佐渡郡羽茂村大字羽茂本郷に生れ、京都市上京區等持院中町二〇に現住。小學校教員。大正十四年頃、高田にて平野秀吉氏に歌の手ほどきを受く。昭和八年京都市に於て短歌雜誌街道社に入社し、萬造寺齊氏の指導を受け、今日に及ぶ。

酒見 四郎 三十九歳。佐賀縣藤津郡鹿島町大字高津原五九に生れ、大阪市住吉區田邊東ノ町八ノ五に現住。大阪瓦斯株式会社社員。大正十年前後「國民文學」の指導を受く。

酒匂 親幸 明治二十八年一月二十四日、東京市京橋區竹川町に生れ、小樽市花園町東四ノ三四に現住。北海道拓殖銀行小樽支店員。大正七年潮音社社友となる。尙昭和十一年以來小田觀磐氏主宰新壘社同人となる。現在潮音社并に新壘社同人。

榊原 武雄 大正元年九月四日、愛知縣碧海郡大濱町に生れ、東京市深川區千田町一二ノ二に現住。編纂所員、二松學舍専門學校卒、アララギ會員、紅鳩同人等を経て現在短歌至上主義同人。杉

浦翠子氏に師事す。二十八歳。愛知縣西加茂郡學母町に生れ、名古屋市中區小櫻町一ノ六に現住。昭和四年の春、竹柏會に入會して今日に至る。

榊原 たづ 本名彦之助。明治四十年三月二十五日、愛知縣知多郡成岩町に生れ、昭和八年一月二十七日、二十七歳にして病歿。石炭商。小學校時代より作歌、あしかびを経て杜鵑花に入る。

榊原 萩村 三十六歳。奈良縣磯城郡多武峯村字針道に生れ、大阪市住吉區平野流町八二〇に現住。大阪商船會計課員。昭和四年國民文學社に入り、藥池庫郎氏に師事、現在同人。

相良 義重 明治三十五年九月三日福島縣相馬郡金房村に生れ、札幌市北十五條西三丁目に現住。鐵道官吏。初め金子薫園氏の指導を受け「光」同人たりしも後「嫩嶺」に轉じ、且下同誌同人。歌集「防雪林」の著あり。

崎江 初次 二十四歳。長崎縣西彼杵郡松島村内浦に生れ、同縣北松浦郡中里村上本山免五八に現住。會社員。十六歳より二十一歳頃まで二三の歌誌短歌研究を讀みたるのみ、師事なし。

向坂 禮子 三十六歳。東京市芝區高輪南町に生れ、小石

川區林町一〇〇に現住。昭和七年四月山下陸奥氏に師事、心の花後に一路誌の會員となる。昭和十年六月亡母三十年祭に「虹」寫眞歌集帳出版。

先川 露江 二十二歳。徳島縣美馬郡脇町大字脇町五に生れ、同地に現住。女學校卒業後國文學を獨學、短歌研究其の他短歌雜誌に依りて學び、父に添削を受く。

作田 良雄 大正二年八月五日、石川縣珠洲郡宇世津町一四ノ五八に生る。昭和六年二月青垣會に入り大熊長次郎氏に師事。昭和八年一月二十一日の大熊氏自殺に關聯して惱む。同年六月一日高尾山小佛峠に通ずる檜林中に催眠劑自殺。歿後友人數氏により「作田良雄歌集」出版さる。

作間 木菟 本名博。明治三十五年十二月十日、福岡縣小倉市に生れ、東京市澁谷區松濤町二五に現住。鐵道省官吏。中學生時代に若山牧水氏主宰の「創作」社に入り約三年、後俗務に紛れ中斷、昭和十一年再入社して今日に至る。

櫻田 角郎 明治三十八年一月二十四日、青森縣東津輕郡横内村に生れ、函館市中島町二五に現住。昭和三年神宮皇學館本科卒業。在京二年餘、種種の職業を経て、現在母校中學國語教師。中

學時代故船木順之輔氏に歌の手ほどきを受け、昭和九年アアララギーに入會、土屋文明氏に師事す。短歌誌「五更」同人。

櫻庭 誠四郎 三十一歳。青森縣五所川原町に生れ、弘前市新鍛冶町六七に現住。駄菓子行商人。現在「勤草」同人。

櫻井 英信 三十八歳。埼玉縣北足立郡常光村に生れ、千葉縣夷隅郡上野村東光寺に現住。眞言宗僧侶にして小學校教員。十七八歳より歌を作り、文章俱樂部等に投稿、二十五歳より三十歳迄中絶、後ち再び作り始め、最近吉植庄亮氏の結社に入る。なほ同志と同人雜誌「竹風」を發行。

櫻井 喜美 三十二歳。東京市牛込區通寺町四に生れ、同地に現住。大坪草二郎氏につき手ほどきを受けて四年、正規の修業なし。

櫻井 京三郎 明治四十年七月二十三日、山形縣南村山郡沼原村大字吉原五七に生れ、同地に現住。小學教員。結城稟草果氏に師事す。

櫻井 慶雄 二十九歳。長野縣松本市田町三五〇に生れ、同地に現住。大工職。十六歳頃より作歌し、後二ヶ年吾妹生田蝶介氏に師事、後國民文學二ヶ年購讀川崎杜外氏、窪田空穂氏に師事、

昭和十年渡瀧、昭和十二年一月歸郷。

櫻井 聲樹 本名宗一郎。五十三歳。富山縣東礪波郡油田村三郎九一八三に現住。農業。昭和五年一月よりアアララギ會員たり。

櫻井 ツネヨ 明治四十一年五月二十二日、長野縣北佐久郡御代田村七四に生れ、同郡小諸町丁二五九に現住。教員。現在「アアララギ」會員。

櫻井 孝 四十三歳。東京市に生れ、大森區馬込町東一ノ一〇八四に現住。北樺太石油株式會社員。村野次郎氏に指導を受けし事あるも雜誌に發表せし事なし。

櫻井 文司 三十一歳。新潟縣中浦原郡大郷村字澁川に生れ、群馬縣草津町五八二に現住。職業無し。昭和十一年九月アアララギ社に入會す。

櫻井 秀人 本名秀夫。二十六歳。奈良縣宇智郡阪合部村上野に生れ、同地に現住。教員。少時より短歌を愛し、昭和十年前川佐美雄氏の「日本歌人」に入り現在に及ぶ。

櫻井 文字 東京市大森區入新井五ノ一八五に現住。アララギ會員。

櫻井 夢村 四十歳。青森縣鱒ヶ澤に生れ、同地に現住。

寫眞業。大正四年より作歌、同志と共に「ひとみ」「あすなろ」「素描」を發刊、十年より作歌中絶、昭和四年國民文學に入社、窪田空穂氏の選を受く。同六年岡山畿氏の「歌と觀照」創刊に際し同人として加入、同年「和船」を發行十年終刊、十一年十二月「歌と觀照」を退社、十二年「橄欖」に入社、三月稲垣浩氏の「美籟」に加盟。

櫻井よしえ

十九歳。群馬縣山田郡
蕪川村東長岡一四〇二
に生れ、同地に現住。群馬女子師範生。昭和十一年十月より「からまつ」一社友。

櫻井芳雄

三十歳。神奈川縣高座郡小出村に生れ、東京市品川區西大崎一ノ三〇三に現住。會社員。少年時代「武相の若草」を通じ前田夕暮氏に師事、後、並木秋人氏の「常春」同人、「ひこばえ」「短歌祭」創立同人、「短歌祭」廢刊と共に歌より遠ざかる事二年、法政大學入學當時より再び作歌す。昭和十二年四月「あめつち」を創刊主宰す。

櫻井禮丸

二十八歳。高崎市成田町に生れ、同市藪町三十五に現住。信用組合書記。昭和十年より十一年末まで水穂社友たり。現在青垣會員にして常には中曾根白史氏の指導を受く。

笹川露香

本名久我尚寛。明治三十五年四月二十七日、

横濱市に生る。豊橋市岩田町西福寺住職。曹洞宗特派布教師、龍祐寺專門僧堂講師。歌は十八歳の春より親しみ、大正十二年、アララギ會員となりて作歌、故岩谷莫哀氏を知るに及び大正十五年五月「水穂」に入社して今日に至る。其間郷土誌「星影」「豊橋歌人」等を編輯せしことあり。現在「水穂」同人、寂照一主宰。

笹川満堯

明治三十一年一月、鹿兒島縣熊毛郡西之表町西之表中目に生れ、同地に現住。農業。青年期より大阪奈良等に於て生活す事二十年、大阪にて同人歌誌に作品を發表したる事あり。昭和十年春歸郷して、獨り作歌を樂しむ。

笹田葉花

本名高木由次。三十二歳。愛知縣碧海郡知立町大字八留に生る。大正十五年ボトナム社に入り今日に至る。

笹沼剛

三十三歳。栃木縣那須郡黒羽町大字北瀧に生れ、同郡湯津上村大字佐良土に現住。農。大正十四年桐生高工在學中作歌に志し、昭和六年より谷邦夫氏に師事し、現に谷邦夫氏、高野はま氏の主宰する短歌星雲の社友たり。

笹沼秀夫

三十歳。栃木縣那須郡馬頭町に生れ、東京市豊島區堀之内町一〇四一に現住。官吏。二十二年頃より作歌、歌誌「ささぎ」に入社、

現在同人。

笹野一夫

三十一歳。名古屋に生れ、名古屋市東區石神本町一ノ一四に現住。英語私塾。八高在學中より歌を初め、故石井直三郎氏に師事せり。「吾妹」を経て、目下「水穂」「いぶき」に據る。

笹森壽子

明治三十年五月廣島市に生れ、弘前市馬屋町一九に現住。弘前女學校教師。大正九年、東京女高師文科卒業、同年米國留學、コロロンビア大學に學ぶ。大正十二年歸國、笹森順造と結婚。昭和六年、宇都野研氏主宰勁草社に入社今日に至る。

笹山君子

明治四十一年十二月十日、東京に生れ、同市小石川區東青柳町二五に現住。大正十四年頃より草の實社に入社、昭和十一年末迄同誌に投稿、其後都合にて退き目下は休詠。

笹井浩

本名淺岡一雄。二十五歳。神戸市に生れ、東京府北多摩郡東村山南秋津に現住。昭和二年癩發病、昭和九年全生病院に入院す。作歌經歷といふほどのもの無し。

笹尾好一郎

本名好一。二十八歳。岐阜縣惠那郡串原村に生れ、静岡市稻川町三ノ五二に現住。圖案家。大正十年頃より作歌、昭和七年名古屋「短歌」

加入、現在同誌同人。

笹岡安正

四十九歳。東京市京橋區木挽町に生れ、浦和市上木崎大原中通に現住。洋酒雜詰御商店勤務。雜誌「スバル」全盛時代より作歌、現在いづれにも屬せず。獨り樂しむ。

篠尾美枝子

二十六歳。朝鮮元山府に生れ、東京市世田ヶ谷區玉川尾山町五一に現住。昭和六年頃より生田蝶介氏主宰「吾妹」に入社、其の後間もなく退社、杉浦翠子氏主宰の短歌至上主義に入會、今日に至る。

里見近

明治三十五年十一月二十七日、三重縣安濃郡橿形村大字殿村に生れ、同縣三重郡楠村大字北五味塚に現住。大正十一年三月結婚後、夫廣香について作歌す。

里見房子

三十二歳。東京に生れ、同市豊島區池袋一ノ五四九に現住。由利貞三氏に師事す。短歌公論社同人。

里井陸郎

二十五歳。大阪府泉南郡佐野町中庄湊に生れ、京都市寺町今出川上ル二丁大賀方に現住。京都帝大文學部學生。中學在學中一、二年間自習せしことあるも以後中絶、昭和十年十二月「帯木」入會現在に至る。

眞田但馬

三十三歳。岡山縣淺口郡鴨方町二七五〇に生れ、東京市目黒區大岡山九五に現住。著述。中學三年の頃より作歌、若山牧水氏選の中國民報歌壇に投稿せしことあり。昭和四年より窪田空穂氏に師事す。昭和八年「槻の木」同人となり現在に至る。

早苗亮雄

三十四歳。長野縣下伊那郡龍江村に生れ、同地に現住。僧侶。京都臨濟宗大學本科卒業後、京都嵯峨天龍寺にて雲水生活四ヶ年後歸郷住職。太田水穂、大井廣、吉澤義則の諸氏に師事、潮音、帯木同人。

實吉恵美子

昭和九年二月、十八歳にて他界す。永病の床の上に、歌を唯一のなぐさめとして居りぬ。創作社友。

澤こと子

五十一歳。富山市南田町に生れ、小石川區原町一四七に現住。大正八、九年頃より作歌すれど經歷といふほどのものなし。

澤星彦

本名澤田太郎。三十六歳。大阪府天王寺區下寺町二ノ一八に生れ、和歌山市小松原通三ノ二に現住。雜誌記者。大正八年頃より大阪時事新報に短歌を發表す。當時、澤田春夫、團鶏野秋彦等の筆名を用ふ。後、和歌山市に移住し、社會叢報其他に寄稿。昭和十年九月創

刊の「桐の花」同人。昭和十二年一月「巴旦杏」編輯。同年五月竹垣二編輯現在に至る。大正二年十一月十四日

澤美枝

大阪市に生れ、同市東區瓦町四ノ一に現住。昭和十年五月竹柏會に入會、石棟茂氏の指導を受けて現在に至る。

澤口政之介

明治四十三年三月十六日、宮城縣登米郡石越村に生れ、同縣本吉郡唐桑村に現住。小學校教員。昭和六年六月香蘭入社。昭和十年六月、多磨創刊と同時に多磨短歌會入會、現在に至る。

澤口眞沙夫

明治三十九年八月、靜岡縣周智郡三倉村に生れ、同縣袋井町新町三〇六に現住。青年學校教諭の傍ら作歌に親しみ「心の花」により指導を受け現在に至る。朱實會同人。

澤島かず子

本名一江。明治三十七年四月十五日、長崎に生れ、昭和八年四月五日死亡。昭和三年「ぬはり」入社以來菊池知勇氏の指導を受く。歌集「海峽」の著あり。

澤田證

三十一歳。埼玉縣比企郡平村大字西平に生れ、同地に現住。商。昭和六年さかかに社に入社今日に及ぶ。

澤田甲子雄

號子朗。二十九歳。岐阜縣武儀郡關町乙一九

五七に生れ、同地に現住。米穀商店員。昭和三年十月より作歌、地方誌「砂丘」に入社、同四年八月「青虹」に入社、同八年一月「木苺」に入社同人として今日に及ぶ。其間昭和八年歌誌「草苗」を創刊主宰して一ヶ年隔月発行せり。

澤田 憲治 三十二歳。熊本縣八代郡八代町字西本町一六に生れ、同地に現住。小學校教員。大正十一年より作歌、大正十二年四月、熊本の「非歌人」同人。昭和五年六月、同「龍燈」同人。昭和三年三月より約二年「詩歌」に入る。本名繁一。二十四歳。

澤田 水聲 新潟縣柏崎町諏訪町二丁目丁目に生れ、同町羽森町に現住。印刷工。十七年の頃より作歌、昭和十年十二月より創作社に入社現在に至る。

澤田 藤枝 三十一歳。熊本縣宇土郡浦村に生れ、中華民國上海楊樹浦路上海紡織株式會社社宅に現住。看護婦。昭和十一年より作歌を始め現在に及ぶ。

澤登 龍生 明治三十三年、札幌市九ノ一に現住。大正二年春はじめて短歌を函館毎日新聞に登載、爾來種々の筆名を以て文章世界、新潮、天才文學等幾多の機關に發表せるも、感ずるところあり沈黙二十年、なほ

作歌は懈らず現在に至る。

澤村 傳 三十三歳。栃木縣那須郡向田村野上に生れ、同地に現住。小學校教員。十數年作歌するも一定の發表機關によらず、また一定の師なし。

三條 公夫 本名田中一男。二十七歳。京都市に生れ、同市上京區榎木町通堀川西入二三四に現住。美容術師。昭和五年十一月より「荷塔」詩社友となり作歌を始め。昭和六年七月より「水鏡」に投稿。その後、昭和八年一月より「香蘭」に籍を置き、荒木暢夫氏に師事して、現在に至る。

山宮 允 明治二十三年四月十九日。原籍東京市本郷區湯島切通坂町二〇。同市世田谷區下馬町二ノ一一三〇に現住。大正四年七月東京帝大文科大學卒業。大正八年五月六高教授。大正十四年一月英文學研究の爲英、佛、米國に留學、同十五年十一月歸任。現在府立高校教授。歌は初め母に就て稽古す。明治四十二年五月伊藤左千夫氏の指導を受け、アララギの月次歌會に出席。著作に詩文研究(大正八年)、譯詩集紅雀(大正十四年)、ブレイク論稿(昭和四年)、明治大正詩書綜覽(昭和九年)、歌集歌久都(昭和十一年)其他あり。

山東慶二郎 三十歳。京都に生れ、京都市東山區三條大橋

東二ノ四八に現住。兵庫縣立第一神戸高女教諭。昭和十年一月より潮音社友。

鮫島ちづむ 明治二十一年七月、福岡市姪濱町に生れ、兵庫縣川邊郡立花村七ツ松に現住。無職。作歌十數年、尾山篤二郎氏に師事し自然詩社同人。

血海 美孝 明治三十六年七月二十三日、廣島縣蘆品郡府中町花香山に生れ、同地に現住。教員。大正十二年頃より二ヶ年程創作社友たりしことあり。現在は廣島の晚鐘に籍を置く。

申賀謙太郎 三十一歳。青森縣下北郡東通村尻屋に生れ、同郡田名部町に現住。教員。地方の同人雜誌に投稿するの外特に經歷はなし。

猿田 實 四十四歳。長野縣南安曇郡三田村二三二七に生れ、京都市上京區塔之段昆沙門町四五九に現住。小學校教員。歌は大正五年より始め、今日に至る。現在「帚木」同人。

猿橋英太郎 明治四十年二月十一日、福井縣大飯郡本郷村本郷に生れ、同地に現住。農業。昭和三年一月「創作」入社、若山牧水氏に師事、その歿後喜志子氏に師事、今日に至る。

猿橋 收一 二十七歳。福井縣大飯郡本郷に生る。理髮業。昭和十年六月創作社に入り今日に至る。

しの部

志賀 一夫

明治三十年三月二日、岡山縣眞庭郡八束村下

見に生れ、同地に現住。農家なれど病弱にして半農半讀書子の如き生活を送り來り。始め平賀春郊氏に手ほどきを受け、後ち竹柏園の齋藤瀏氏の指導を受けて今日に至る。

志賀 曉果

本名正三。三十歳。大分縣直入郡久住町に生

れ、同地に現住。町役場吏員。初め若山牧水氏に師事、後土屋文明氏の添削を受く。

志方 赤堂

本名朔。三十七歳。長崎縣東彼杵郡江上村に

生れ、同地に現住。農業。大正十三年陸軍野戰砲兵學校に入隊、檣禮に入り吉植庄亮氏に師事、後ち多齋創刊と同時に北原白秋氏の門下となり今日に及ぶ。作歌經歷十九年。

志貴きみ子

三十一歳。愛知縣に生

れ、東京市江戸川区西小松川二丁目水明荘内に現住。小學校教員。二年ばかり水穂社友たりし事あるのみ。

志岐 春吉

三十六歳。福岡縣三潁郡大川町榎津に生れ、

同地に現住。新聞販賣業。大正十一年末頃より「創作」社友。

志岐 信次

三十四歳。福岡縣大川町に生れ、同地に現住。

米穀及蒲鉾商。昭和二年「創作」に入社し現在に至る。

志摩 英二

本名大屋武夫。明治三十八年五月八日、鳥取

縣濱田町に生れ、大阪市住吉區駒川町四ノ一八に現住。銀行員。大正十五年早崎夏衛、福岡將夫氏等と歌誌「草の葉」を隔月發行、昭和二年杉野朴、福岡將夫氏等と「裸形」發行、昭和五年「地上」入社、同人として現在に及ぶ。又「短歌精神」同人。

志水賢太郎

明治四十年八月十日、愛知縣愛知郡日進村岩

崎に生れ、名古屋市中區車道町三ノ一ノ八に現住。郵便局員。昭和二年十月、蒼穹社入社以來岡野直七郎氏に師事す。歌集「松濠」(昭和十二年五月刊)あり。

志村 潮

本名堀家義勝。三十二

野村に生れ、同地に現住。明大在學中一時水穂「に入りしも、昭和八年荒木暢夫氏の指導を受けて「香蘭」に入り、同十年「多齋短歌會」創立とともに之に移り、北原白秋氏に師事して今日に至る。

志村 白鳥

本名信義。三十九歳、

長野縣東筑摩郡宗賀村洗馬に生れ、名古屋市中區島退町二ノ一に

現住。洋服商。十七八歳の頃より名古屋歌壇に投稿し若山牧水、太田水穂兩氏の指導を受け、其後叔父鷺野飛燕の熱田歌會を創立するやこれに加入す。二十七歳の春「創作」に入社し若山牧水氏に師事し、その死後は喜志子氏のもとに創作社友として今日に至る。

志村 桐門居

本名龜助。五十歳。神奈川縣に生れ、兵庫縣

武庫郡本山村森に現住。公立高等女學校教諭。「街道」同人。

志連 政三

二十五歳。滋賀縣犬上郡大瀧村字川相に生れ

同縣高島郡白瀬村字知内に現住。小學校教員。師範學校在學中より歌に親しみ大毎滋賀歌壇其他の雜誌に投稿現在「いぶき」誌に屬す。

滋賀 エミ子

四十一歳。京都市東九條札ノ辻東入二二九に

生れ、銚子市松本町一ノ一に現住。教育者の妻。昭和十年より水穂に入社、松田常憲、上田英夫兩氏の指導を受く。

思賀 良

本名紅林茂夫。二十七

京市豊島區雜司ヶ谷四の五七〇に現住。安田銀行員。年少より和歌を好み、後「短歌研究」(日本短歌)等綜合短歌誌に投稿、其後「香蘭」の橋本敏夫氏につきしも昭和十年「鶴」社に入社、釋道空氏の指導を受く。

四賀 光子

本姓太田。五十三歳。長野市に生れ、東京市

瀧野川區田端二八三に現住。太田水穂の妻。潮音社同人。歌集「藤の實」のほか「日本和歌讀本」の著あり。

四海多寶三

本名民藏。舊姓善波。明治二十三年神奈川縣

二宮町に生れ、東京市豊島區巢鴨七ノ一六九四に現住。現在四海書房主。歴史教育研究會を主宰し、歴史教育、歴史學研究その他數種の月刊雜誌及學術書の出版に從事す。明星、文庫末期頃より歌作に親しみ、松本白衣の名を以て橋田東聲氏其他と珊瑚礁の前身白楊會を結ぶ。大正六年「珊瑚礁」同九年「行人」同十三年「日光」を創刊。後「多磨」同人たり。

四野宮すま子

廿六歳。東京市京橋區南橫町一四に生れ、同

市淀橋區諏訪町一六〇に現住。京橋區明石町方面館託兒部保母。昭和八年一月「草の實」に入社、同九年九月退社、昭和十年四月「遠つび」と創刊と同時に入會今日に至る。

清水 朝子

二十七歳。飛騨國高山市に生れ、甲府市細工

町四九杉山方に現住。昭和五年水壘入社、今日に及ぶ。

清水以譽子

二十九歳。山梨縣北巨摩郡安都那村箕輪に生

れ、同地に現住。農家の主婦。十七歳竹柏會に入會作歌を始む。二十二歳アララギに轉じ以後岡麓氏の指導を受け今日に至る。

清水 和彦

四十二歳。滋賀縣高島郡饗庭村に生れ、名古屋

屋市東區内山町三ノ二九に現住。會社員。大正三年あゆみ社結成、地方小雜誌「ななし帥」「あゆみ」「生に至る者」順次發刊。大正五、六年アララギ誌友。昭和六年「歌と觀照」創刊に當り入社、現在に及ぶ。

清水 一雄

八王子市子安町に生れ昭和八年十二月十七日

死亡。銀行員。昭和四年頃より作歌、昭和六年「八王子短歌」會員となる。

清水 易嘉

號愛川。四十四歳。高知縣長岡郡三和村濱改

田に生れ、朝鮮咸鏡南道永興警察署官舎に現住。警察官。昭和五年夏細井魚袋氏主宰の眞人に入社、現在に至る。其間昭和六年より七年にかけ滿一ヶ年霸王樹主宰白井大翼氏に師事したることあり。

清水 基美

筆名牧丘草之助。明治四十三年二月二十六日

群馬縣佐波郡上湯村大字仲内乙四四二に生れ同村大字上福島一〇三九に現住。小學校訓導。大正十四年群馬師範入學と同時に「野菊」の大澤雅休氏の指導を受く。在學中「妖星」「群帆」等の短歌誌を編輯、昭和三年以降野菊社

を退き歌誌「木もれ陽」の同人となり、故須藤泰一郎氏の指導をうく。氏歿後「ぬはり」の菊池知勇氏に師事して現在に至る。

清水 潔

明治三十七年一月廿五日生。長野縣更級郡信

里村三五二に現住。農業。大正十一年四月十九歳にてアララギ入會、昭和二年三月退會。其の間東京日日歌壇に投稿せし事あり。以後殆ど歌作せず。

清水 塊音

本名慎一。四十五歳。静岡縣富士郡吉永村比

奈に生れ、同地に現住。教員。水壘社同人。二十六歳。茨城縣東茨城郡下大野村下大野に

清水 源

生れ、同地に現住。農業。とりたてて書くほどの作歌經歷なし。

清水 權錄

明治三十五年五月北海

道に生れ、昭和十年三月歿す。潮音社友にして、遺著に「山彦」あり。

清水 貞次郎

三十二歳。新潟縣古志郡上川西村宮關三一五

に生れ、長岡市東新町に現住。長岡市役所吏員。はじめ相馬御風氏につきて學び、後ち中原綾子氏主宰の「いづかし」に加入、また長岡市に短歌團體「青光社」を起す。

清水 三郎

本名金敷武男。三十二歳。栃木縣芳賀郡祖母

井町大字稻毛田に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和八年四月より昭和九年三月まで、「杜鵑花」の誌友たり。

清水しつ子

本名シツ。三十一歳。福島市清明町に生れ、福島縣信夫郡笹谷村新町に現住。小學校教員。

夫清水延晴に手ほどきを受く。昭和九年十月「現實短歌」に入社、田口白汀氏に師事して現在に至る。

清水秋歩

本名利次。三十歳。和歌山縣海草郡黒江町字歌山に生れ、海南市船尾中濱二三七に現住。

漆器製造業。昭和三年十一月「渡津海」（和歌山市）入社、翌年三月退社。昭和十年迄作歌休止、昭和十年二月「紀伊短歌」入社、昭和十一年一月「香蘭」入社、昭和十二年一月「紀伊短歌」同人となり現在に至る。

清水翠雨

本名伍六。明治二十八年三月二十五日、山梨縣北巨摩郡安都郡村八卷家に生れ、東京市豊島區堀之内町四二に現住。十八歳より作歌。

二十七歳清水家をつぎ二十九歳上京、三十一歳結婚。雑誌店玩具店等を営みしが何れも失敗、昭和六年失業。昭和五年霸王樹社に入り白井大翼、飯田莫哀氏等の指導をうけ今日に至る。

清水夕舟

本名勤。四十四歳。兵庫縣津名郡釜口村に生

れ、同郡假屋町二三四七に現住。種苗商。大正元年頃アララギ會員となり、一時中絶し居たるが昭和八年より復活し、土屋文明氏の指導を受けて現在に至る。

清水武

明治三十七年十月二十日六日横濱に生れ、東京市杉並區井荻一ノ三九に現住。昭和三年夏より昭和八年末まで海外留學。ドイツ國ハイデルベルク大學にて哲學及文學を學ぶ。リツケルト教授に師事す。曾て「心の花」（昭和三年七月）に萬葉集に基ける舞踊劇「竹取翁」を發表せる他に作歌經歷なし。

清水千代

四十六歳。香川縣丸龜市に生れ、大阪府豊中市櫻塚二六三に現住。作歌を始めてより約二十六年、初め獨學、後ち中河幹子氏のごきやう創刊後間もなく同人として入社十四五年間あり。昭和十年三月歌集「白木蓮」上梓。昭和十一年五月「どうだん」創刊これを主宰して今日に至る。

清水輝明

大正七年一月九日、埼玉縣秩父郡三澤村六八八に生れ同地に現住。農業。高等小學卒業當時より短歌に志し現在に至る。「心の花」に據る。

清水暉吉

明治二十七年群馬縣碓氷郡原市町に生れ、東京市世田谷區世田谷五ノ二八六二に現住。著

書に詩歌集「永遠と無窮」英詩集「春の風」詩集「自画像」の他數種あり。

清水寅治

故人。其他不明。

清水信清

二十五歳。静岡縣周智郡犬居町に生れ、同地に現住。農業。昭和八年九月「ささか」に入社、現在に至る。

清水延晴

本名延清。三十四歳。福島市外杉原村大字清水町に生れ、福島縣信夫郡笹谷村大字清水に現住。小學校青年學校教員。大正十二年作歌をはじめ「短歌雜誌」「郷愁」等に投書し昭和二年に至る。昭和三年一月常春社に入り其後同郷の先輩並木秋人氏を助け「ひこぼえ」短歌日本」等行動を共にせしが昭和六年十二月離脱。昭和七年「歌と觀照」に入社岡山巖氏に師事し現在に至る。

清水はま子

明治二十八年五月六日に生れ、同市澁谷區岡山町三に現住。昭和五年四月「常春」に入社今日に至る。

清水比庵

五十六歳。岡山縣上房郡高梁町に生れ、栃木縣上都賀郡日光町山内に現住。日光町長。昭和四年十月短歌雜誌「二荒」を發行して今日に至る。歌集「夕暮」「朝明」あり。

清水 晴代 不明。

清水 堪治 五十歳。長野縣上水内郡水内村字上條に生れ

同縣更級郡八幡村字北堀に現住。小學校教員。大正十五年アララギに入會、昭和七年退會、以後所屬なし。

清水 弘 本姓梅澤。二十八歳。京都市大森區に生れ、

山口市清水二二四八ノ二に現住。職業無し。大阪朝日新聞九州歌壇にて松村英一氏の選を受けし事あり、昭和十一年「やまぶき」に入り今日に至る。

清水 政福 三十歳。群馬縣北甘樂郡高瀬村大字高瀬三二

二に生れ、同地に現住。農業。昭和四年頃より早水城春氏に師事し作歌を始め現在に至る。「すみれ」「踏土」等の同人雜誌を出す。

清水 百代 岡山縣勝田郡飯岡村高下二〇三に生れ、昭和

十一年十月卅一日ブラジル國サンパウロ州パウルー市ベネフエセンシアポルトゲーサ病院に於て死亡。行年二十九。特に據れる結社なし。昭和八年渡伯後一人短歌に精進し歌集「山茶」あり。

清水 乙女 三十九歳。三重縣桑名町に生れ、東京市世田

谷區世田谷五ノ二八六二に現住。高等女學校

教諭。大正十一年歌詠「御形」を津田塾同期生等と創刊。昭和五年頃同誌を退き専ら北原白秋氏に師事す。現在多磨會會員。

紫藤 紫光 三十六歳。愛媛縣南宇和郡深浦に生れ、高知

縣幡多郡下田町に現住。僧侶。昭和五年より八年まで「勁草」に、昭和九年より十年まで「高嶺」に據る。昭和八年より現在に至る迄石野義一氏主宰郷土歌詠「くさの葉」同人。

秋 艸 道人 本名會津八一。明治十四年新潟縣に生れ、東

京市淀橋區下落合三ノ一三二一に現住。文學博士。東洋美術研究。早大教授。歌集「南京新唱」あり。

鹿谷 かをる 本名馨。二十九歳。兵庫縣飾磨郡鹿谷村に生

れ、神戸市神戸區加納町二ノ四六ノ四〇に現住。小學校教員。昭和三年より「あかしや」一「榎の木」を経て、昭和十一年「曼陀羅」に入社、現在に至る。

式場 麻青 本名益平。明治十五年三月二十二日、新潟縣

中蒲原郡五泉町大字五泉五〇〇〇に生れ、昭和七年九月大阪市住吉區北田邊町三九七に歿す。明治三十五年三月新潟中學校卒業、同年四月東京二松學舎三島毅氏に漢文、落合直文氏に國文學を學ぶ。明治三十九年國語傳習所卒業。明治四十年北人會主宰、大正五年高志

時報主幹、大正十五年八月大阪府立女子師範學校教諭。大正十三年八月歌集「摩星樓歌帖抄」刊行。

宿谷 四郎 三十九歳。東京府西多摩郡小曾木村南小曾木

二七六四に生れ、同地に現住。農業。窪田空徳、對島完治兩氏に師事、大正八年「地上」創刊にあたり入社現在に至る。

繁富 元治 號帆風。四十七歳。山口縣玖珂郡川下村二二

二に生れ、旅順市常盤町八ノ四に現住。中學校國語漢文教員。廣島高師時代「火群」會員、昭和四年頃より大連の「合萌」歌會同人。

重田 流人 二十一歳。廣島縣安藝郡畑賀村に生れ、千葉

縣市川市眞間三六九中川方に現住。職業なし。昭和十一年四月多磨短歌會々員となり今日に至る。

重友 小代太 本名一正。明治四十五年德島縣鴨島に生れ、

朝鮮大邱府元町一ノ七七に現住。時計寫眞機等一般精密機械の修理工作所を営む。嘗て歌誌「梵貝」の同人たりしも、同誌脱退後昭和八年ポトナム社に入社、現在に至る。

重松 ムラ 四十四歳。佐賀縣小城町晴田に生れ、鹿兒島

縣加世田町に現住。鹿兒島市立女子興業學校教諭休職中。大正四年より水麴に據る。

重見 白朗 本名貞一。四十歳。愛媛縣温泉郡立岩村中村に生れ、松山市外垣生村西垣生に現住。教員。大正五年より約三年間前田夕暮氏の指導を受く。後作歌一時中絶、其の後再び作歌するに至りしが、昭和五年「あけび」に入り花田比露思氏の指導を受け今日に至る。

重山 十字路 本名重次郎。四十九歳。鳥取縣氣高郡瑞穂村下坂本に生れ、兵庫縣美方郡温泉町に現住。小學校長。作歌の師なく一切自我流なり。歌集「睡蓮」あり。

穴戸 幸榮 明治三十五年東京府千歳村に生れ、東京市中野區新山通二ノ四四に現住。家具設計製作。少年時我流に作り少年雜誌に投稿、その後中絶、中年再び作歌、現在は「短歌鑑賞」に加筆す。

七條 晃正 明治四十三年兵庫縣揖保郡半田村野田因念寺に生れ、姫路市光源寺前町三六に現住。一七條心療研究所」主宰。二十五歳萬造寺齊氏の街道社に入る。

七五三 満 明治三十七年六月十一日、愛媛縣上浮穴郡浮穴村大字北平に生れ、同地に現住。小學校教員。大正十二年より橋田東聲、吉植庄亮兩氏の教を受け、後一旦作歌に遠ざかり、昭和四

年、再び霸王樹社に入り現在臼井大翼氏に師事す。

品田 聖平 三十九歳。新潟縣柏崎町に生れ、静岡縣富士郡吉永村に現住。社會教育。大正十二年國學院大學卒業後滿五ヶ年東京海城中學校奉職。昭和八年「吾妹」に入り生田蝶介氏の指導を受けつつ今日に及ぶ。

品田 政子 三十一歳。横濱市中區若宮町二ノ一七に生れ大阪府豐中市北乃根山二四五に現住。昭和五年十二月より今井邦子氏に師事し、その擧の葉會を経て同じく氏の明日香會に至る。目下明日香會員。

品田 米尚 二十七歳。新潟縣刈羽郡荒濱村八九に生れ、同郡高柳村萩漆小學校内に現住。小學校教員。昭和六年法政高等師範部國漢科在學中土屋文明氏より作歌教授を受く。一時「橄欖」社友たりしことあれど其の後獨り作るのみ。

階本 樹 本名藤井秀雄。明治三十四年廣島縣吳市に生れ、京都市七條通十本西に現住。元大眾日日新聞編輯長。現在著述業。

信樂 眞純 明治二十八年十月二十町に生れ、京都府愛宕郡鞍馬村鞍馬山鞍馬寺に現住。天臺宗鞍馬寺貫主。故與謝野寛氏及

び與謝野晶子氏の指導を受く。歌集「柳絮」。「筑紫日記」あり。

信濃田 津穂 明治三十七年九月、兵庫縣飾磨町宇高濱に生れ、同縣生野町日銀谷に現住。商業。大正十年頃「國民文學」に入社以來植松壽樹氏に師事して今日に至る。

信夫 安 號先春。明治三十四年福島市に生れ、立教大學英文科卒業。静岡縣立豆陽中學校に奉職。昭和十一年一月神奈川縣大磯の妻の實家に死去す。中學生時代作歌を志し、「アララギ」に投稿、大正七年頃より、土屋文明、釋道空、中村憲吉、島木赤彦、古泉千樞氏の選を受け主として千樞門下たり。後千樞氏に従ひ「日光」に發表。

篠崎 隆 二十九歳。千葉縣千葉郡更科村に生れ、同地に現住。昭和三年頃楠田敏郎氏の「文珠蘭」に入り、同氏に師事。後「青虹」「勁草」に入りしも、昭和十一年以後作歌中絶。

篠崎 松夫 三十歳。茨城縣那珂郡平磯町に生れ、同町一九四五に現住。茨城縣土木課勤務。昭和六年五月「橄欖」社友となり今日に至る。

篠崎 八重乃 二十三歳。福岡縣鞍手郡小竹町大字勝野三八二九に生れ、東京市芝區汐留一五ノ一、井口

イマ方に現住。看護婦。十六歳より作歌、昭和九年五月「青垣」に入會し今日に至る。

篠崎よしゑ (しのざき) 二十四歳。北海道名寄町に生れ、北海道空知郡中富良野市街に現住。昭和六年六月潮音入社現在に至る。

篠塚寛 (しのづか) 三十四歳。茨城縣筑波郡板橋村に生れ、札幌市北十六條東九丁目に現住。北海道女教諭。二十歳より作歌、昭和四年六月歌集「星散羅列」出版。昭和六年北海道赴任と同時に「原始林」同人となる。昭和十一年九月「橄欖」に入社今日に至る。

篠原いと (しのはら) 三十九歳。長野縣上田町四二ノ三に現住。満鐵社員の妻。三、四年前より作歌、滿洲短歌會々員として歌誌合萌に時々寄稿す。

篠原源太郎 (しのはら) 二十九歳。福岡縣朝倉郡三奈木村字城に生れ大分市魚町安部雪夫方に現住。デパート雑貨部勤務。東京の兄の歌を見てより作歌す。

篠原志都兒 (しのはら) 本名圓太。明治十四年長野縣蓼科山麓湯川に生れ、大正七年一月十九日歿す。農。伊藤左千夫氏に師事し、明治三十七年八月同氏を自宅に訪ふ。爾來交遊しげし。「アシビ」「ヒムロ」「日本」「アカネ」「アララギ」等に作

品を發表す。

篠原富藏 (しのはら) 三十四歳。福岡縣朝倉郡三奈木村字城に生れ

東京市麹町區下二番町三七に現住。官吏。十六歳の秋上京して或出版屋に勤む。かたはら若山牧水氏の創作社々友となり現在に至る。

篠原双葉 (しのはら) 本名鏡四郎。明治三十三年十二月四日、群馬縣吾妻郡坂上村萩生に生れ、同郡草津町野口館別荘に現住。小學校教員。昭和十二年三月より歌誌高原同人となる。

篠原正邦 (しのはら) 二十二歳。高知縣長岡郡三和村里改田に生れ同地に現住。職業無し。昭和九年十月頃より作歌しつゝ現在に及ぶ。師なし。

篠原よしを (しのはら) 五十三歳。山梨縣北巨府市百石町三〇四に現住。醫師。中學時代新聞雜誌等に投稿し、高校時代より大學時代一時中絶。大正七年頃よりアララギ會員となり又國民文學講讀者となりて、兩誌に投稿、岡麓、松村英一兩氏の選を受く。歌集「忍冬」(昭和八年刊)あり。

芝猛雄 (しば) 明治十五年十二月五日兵庫縣有馬郡有野村二郎に生れ、同地に現住。農。明治三十二年頃より和歌に興味を持ち、小天地、スバル、中央公論等に出詠せしことあり。大正五年同志と

ともに有馬短歌會を興し、又アララギ會員となりしも、後、武庫短歌會に加はり、しほさの隣刊後あげび會員となり現在に及ぶ。

芝宏 (しば) 三十二歳。鹿児島縣鹿毛郡西之表町に生れ、臺灣高雄州潮州郡蕃地クワルス社鹽野義商店規那造林場に現住。會社員。昭和十一年二月臺北あらたたま會に入會。

芝沼美重 (しば) 二十六歳。茨城縣鹿島郡沼前村大字小堤に生れ、同縣多賀郡助川町東町に現住。會社事務員。昭和七年九月より島田忠夫氏に師事、昭和十年十一月より「アララギ」に入會、齋藤茂吉氏に師事、現在に至る。

芝山永治 (しば) 三十五歳。静岡市に生れ、本本町八一七に現住。會社員。昭和七年より昭和九年四月まで竹柏會々員。昭和九年五月より一路會々員として現在に至る。

柴紐三郎 (しば) 本名壯三郎。大正二年四月千葉縣海上郡豐岡村に生れ、東京市荒川區南千住町六ノ一五一に現住。疊職。昭和七年水壘入社作歌を始む。上田英夫氏、尾上柴舟氏の選を受けて今日に至る。

柴弘志 (しば) 三十六歳。千葉縣香取郡多古町に生れ、同郡中村に現住。農業技手。大正十三年一月より

創作社に入社、昭和三年二月より雑誌「まゆみ」を發行。

柴崎光雄

二十四歳。山形縣西村山郡白岩町大字留場に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和八年中學卒業の頃より作歌し始め、一時休詠、十二年三月水滸入社今日に至る。

柴田楊花 明治二十九年三月二十三日、名古屋市中區大坂町に生る。愛知縣廳を経て愛知銀行に勤務。大正五年歌詠「ナゴヤ」の創刊されるや同人として加盟。大正十二年名古屋短歌會を歌友らと創立し發行所主たり。昭和五年三月結婚。同年十月三十一日名古屋病院にて死亡。享年三十五。同市東郊覺土山に歌碑あり。

柴田倉三

本名倉藏。三十四歳。秋田縣雄勝郡三輪村野中字野中七〇に生れ、北海道渡島國上磯郡上磯町字昭和町七二に現住。電工。淺野セメント北海道工場に勤務。昭和五年四月より、昭和六年八月まで水滸に屬す。現在安富六男氏主宰はまなすの會員たり。

柴田健兒

明治二十五年十二月、京都に生れ、大阪府豊中市新免六三六に現住。徳永硝子株式會社研究部長。アララギ會員。

柴田畔老

本名虎一。七十二歳。廣島縣變三郡三次町に

生れ、明治三十四年九月渡米、北米合衆國加州リバサイト市東十四街二九九六に現住。食料品及雜貨商。一九三一年九月腰部及兩脚部に負傷し以來歩行の自由を失ひてより作歌、高柳沙水氏の指導を受く。

柴田久

二十六歳。茨城縣新治郡石岡町大字石岡九三

九六に生れ、同地に現住。農業。菊地貞也氏に師事し、昭和八年國民文學に入社、窪田空穂、谷井兩氏の選を受け今日に及ぶ。

柴谷武之祐

三十一歳。大阪府堺市九間町西二丁三番屋敷

に生れ、同地に現住。酒造業。大正十五年アララギ入會、岡麓氏に師事す。

柴谷文子

二十七歳。大阪府北河内郡星田村に生れ、堺市九間町西二丁三番屋敷に現住。柴谷武之祐の妻。昭和十一年夏アララギ入會、岡麓氏に師事す。

柴生田稔

三十五歳。原籍埼玉縣此企郡野本村。東京市中野區上ノ原町一に現住。教員。昭和三年一月アララギに入會。

柴山保

明治四十年六月三日、千葉縣安房郡富浦町豊岡三八に生れ、同町南無谷二二〇四に現住。小學校教員。昭和五年十一月アララギに入會し高田浪吉氏に師事す。其の後昭和十一年四月轉じて青垣會に入會し今日に至る。「短歌鑑賞安房百首」の著あり。

柴山武矩

本名武徳。明治三十一年二月十一日、神奈川縣足柄下郡小田原町綠四ノ五七三に生れ、東京市板橋區練馬南町一ノ三四九九に現住。會社員。大正六年創作社に入社、大正九年長野市にて歌詠「水滸」發行。昭和八年臺北市にて歌詠「相思樹」發行今日に繼續す。歌集「海彦山彦」歌集及短篇集「突風」の著あり。

椎木文也

四十七歳。山口縣都濃郡富田町に生れ、ブラジル國リオ・デ・ジャネイロ市に現住。横濱正金銀行リオデジャネイロ支店支配人。島本赤彦氏主宰の頃「アララギ」に投稿、當時虹島椰子雄たる筆名を用ふ。昭和十一年一路會に入會現在に至る。

椎名智夫

明治四十一年二月十一日、千葉縣香取郡栗源町高萩に生れ、同縣小見川町に現住。佐原中學千葉師範卒業、現在小學校教員。師範在學當時故岩谷莫良氏の指導を受け作歌を始む。嘗て水滸社たりしことあり。現在何れの結社にも屬せず。

椎野かつ

三十二歳。東京市深川區靈岸町に生れ、同市大森區千束町七〇六に現住。小學校教員。昭和六年五月今井邦子氏に師事し歌詠「明日香」

創刊と同時に會員となる。

椎屋 欣二 本名宮崎金治。三十四歳。長野縣更級郡鹽崎村に生れ、同郡篠ノ井町に現住。米穀肥料商。昭和四年アララギに入會して今日にいたる。

澁江 嶂 本名秀壽。明治三十七年長崎縣島原港に生れ、同地に現住。宿屋。島内八郎氏に師事す。現在所屬なし。

澁澤喜守雄 二十六歳。群馬縣新田郡尾島町備前島に生れ、東京市杉並區高圓寺二ノ三七二、三宅方に現住。東京帝大醫學部學生。昭和八年三月「アララギ」に入會し齋藤茂吉氏の指導を受け現在に至る。

澁谷 あきら 本名齋。四十歳。熊本縣球磨郡一武村に生れ、同郡湯前村に現住。小學校教員の妻。昭和五年創作に入社、神原克重氏に師事して今日に及ぶ。

澁谷 市郎 二十八歳。山形縣西村山郡柴橋村に生れ、同地に現住。農業。昭和五年十一月國井茂村氏に師事し「草徑」に入社。六年五月退社、同九月美濃谷茂介氏編輯「みちのく」に入社、同十二月犬飼藤八郎氏に師事し、「草の香」を編輯發刊す。同八年九月犬飼氏病死し、作歌を中止、十二年三月大澤雅休氏の「野菊」

に入社。

澁谷 俊 明治二十一年六月二十日生。甲府市深町二五三に現住。小學校教員、山梨日日新聞記者、等を経て現在甲府市收入役兼會計課長。歌は少年時代より與謝野寛、晶子兩氏に學び、歌集「華鬘」外數種の著あり。

澁谷 すみ子 本名中辻とく。四十六歳。山梨縣東山梨郡加納岩町に生れ、東京市澁谷區伊達町二八に現住。少女時代より時をり作るのみ。

澁谷 瑠子 明治二十七年一月、東京二五三に現住。澁谷俊の妻。元並木秋人氏の小こばえ同人、現在は北原白秋氏に傾倒す。歌集「無礙の光り」の著あり。

澁谷 嘉次 本姓杉田。三十八歳。東京に生れ、東京市神田區駿河臺三ノ九に現住。書道教授。昭和二年「アララギ」入會同齋氏の指導を受く。

澁谷 修 本名修藏。三十六歳。神奈川縣愛甲郡厚木町二五四二に生れ、同縣中郡秦野町會屋一四九三に現住。銀行員。昭和六年一月アララギに入會現在に至る。土屋文明氏に師事す。

鹽川 孝 四十八歳。静岡縣東郡北郷村に生れ、同郡富士岡村神山九六六に現住。静岡三五銀行

御殿場支店長。大正六年より竹柏會佐佐木信綱、石種千亦兩氏の指導をうけ今日に至る。心の花に屬す。

鹽小路 政子 二十四歳。東京市麴町區上二番町五〇に生れ、東京市世田ヶ谷區新町二ノ三〇三に現住。實踐女子専門國文科二年より高崎正秀氏の指導を受け、卒業後青角髮短歌會に入る。

鹽崎 善一 二十八歳。和歌山縣海南市日方に生れ、同地に現住。職業なし。曼陀羅會員。

鹽澤 薫 二十八歳。東京府南多摩郡界村相原丸山に生れ、同地に現住。農業。昭和八年十月八王子の「桑の實」に入會、昭和九年十二月同誌廢刊、昭和十年一月「野菊」に入會今日に至る。

鹽島 嘯風 本名元信。明治三十七年生。東京市豊島區雜司ヶ谷町二ノ四六〇に現住。昭和二年高野はま氏等の回覽誌「二路」に知り、「つきしろ」(後北郊短歌と改題)を發行、岸良雄、赤木邦輔氏等が「鴨頭草」發刊と共にその同人となる。卒業後殆ど作歌より遠ざかる。現在東京盲學校にあり、中等部生師範部生に國語を教ふ。盲人の作歌振興に努む。

鹽田 悦子 明治二十八年二月十六日、大阪府泉北郡久世

村大字伏尾に生れ、同郡鳳町六三六に現住。初め仲田應弘氏について萬葉集及び現代短歌の講義を受く。昭和九年一月高嶺に入社、引きつゞき今日に至る。昭和十一年六月鳳歌會を起す。

鹽田 邦一 明治三十二年十一月二日、高知縣長岡郡本山町に生れ、同縣幡多郡中村町山際に現住。大阪毎日新聞社中村通信部主任。十八歳の頃より作歌、「自然」「國民文學」を経て「地上」「秦皮」等の同人たりしことあり。

鹽田 沙香 三十歳。京都市に生れ同市上京區紫野上若草三ノ三に現住。二十三歳の頃より短歌に興味を持ち「日本短歌」の誌友となり、二十八歳の秋より松村英一氏に師事し、國民文學誌友となり今日に至る。

鹽田 眞八 筆名露葉、つゆは、六羊子。四十四歳。東京府南多摩郡恩方村に生れ、同地に現住。農業、東京監獄書記、醫院の藥劑員、謄寫版の筆工、日雇人夫、地主手代等を経て現在村役場雇書記。主として地方の同人雜誌に據る。生活に追はれ作歌より遠ざかること屢ありて今日に及ぶ。

鹽田 秋陽 本名音藏。一時陽村と號せり。明治三十七年四月二十日、德島縣名東郡佐那河内村に生れ、

德島市富田浦町字堀南に現住。化粧品小間物商。大正十一年頃より作歌。

鹽津 眞二 四十歳。京都府龜岡町小山東大野町二八に現住。京都市吏員。昭和六年十一月曼陀羅社加盟、現在同人。

鹽野 橙一 明治二十三年十一月二日、群馬縣利根郡川田村に生れ、東京市澁谷區幡ヶ谷本町三ノ五七〇に現住。高等女學校教員。大正十一年四月師範學校教諭として新潟縣高田に赴任し始めて短歌を詠む。平野秀吉氏主宰の「潮ぎら」の同人たり。相馬御風氏の指導をうく。

鹽原 義久 明治二十七年一月一日、長野縣東筑摩郡朝日村大字古見に生れ、同郡廣丘村大字郷原に現住。農業。昭和二年二月太田水穂氏の潮音に入社し今日に至る。

鹽見 清子 本名清香。三十三歳。井に生れ、大阪府東淀川區元今里南通一ノ七三に現住。大阪府警部補妻。昭和九年九月潮音社太田水穂氏の門に入り現在に至る。

鹽見 太郎 三十歳。京都府何鹿郡中筋村字高津に生れ、

同地に現住。教員。昭和十年春頃より獨り作歌、昭和十一年四月より萬造寺齊氏主宰「街道」社友となりて今日に至る。

鹽見 敏明 三十歳。岡山縣赤磐郡瀧瀬村に生れ、同地に現住。小學校教員。高等小學の頃初めて作歌、少年雜誌、地方新聞に投稿。師範入學後、文章俱樂部、短歌雜誌等に投稿、同人雜誌發行。一時作歌を中絶、現在地方短歌同人雜誌及び中央某社に加盟。

鹽谷 喜久子 本名喜久。三十四歳。福岡縣田川郡金田村に生れ、唐津市坊主町四五二に現住。昭和二年水斐社に入社、今日に及ぶ。

鹽山 正二 二十歳。熊本縣下益城郡松橋町に生れ、同郡杉合村御舟手に現住。小學校教員。師範學校二年頃より歌を作り初めて現在に至る。其の間短歌雜誌「眞人」の同人たりし事あり。現在は「龍燈」の同人たり。

潮満庄三郎 三十五歳。熊本市東坪井町一四に生れ、朝鮮咸鏡北道慶興郡灰岩洞社宅一ノ二〇一番戸に現住。石炭工業會社僱員。大正十四年作歌を始め十五年八月水斐入社、翌年八月退社、昭和九年三月復社。八月歌誌向日葵を創刊主宰す。十年十月水斐退社、十一年六月向日葵廢刊、十二月眞人入社。十二年一月氾濫入社。

潮村 白楨 本名瓜生嶋清志。十九歳。大分市に生れ同市に現住。職業無し。作歌経験といふほどのも

の無し。

島 棟乃

本名トヲエ。四十九歳。和歌山縣那賀郡名手町

に生れ、京都市左京區銀閣寺南隣に現住。郷里時代與謝野晶子氏に通信教授を受けし事あり。京都女子専門時代、恩師山本行範氏(初音會)吉澤義則氏(帶木會)に指導を仰ぐ。現在萬造寺齊氏主宰の歌誌「街道」同人。

島 吉二

本名副島吉次。三十二歳。佐世保市に生れ、

同市上矢岳町二九四に現住。佐世保軍港購買組合事務員。歌歴といふほどのものなし。

島 久美於

本名前田重平。二十一歳。奈良縣南葛城郡吐

田郷村名柄に生れ、同地に現住。製綿業。十八歳の秋より作歌、二十歳の春より水麩に投稿しつづ現在に及ぶ。

島 東吉

明治二十三年四月二十六日、東京市麴町三番

町に生る。著述業。早稲田大學に學びし時代若山秋水氏を識りて作歌す。後滿洲に於て生活し、歸來、秋水氏と再會せしも「君の歌は變調なり」と云はれて、作歌を斷念、其後は俳句に精進す。著書は小説、隨筆及び佛論、句集等にして歌に關するものはなし。

島 乃保留

本名前島丹。四十歳。茨城縣太田町に生れ、

東京市世田谷區玉川尾山町七九に現住。會社

員。昭和五年秋初めて作歌、舞島登の筆名にて報知歌壇に投稿、佐佐木信綱博士の選を受く。昭和六年五月アララギ會員となり現在に至る。

島 稔

明治四十四年九月八日和歌山市北新博勢町二

八に生れ、仙臺市東二番丁一五六に現住。東北帝大法文學部學生。昭和十年夏よりアララギ會員となり結城哀草果氏の教を受く。

島 洋介

本名古戸嘉六。昭和七年十二月頃カナダに客

死す。年齢、出生地不明。カナダの邊陲にて勞働に従事す。少年時代より同地に在任したるが如し。はじめ「短歌雜誌」に投稿し、後「國民文學社」に入社して植松壽樹氏の選歌を受く。

嶋 正央

二十七歳。三重縣南牟婁郡木本町に生れ、同

地に現住。小學教員。昭和十年水穂に入社、金澤種美氏、上田英夫氏の選を受く。

嶋 雅男

本名中村正夫。二十七歳。京都府竹野郡彌榮

村字堤に生れ、同郡網野町字淺茂川に現住。小學校訓導。昭和九年一月、龜山美明氏の「いぶき」に入社現在に至る。

嶋 藤介

本名下村寅男。二十五歳。熊本縣阿蘇郡内牧

町五一四に生れ、東京市京橋區八丁堀二ノ三

ノ五高橋方に現住。警視廳日本橋新場橋警署署書記。中學一年より作歌するも師なし。昭和十二年四月「星雲」の社友となる。

島内 八郎

四十二歳。佐賀市岸川町三三三に生れ、長崎市

寺町一〇八に現住。縣立長崎圖書館司書。大正九年より三年間中村三郎氏に師事、後「秦皮」同人たる事約十年、香蘭同人たる事三年、多磨劇刊に際しこれに參加して今日に至る。

島木 赤彦

本名久保田俊彦。二水軒、伏龍、山百合、柿

乃村人等の別號あり。明治九年十二月十七日信濃上諏訪に生れ、久保田家の養嗣子となる。長野師範卒業。當時新體詩、和歌、俳句、文章等を「文庫」に發表。後、伊藤左千夫に師事す。大正二年諏訪郡視學を辭し上京。爾來作歌に専念し、アララギの編輯發行に努力す。歌道に寫生及び鍛鍊を唱道し、多くの門人を養成す。大正十五年三月二十七日病歿。

歌集、「山上湖上」(太田水穂合著)「馬鈴薯の花」(切火)「氷魚」(太虚集)「十年」(栢蔭集)「童謡集」(赤彦童謡集第一、二、三)「歌論集」(歌道小見)「萬葉集の鑑賞及び其批評」及び「赤彦全集」あり。

島崎きみ子

本名きみ子。明治四十四年十月、東京市下谷區

仲御徒町に生れ、同市荒川區日暮里町三ノ七六三に現住。東京電燈株式會社タイピスト。

十歳頃より作歌。現在「水薺」社友なり。

島崎 清吉 明治四十四年三月十日長野縣南佐久郡白田町

一七・三に生れ、同地に現住。農業。十八歳の春創作に加入、二十四歳の春退社。二十五歳の秋「いわひば」入社今日に至る。

島崎 清吉 大正三年埼玉縣比企郡小川町に生れ、同地に現住。書籍雜誌商。昭和十年くひに入社、現在に及ぶ。

島崎 ナヲエ 大正五年六月五日、神奈川県愛甲郡及川村に生れ、同地に現住。農業。十九歳にて作歌を始め地方文藝誌新聞等に發表、二十一歳にて「歌と評論」に入社、現在に及ぶ。

島崎 松司 二十七日。高崎市宮元町一四四に生れ、同地に現住、高崎信用組合書記。水薺に學び、現在「青煙」に據る。

島崎 義雄 二十五歳。八王子市に生れ、同市本郷町六に現住。銀行員。銀行に入り作歌はじめてより六年。

島崎 英彦 本名嶋崎進美。明治四十四年二月二十八日、兵庫縣城崎郡港村氣比に生れ、同地に現住。米穀商。大正十五年より作歌、昭和四年より「土筆」「つきさき」「短歌月刊」等に關係し、

同九年同志と共に「獵矢」を創刊。昭和十年六月北原白秋氏の「多磨」創刊さるや同氏に師事、會員として現在に至る。歌集「神水岬」あり。

島末 眞之 明治四十一年二月二十日、廣島縣安藝郡下浦刈島村字向浦に生れ、同地に現住。少年時代種々の雜誌に投書、昭和四年一月創作社に入社、昭和五年眞樹に入る。昭和十年八月より兩誌をやめ歌作を休み現在に至る。

島田 旭彦 明治十八年六月二十八日仙臺市に生る。中學五年中途退學、廣島縣に代用教員を勤めたる後、尾道鹽務局、東京市京橋、本所、深川の各區役所に勤務、一時支那料理店開業、のち東京市社會局に勤務。昭和十一年十一月二十二日逝去。大正三年北原白秋氏の巡禮詩社に入社し秦皮、香蘭を経て多磨に参加、逝去に至るまで一貫して北原白秋氏の教を受く。

島田 澄 本名柴田鏡。三十三歳。静岡縣清水市入江岡六六〇に現住。大正十三年より作歌、「短歌」「橄欖」「國民文學」「あしかび」等を経て、昭和五年八月香蘭入社、現在同人。

島田 實造 廣島縣三原市東町三五七に生れ、昭和十一年六月十三日四十歳にて物故。元臺灣總督府交通局鐵道部花蓮港出張所勤務。臺北市あらた

ま社所屬四ヶ年。福岡縣に生る。若くし

島田 尺草 て癩を病み熊本本の九州療養所に入院して闘病生活中、内田守人氏に師事して短歌によつて精神的更生を見出し、「水薺」に入社、昭和十三年二月、三十五歳にて長逝。歌集「一握の薔」「襟の花」あり。

島田 道人 本名忠雄。二十八歳。北海道旭川市に生れ、青森市葺町三七増田方に現住。農産物検査員。昭和四年より作歌、昭和八年一月創作社に入社、神原克重氏に就きて今日に至る。

島田 洗耳 三十八歳。京都市に生れ、長野市横澤町六八七に現住。無職。畫と篆刻を樂しむ。「歌と觀照」同人。

島田 武 三十四歳。山梨縣中巨摩郡貫川村に生れ、同地に現住。農業。昭和二年頃より作歌、「アララギ」に三年間投稿、後田中準氏主宰の短歌雜誌「ポエチカ」に投稿して今日に及ぶ。

島田 タマ 五十三歳。長崎市戸町三井醫院に現住。三井醫院看護婦長。昭和九年一月より作歌、「歌と評論」に投稿す。

島田 のはぎ 本名百代。三十九歳。東京京橋に生れ、旅順市常盤町一八に現住。大正八年創作に入社後

青藻同人にもなりし事あり。現在「創作」三合朋「路上」等に籍あり。

島田 兵三 明治三十一年三月十八日、大阪府中河内郡矢

田村大字矢田部に生れ、同地に現住。貸家業。大正十一年五月歌誌「あけび」に入りて花田比露思氏に師事し今日に至る。現在「あけび」を編輯す。

島田 眞佐 二十四歳。熊本市に生

れ、同市島崎町石神に現住。作歌經歷といふほどのものなし。

島田 政子 五十三歳。栃木縣川西

町に生れ、栃木縣植野村に現住。つき草、下野短歌の同人を経て現在立春同人。

島田 芳子 舊姓安井。明治四十

一年十一月二日京都市に生れ、東京市中野區城山町五三に現住。昭和六年一月おほそら短歌社に入社、同九年九月よりその編輯を引受け十年十二月に及ぶ。昭和十一年六月結婚、目下結社に加入せず。

島田 米子 三十九歳。兵庫縣姫路

市に生れ、福井市相生町八五に現住。醫師の妻。昭和十一年四月よりアララギ會員。

嶋田 美佐緒 二十五歳。石川縣羽咋

郡粟ノ保村字兵庫に生れ、同地に現住。諸新聞雜誌に投稿。

嶋田 榮一 三十二歳。京都府相樂

郡大河原村に生れ、秋田縣本莊町表尾崎町二五に現住。本莊中學校教諭。大正十五年廣島高師國漢科に入學、萬葉集の講義を聞きて作歌に志し、校友會誌「曠野」委員、短歌同好會「火群」幹事となる。卒業後一時中絶、長男、父の死に遇ひて復活す。現在「橙」の社友たり。

島津 耕三 本名英馬。二十八歳。

高知縣幡多郡大川筋村に生れ、同郡江川崎村に現住。自轉車販賣業。十八歳頃より作歌す。昭和六年十一月曼陀羅入社。昭和八年十一月同社を退き、同月アララギ會に入會、現在に及ぶ。

島野 三秋 本名新太郎。明治十年

七月二十二日金澤市に生れ、大阪市住吉區北畠中二ノ三に現住。詩繪及び漆畫業。郷里にて高橋富丸翁の教を受く。武都紀同人。昭和十一年歌集「閒雲」を刊行。

島峯 月歩 本名徳次郎。明治四十

二年四月二日、東京市芝區本芝一ノ二に生れ、東京市麻布區飯倉四ノ一二に現住。官吏。二十一歳より都新聞歌壇に投稿す。

島村 空花 明治十六年七月、三重

縣多氣郡齋宮村に生れ、東京市大森區新井宿四ノ一〇四一に現住。専

修大學經濟科出身。少時より新詩社の詩風を慕ひ、新聲、新思潮等に投稿す。銀行株式店の事務員たりし事ありしが、退職後篆刻及び俳句を嗜み、目下主として俳畫の揮毫に従ふ。

島村 須賀子 本名スガ。三十三歳。

奈良縣郡山町字塚二三に生れ、大阪府豊中市櫻塚一〇三手島方に現住。女學校教員。二十四歳の時中河幹子氏主宰「ごぎやう」會員となりて作歌、昭和十一年大阪にて清水千代氏主宰「どうだん」創刊に同人となりて今日に至る。

島本源太郎 三十歳。熊本縣葦北郡

佐敷町大字計石に生れ、同地に現住。生家は漁業、大正八年より父兄と共に福岡の炭坑地を洗轉し、昭和三年歸郷す。虚弱の爲め家業を繼ぐを得ず、月刊「城南新報」に入り五年にして辭す。歌は昭和五年末より同九年末まで花田比露思氏の指導を受く。

島元 義輝 宮崎縣宮崎郡生目村大

字生目に生れ、東京市中野區城山町一二に現住。大正七八年より作歌、嘗て同志と雜誌「響」を創刊せしことあり。大正十二年金子薫園氏の短歌研究會に入り「光」同人を経て、後その編輯に關與す。昭和六年「光」を退き爾來一朱船」を編輯して今日に至る。

神宮哲三郎

對馬竹敷に生る。大正三年北原白秋氏主宰の

巡禮詩社に入り、A. R. S.、烟草の花、曼陀羅、ザムボア等に作品を發表す。大正中期逝去。巡禮詩社々友當時、長崎市大浦下町二四三津尾方に居住せり。

神保 聰吉

本名佐與吉。三十五歳。石川縣河北郡高松町に

生れ、小樽市入船町八ノ六七に現住。小樽郵便局長。十九歳にて渡道、二十二歳の小樽歌誌「極光」の同人として同誌の編輯をなすこと四年、同誌廢刊後アララギ及び東京日日新聞の短歌欄に投稿、二十七歳以來作歌を休む。

神保 冷平

本名秀正。明治二十七年八月五日、群馬縣群

馬郡金古町に生れ、同郡古卷村八木原に現住。澁川小學校訓導。アララギ會員たりし事あり。のぎく同人。

新海 五郎

明治三十四年七月五日山梨縣中巨摩郡玉幡村

に生れ、長野縣西筑摩郡上松町に現住。大同電力株式會社社員。昭和三年東京帝大法學部卒業、同年暮より作歌、同年十二月二十五日アララギに入會し土屋文明氏に師事して今日に及ぶ。

新開 政勝

三十一歳。熊本縣玉名郡賢木村に生れ、同縣

菊池郡九州療養所に現住。昭和九年アララギ入社、現在に及ぶ。

新谷 三千子

二十歳。神戸市に生れ、同市兵庫區大開通七ノ六六に現住。神戸市神港女子商業學校短歌會に入會作歌す。

新藤 武一

四十歳。埼玉縣北足立郡馬室村大字原馬室に

生れ、同地に現住。百姓。大正十二年頃創作社に入り若山牧水氏の選を受く。のち中絶、昭和十年再び創作社に入りて現在に至る。

新免 忠

三十七歳。東京市に生る。官吏。電氣工學專

攻。大正八年より作歌、大正十一年より國民文學に入社、松村英一氏の指導を受け現在に至る。

進藤 喜與子

三十六歳。山梨縣に生れ、東京市澁野川區田

端町六七二に現住。小學校教員。昭和三年より「歌と評論」に出詠、勝田基文氏の指導をうけ現在に至る。

進藤 孝三

明治三十五年秋田縣仙北郡峯吉川村に生れ、

秋田市泉反町一二七に現住。小學校教員。二十五歳頃より歌集を讀み、其後教へ兒等となぐさみに作歌す。

進藤 水鶴

本名滿。三十三歳。山梨縣北巨摩郡小淵澤村

に生れ、長野縣諏訪郡落合村富里に現住。無職(病中)。アララギを経て同人誌「湯芽」を發行その後病を得て休養、現在青虹に據る。

進藤 千鶴

三十二歳。大分縣日田郡中川村櫻村に生れ、

千葉市龜岡町二七に現住。京都女子專門國文科入學後短歌を學ぶ。卒業後一年を故郷に、らし、進藤文一と結婚して千葉に住み共に作歌す。

進藤 秀子

大正五年四月八日、福岡縣糸島郡怡土村末永五五三に生れ、福岡市馬出日本町一〇〇一櫛

櫛方に現住。家事見習。昭和十年十一月より作歌し始む。現在松山市にて發行のやまぶきの會員なり。

進藤 惠美子

三十一歳。兵庫縣朝來郡山口村に生れ、神戸市須磨區離宮前町一七一に現住。大正十四年窪田空穂氏に師事し、同年國民文學社に入社今日に至る。

甚野 敏夫

明治四十年、北海道空知郡上富良野村に生れ、樺太名好郡惠須取町本町六丁目に現住。小學校教員。昭和五年以來青垣會員として今日に至る。

霜 島 榮

三十歳。神奈川縣愛甲郡愛川村半原に生れ、朝鮮平壤府南山町一三東洋館内に現住。中等

教員。昭和二年郷里に愛川短歌會を組織、昭和六年歌誌「相模野」社友となり、後ち上京昭和十一年平壤「浪水短歌會」會員となる。「ポトナム」社友となる。

下御領義盛 不明。

下瀨謙 四十八歳。廣島縣に生れ、大阪市此花區秀野町三五に現住。職工。年少の頃より新聞雜誌に投稿、一時創作社に入り若山牧水氏の選を受く。昭和二年頃より國民文學社に入り植松壽樹氏の選を受け現在に至る。

下田一清 三十五歳。鳥取縣若美郡米里村字西大路に生れ、同地に現住。農業。十七歳より作歌、潮音、水鏡、嫩體等の社友たりし事あり。大正十年短歌誌「曠野」を創刊編輯す。

下田貞雄 明治四十一年九月十九日、群馬縣群馬郡箕輪町西明屋三三八に生れ、大阪市東成區片江町六〇八に現住。印刷業。日本印刷學校在學當時廣野三郎氏に教へを受け、しばらくしてアラギに入會せしがいつしか作歌絶ゆ。大阪に職を得てより再び作歌。

下平依知一 二十七歳。三重縣南牟婁郡五郷村寺谷に生れ、名古屋市東區吹上本町一ノ六七に現住。會社員。昭和九年一月森蔭短歌會に入會、短歌を

始め現在に及ぶ。

下平晴實 三十二歳。長野縣上伊那郡南向村葛島六三七に現住。農業。小學校當時より少年雜誌文藝欄に投稿、卒業後は、地方文藝雜誌に發表。大正十五年二十歳の時アラギ會員となり、岡麓氏の指導の下に今日に至る。

下條寬一 二十七歳。長野縣松本市小池町に生れ、東京市板橋區板橋町三ノ四六二に現住。公吏。昭和四年ポトナムに入社、現在に至る。

下斗米光子 二十一歳。青森縣八戸市外澤里に生れ、同地に現住。昭和十二年二月「潮音」に入社。

下長根時子 明治三十年十二月十七日、盛岡市に生れ、東京市淀橋區西落合一ノ二二八に現住。東北高女、洋裁學院等を出で新聞記者たりし事あり。十八歳より作歌、大正十二年吾妹入社、今日に至る。

下野精三 二十六歳。青森縣八戸市小中野町字佐比代二五に生れ、東京市淀橋區淀橋六六五本間方に現住。官吏。大正十五年窪田空穂氏、對馬完治氏等の「白鷺」に入社、昭和六年上京中央大學に入學して一旦退社。昭和十一年「地上」に入社、對馬完治氏に師事す。

下林喜市郎 三十一歳。京都府船井郡下和知村廣野に生れ、同府與謝郡伊根村平田に現住。小學校教員。昭和五年九月アラギに入會。結城哀草果氏に師事して今日に及ぶ。

下村海南 本名宏。六十四歳。和歌山市に生れ、東京市大森區田園調布三ノ二二に現住。職業無し。大正四年四月聖路加病院入院の時作歌を始め竹柏園に入門す。歌集「芭蕉の葉蔭」「天地」「白雲集」あり。歌論、歌集のブックレビュー、歌日記等は隨筆集中にあり。

下村貴美子 二十四歳。和歌山縣日南郡熊取村大久保に現住。高女四年の頃より作歌、後ち市内の短歌雜誌に入り又水穂社に入る。現在水穂社を退き和歌山の短歌雜誌のみに依る。

下村湖人 本名虎六郎。五十五歳。佐賀縣神埼郡千歲村に生れ、東京市淀橋區百人町三ノ二八五に現住。教育家。學生時代（明治四十年前後）内田夕闇の名を以て帝國文學其他に屢々作歌を發表せしが、教育生活に入りてより作歌は極めて稀なり。昭和七年はじめて歌集「冬青葉」を出す。

下村照路 本名榮安。明治二十七年十二月二十七日生。

東京府沼多摩郡町田町原野田八九二に現住。

東京朝日新聞記者販賣駐在員。大正二年若山

牧水氏の門に入り創作社々友たり。昭和五年

ぬはりに轉じ和田山蘭氏に師事し、同誌の同

人たること五年、昭和十年北原白秋氏多磨を

主宰するに當り、同門に參じ現在會員。歌集

「拾ひし木の實」「からす貝」の二冊あり。

下山 舊姓西山。三十五歳。岡山縣淺口郡鴨方町地

頭上七五九に生れ、同縣津山市南新座一〇三

に現住。數學科中等教員。昭和三年一月アラ

ラギに入會し、引續き今日に及ぶ。

じやう・いばら 本名前川清。二十八歳。北海道に生れ、

札幌市郊外錢函海岸に現住。岬寫眞研究室研

究生。師なき模倣時代を経て、多磨會員とな

りしも昭和十一年九月退會。其より前、短歌

鑑賞に入り目下その同人。

城望東 本名もと子。二十六歳。福岡市東唐人町九五番

龍寺に生れ、同寺に現住。昭和六年頃より作

歌、諸新聞雜誌に發表。齋藤茂吉、土屋文明、

中島哀浪、萬造寺齊の諸氏に指導を受く。

昭和十一年一月福岡「清明」短歌社に入社、

園城寺汀風氏に師事、同年十月編輯同人とな

り「清明」を編輯して現在に至る。

城市紫影 三十一歳。島根縣那賀郡長濱村に生れ、朝鮮

京城府新吉町文化村に現住。會社員。大正十

三年より作歌、昭和四年歌誌「短歌風景」創

刊主宰、昭和七年廢刊。其後「八合」同人と

なるも同誌廢刊により退社。其間、「吾妹」

「創作」「ぬはり」等に入社せしも退社、現

在「水甕」に發表す。

城市秀子 二十七歳。島根縣那賀郡石見村に生れ、朝鮮

京城府新吉町文化村に現住。城市紫影の妻。

女學校時代作歌せしも中絶。現在は「水甕」

に發表す。

城島正代 二十七歳。長崎縣北高來郡諫早町甲四七に生

れ、同地に現住。昭和六年中河幹子氏主宰の

ぎやう社に入社、今日に至る。

城山達朗 二十四歳。沖繩縣國頭郡今歸仁村に生れ、同

地に現住。農業。昭和八年十一月病氣療養の

ため熊本縣待勞院に入院、同九年九月より作

歌、昭和十年六月「アララギ」の會員となる。

昭和十一年四月郷里沖繩縣に歸り、現在に及

ぶ。

昌子明 二十二歳。島根縣飯石郡三刀屋町大字三刀屋

六〇六に生れ、臺中州員林郡永靖庄二七二に

現住。公學校教員。中學二年頃より作歌を始

めたるも、本格的には昭和九年四月渡臺し、

十一月「あらたま」に入社してよりなり。

正分蒼生 本名多美治。明治四十一年岡山縣久米郡神目

村峠に生る。大正十五年岡山縣金川中學校を

卒業、昭和三年姫路野砲聯隊に入營、四年胸

疾を得て除隊、爾後病勢一進一退未だ離床を

得ず。昭和四年作歌を創む。昭和六年水甕に

入社、同年歌誌「早蕨」を創刊之を主宰して

今日に至る。

庄司正史 本名正儀。二十七歳。千葉縣野田町に生れ、

埼玉縣北葛飾郡幸松村に現住。公吏。「吾蘭」

を経て「多磨」創刊と同時にその會員たり。

庄司勇之助 六十六歳。千葉縣君津郡佐貫町に生れ、静岡

市鷹匠町三丁目に現住。大正六年大日本歌道

奨勵會に入會、大正十四年加藤義清氏の指導

を受く。昭和八年水甕社に入る。

庄武春鳥 本名憲太郎。四十六歳。大分縣西國東郡朝田村

に生れ、東京市澁谷區代々木山谷町二〇一に

現住。帝國商業女學校教頭。大正十三年日本

大學國文科卒業。歌集「暖雲集」あり。

庄野光子 本姓山崎。三十一歳。福岡縣宗像郡赤間町八

七に生れ、福岡市藥院町五二に現住。昭和

六年一月アララギ會員となり、同年九月より

齋藤茂吉氏の選を受けて今日に至る。

上代 糸子

出雲國大原郡屋村に生れ、滋賀縣彦根鎮紡絹糸工場寄宿舎に勤務。二十歳過ぎてより眞面目に歌を詠みはじめ、與謝野晶子氏の添削を受けて今日に及ぶ。

釋 迢空

本名折口信夫。明治廿二年二月十一日生る。今

大阪市浪速區鷗町一丁目の地なり。年十九、國學院大學に入學、四十三年卒業す。翌年多大阪府立今宮中學校囑託教員となる。大正三年上京。徒食數年、後ありつきを得て、教員たること久し。現在慶應義塾大學教授にして國學院大學教授を兼ね。歌集二部。研究書數部あり。歌は大體根岸派に系統を引けども、尙、師服部躬治氏の風を交ふること著し。

釋 堯空

本名坂倉保。通稱至鷹。三十一歳。三重縣四日

市市濱田一四四四に生れ、同市濱田新田町一四四四に現住。藥種商。三谷蘆華氏主宰歌誌「鳥人」に加入せしが幾許もなくその逝去に逢ふ。

釋 光澄

本名岡本純盛。三十七歳。岡山縣勝田郡瀧尾

村、西法寺に現住。小學校訓導、天台宗僧侶。大正十年創作社に入社、若山牧水氏に師事す。昭和四年水蘗社に入社、現在に至る。

釋 蒼玄

本名衣笠梅二郎。四十

京都市上京區大將軍一條町四一に現住。教員。同志社大學出身。「青垣」會員たりしことあり。最近迢「詩と隨筆」を編輯す。現在「開化」同人。

釋 放空

本名福田和男。二十六歳。神戸市に生れ、京

都市左京區上高野釜土に現住。十八歳のころより折にふれて作歌す。

赤後寺壽光

本名藤田彌治郎。三十

郷村唐川に生れ、同地に現住。通信事務員。初め白日社に入社せしも新興短歌運動盛ならむとする頃退社、以後何れへも入社せず。

白石眞吾

明治三十九年二月二十

町大字長野に生れ、同地に現住。小學校教員。松村英一氏に入門指導を受く。竹柏會心の花會員。

白石崇

二十七歳。長崎縣北松

京市豊島區集鴨町二ノ五三思齋寮に現住。三菱商事株式會社社員。昭和五年「國民文學」に入社、昭和七年退社、「歌と評論」に入社、現在に及ぶ。

白石初枝

二十六歳。茨城縣に生

川五ノ三六小貫五一方に現住。郵便局員。初め島田忠夫、伊藤嘉夫兩氏に歌を學び、後、昭

和十一年五月「明日香」入會以後、今井邦子生方たつる兩氏の指導を受く。

白石浪男

二十七歳。茨城縣に生

員。立正大學專門部學生。初めより伊藤嘉夫氏に學ぶ。

白石八重子

二十五歳。愛媛縣温泉

朝鮮全羅北道群山府千代田町一丁目に現住。十八歳より橄欖社に入り現在に及ぶ。

白石悠紀保

二十八歳。熊本縣飽託

市本山町六〇五に現住。官吏、熊本縣農林技手。昭和五年七月龍燈入社、昭和九年七月潮音入社、現在に至る。

白岩艶子

五十九歳。岡山市七番

區南平臺四六に現住。佐佐木信綱氏に學ぶ。

白岩隆

二十一歳。岡山縣英田

郡讚甘村大字宮本に生れ、宇治山田市外倉田山神宮皇學館精華寮に現住。十八歳頃より歌を始め。昭和十年七月より「香蘭」會員となる。十一年一月より「五更」の編輯に加はる。

白川晃

本名日比長藏。東京市

生れ、北海道札幌市北二條西四丁目株式會社本多商店札幌支店内に現住。會社員。昭和八

年早稻田大學政治經濟學部卒業。

白川 淳 郡新居濱西町に生れ、

兵庫縣川邊郡立花村字尾濱に現住。機械設計製圖、日立製作所尼崎工場勤務。昭和十年より主として短歌研究誌に據り、同年九月北原白秋氏に師事し多磨に入會す。

白川 照雄 本名羽生時哉。三十一歳。鹿兒島縣に生れ、

熊本市黒髮町下立田六三五、回春病院内に現住。二十四歳の折額を病み熊本回春病院入院せしが病勢すすみ、二十八歳眼を犯さる。歌作は二十八歳より始め、昭和十二年一月よりアララギに學び現在に至る。

白川彌太郎 明治三十一年四月五日香川縣三豊郡比地二村

大字比地中前田に生れ、同郡觀音寺町大字觀音寺甲一〇九一ノ四に現住。讚岐無盡株式會社常務取締役、讚岐住宅株式會社出張所長。大正九年水黴に入社、後、上田英夫氏に就きて學ぶ。上京中は岩谷莫哀氏に師事す。十二年五月末歸郷現在に至る。

白川 了照 明治三十八年九月、富山縣に生れ、石狩國上

川郡愛別村安足間に現住。眞宗本願寺派僧侶、始め故岩谷莫哀氏に指導を受け、水黴に發表、後作歌中止、昭和八年九月尾山篤二郎氏の自然に入社、同人として今日に及ぶ。

白木 豊 明治二十七年六月二十一日、愛媛縣宇摩郡小

富士村に生れ、廣島市舟入川口町五三六ノ三に現住。廣島高等師範學校教授。大正十五年以來アララギ齋藤茂吉氏に師事す。

白木 成邦 四十二歳。熊本縣八代

八代町德淵に現住。小學校長。小學時代より和歌を學び、青年時代非歌入社に二三四回寄稿せしも興味を失ひ久しく中絶、最近再び作歌を始む。

白倉 三郎 四十四歳。山梨縣北巨

敷員。大正三年頃創作社に入社。大正十一年頃瀨玉樹に轉じ、現在に至る。

白倉 牧露 本名幸男。明治四十三

年九月五日、熊本縣天草郡御所浦村字大浦六一〇に生れ、朝鮮平安南道安州郡安州邑北門里七九に現住。官吏。昭和八年平壤歌入會の同人となり、十年一月ポトナム社に加入し、現在安州短歌會を主宰す。

白倉 八重 本名ヤエ。三十八歳。

明治三十四年十二月二十三日、東京市世田谷區池尻町に生れ、同區太子堂町四三三に現住。大妻高等女學校教員。昭和二年十月アララギに入會し、土屋文明氏の教へを受けて現在に及ぶ。

白崎 秀雄 福井市九十九町三一に生れ、同地に現住。昭和八年より石原眞一氏主宰の「格」に入り、今日に至る。

白澤 敏江 二十九歳。静岡に生れ

東京府下東村山全生病院に現住。昭和十一年五月より作歌、昭和十二年三月勁草入社、宇都野研氏の指導を受けて現在に至る。

白澤 昇 三十一歳。長野縣に生

れ、東京市本郷區駒込神明町一六一に現住。婦人洋裝店經營。昭和二年、三年短歌雜誌に投稿、同四年國民文學社に入社、半田良平氏の教へを受けて今日に至る。

白敷 武夫 三十一歳。京都府與謝

郡岩瀧町字石田に生れ同地に現住。人絹及縮緬商。勁草社友。

白鈴 二郎 明治四十四年十一月七日、横須賀市に生れ、

東京市板橋區板橋町三ノ三二二齋藤福重方に現住。公吏。昭和九年六月「あけび」に入會花田比露思氏に師事す。昭和十年二月「アララギ」に入會し、齋藤茂吉氏の選を受けて現在に至る。

白谷 虎雄 三十七歳。宮崎縣北諸

縣郡西岳村に生れ、福岡市紺屋町三一に現住。遞信官吏。創作に入

社して十年餘。

白土よしゑ

本名芳枝。二十五歳。茨城縣久慈郡佐竹村磯部に生れ、東京市中野區水川町二四寺門茂方に現住。

白鳥 耀

三十三歳。長野縣上水内郡中郷村平出に生れ

同地に現住。小學校教員。大正十三年より新聞歌壇に投稿、太田水穂、若山牧水兩氏の選を乞ひ、昭和二年より潮音購讀を始め、續いて入社、水穂氏の教へを受け現在に至る。

白鳥 游

本名津下正章。明治四十年三月七日、熊本縣

菊池郡津田村に生れ、廣島市牛田町に現住。廣島陸軍幼年學校教官。中學三四年の頃より作歌。現在何れの結社にも屬せず。

白鳥きみ子

明治二十九年七月十七日、東京市牛込區砂土原町に生れ、同市目黒區上目黒六ノ一五七五に現住。双葉高女卒業。大正九年金子薫園氏主宰「光」に入會す。

白鳥 大治

三十歳。宮城縣栗原郡築館町に生れ、旭川市鐵工職。現在酒井廣治氏に師事す。地方新聞雜誌等に發表の外に歌歴なし。

白鳥 晴康

四十歳。宮城縣栗原郡築館町に生れ、北海道

天鹽國中川郡常磐村に現住。小學校訓導兼校長。大正九年より十年に亘り朝日歌壇島木赤彦氏選に投稿し、次でアララギ會員となりしも、十五年三月赤彦氏歿後退會。昭和十年より自然社友となり現在に至る。

白鳥義千代

四十八歳。長野縣上水内郡中郷村大字平出に

生れ、同地に現住。長野縣上水内郡三水尋常高等小學校訓導兼校長。長野縣師範學校三年の時信濃毎日新聞歌壇に投稿太田水穂氏の選をうけ、同校卒業以來縣内諸地方に小學校教員をつとめ、大正四年潮音社の創立と共に同社に入り、以來水穂氏の指導をうけ現在にいたる。

白仁 秋津

戸籍面の稱名は勝衛。明治九年六月六日、福岡縣三池郡銀水村に生れ、同地に現住。看護卒となり日露戰役に従事、凱旋後村長となりて十五年、明星初號に一首掲載されてより新詩社に加はり今日に至る。

白縫須磨子

本姓橋本。三十三歳。佐賀縣佐賀郡北川副村枝吉に生れ同地に現住。歌集を師として十四年、その間三度中絶、昭和十年以降は健康上單に中絶せざるのみ。

白根 邦人

二十五歳。廣島縣比婆郡美古登村に生れ、同地に現住。神職。神宮皇學館在學中後半二ヶ

年間正科として作歌を課せらる。昭和八年十一月菊池猶喜氏主宰「あざみ」に入會、指導を受け現在に至る。昭和十二年二月更に「五更」に入會現在に至る。

白旗 浩蕩

本名彦太郎。山形縣酒田上内匠町に生る。明治三十二年庄内中學を半途退學、三十七年上京、四十年歸郷して耕地整理事務所勤務。豐者に近き耳の不自由と貧苦との中にて歌を作り、大正六年創作に入社、若山牧水氏に師事す。大正十四年十二月二十三日郷里にて病没す。享年四十四。

白幡 正吉

明治四十一年生。山形縣鶴岡市二百人町一五に現住。京都にて丁稚奉公中、アララギ會員となる。昭和八年、郷里に歸り莊内アララギ歌會を創立、會報の編輯發行に従ふ。一貫して結城哀草果氏に師事す。

白濱 増夫

三十五歳。佐賀縣佐賀郡嘉瀬村大字荻野六一一に生れ、香川縣丸龜市中府景川町六四三に現住。教員。作歌經歷といふほどのものなし。

白水 廣

三十三歳。福岡縣朝倉郡甘木町に生れ、門司市吉野町一丁目現住。中學教諭。大正十三年「橄欖」同人、大正十四年「霸王樹」準同人、其後中絶。昭和十年より「日方」同人。

白水吉次郎

明治三十一年、福岡市に生る。大正四年頃より、短歌雜誌「響」「エニグマ」「ハカタ」南方藝術「赫土」等の發行に關係す。

大正九年「アララギ」入會、土田耕平、島木赤彦、岡麓三氏の指導を受く。大正六七年頃より肺を冒され、東京、大連、大阪、門司、郷里等を放浪し、病と闘ひ昭和四年四月五日、東京にて逝去す。享年三十一。大連老虎灘山上に歌碑あり。昭和八年、古今書院より「白水吉次郎歌集」出版さる。

白井善司

明治三十五年九月二十一日、静岡縣中泉町西新に生れ、同地に現住。織物工場經營。大正七年郷里の友と聖樹社を結成、翌八年四月國民文學社に入り今日に至る。歌集「木染集」あり。

白井庸子

大正四年九月二十三日、東京市芝區白金今里町に生れ、同市日本橋區茅場町一ノ四に現住。昭和八年三月府立第一高女を卒業、同十年十月創作社に入社、現在に及ぶ。

白井英子

大正三年北原白秋氏主宰巡禮詩社に入り「地上巡禮」「A.R.S.」「烟草の花」等に作品を發表、大正中期逝去。巡禮詩社々友當時、遠州濱松町伊場東に居住せり。

白井孝

舊姓吉成。三十一歳。千葉市旭町六二三に生れ、仙臺市北五番丁一八三ノ一に現住。昭和三年草の實社に入社、現在に及ぶ。

白井登志晶

昭和七年十二月逝去。享年二十。中學卒業後短歌に親しみ、武藏野なる某病院に入院靜養中「いづかし」社友となる。

白男川敬藏

明治十九年鹿兒島縣財部町に生れ、鹿兒島市藥師町四四五に現住。中學卒業後渡臺して官途にあること二十年、その間「三人」「にひ星」「南方文學」等の同人雜誌を發刊す。初め前田夕暮氏に師事せしも「詩歌」一時休刊の爲投稿中止、大正十四年夏鹿兒島朝日新聞社に入社、現に學藝部長。昭和三年橋田東聲氏來遊の際瀧王樹同人として入社、今日に至る。

代田文誌

三十九歳。長野縣下伊那郡河野村に生れ、長野市縣町一五に現住。鍼灸醫。大正九年夏病氣靜養中より作歌、大正十二年秋島木赤彦氏に師事し以後二年ほどアララギ會員となる。其後歌壇を離れ發表せず、心の趣くままに作歌するのみ。

城木正太

本名城米正太郎。三十三歳。京都市に生れ、東京市荒川區尾久町三ノ二三七六に現住。丙

關印刷局官報課に奉職。大正十五年頃より作歌、昭和四年「アララギ」に入會、間もなく「みづがき」に關係して「アララギ」を退會今日に及ぶ。

城之内徹一

本名濱田佳澄。明治七年十二月二十二日、香川縣仲多度郡多度津町大字新町に生る。明治三十年早稻田大學の前身東京專門學校文學部卒業。同年秋國民新聞記者となり、明治四十二年夏病氣の爲退社。明治四十二年冬以來十八年間神戸新聞主筆たり。昭和三年一月病氣の爲退社。爾來休養。昭和五年夏の交より短歌に志し、爾來獨學自習今日に至る。何れの結社にも加入したることなし。

すの部

須賀惠彦

本名惠。大正二年八月稻穂町西二丁目に現住。無職、療養中。少年時代より折にふれ作歌し來れど獨習なり。現在結社には所屬せず。

須賀歌子

三十五歳。愛媛縣越智郡宮内町二ノ六〇に現住。「御形」社友として中河幹子氏に師事。

須貝徳之輔

二十九歳。山形縣東置賜郡沖郷村長灘に生れ

同地に現住。農業。昭和十年一月病を得て伊豆大島に遊び初めて作歌、爾來佐佐木信綱、石樽千亦兩氏に師事し今日に至る。現在心の花會員たり。

須志田ふみ江

三十二歳。宮崎縣南那珂郡油津町三四八に生れ、同地に現住。昭和六年六月金子薫園氏の「光」に入會今日に及ぶ。

須々木草一

本名鈴木良一。明治四十四年九月二十九日、三重縣桑名に生る。桑名郵便局員。中學卒業の昭和四年三重の「金雀枝」に入社現在同人。また遞信雜誌の選者佐佐木信綱氏にも師事し、昭和九年より潮音入社今日に至る。

須田伊波穂

本名巖。明治三十三年三月三十日、長崎縣西彼杵郡西浦上村若屋郷に生れ、長崎市水之浦町二〇一に現住。印刷業。大正九年より作歌大正十一年尾山篤二郎氏に師事して「自然」に入社、「自然」「青海原」同人を経て昭和四年より「香蘭」に轉ず。現在「香蘭」同人。歌集「旅情」あり。

須田昌平

三十四歳。靜岡縣賀茂郡松崎町松崎三七四に生れ、靜岡市上沓谷町一五に現住。靜岡師範訓導兼教諭。大正十二年頃より作歌、初め前田福太郎氏に學び、後、若山牧水氏前田夕暮氏の門に入りしも各三三年にして止む。現在

流派に屬せず。

須田利雄

二十五歳。北米シヤトル市に生れ、福島縣信夫郡土湯温泉扇屋に現住。小學校教員。昭和九年「短歌祭」入社、昭和十一年同誌廢刊より「歌と評論」入社間もなく退社、昭和十二年「現實短歌」入社。

須田禮子

二十三歳。埼玉縣本庄町に生れ、前橋市高田町四七八に現住。昭和十年より與謝野晶子氏に學び多栢に入社、今日に及ぶ。

須藤克三

明治三十九年十月三十日、山形縣東置賜郡宮内町二五〇三に生れ、東京市杉並區西高井戸一ノ八二に現住。小學校教員の傍ら教育雜誌編輯。「吾妹」の同人たりしことあり。目下「梅壇」主宰。歌集「洗滌」のほか童話集及び教育關係書あり。

須藤紫風

三十三歳。埼玉縣北埼玉郡三田ヶ谷村に生れ、同地に現住。大正十三年「短歌雜誌」に松村英一氏選の下に作歌を始む。後橋田東聲氏に師事し「霸王樹」に入り現在に及ぶ。

須藤鐘一

明治十九年二月一日、島根縣能義郡比田村に生れ、東京市品川區大井瀧王子町四四八四に現住。著述業。中學時代より諸新聞雜誌に投稿、現在「青影」同人。

須藤泰一郎

明治二十二年群馬縣勢多郡柏川村大字睦に生れ、昭和八年四十五歳にして前橋に逝く。アララギ、心の花、霸王樹等を経て「草炎」に入り晩年歌を「アララギ」に送る。青年時代病を得て足萎となり、震災直後上京看板屋を營み、後歸郷前橋に住し病に斃る。歌集「瑠瑠」遺歌集「言靈」あり。

須藤得水

本名豊二。三十六歳。新潟縣北蒲原郡川東村字田員に生れ、同地に現住。十四五歳の頃より歌に興味を持つ。其後布哇に渡り、大正十五年同地ホノルル市にて歌集「白骨」を出版。目下歸郷中。

須藤文子

明治四十三年四月十三日、東京市王子區神谷町に生れ、同地に現住。昭和六年、前川佐美雄氏の門に入り、短歌雜誌「短歌作品」「カメレオン」を経て「日本歌人」の同人。

須藤正男

二十六歳。埼玉縣大里郡吉見村大字相上三七三に生れ、埼玉縣熊谷市大字熊谷一二一九ノ三に現住。商業。現在アララギ會員。

須藤俣康

廿二歳。東京府南多摩郡忠生村圖師に現住。東京府農林產物検査吏員。昭和十年四月、若林昇氏に従ひ歌を始む。昭和十一年十二月常春に入社今日に至る。

須永 秀彌 四十一歳。東京市に生れ、神戸市灘區天城通

三ノ二〇に現住。神戸高商教授。大正八年京都帝大經濟學部に入學以來作歌、昭和二年歌集「たびびと」を出版す。以來引續き「あけび」の同人たり。

須部 珠城 本名釧。五十九歳。靜岡縣遠江國引佐郡都田

村都田に生れ、同縣濱松市名殘町に現住。神職。明治三十五年より三十九年まで短歌及び短詩に關する雜誌を發行す。

巢木 健 本姓杉。四十五歳。福岡縣山門郡柳河町に生

れ、横濱市神奈川區齋藤分町三七ノ一に現住。丸善三田出張所主任。明治四十四年より作歌、大正年間二三の同人雜誌に關係す。昭和七年夏歌集「春愁」を上梓す。昭和七年秋「短歌民族」に名を連ね、昭和十年春より「多磨」會員として今日に及ぶ。

巢山 壽恵一 本名末一。三十二歳。松本市東町に生れ、同

市榮町に現住。昭和元年頃より作歌、昭和三年、國民文學に入社、松村英一氏、故川崎村外氏に師事す。

洲崎 哲二 明治二十三年四月十六日、富山縣東礪波郡城

端町一ノ一に生れ、同地に現住。醫師。四高生時代より作歌、大正十四年妻を喪ひ追悼

歌集「もろとも」を刊行知人に頒布、昭和六年九月より國民文學に入り植松壽樹氏に師事す。

壽床 榮助 二十八歳。名古屋市西區茶屋町一ノ一〇に生

れ、同地に現住。小學校教員。二十一歳國學院大學神道部に入學以來格歌會に於て西角井正慶氏の指導を受け、傍ら歌誌裝填に歌作を發表し來る。

鷲見 治喜次 明治二十三年八月二十七日、岐阜縣武儀郡大

矢田村に生れ、川崎市京町二ノ二七に現住。明治四十四年竹柏園に入門、以來佐佐木信綱石樽千亦兩氏に師事す。現在「心の花」編輯部員。大正十年より十二年まで歌誌「若葉」、昭和七年より十年まで歌誌「朱鳥」刊行。

菅 敏夫 明治四十二年七月二十

日に生れ、新竹州竹東郡蕃地タラスカスに現住。新竹州巡查。昭和十年四月妻を失ひてより歌に親しみ、昭和十一年末ポトナムに入社今日に至る。

菅 又吉 四十五歳。島根縣邑智郡川本村大字川本三五

八に生れ、中華民國上海文路三〇〇號篠崎醫院に現住。醫師。中學四年頃より作歌、高校時代友人等と同人雜誌を出ししことあり。其後今日に至る迄獨學。

菅 義臣 本姓菅。三十一歳。大分縣直入郡豐岡村大字

會々四一八三に生れ、福岡市平尾三八二、安祥莊に現住。官吏、福岡簡易保險支局勤務。昭和七年一月「水壘」に入社今日に及ぶ。その間「吾妹」に關係せしことあり。

菅江 貞雄 二十一歳。本籍山形縣北村山郡東根町大字東

根甲四八九。東京市澁谷區上智四〇川邊方に現住。國學院大學生。昭和五年十三歳より作歌、昭和九年「霸王樹」に入社、一年にして退社、以後結社に入らず。又昭和九年に故郷東根町に短歌會を起す。

菅澤 忠雄 三十歳。千葉縣香取郡久賀村高津原に生れ、

同地に現住。小學校教員。昭和五年ポトナム社に入り同十一年退社す。

菅田 正 二十四歳。廣島縣深安郡神邊町字川南に生れ

同地に現住。運送會社員。歌は「作歌協會」同人、「短歌評論」社友。又「黃葉」編輯等に關係す。

菅沼 宗四郎 舊姓石引。五十五歳。茨城縣筑波郡豐村大字

彌柳に生れ、横濱市中區西戸部町二ノ一九〇に現住。官吏。明治四十年、三浦濯園氏の門に入り、後、新詩社に入り、與謝野寛、晶子兩氏の教を受く。昭和四年より横濱短歌會を

起し、これを主宰し今日に至る。著書に「萬相流轉」(文及歌)外二冊あり。

菅沼 猛雄 二十九歳。名古屋市東區鍋屋上野町谷口一六九に現住。官吏、郵便局員。二十六歳頃より作歌、結社に加入せず。

菅沼 能 四十五歳。長野縣下高井郡中野町に生れ、同郡豊郷村野澤温泉に現住。小學校教員。大正十三年九月アララギに入會、爾後齋藤茂吉氏に師事す。

菅原 利通 二十八歳。宮城縣加美郡色麻村黒澤寺五に生れ、同縣伊具郡筆甫村中下五に現住。小學校教員。多磨創刊以來同會員。

菅原 房乃 三十九歳。丹波國福知山に生れ、大阪市東淀川區十三南之町一ノ三二に現住。夫に死別後短歌に關心を持ち、初め「こぎやう」に入社、間もなく「曼陀羅」に轉じ現在に至る。作歌年數八年。

菅原 春水 本名善良。三十八歳。福井縣丹生郡萩野村笈松二四號一九に生れ同地に現住。農業。少年時代に同人雜誌「新詩光」を創刊して小泉菱三氏の指導を受けしが、昭和八年より「國民文學」に籍を置き松村英一氏に師事しつつあり。

菅谷 庸三 號一空庵、茨木陽三。明治三十六年一月二十四日、茨城縣稻敷郡龍ヶ崎字米町に生れ、東京市本所區堅川二ノ一六に現住。元會社員現在鋼鐵業。大正十二年初より作歌、同年四月「アララギ」に入會し土田耕平、島木赤彦藤澤古實諸氏に師事し昭和二年迄同誌に發表す。別に「スカンポ」の編輯同人となり同年二月より「いちばつ」次で「高樓」「はまなす」等に作歌を發表して今日に至る。

杉 明一 二十五歳。岡山縣眞庭郡落合町中村に現住。農業。現在「短歌詩人」同人。

杉 榮三郎 明治六年一月二日、岡山縣阿哲郡矢神村に生れ、東京市豊島區長崎南町一ノ一九三〇に現住。官吏。佐佐木信綱氏の指導を受く。

杉浦 貴一 四十一歳。東京市赤坂區に生れ、同市中野區上高田一ノ七〇に現住。會社員。嘗て「吾妹」「橄欖」其他の社友「文珠蘭」の同人たり。其後友人と歌誌「満天星」を創刊、後「青虹」と改稱せしも昭和九年春退き、現在「二荒」「木苺」の同人。

杉浦 力 三十一歳。豊橋に生れ、沼津市上香貫川瀬町五九三に現住。小學校教員。一時「創作」の社友たりしことあり。昭和九年の頃教員を同志とする「短歌教育」を創刊し之が編輯に當る。

杉浦 民一 三十八歳。愛知縣碧海郡明治村西端に生れ、同地に現住。農業。「アララギ」會員。

杉浦 亮一 三十三歳。三河國額田郡幸田村大字大草に生れ、愛知縣西加茂郡譽母町西浦一〇に現住。數學教師。尾張三河を中心とする農人歌會に於て依田秋圃氏に師事すること多年、「歌集日本」「あけび」等に據りしことあり。現に「武都紀」同人。

杉江 芳枝 明治四十四年一月、大阪市に生れ、同市住吉區住吉町一三〇四に現住。昭和九年八月竹柏會に入り、翌十年一月より石槿茂氏に師事し今日に至る。

杉枝 彦太郎 六十五歳。静岡市根古屋四〇一ノ一に現住。別格官幣社東照宮司。

杉田 小九 五十一歳。津市南河路町に現住。圖書館司書。日露役後歌に志し、明星八少女、かたばみ、創作(第一期)、詩歌(第一期)等を経て昭和二年「自然」に参加。現在同誌同人たる傍ら白珠會主宰。歌集「明眸」「落葉」共に明治年代の發行あり。

杉田 千鶴郎 二十九歳。三重縣津市南河路に生れ、同縣阿

山郡上野町紺屋町に現住。商業學校教諭。昭和五年五月より作歌。同七年十二月迄國民文學社に入社し、植松壽樹氏の指導を受く。後ち三重白珠會に入會し現在に至る。

杉田 鶴子 つるこ 神戸市に生れ、東京市本郷區本郷二ノ三ノ六

に現住。小兒科醫。大正八年若山牧水氏に、大正九年より昭和三年迄窪田空穂氏に師事し昭和四年より宇都野研氏の指導を受く。「朝の光」「國歌」「白鬚」の同人を経て現在は「勁草」同人なり。

杉田 星歌 せいか 本名仁。明治二十九年栃木縣茂木町に生れ、

同地に現住。電燈會社員。二十年來作歌、此の間十餘の地方歌誌の同人及主宰たりしことあり。現在下野古歌顯彰會委員にして、歌誌「吾妹」「下野短歌」「立春」の同人。歌集「麓野」「椽果」あり。

杉田 翠 すずり 岡山縣久米郡高目村に生れ、同地に現住。農

業。昭和四年より作歌、「岡山青年」「吉備人」「まがね」「さわらび」「曉星」「水穂」等に關係せしことあり。野村完六、黒田慶次、井上雪下、金澤種美氏等の指導を受く。

杉谷 國明 くにあき 明治三十四年四月十二日生。石川縣小松町郊

外蓮代寺西山方に現住。大正二年一月より作歌、「銀扇」「パラダイス」「情愁」「土の群」

「あしび」を経て現在「かゞび」を主宰、葦附一人。

杉野 朴 すなは 明治三十一年二月一日福岡縣大牟田市に生れ

京都市伏見區桃山町松平筑前二六に現住。著述業。大正七年九月福岡にて「ハカタ」創刊。大正九年九月「地上」に入社、今日に及ぶ。又大正十一年門司にて「楮土」創刊、後「白土」と改稱し同十五年四月迄刊行。昭和二年八月大阪にて「心象」創刊、翌年廢刊。昭和十年十一月歌集「凡愛經」出版、同十一年九月京都にて「あらくさ」創刊現在に至る。

杉野 房枝 ふさえ 舊姓永井。明治四十四年、岡山縣赤磐郡瀧瀬

村大内に生る。高女卒業後、一時小學校教員たりしも、後、杉野英太郎に嫁く。昭和十二年四月十八日福山市に歿す。行年二十九。作歌は昭和三年四月、蒼穹社に入りしに始まり岡野直七郎氏に師事す。

杉原 皓三 かうさ 明治三十三年一月一日

四に生れ、昭和五年一月二日病歿。元丸善社員。大正十四年頃アラギ入會、大正十五年六月齋藤茂吉氏歸朝後専ら氏の指導を受く。

杉町 舟水 ふねみづ 本名貞一。四十六歳。佐賀市に生れ、佐世保

市八幡町三三ノ一に現住。縣立佐世保商業學校教諭。歌は初め岡山高蔭氏に學び、後、若

山牧水氏に就きし事あり。目下菊池劍氏の指導を受く。

杉村 楚人冠 すくむらとくじんかん 本名廣太郎。明治五年和歌山に生れ、千葉縣

我孫子町我孫子二二一〇に現住。東京朝日新聞社相談役。著に隨筆其他の全集十卷あり。**杉本 寛一** すきもとくわんいち 明治二十一年十月一日

東京府北多摩郡狹山村に生れ、東京市澁谷區櫻丘九一に現住。會社員。明治四十四年創作社に入り今日に至る。

杉本 峰世 すきもとみねよ 四十歳。東京に生れ、同市澁谷區櫻丘九一に

現住。大正十二年頃より三ヶ年程「霸王樹」に據りし外歌より遠ざかりしも、三年前より再び作歌しはじむ。

杉本 喜一 すきもときいち 三十三歳。富山縣高岡市に生れ、同市西下關

七九七に現住。郵便局員。年少の頃「短歌雜誌」に歌を投じ、後郷土の先輩後井嘉一氏に師事して香蘭社友たりしもまもなく退社、爾來折に觸れて作歌を獨り樂しみ今日に至る。

杉本 歸一郎 すきもときいち 本名吉郎。二十九歳。石川縣石川郡中奥村字

五步市に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和九年四月「國民文學」社に入社、松村英一氏に師事して今日に至る。

杉本 露彦 すきもとつゆひこ 本名金吾。二十八歳。東京市芝區に生れ、山

梨縣南巨摩郡三里村新倉に現住。東京電燈社員。昭和五年對馬完治氏主宰の「地上」に入會、又昭和十年東電短歌會「青煙」に入り、現在も引續き前記兩誌の同人。

杉本 萍吉

本名平吉。四十四歳。熊本縣菊池郡合志村大字築四〇五に生れ、同郡西合志村合生三九四九に現住。大正五年より森林主事、山林屬、營林局屬、營林署屬に歴任、昭和七年より病氣療養中。大正初年より若山牧水氏に師事し創作社に屬して現在に及ぶ。

保市上京町三八に現住。大正十五年水壘入社。岩谷莫哀氏の指導を受け今日に至る。

杉森 靜子

三十三歳。佐賀縣杵島郡住吉村に生れ、佐世

杉山 多喜子

明治三十七年十二月一日、和歌山縣に生れ、

東京市澁谷區西大久保三ノ一五六に現住。昭和九年二月より柳原白蓮女史に師事、昭和十一年二月創作社入社現在に至る。

杉山 多賀

四十一歳。埼玉縣に生れ、東京市澁谷區西

ヶ原町五九二に現住。藥劑師。少女時代より歌を作り、後、約二十年間單に愛好者たるのみにて全然作歌せず。昭和八年國民文學社に加入窪田空穂氏の選を受け、後、松村英一氏に師事して今日に至る。

杉山 唯芳

二十七歳。北海道後志國島牧郡西島牧村に生

れ、北海道野付牛町兵村三區に現住。野付牛郵便局員。昭和六年四月橄欖社に入社今日に至る。

杉山 常子

二十二歳。岡山縣久米郡吉岡村藤原に生れ、

東京市麩町區飯田町二ノ一一佐藤方に現住。事務員。昭和六年四月「蒼穹」入社、今日に至る。

杉山 灯影

明治四十三年六月十日青森縣北郡嘉瀨村に生

れ、青森市榮町一八〇松坂方に現住。新聞記者。七八年間各種歌誌に投稿せるのみ。

杉山 尚子

京都市に生れ、兵庫縣宍粟郡山崎町明源寺に

現住。大正の末、夫に死別して後作歌、安田青風氏の指導により「生きて行く道」歌壇、「水壘」及「女性詩歌」に入りし事あり。現在山崎歌話會を員。歌集「山うど」あり。

杉山 益夫

本名増造。明治四十一年一月十七日湖南に生

れ、昭和八年十二月十二日、横須賀市佐野町二三二に歿す。享年二十六。創作社友。

杉井 武治

三十六歳。和歌山縣名手町に生れ、同地に現

住。農業。大正十二年より作歌、同十五年常春社に入社。昭和六年末より作歌に遠ざかる。

昭和十一年再起、「アララギ」會員となりて今日に至る。

杉岡 富美枝

三十四歳。岐阜縣安八郡神戸町に生れ、名古屋

市南區瑞穂町楠七四に現住。昭和九年三月より茅野雅子氏に師事、昭和十一年一月より水壘社友となる。

助永 春夫

二十三歳。朝鮮全羅南道長興郡長興面客洞里

に生る。本籍廣島縣御調郡美ノ郷村字中野。作歌經歷といふほどのものなし。

鈴江 幸太郎

三十九歳。徳島縣那賀郡富岡町に生れ、兵庫

縣武庫郡魚崎町横屋一七五に現住。銀行員。大正十年七月「アララギ」會員となり現在に及ぶ。

鈴川 秀雄

三十一歳。愛知縣額田郡幸田村大字大草に生

れ、名古屋市南區東櫻町一ノ三に現住。神職。昭和三四年愛知國學院在學中、正課として短歌を學ぶ。同五年「若森」創刊。同六年同誌廢刊「葦舟」と合體して「鳩鳥」創刊。同十年同誌廢刊、「青角髪」に同人として參加。同十二年四月同誌廢刊となり、現在單獨。

鈴木 祐喜

明治三十六年十一月八

日に生れ、同郡大曲町に現住。大正十一年秋田縣農林技手農事試験場技手となり、更に實

業教育界に轉じ、歸郷して農に従事す。大正十一年アララギに入社島木赤彦氏に師事し、中村憲吉氏、結城哀草果氏の指導をうけ今日に至る。

鈴木浅五郎 大正五年十一月、銚子市川口町に生れ、同地に現住。薪炭商。昭和七年頃各種文藝雜誌に投稿、同十一年土筆に入社、現在に至る。

鈴木淳雄 本名富雄。二十七歳。千葉縣君津郡八重原村に生れ、同地に現住。農業。大正十三年十三歳より作歌、十九歳、アララギ入社。翌年退社、翌六年香蘭詩社に入社せしも三月にて退社、八年白日报社に入社現在に至る。又昭和十二年水廻社に入社したり。

鈴木内子 三十一歳。神奈川県小柄下郡足柄村中島八五に現住。昭和九年十月「歌と觀照」入社今日に至る。

鈴木海南 本名建一。三十歳。愛知縣渥美郡赤羽根村大字赤羽根字西六二に生れ、同縣寶飯郡牛久保町大字牛久保字常盤二八に現住。銀行員。昭和五年並木秋人氏の「ひこばえ」に入社、「短歌日本」と改稱して、廢刊となるまで繼續、昭和八年加藤今四郎氏の「東邦」に入社、同時に郷土の「豊橋歌人」に入會、翌年七月「水廻」に入社して今日に至る。

業教育界に轉じ、歸郷して農に従事す。大正十一年アララギに入社島木赤彦氏に師事し、中村憲吉氏、結城哀草果氏の指導をうけ今日に至る。

鈴木勝子 三十一歳。鹿児島市山下町に生れ、千葉市葛城町二七五に現住。幼時より坂正臣氏に師事東京女高師專攻科國語部にて尾上柴舟氏の教を受け卒業後二年程師事す。

鈴木數吉 三十八歳。靜岡縣に生れ、東京府下北多摩郡東村山村に現住。職業なし。昭和四年五月より作歌、國民文學に入り、松村英一氏の選歌を受け、翌七年四月退社、越えて十年四月復社して現在に至る。

鈴木勸正 本名利三。四十歳。靜岡縣富士郡に生れ、伊豆下田在蓮臺寺に現住。中學校教員。大正七年の頃「短歌雜誌」に關係し尾山篤二郎氏の仕事を手傳ひし事あり。

鈴木照一 小學校教員。千葉師範講習科卒業。吉植庄亮氏に師事、昭和二年土筆社入社、今日に至る。

鈴木吉治 二十二歳。埼玉縣北足立郡大門村一五九三に生れ、同地に現住。農。歌は獨學。

鈴木欽二 三十五歳。横須賀に生れ、同市中里町二一三に現住。海軍工廠職工。大正十五年頃より作歌、昭和九年、現實短歌社同人となり現在に至る。歌集「鐵塵」あり。

業教育界に轉じ、歸郷して農に従事す。大正十一年アララギに入社島木赤彦氏に師事し、中村憲吉氏、結城哀草果氏の指導をうけ今日に至る。

鈴木吉良 四十四歳。岐阜縣高山市に生れ、東京市深川區平野町一ノ一四に現住。中等教員。與謝野寬、同島子兩氏に師事す。

鈴木庫治 三十歳。愛知縣丹羽郡大口村大字豊田に生れ、東京府北多摩郡東村山村南秋津に現住。十五歳頃より不治の病にかかり、昭和八年四月東京府立全生病院に入院。其頃より歌に興味を持ち、昭和九年九月病院内に「武藏野短歌」なるパンフレットを發行し、昭和十年六月より「一路」に入會今日に及ぶ。

鈴木恭作 二十六歳。靜岡縣島田町一二三二に生れ、同地に現住。小學校教員。昭和九年六月國民文學社に入社、以來半田良平氏の指導を受く。

鈴木杏村 本名又七。明治三十二年一月二十三日、東京に生れ、杉並區和田本町一〇〇六影山方に現住。映畫説明者。大正六年始めて「アララギ」會員となり、故古泉千樞氏に師事す。後「日光」同人となり、千樞氏歿後同志と「青垣」を創刊す。昭和五年「青垣」を退き後井嘉一、石川信雄氏と「エスプリ」を創刊す。現在は北原白秋氏に師事「多磨」會員たり。

鈴木憲太郎 四十三歳。愛知縣渥美郡杉山村に生れ、同郡二川町に現住。官吏。十八歳頃より和歌に志

業教育界に轉じ、歸郷して農に従事す。大正十一年アララギに入社島木赤彦氏に師事し、中村憲吉氏、結城哀草果氏の指導をうけ今日に至る。

し、二十歳頃愛知縣農會報の歌壇に入り依田秋圃氏の指導を受け、歌集日本、あけび、武都紀に關係して今日に至る。

鈴木 浩 二十五歳。千葉縣津那環村田原九一三に生

れ、東京市牛込區赤城下町四〇邊渡方に現住。會社員。昭和八年より作歌、初めは、日本短歌に投稿、昭和九年より約半年「短歌鑑賞」に在籍、昭和九年七月現在の「杜鵑花」に入社、今日に至る。

鈴木 古鶴 本名行三。明治十二年七月五日、群馬縣山田郡大間々町に生れ、東京市澁谷區上落合二ノ

七五四に現住。國民英學會、早稻田東京専門學校文科等に學ぶ。歌は初め小川直子氏、後に與謝野寛氏の添削を受く。現在「小説」近世作家大觀一編纂中。

鈴木 貞吉 明治三十三年七月五日千葉縣夷隅郡老川村小

田代一〇〇に生れ、東京市澁谷區代々木富谷町一四二九に現住。東京市吏員。昭和八年九月「常春」に入り矢部道氣、松岡貞總兩氏の指導を受け現在に及ぶ。

鈴木 葵子 三十歳。東京市四谷區舟町一四に生れ、同地

に現住。實踐女子専門國文科在學中及びその後、武島羽衣氏に師事。昭和十年「短歌街」入社、鈴木北溪氏に師事して現在に至る。

鈴木 重貞 五十六歳。千葉縣市原郡里見村に生れ、東京市牛込區若松町六一に現住。教員。大正九年頃より作歌をつづけ、後「蒼穹」發刊と共に入社、岡野直七郎氏に師事し今日に至る。

鈴木 重衍 本名貞治。明治二十年十月三河國八名郡山吉

田村字下吉田小阿寺に生れ、同地に現住。農業。明治四十四年十月依田秋圃氏に師事し今日に至る。大正十三年より昭和五年に至る間安江不空氏の教へを受けし事あり。又大正十二年より昭和三年迄あけび誌に歌をよせ花田比露思氏に選評を受く。

鈴木 重延 本名龜松。號竹柏廬舍。慶應元年六月二十日、

三河國八名郡山吉田村字下吉田に生れ、大正三年七月九日永眠。享年五十。農業。明治十八年居村の莊田喜章氏に作歌の手ほどきを受く。明治四十三年依田秋圃氏に師事し萬葉調の歌を修業せり。大正十二年鈴木重衍編にて「竹柏廬落葉」と題する歌集刊行さる。

鈴木 賤 明治三十四年二月福岡

京市目黒區宮ヶ丘一八七〇に現住。初め大阪住友製鋼所に奉職、後昭和十一年上京、現在某商事會社に勤務。大正十三年國民文學社に入社と同時に作歌を始め、半田良平氏に師事す。

鈴木 信太郎 三十九歳。茨城縣新治郡土浦町に生れ、東京

市澁谷區鷺谷町四に現住。株式會社櫻井製作所代表取締役。大正十年アララギ入社。昭和七年退社。現在「若杉」同人。

鈴木 新一 明治三十六年十一月三日

日生。原籍山梨縣北都留郡七保村。商業學校卒業後上京、店員、會社員、雜誌記者等の職に就くも身體弱かつかず、昭和三年十月三十一日歿す。小學校時代より作歌、黎明、あぢさゐ、ひまはり、アララギ、あけぼの等に關係せり。昭和十一年七月以來中村美穂氏に師事す。

鈴木 秋邨 本名利一。三十歳。新

潟縣中頸城郡米山村大字青海川に生れ、同地に現住。農業兼產業組合職員。昭和二年八月ぬほり社に入社今日に及ぶ。

鈴木 俊三 四十一歳。福島縣安達

郡本宮町に生れ、東京市中野區西町二九に現住。二十歳頃より作歌を始め、のち暫く作歌に遠ざかり又三四年前より作れど師に就きたることなし。

鈴木 つじ 本名月嗣。岡山縣阿哲

郡刑部町大字小坂部に生れ、臺灣臺中市數島町四ノ一五に現住。昭和十年六月「あらたま」に入會今日に至る。

鈴木 如楓 本名富雄。明治三十三年十二月二十八日、新潟縣新津町善道に生れ、同地に現住。小學校教師。中學三年の頃より歌道に入り、神田停雲氏の指導を受く。後、若山牧水氏の「詩歌時代」誌友となりて半年、廢刊と共に止む。昭和十年十月「潮音」社友となりて現在に至る。

鈴木 水園 本名修目。三十歳。静岡縣田方郡北狩野村牧之郷五九〇に生れ、同地に現住。少年時代より歌に親しむ。

鈴木 誠一 東京に生れ、昭和五年六月十日病歿。享年二十七。八。職工。大正十四年頃「アララギ」入會、主として土屋文明氏の指導を受く。

鈴木 精一 號景星。二十八歳。濱市中區中村町に生れ、東京市神田區司町一ノ二三高島米次郎方に現住。謄寫版印刷兼衣裳圖案業。歌は故原田泰治氏に手ほどきを受く。他は獨學。

鈴木 丈夫 本姓八嶋。二十六歳。千葉縣印旛郡布鎌村請方の花をへて現在「蒼穹」に據る。

鈴木 太一 本名太一郎。大正元年九月二日、滋賀縣蒲生郡東櫻谷村大字奥之池八二三に生れ、同地に

現住。農業。昭和五年より作歌、翌昭和六年「香蘭」に入社、今日に及ぶ。

鈴木 孝 大正二年十月二十三日、東京市小石川區白山御殿町六五に生れ、東京市在原區小山町三〇三に現住。自動車運轉手。十七歳の春牡丹花に入社、山脇一人氏に師事し今日に至る。

鈴木 孝 四十二歳。山梨縣東八代郡金生村に生れ、同縣東山梨郡加納岩町に現住。縣立甲府中學校教諭。國民文學社友として十ヶ年、松村英一氏の指導を受く。

鈴木 喬 三十一歳。北海道函館市に生れ、北海道札幌郡江別町字元江別二二六に現住。小學校教員。昭和九年より作歌、酒井廣治氏に師事香蘭に投稿、昭和十一年同誌を離れて今日に至る。

鈴木 武雄 明治三十二年三月七日、千葉縣印旛郡成田町田町に生れ、濱濱市神奈川區篠原六〇二に現住。無職。中學三年の頃より作歌、當時文章世界に投稿す。一時古泉千樞氏に批評を乞ひたる事あり。以來作歌に親しむも發表せることなし。

鈴木 大二 二十六歳。樺太豊原郡香那敷香町大通北五丁目樺太敷香時報社内現住。新聞記者。昭和五年より作歌、昭和九

年より「心の花」に出詠、昭和十一年四月より豊原町に於て吉田夷沙美氏と月刊「樺太短歌」を創め現在に至る。

鈴木 保 大正元年九月一日、京都市上京區小山大野町二に生れ、東京市本郷區駒込林町一七五足立方に現住。友禪圖案家。昭和十一年五月頃より作歌、十二年二月「短歌精神」に作品發表今日に至る。

鈴木 千賀子 明治四十二年五月五日、東京市淀橋區戸塚町一ノ三五五に現住。本名篤郎。二十五歳。宮城縣石巻市に生れ、仙臺市北一番丁三二ノ四二に現住。東北帝大學生。作歌生活二年、現在水響社に屬す。

鈴木 忠次 三十八歳。長崎縣東彼杵郡萱瀨村に生れ、同郡大村町に現住。新聞通信員。「とねりこ」にありし事あり。のち青垣に屬せしも、今は何れの結社にも入らず。歌集「土蝨」あり。

鈴木 哲夫 明治四十三年九月、福島縣會津廣瀨村に生れ、同縣和氣郡本莊村大字福富に現住。岡山縣道路書記、同縣和氣土木出張所詰。昭和七年病を郷里に養ふ中作歌に専心し、野地曠二氏主宰の「防風」に據る。又同時に「敬禮」に入社、今日に至る。

鈴木傳左衛門

四十四歳。山形縣東村山郡豊田村金澤に生れ

同地に現住。農業。青年團時代は青年雜誌歌壇に、現在は産業組合雜誌家の光に發表。昭和七年より三年間結城哀草果氏に師事す。

鈴木英夫

明治四十五年二月九日神奈川縣座間に生る。

十八歳藤川忠治氏等の「歌と評論」入社、二十一歳北原白秋氏の「短歌民族」に出詠、二十四歳「多磨」創刊と共に會員となり、今日に及ぶ。

鈴木比露思

本名博。大正二年八月二十五日、茨城縣北相

馬郡六郷村に生れ、東京市小石川區音羽町三ノ一九大日本雄辯會講談社に現住。雜誌社員。現在「多磨」會員。

鈴木藤雄

二十八歳。長野縣小縣郡長久保新町に生れ、

東京市四谷區南寺町三五和泉草三方に現住。諸機械傳動裝置用品製作販賣會社々員。昭和九年一月創作入社、若山喜志子氏に師事し現在に至る。

鈴木不二子

大正二年四月十七日、東京市板橋區板橋町八

ノ二〇九〇に生れ、同區下石神井二ノ一五六〇清原方に現住。日本畫勳強中。淑徳高女在學中、水町京子氏に手ほどきを受く。昭和四年より「野菊」の大澤雅林氏につき今日に至る。

る。

鈴木冬吉

明治四十一年一月、山形縣東置郡那梨郷村に

生れ、同郡宮内町柳町に現住。印刷業。十八九歳の頃より作歌、別に結社に入ることもなく新聞雜誌に投稿、現在の職業に變ると共に作歌より遠ざかること五ヶ年間、昭和十二年一月鈴木北溪氏の主宰する「短歌街」に入社し、今日に至る。

鈴木まつ江

三十七歳。奈良に生れ鳥取市吉成四六三に現

住。鳥取高等家政女學校講師。祖父を師として十四歳の頃より舊派の歌を作る。京都女子高等専門學校に入り、山本行範氏の指導を受く。大正十四年「水鏡」に入社、故岩谷莫哀氏に師事現代短歌に轉向。氏の歿後故兒山信一氏の指導を受け、現在に至る。昭和五年須磨在住當時「青波」にも入社。

鈴木正夫

四十歳。名古屋市東區久屋町二ノ三に生れ、

千葉市葛城町二七五に現住。千葉醫科大學教授、生理學專攻。少年時代より趣味を持ち獨り作歌するも特に一派に屬せず。

鈴木正男

三十一歳。静岡縣富士郡富士町に生れ、東京

市豊島區池袋二ノ九〇五に現住。建具商。昭和三年「國民文學」に入社、半田良平氏の指導を受けつつ現在に至る。

鈴木無庵

本名陽吉。明治二十一年栃木縣鹽谷郡矢板町

に生れ、足利市大正町八六五に現住。市立實業學校長。日光町發行の二荒に屬し十年餘の作歌生活をなす。

鈴木茂杜子

三十八歳。宮城縣遠田郡元涌谷村字日向丁四

三に生れ、同地に現住。大正十一年より作歌、同十二年國民文學社に入社、半田良平氏の選を受く。

鈴木康文

昭和四年義雄を康文と改む。明治二十九年三

月五日、千葉縣匝瑳郡榮村堀川三五八六に生れ、同地に現住。農業。大正五年二十一歳の時「水鏡」に入社し、同六年更に「心の花」に入會し、同十一年に至り兩誌を退き、吉植庄亮氏に師事し「橄欖」同人として今日に及ぶ。歌集「青萱」あり。

鈴木よし子

二十四歳。宮城縣本吉郡氣仙沼町三日町に生

れ、函館市沙見町陸軍官舎廣野方に現住。昭和十年より作歌、故熊谷武雄氏の指導を受く。昭和十一年春「ぬはり」入社。

鈴木樂光

本名寅雄。三十五歳。静岡縣濱松市下池川一

五五ノ五に生れ、東京府北多摩郡東村山南秋津一六一〇に現住。病氣療養中。昭和三年十一月始めて短歌雜誌に歌を投稿す。以來、國

民文學に入社し、松村英一氏の指導を受く。昭和九年九月パンフレット「武藏野短歌」を發行し、今日に至る。

鈴木 菱花

本名匡雄。千葉縣印旛郡大森町大森に生れ、大正十二年十月十日、二十六歳にて長逝す。大正五年頃より作歌、大正六年創作に入社して以來若山牧水氏に師事す。

鈴木 良作

五十歳。足利市外三重村に生れ、山形市香澄町鐵道官舎に現住。山形運輸事務所庶務係長。明治三十六年四月より作歌、大正八年三月國民文學社に入社松村英一氏の教へを受け現在に至る。仙臺在住中短歌雜誌「裸象」を主宰。

鈴木 亮之介

二十九歳。北海道富良野字麓郷に現住。小學校教員。芥子澤新之介氏の「吾が嶺」によりて作歌をはじめ、現在「多磨」會員。

鈴木 左兵衛

滋賀縣神崎郡御園村大字中小路に生れ、同地に現住。農業。昭和五年朝鮮京城にて、「久木」會員となる。同誌廢刊後、昭和八年「アララギ」會員となり現在に及ぶ。

鈴井 武治

二十八歳。靜岡縣濱松市追分町二六に生れ、同縣庵原郡飯田村天王原に現住。郵便集配手。昭和六年一月香蘭詩社に入社作歌し初め、今

日に至る。

鐸木 孝

本名鈴木幸一。茨城縣稻敷郡八原村大字薄倉に生れ、東京市小石川區小日向臺町二ノ四五小日向ハウスに現住。北原白秋氏に師事、「日光」「近代風景」「短歌民族」等を経て現在「多磨」會員。

砂田 清哉

三十四歳。愛媛縣越智郡立花村に生れ、同地に現住。小學校教員。口語歌自由律短歌など試みたることあれど、現在は何れにも屬せず。

角 鷗東

三重縣に生れ、東京市牛込區北町一二に現住。千代田火災保險取締役。明治四十四年竹柏會に入り今日に至る。大正十三年、歌集「いしずゑ」出版。大正十五年、個人歌誌「青玉」を創刊して今日に至る。

角 静子

大正三年廣島市に生れ、同市翠町一五〇七ノ二に現住。十四五歳より作歌、獨學にて今日に至る。

隅 青鳥

若くして癩を病み、能く生活を送る。歌は専ら内田守人氏等の指導を受け、晩年失明しつつも作歌に精進、「アララギ」に入會す。昭和十一年三月病歿。昭和十二年其遺稿「隅青鳥歌集」出版さる。

住野 山郎

明治二十七年六月六日八幡市大字尾倉七九三に生れ、同地に現住。大正七年頃より作歌、大正十年頃短歌雜誌「アララギ」に投稿し其後故有りて作歌中止。

住谷 三郎

明治三十三年一月十日群馬縣群馬郡國府村東國分三四に生れ、同地に現住。農業。大正六年より作歌、「詩歌」「珊瑚礁」を経て、「霸王樹」創刊と共に同人として現在に至る。

隅田 葉吉

本名秀男。明治三十一年七月二十四日神戸市に生れ、栃木縣眞岡町臺町に現住。遞信省、復興局を経て栃木縣土木技手奉職。大正九年五月國民文學社入社、窪田空穂、半田良平、松村英一、植松壽樹氏等に師事し今日に至る。

澄田 水聲

本名重典。二十九歳。山口縣熊毛郡城南村大字川西に生れ、山口縣徳山市佐渡町、河村方に現住。徳山曹達會社員。昭和十一年春より作歌、同年秋阿部鳩雨氏主宰歌誌「草炎」に入り現在に至る。

末田 晃

三十九歳。大分縣中津町二一〇に現住。官吏。中學四年頃より作歌昭和三年七月短歌雜誌「久木」を創刊、同誌を編輯して今日に及ぶ。

末廣富士子

明治三十八年十二月京都に生れ、昭和九年三月死亡。行年三十。昭和七年秋より下村關路氏に師事す。遺稿「裾野の露」あり。

末宗

三十七歳。岡山縣英田郡江見町川北一九に生れ、京都市今熊野日吉町三七に現住。女學校國語科教員。女學校卒業當時大正七年頃創作社友たりし事あり。後中絶、昭和五年一月より帯木會員、同九年八月より潮音社に入り現在に及ぶ。

卯

三十四歳。京都府舞鶴府市上野口一六二九ノ二に現住。京都帝國大學理學部講師、別府市京都帝國大學地球物理學研究所勤務。作歌を始めてより十年餘なれど殆ど發表したることなし。

同時に加盟、現在に至る。なほ、短歌雜誌、朝日歌壇等に投稿せしことあり。

せの部

瀬崎三郎

鹿兒島縣薩摩郡宮之城に生れ、昭和八年十二月三十歳にして死す。商業學校卒業後東京に出で保險會社員となる。昭和五年冬病を得て歸郷。歌は病中僅かに作りしのみ。

瀬下義友

本名由比。明治三十六年十一月三日、長野縣諏訪郡下諏訪町に生れ、同縣下伊那郡吉田村字中山に現住。小學校教員。昭和二年アララギに入會、齋藤茂吉氏に師事し現在に及ぶ。

瀬野喜義

明治四十一年五月二十一日、京都府加佐郡池内村に生れ、同府新舞鶴町桃山通に現住。病氣療養中。昭和六年十一月「曼陀羅」創刊と

現住。教員。

瀬野錦藏

三十四歳。京都府舞鶴町本町三六に生れ、別府市上野口一六二九ノ二に現住。京都帝國大學理學部講師、別府市京都帝國大學地球物理學研究所勤務。作歌を始めてより十年餘なれど殆ど發表したることなし。

世古四郎

大正二年二月一日、三重縣津市新町八町三丁目に生れ、同縣一志郡小野江村大字小野江四〇四に現住。宗教教導職。二十歳頃より作歌「短歌生活」を通じ佐野翠坡氏の指導を受けし事あり。昭和八年頃中島達源氏主宰「鳥人」短歌社同人となり十年退會、現在に至る。

世良田優子

明治二十一年十月、長野縣上田市に生れ、大正十一年十月病死す。初め河井醉茗、水野葉舟兩氏に師事し雜誌女子文壇に小説を投ぜしが後歌に轉ず。潮音創刊以來太田水穂氏に師事し同社の同人となる。大正八年中澤理に嫁し京都市に轉任す。

勢多朗

東京市牛込區辨天町一四、田中方に生れ、同地に現住。教員。

妹尾豊三郎

明治三十一年三月十日島根縣能義郡赤屋村下拾年畑に生れ、臺北州基隆市幸町一ノ二に現住。基隆高等女學校教諭。大正十二年四月あらたま入社、目下同社同人。

妹尾鍊三

三十五歳。秋田市保戸野に生れ、秋田縣仙北郡荒川鎮山に現住。小學校教員。昭和六年自然詩社に入社、今日に至る。

清板好子

二十六歳。岡山縣兒島郡琴浦町引網八七六に生れ、同縣阿哲郡新見町下ノ町一三三七に現住。教員。昭和九年九月恩徳さか多氏に歌を學び後「歌と觀照」に入社し現在に至る。

清家璧三郎

明治十六年二月、愛媛縣西宇和郡二木生村に生れ、東京市麻布區笄町一八一に現住。日本デイゼル工業株式會社取締役副社長。昭和四年以來佐佐木信綱氏の薰陶を受く。

清家正子

明治四十四年七月二十日、岡山市に生れ、愛媛縣宇和島市北町五一に現住。宇和島幼稚園保姆。昭和四年頃より作歌、昭和六年十月吾妹入社、生田蝶介氏に師事し今日に至る。

清藤二實子

三十歳。岡山縣赤磐郡小野田村大字酌田七五三に生れ、同地に現住。農業。昭和四年一月蒼穹入社、今日に至る。

清野靜子

明治四十年十二月、奈良市に生れ、福島市戸

ノ丙二に現住。昭和二年結婚、昭和八年福島詩歌誌反響に入社、現在に至る。昭和十一年十月、歌と觀照社に入社せるも十二年三月退社す。

清野 宗佐 大正三年宮城縣亙理町に生れ、長崎市里郷長崎醫科大學内に現住。長崎醫科大學在學中。昭和六年第二高等學校に入學の時より作歌すれど、師事したることなく、發表せしこともなし。

清野 祐彦 二十四歳。山形縣西村山郡左澤町東町二九九に生れ、仙臺市北目町一七一に現住。學生。昭和八年九月、「アララギ」に入會、現在に至る。

關 あさ子 本名アサ。二十七歳。神奈川縣足柄下郡早川村一五八に生れ、神奈川縣小田原町幸二ノ二六五に現住。日本工業組合聯合會小田原分場勤務。昭和八年より作歌、現在香蘭詩社々友。

關 卯一 明治二十四年十二月二日に、栃木縣芳賀郡久下町大字阿部品に生れ、同地に現住。農。大震災後アララギに入り島木赤彦、藤澤古實、齋藤茂吉の諸氏に教へを受く。

關 寛 群馬縣群馬郡京ヶ島村元島名七四五に現住。大正十四年二月のぎく社入社、大澤雅休氏に師事、昭和三年四月退社す。同三年九月水薺

社に入社、七年七月退社。

關 せん 三十一歳。茨城縣筑波郡小田村に生れ、同地に現住。昭和二年一月より「アララギ」に投稿、齋藤茂吉氏の選をうく。

關 徳彌 本姓岩田。明治三十二年三月二十八日、岩手縣稗貫郡花巻町に生れ、同地に現住。商業。歌は大正八年尾山篤二郎氏の門に入り今日に及ぶ。昭和八年歌集「寒峽」を出版。

關 みさを 明治二十六年三月、山形縣上山町に生れ、東京女子高等師範學校にて尾上柴舟氏につき作歌法を學ぶ。大正三年石井直三郎氏等の水薺創刊と同時に社友となる。大正八年より數年休社、昭和四年復社今日に至る。著書に「萬葉に現れたる女流歌人とその歌」源氏物語女性考」あり。

關 百合子 大正五年一月三十日、神奈川縣横須賀市に生れ、福島市萬世町一四に現住。昭和九年より秋田魁新報歌壇に投稿、日本短歌及び短歌研究について歌を學び、秋田市の七葉會及び福島の「こだま」に入會せり。

關 得一郎 本名徳一郎。三十七歳。香川縣三豊郡麻村大字上麻に生れ、同縣仲多度四郡條村大字四條に

現住。國幣中社金刀比羅宮出仕。昭和五年より短歌雜誌に投書、昭和七年國民文學社に入社して松村英一氏の選を受け今日に至る。

關口 登記 二十三歳。朝鮮仁川に生れ、東京市小石川區雜司ヶ谷町一二二に現住。十七歳の頃より作歌、其の後某専門學校の國文科を専攻するに當り作歌時間を課せられ、アララギの歌人として、二年を経て、アララギ會員となる。以後現在に至るまで齋藤茂吉氏の選を受く。

關口 正雄 二十六歳。埼玉縣川越市連雀町四八一に生れ、廣島縣賀茂郡廣村警察署前に現住。齒科醫。昭和七年「潮音」入社、八年退社、十一年「吾妹」入社、今日に至る。

關島 桃子 二十九歳。長野縣下伊那郡川路村に生れ、同地に現住。農業。小學校時代より父につきて御歌所派を學び、女學校時代より新しき作風に入り、昭和十年「歌と觀照社」に入り、今日に至る。

關戸 信次 五十五歳。東京銀座に生れ、同市世田ヶ谷區世田ヶ谷三ノ二三九一に現住。貿易商。少年の頃金子薫園氏に教を受けしことあり、後中絶、大正十年與謝野寛、晶子兩氏の門に入り、明星、大柏等に作品を發表せり。大正十二年歌集「相思樹」を刊行。

486

關根九連城

本名芳男。二十五歳。東京市京橋區に生れ、

同市神田區多町一ノ八ノ一に現住。陸地測量部勤務。昭和四年頃より作歌すれど、短歌の雜誌に關係することなし。

關根幸二

三十一歳。東京市に生れ、同市中野區住吉町

三三に現住。銀行員。昭和三年頃より作歌。暫く若山牧水氏選國民新聞歌壇に投稿したることあり、同四年頃「アララギ」に入り今日に至る。

關根孝三

明治四十年九月二十三日、埼玉縣兒玉郡金屋

村大字宮内に生れ、泉州濱寺町下石津四一八に現住。教師。作歌經歷といふ程のものなし。

關根源吉

四十一歳。福島縣伊達郡上保原村に生れ、仙

臺市堤通一三七に現住。官吏。昭和九年六月草炎社に入社。

關根文之助

二十七歳。東京市京橋區入船町一ノ二一ノ六

に生れ、同地に現住。教師。昭和六年より小森眞羨郎氏に師事し、現在「地上」同人。

關根正

二十六歳。埼玉縣秩父郡金澤村浦山に生れ、

東京市麻布區森元町一ノ一八に現住。帝國水難救濟會事務員。昭和三年水變入社、六年退社、同年八月歌と觀照入社。現在同人。

關根よし哉

本名一男。二十九歳。新潟縣三條町に生れ、

同縣五泉町に現住。教員。明星派の歌に心酔して歌道に入り、漸次アララギ派の傾向を尊び現在に至る。

關谷和夫

二十七歳。東京市小石川に生れ、長野縣上高

井郡小布施村に現住。煙草小賣商の傍ら美術騰寫印刷。數年前唐木田李村氏に歌を學び昨春より「國民文學」に入り松村英一氏の教へを受けつつ今日に至る。

關谷靜枝

二十六歳。新潟縣南蒲原郡今町上新田に生れ

京都市上京區北野市營住宅二九に現住。地方新聞一二の歌誌に據りて數年間作歌、多磨創刊と共に北原白秋氏の教を受け現在に至る。

關井こう子

本名孝。大正三年二月十一日、茨城縣結城郡

石下町に生れ、東京市大森區大森三ノ一四八に現住。兄の影響を受けて作歌、あめつち一人。

仙波青都

本名正雄。二十六歳。秋田縣仙北郡四屋村に

生れ、同縣南秋田郡寺内町に現住。官吏(秋田縣社會課勤務)。中學卒業後病を得つれなるあまり歌を始め。昭和六年以降仙北新報にて遠藤桂風氏の指導をうく。昭和十一年二月香蘭詩社に入社、現在に至る。

千家照子

千家尊統男の妹。大正十三年二月潮音に入社

太田水穂氏の門下となり昭和七年死亡。

千家經麿

千家尊福男の子。大正十三年春、國學院大學

に入學、昭和三年夏、出雲國杵築町の實家にて卒業論文製作中病歿。年二十三。入學以來釋道空氏に師事す。鳥船社同人。

千家すゝ子

本名鈴木ちか子。明治三十七年九月八日、埼

玉縣大里郡男衾村大字富田一〇三一に生れ、東京市大森區入新井一ノ一〇二〇高橋實方に現住。裁縫業。昭和二年馬場靜浪氏の「白珠」會員となり同五年休刊以後浪人數年、昭和八年杉浦翠子氏の「短歌至上主義」に入會。

その部

曾我弘

三十二歳。北海道札幌市南十六條西十六丁目に現住。會社員。

昭和三年病床生活中作歌を始め、素質多光或は山輪晃と號し「療養生活」誌の歌欄、北海タイムズ歌壇、「日本短歌」等に投稿。昭和七年「敬禮」に入會、病氣のため暫く出詠を休み、十年四月復活、現在に及ぶ。

曾我信子

三十歳。岐阜縣郡山郡八幡町に生る。小學校

教員。大正十五年十七歳の頃より作歌、歌壇、水麩、くどひに關係せしことあり。

曾根 光造 三十四歳。靜岡縣藤原郡地頭方村落居に生れ

東京市杉並區香掛町二〇一に現住。東京市役所吏員。昭和六年アララギ入會、土屋文明氏の指導を得て現在に至る。

曾根 正巳 二十六歳。靜岡縣藤原郡白羽村に生れ、同地

に現住。銀行員。昭和五年釋道空氏選の東京日日新聞に投稿、昭和七年四月靜岡の「不二」に入會、昭和八年十月青垣會入會、今日に至る。

曾根 正庸 熊本市本山町四五二に生れ、大正十三年十二月二十二日同地に歿。行年二十三。大正十年三月アララギ入會。

曾山 祐博 本名玉雄。三十五歳。長野縣南安曇郡明盛村

中堂に生れ、同地に現住。農。大正十四年十月國民文學社入社、松村英一氏に師事して今日に至る。

十河道之介 五十六歳。和歌山市元町奉行丁に生れ、同市

字須六四に現住。中學校教員。明治三十年より約三年間荒巻利蔭氏に師事、昭和四年一月より約二年間水麩會員となり、昭和八年十月よりあげび會員となり現在に至る。

十龜儀三郎 三十歳。愛媛縣周桑郡庄内村に生れ、同地に

現住。産業組合事務員。昭和十年七月より多磨短歌會に入會、北原白秋氏に師事す。

園 潮 眞 本名山田政次。明治四十年、徳島縣名東郡佐

那河内村下宮澤に生れ、徳島市東富田若松町四丁目に現住。軍人。大正十五年生田蝶介氏の「吾妹」に入り現在に至る。歌集「戦塵」あり。

園 田 信子 大分縣宇佐郡宇佐町に生る。昭和六年新春病

を得て以來つねに病床にあり。昭和八年十月より香蘭詩社に入社今井氏に師事す。昭和十年十月二十一日二十一歳にて永眠す。

園原 信夫 明治三十五年二月十四日、長野縣松本に生れ

長野市岡田一二二に現住。産業組合中央會長野支會主事。大正九年頃より作歌、木曾福島町にて同人雜誌「岐蘇」を發行せしが後廢刊、同十年潮音に入社、現在に至る。

園山 喬三 島根縣八束郡乃木村字

上乃木二〇一に生れ、同地に現住。農業。昭和七年「自然詩社」に入社、同年末退社。現在地方歌誌「珊瑚樹」社友。

茵邊 國 臣 三十一歳。熊本縣松橋町一二〇に生れ、同地

に現住。著作業。十九歳の年處女詩集出版。

杉田 勝重 二十二歳。東京府南多摩郡小宮町西中野二〇

〇八に生れ、同府西多摩郡青梅町仲町二九四野村商店内に現住。生糸商。八王子短歌會よりアララギ會員に移り現在に至る。

染野 嚴雄 本名幸太郎。三十七歳。東京京橋に生れ、同市

牛込區水道町五一に現住。會社員。十五歳より歌に親しみ同志と「青塘」發刊、短歌雜誌其他に投稿、後「自然」の誌友となる。大正九年渡支、上海にて邦字新聞等に作品發表、上海短歌會を起し「夜克」創刊。十四年歸京「餌壺」「相持」等主宰、「自然」に一時復歸同人となる。昭和六年「吾妹」に加盟今日に至る。

染谷 進 明治三十六年二月十二日、茨城縣筑波郡谷井

田村山谷に生れ、東京市世田谷區玉川奥澤町二ノ六五〇に現住。早大講師、同高等學校教授。大正十年より窪田空穂氏に師事して現在に至る。大正十五年槻の木創刊と共に「槻の木會」同人。

染谷ふみ子 本名富美子。三十二歳。横濱市中區太田町に生

れ、東京市世田谷區玉川奥澤町二ノ六五〇に現住。窪田空穂氏に師事、「槻の木」同人。